

鉄血のオルフェンズ
捧ぐは愛と忠義と憐憫
と

フラペチーノ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鉄血のオルフェンズ、ラスタル陣営に一人のオリ主ブツ込んだ物語です。

公式はさっさと七十二のガンダムの詳細を公表して、どうぞ。

公式資料集等を持っていないのでキャラの年齢とかギヤラルホルン周りの設定は独自なものが多いです。ご注意ください。

目次

原作前

0	オルフェンズと養父	1
1	命名	15
2	契機	26
3	偽り	37
4	秘密の逢瀬	48
5	初陣	60
6	セブンスターズの変化	78
7	宇宙演習・1	88
8	宇宙演習・2	98
9	事後処理	110
10	配属先	122

11 監査

原作一期 (P・D・323)

12	火星へ	145
13	火星から飛び立つ旗手	157
14	火星軌道上での鎮圧	167
15	広義の監査	177
16	婚約パーティーにて	189
17	『マクギリス』の休暇	204
18	決闘もどき	215
19	思想・主義の違い	229
20	作戦開始と告げ口	242
21	正義と正当性	253
22	暗躍	266

134

30	名もなき戦争・1	370	39	エピソード0・18	483
357			38	無知の罪科・2	473
29	明朝を拝めない者達・3		37	無知の罪科・1	459
344			36	告解	444
28	明朝を拝めない者達・2		430		
330			35	天使と悪魔の目覚め・4	
27	明朝を拝めない者達・1		417		
	原作二期 (P. D. 325)		34	天使と悪魔の目覚め・3	
26	アリアンロッドの日常	317	404		
25	出自	300	33	天使と悪魔の目覚め・2	
24	戦乱の間に	287	394		
	幕間 (一期〜二期)		32	天使と悪魔の目覚め・1	
23	エドモントンの乱	277	31	名もなき戦争・2	381

4 0	エピソード 0.	2 4	マクギリ
ス宣言	—		
4 1	エピソード 0.	3 7	ある孤児
院の兄貴分	—		
4 2	エピソード 0.	4 9	開戦前に
—	—		
4 3	エピソード 0.	7 9	最後の戦
い	—		
4 4	エピソード 0.	8 7	エドモン
トンの再来	—		
4 5	エピソード 0.	9 7	ガンダム
対ガンダム	—		
エピソード 1	—		
辿り着いた場所	—		

535

508

502

495

554

544

エピソード 2
ハッピーエンド

原作前

0 オルフエンズと養父

エピソード0

厄祭戦という人類の未曾有の危機から三百年ほど経った世界で。P・D・325という年号には様々なことがあった。

二年前の地球における大きな戦いから、治安維持組織であるギャラルホルンの内部腐敗が公となり、地球・宇宙問わず秩序が崩壊。これによって海賊や地球の各国がギャラルホルンへ叛意を示して多数の戦争行為が勃発していた。

それらを抑えるのはギャラルホルンの役割だったが、如何せん戦線が広がりすぎた。そのせいで抑えられず火の海に消えた国やコロニーもあった。

そんな混乱期の折、場所はヴィーンゴールヴ。海洋上に建設された巨大なメガフロートでギャラルホルンの地球本部が存在する、ギャラルホルンにとっては最重要拠点だ。なにせ今の時代の軍事力の象徴たるMSの生産施設に加え、ギャラルホルンを牛耳るセブンスターズの居住区も存在し、セブンスターズの会合もここで行われる。

そんな施設の廊下を、一人の女性士官が走っていた。ジュリエッタ・ジュリス。ダー

クイエローの短い髪に青緑色の瞳をした、月外縁軌道統合艦隊アリアンロッドに所属するMSパイロットで、エースとして期待されて専用機も渡されるような人物だ。

その彼女が、孤児でありながら軍人としての教養や礼儀作法は抑えているジュリエツタが緊急事態だという訳でもなく走る。他の上官などに見付かれれば叱責されるだろう。

それでも彼女は走る。嫌な胸騒ぎがしたからだ。

ジュリエツタは幼い時からこの妙な勘には助けられてきた。士官学校時代もこの勘に従って行動して、悪い結果になつたことはない。

その勘が嫌な感覚を促してくるものの、急ぐなども告げている。この相反する感覚が気持ち悪くて、結果として走っていた。

目指す場所は彼女の所属するアリアンロッドの司令、セブンスターズの一角であるラスタル・エリオンの元。直属の上司の執務室だ。

そこに近付くにつれ、彼女は知己の人物が近くにいることを感じ取る。彼女の家族とも言つていい男性で、同じくギャラルホルンでパイロットをしている歳が近いながらも少し上の男性だ。

彼も孤児だったようで幼い時からお世話になつてきた。彼女と同じくラスタルに拾われたものの、彼はアリアンロッドに所属しておらず経済圏の警戒をする部隊に所属していた。

そんな彼が、ラスタルの執務室の方にいると感じ取る。違和感が増した。

なにせ最近、木星圏で幅を利かせているテイワズという複合企業が内輪揉めを起こして大きな戦闘行為があつたばかりだ。宇宙も混乱していて、ギャラルホルン内部もキナ臭い噂が多くなっている。

ギャラルホルンはここ二年ほど、ずっと警戒態勢を敷いている。そんな折でも恩人であるラスタルの元に顔を出さなかつた兄貴分が何故かラスタルを訪れている。

心臓の鼓動が、早くなった。

脳は行くなと告げる。心臓は逸つて足を速める。相反する心身だったが、身体は結局執務室に辿り着いてしまった。

中は防音で、声などは漏れていない。それでもジュリエッタは中にラスタルと彼がいると確信していた。

重要な話をしているのかもしれないと、勘も合わさつてインターホンを押す指が躊躇してしまう。

その躊躇がいけなかった。

ターン！ という、軽いなながらも明らかな銃声音が中から聞こえた。軍属であるジュリエッタが聞き間違えるはずがない。

一瞬間が真つ白になるも、叩き込まれた軍人としての習性から腰のハンドガンを取り出して撃鉄を上げていた。そしてインターホンを押すことなくテンキーで執務室のパスワードを入力していく。

ジュリエッタはラスタルの腹心の部下として執務室へ中からの許可なく入るためのパスワードを教わっていた。それを素早く打ち込み、扉が横開きするのと同時に銃を前へ向けて突入する。

そこで見たものは――。

「ら、ラスタル様……？？」

左腹部から赤い血痕を露わにしている直属の上司、筋肉質でガタイの良い壮年の男性であるラスタル・エリオン。彼が執務用の机に背を持たれながら俯いている姿と。

その凶行を実行したであろう、金髪に金の瞳。爬虫類を思わせる縦に長い瞳孔が特徴の、左手にハンドガンを持ってこちらを向く長身の男性。

いつから一緒だったか、ジュリエッタは覚えていない。それでも一番古い記憶では彼と一緒にいた。そしてこれまたいつの間にかラスタルに拾われていて、学年こそ違うものの幼年学校にも一緒に通いもした。

幼少期の大半を一緒に過ごした人だ。常識を、戦い方を、この直感のようなものを教えてくれた大恩ある人だ。兄と呼んでいた時期もある人だ。

そんな人が、ラスタルに凶弾を放ったという事実が受け入れられなくて、構えていた銃を持つ手が震えていた。

「か、カイン……？ あなたが、あなたがラスタル様を撃つたのですか？！」

「状況判断が鈍いぞ、ジュリエッタ。オレ以外の誰が、ラスタル様を撃つたという状況証拠が残っている？」

「マクギリス・ファリドの狗に成り下がったというのは本当のことだったか！」

そういう話があった。セブンスターズの一角、ファリド家の実質的当主マクギリス・ファリドは青年将校に声をかけ、一大勢力を作り上げていると。そのメンバーにカインも含まれていると。

あくまで噂話。それを聞いたジュリエッタも馬鹿らしいと本気にしなかった。マク

ギリスが怪しいことと、カインのことを信じていたからこそそんな眉唾な話に乗るとは思っていないかった。

カインへの信頼の裏返し、とでも言うべきだろう。

だが、裏切られた。実際にラストアルは撃たれた。

だから脳が警鐘を鳴らしてでも、右手の銃をカインへ向ける。

「や、めろ……ジュリエッタ……」

ラストアルの眩くような声。

それが掻き消えるように、執務室に一つの銃声が響いた。

弾丸は撃たれたラストアルと同じように、首謀者の左脇腹に突き刺さる。

それと同時に、ジュリエッタの瞳からは存在しないと思っていた液体が滝のように零れていた。

エピソード0

ラストルとて、初めから家の力でアリアンロッドに所属していたわけではない。軍を指揮する者として、もちろん士官学校に入れられた。ラストル自身はそのことを苦にしていなかった。

家の仕来りに従うことも、この世のことを憂うことも、等しく特権階級のセブンスターズに産まれた自分の役目だと疑っていなかった。

そんなラストルはギャラルホルンの士官学校でも優秀な成績を残してこのまま何もなければアリアンロッドに所属できるだろうというエリート街道を突き進んできた。

問題があるとすれば。

「ラストル様。周辺住民への聞き込み、完了しました。不審な漂流物などは確認できなかつたということです」

「まだ自分は一介の士官学生です。セブンスターズの跡取りだとしても、そんな鼻根をしないでいただきたい」

「そんな訳には参りません。御身に何かあれば我々の首が飛びます」

(腐敗極まれり、だな)

この、御曹司に対するような態度だけは気に食わなかった。セブンスターズの跡取りは誰も彼も士官学校はおろか、ギャラルホルンで配属になってもこのような扱いを受けることは事前に聞いていた。

それでもこうやって諛う様は、ラスタルにとって不快だった。自身ではなく家でしか判断されていないように見えて。

どんな功績を立てても、セブンスターズだから当たり前。さすがはエリオン家の当主候補。そんな言葉ばかりだ。

今回ラスタルを含む士官学生がギャラルホルンの本隊と一緒にやって行なっている任務は宇宙から地球に落ちたスペースデブリと思われる物体がこの近辺の海に落ちたということ、その未確認物体の調査が任務内容だ。

デブリが地球に落ちてくることは珍しい。だが、ないことはない。大概が地球の大気圏内で燃え尽きるのだが、今回のように質量があればこうして地球に落下してくることもあった。

これもひとえに、地球外縁軌道統制統合艦隊のパトロール不足という、これまた腐敗の温床が表に出た形だ。

ラストルは心内で同じセブンスターズの一つ、イシュー家へ舌打ちを送る。

ギャラルホルン本隊に所属する人間までもただの士官学生に謙る様子が気に入らず、全員がそうなのかと団体行動をしている全員を見回そうと思い、後ろを振り返った。何故か士官学生のラストルが先頭でこの集団を率いているのだ。

そうして振り返った先で、ラストルは驚愕の光景を目に映す。

まだ年端のいかない、四歳くらいの子供が、ガラスの破片らしきものを右手に持ってこちらに駆け寄っていた。

しかもその鋭い視線から、確実にこちらを目標に凶器を手に行っているとわかった。

「危ない！」

ラストルが叫ぶが、誰もがその声に反応できなかった。ギャラルホルンの制服とシンボルを掲げているのだから、市街地で、しかも地球で襲われるなんて想定もしていなかったのだろう。

場所も場所で、ギャラルホルンのことを疎んでいる経済圏の中でも、ここはギャラルホルンの影響力が強く出た場所だったために油断をしていたのだろう。

駆け寄ってきた金髪に金の瞳の少年はある一人の隊員が背負うバックバックを切り

裂き、その中に入っている救護パックに収納されたある治療薬の入った注射だけを奪い、すぐさま反転。

あまりの鮮やかな手際と、何がされたのか理解していない練度の低さ。更にはバックパックこそ引き裂かれたものの、人的被害が一切なかったことで誰も動け出せなかった。

だから、一番遠かったラスタルが全ての状況を把握して動き出せる心身をしていたので走り出す。

「ラスタル様!?」

後ろの制止の声を無視して、少年を追いかける。少年は人混みを器用に小さな身体を駆使してスイスイと抜けて行き、路地裏へ入っていった。

ラスタルはここへ実地研修に来ていたが、全く土地勘のない場所だ。裏路地に入って逃げ込まれたら見逃してしまふ可能性が高かった。

ラスタルが走ることで、ギャラルホルンの軍服が目に入った者はすぐに退いて道を開けていく。こんな時にギャラルホルンの権力のありがたさを実感したくないラスタルだった。

同じ路地に入る。そして奥へ向かってすぐ。四歳児くらいの足ではそこまで遠くへ行っていないだろうと思っていたが、その予想は正しく路地に入ってすぐの所に少年は

いた。

問題はその少年の他にもう一人、子供がいたこと。

その子供はもつと年齢が低く、二歳くらいだった。ダークイエローの髪をした子供はぐったりしているのか、目を開けていない。その子供を布の上で横にしたまま腕を捲つて、今にも少年が注射を刺そうとしている所だった。

「おい、ボウズ^{!!}?」

ラスタルが止める前に、少年は注射を刺した。よく見れば注射キットに入っていた脱脂綿とアルコールで刺す部分を消毒していたようだ。

注射を刺されても子供は目を覚まさず、少年は薬を注入し終わると即座にラスタルの方を向いた。

爬虫類を彷彿とさせる縦長の瞳孔。その強い意志を思わせる瞳に、ラスタルは思わずゴクリと喉を震わせた。

ギヤラルホルンのことを知ってか知らずか。それでも窃盗を成功させ、医療行為をやつてのけた少年のことが、とても気になった。

ラスタルは声をかける前に、注射器に残った薬の液体の残量を見て、子供に処置すべき適量を注入していたことを知る。しかも注射キットの型番からこの薬がこの地方で流行っている風土病に対するワクチンだと知った。

ラストルもこの地方に派遣される前に、風土病の兆候が見えたらこれを打つようと研修で言われていた。そのことから彼が何をしたかったのか理解する。

少年は子供を抱き抱えてラストルを警戒していたが、逃げられないとわかってか、その場から動かない。

子供の方を見れば、風土病の初期症状である赤い蕁麻疹が肌に現れていた。少年の方には出ていなかった。

「ボウズ。オレと話さないか？」

「……金はない。だからうばった」

「見ればわかる。お前さんら、孤児だろう？ んで、発症してたから注射したと。素人が

やっていい医療行為じゃないんだが……。やらなきや死ぬかどうかの博打だったんだろうが」

ラストルはおそらく、この街の診療所かどこかで見たことを真似したのだろうと思つた。この治療薬は独特の紫色をしているために他の薬と比べて判別しやすい。

しかし、ギャラルホルンの人間は医者ではない。治療薬を持つていることを隊員であるラストル達なら知っているが、こんな子供が知っていたことは不自然だ。情報が漏れていたとしても、どこでこの少年が知ったのか。

そしてあまりの手際の良さにも驚く。少年はバックバックを切り裂いて物色するこ

となく、この注射キットだけを奪って即座に離脱した。わかりやすい紫色の液体とはいえ、これがどこにあるのかわかっていたかのような勘の良さ。

あまりにも、ラスタルにとって興味深い少年だった。

「で、そつちの子は弟か？」

「違う。同じ船にいただけ。それと女の子」

「ん。それは失敬。……船から逃げて来たのか？」

「そう。……何も知らないんだな。アンタら大人がこの地球に捨てたくせに」

「捨てた？ 地球に？」

ラスタルはそれだけの情報で、この少年が言っていた船が海上で使うものではなく宇宙船だとわかった。そして二人の格好がこの地域や地球の物ではないと、アリアンロッドを率いる家柄だからこそ看破した。彼らの服はコロニーで作られるような物だと。

阿頼耶識などの違法手術はされていないようだが、彼らがヒューマンデブリだと知る。そうでもないかと地球に捨てられることはない。

そしてつい最近、地球に漂着したデブリがあったことを思い出した。宇宙産の服を着た子供。孤児にしてはあまり汚れていない服装。この地域独特の言語の訛りもなく、むしろ宇宙訛りを思わせる発音。

彼らの居場所が地球にないことを知ったのと同時に、少年の能力からラスタルは手元

に欲しいと思った。

「少年。二人を私が引き取ろう。地球で生きていくには、それしかない」

「……アンタは、不思議と変な感じがしない。他の人よりはマシだ」

「それは嬉しいな。その注射キットのことも私がどうにか揉み消そう。君の名前は？」

「カイン。ただのカイン」

「私はラストル・エリオン。君達の養父といったところか」

「これが三人の馴れ初め。」

もう一つのオルフエンズの、物語。

1 命名

カインと少女は、ラストルによつて引き取られてエリオン家が運営する孤児院に入れられた。その際戸籍を作る関係で名前を尋ねてみたのだが。

「名前しか知らない。親の顔も名前も知らない」

「なまえつてなあに？」

そんな状態だった。なのでラストルが名付けることとなる。

特にカインには士官学校に通ってもらいたかったので、苗字が必要だった。そのついでに少女に名前を付ける。

DNA鑑定も行なつて二人が兄妹ではないことが判明したので苗字も別にすることにした。

「カイン・ベリアル。それとジュリエッタ・ジュリス。それが二人の名前だ」

「あたしカイン・ベリアルー！」

「違う。それはオレの名前。君はジュリエッタ・ジュリス」

「じゅり？」

「……ジュリエッタ・ジュリス」

「ジュリー！」

カインはジュリエッタに名前を教え込むことを早々に諦めた。二歳児に長い名前を覚えるという方が無理だろう。

ジュリエッタはこのまま孤児院に入って一般常識と子供としての当たり前を経験することになる。

だが、カインは別だ。

カインの勘の良さ。これは異常としか言いようがなかった。それは彼の経歴を聞いた時のこと。

ジュリエッタはまともに物心もついていないような状態だったので、話を聞こうにも要領を得ない。だからカインに乗ってきた船のことも含めて色々聞いてみた。

「するとカインはヒューマンデブリとしてあちこちに売り飛ばされて、今回は捨てられる予定だったと」

纏めるとそういう話だった。物心ついた頃には大人に殴られる日々で、他の子供の世話係をしていたという。年長者がカインで、他の子供が煩いと殴られていたと。

雇い主がどういふつもりだったのか知らないが、とにかく子供が集められていたという。そして出荷と言われて小型船に乗せられて地球にやってきて、海に打ち上がったところ何とか陸に着いたらジュリエッタの具合が悪くなったということ。

乗せられた子供は合計五人いたが、他の三人は動かなかったために置いてきたようだ。

何とか街まで行って、薬が手に入らなかったので持っていると確信したギャラルホルンの隊員から奪うことを決意。それが最善だと思ったとのこと。

そして今に至る。

ラストルは自分の領地に戻ってくる前にカイン達が乗っていたと思われる宇宙船を回収している。それは一目で宇宙船とわからないように岩石をコーティングして、ただのデブリのように偽装していた。

そしてその中から金髪の子供の遺体も三つ、見付かっていた。

死因は大気圏突入プログラムの誤作動による艦内の温度上昇による脱水症状と、着水時による衝撃による圧死。突入プログラムを用意した者はバカだろうとラストルは呆れていた。

違法な海賊辺りにはそれが限界だったのだろう。むしろ二人生存できたことが奇跡だ。二人は衝撃を緊急用のクッションで緩和して平気だったらしい。

突入プログラムの誤作動もそうだが、本来の着地予定ポイントともかなりズレていた

のでとにかく杜撰だったのだろう。

本来の届け先を知ったことで、またセブンスターズの腐敗を知ってしまったことは正直ラスタルを萎えさせた。

それがギャラルホルンの本部であるヴィーンゴールヴを纏める人間だというのが余計に。

カインの中では悲惨な目に遭ったために捨てられたと認識していたが、正確には男娼として迎え入れるつもりだったことは言わないことにした。これは一生、ラスタルの内秘めることにする。

ジュリエッタは性別が違うが、おそらくミスかたまには女兒もいいか、というくらいの認識だったのだろうと思うことにした。これ以上この件に深く関わると脳に蛆が湧きそうだったので思考を止めるラスタル。

すっかり届け先の座標や、『積み荷の伝票』は確保しておいたが。

「ではどうしてあの隊員が治療薬を持っているとわかった？」

「勘」

「あの位置にあるというのはい？」

「勘」

「実行しようがしまいが、捕まるとは思わなかったのか？ 事実私には捕捉された」

「……やるしかなかった。それと勘で、どうにかなるって」

ここまで勘頼みなことにラスタルは頭を抱えたが、むしろそれしか頼ることができなかつたカインの境遇にこそ同情した。大人を信じられず、子供を押し付けられ、地球に放り出された。

そしてその勘が良い結果を運んでいるので、何かあると勘を信じて行動してしまう。

問題はこの勘の精度が勘で収まらないことだろう。

まだ四歳のカインに言語化を求めるのも酷だろう。引き取られた海賊のところでもある程度の会話ができるように仕込まれたようだが、それでも最低限のようで文字は全然読めなかつた。

この勘は恐ろしすぎる。だからカインにも了承を得て、科学的に調べることにした。主に、脳波を調べるという方法で。

小型艇を運転させるゲームをやらせて、そのスコアなどを記録していったのだが。恐るべき結果が出た。

「ラスタル様っ！ この子は通常の人間よりも三割の脳を日常的に使っているのです！

彼の言う勘は、我らが感じ取れない細かい情報までも五感の全てを通して感じ取り、それが言語化できないために勘と言っているだけで我々が取捨選択して確信している出来事を、より尖鋭に感じ取っているのです!!？」

「つまり我々の常識だと思われる知覚領域よりも、この子は更に深く細かく物事を理解しているということか？」

「まさしくっ！ 阿頼耶識を埋め込んだかのごとく、彼は自然と人間を超えている！

彼は新たな人類と言って良いほど、我らとは種族が異なるのです！」

「新人類、か」

エリオン家子飼いの研究施設で調べさせた結果、研究者達が発狂していた。それだけ興味深い結果だったのだろう。参加した研究者達が全員、食い入るようにデータに向き合っている。

「だが、カインが特別スペインヤルなだけかもしれないだろう？」

「ではエリオン家の孤児院の子供達を調べさせていただきたい。特殊な一例なのか、進化の一端なのか」

カインだけが特別なのかを調べるために、エリオン家の全員に似たような試験を実施した。ラスタルとしても優秀な者が見付かるのならそれに越したことはない、試験を許可。

結果、カインのように脳が拡張されているような者が一人だけいた。ジュリエッタだ。ジュリエッタはそれこそカインに匹敵する試験の結果を叩き出した。彼女はゲーマ感覚で遊んでいただけが、小型艇の操縦技術はとて子供とは思えないほど。

ラストルはこの二人をまずは孤児院で育てて経過観察を行いつつ、一定周期で研究所に連れて行き、二人の能力に変化があったかを確認していった。

その結果を受け取りつつ、ラストルは確信する。

彼らは新人類だニュータイプと。そして将来の部下に欲しいと。

カインに、ベリアルの名前を与えて良かったとラストルは過去の自分を褒める。

カインになら、エリオンの遺産を託しても構わない。そんなパイロットに育ててみせると、息込んだ。

だからまずは六歳になったら幼年学校に通わせることにする。士官学校に入るまでの繋ぎの教育機関だ。そこで基礎を養ってもらおうと考えた。

もちろん秘蔵っ子とするために、自分との関わりを全て消した経歴で入学させる。他のセブンスターズがやっていることに比べれば微々たる改竄だ。

もちろん入学させるまでに、研究所でできるだけの試験と調査、それにゲームと偽ってMSシミュレーターもやらせていた。MSの操縦のイロハを幼い時から徹底的に仕込ませる。

幼少期の学習は大人になった際の能力に影響するという研究結果もあり、また幼い時であれば物覚えが良い人間の習性から、カインはスポンジが水を吸うように様々な物事を順調に覚えていった。

ジュリエッタにも同じようにゲームとして様々なことを与えて、学習させる。

二人はラスタルの肝いりとして、丁寧に育てられていった。

カインとジュリエッタはよく二人一緒にいた。同じ感覚を共有する者として自然と一緒になるようになっていた。同じ境遇だったということも大きく影響している。

そんな二人は孤児院の近くの花畑に来ていた。ジュリエッタが行きたいと言い、カインは付いていつている形だ。孤児院の大人にも二人で行つていいが決して手を離すなと言われた。

ジュリエッタはあまり覚えていないが、宇宙産まれのカインとしてはこのような花畑は珍しかった。緑が一面にあり、色とりどりの花がこれでもかと咲き乱れている。

自然の豊かさを実感しているのはカインだけ。カインが覚えている景色とは宇宙船の中の様子と暗い倉庫のような、人が暮らすような場所ではなかったボロボロの部屋。あとは窓から見える深淵を思わせる宇宙の濃い紫色と、デブリが浮いた宇宙のゴミ捨て場だけ。

地球に捨てられた直後は生き残ることに必死で海を楽しむ余裕なんてなかった。

コロニーにも入ったことがなく、他の火星やら木星やら、人が暮らしている星には行つた記憶がない。そのためともに人が住んでいる人類圏を見るのも初めてのこと

だったりする。

カインは花畑で何をするわけでもなく景色を楽しんでいたが、ジュリエッタは好き勝手にゴロゴロと転がって遊んでいた。

ジュリエッタがどこかに行ってしまわないよう、カインはジュリエッタから目を離さないようにしていたのだが、ジュリエッタの指に飛んでいた蝶が留まり、あろうことかそのまま口を広げていた。

カインは嫌な予感がしてすぐに駆け寄り、ジュリエッタの頭にチョップを下していた。

「あいたつ^{!!}？」

チョップの反動でジュリエッタの身体が揺れたため、蝶は飛び立ってしまった。いきなりのことと痛みから涙目になりながら、上目遣いでカインのことを睨む。

「蝶を食べようとするな」

「カイン兄様。だって綺麗で、美味しそう」

「……美味しくないと思うぞ」

「兄様は食べたこと、あるの？」

「ないけど……。小さくて、食べ応えがなさそうだ」

「確かに！」

カインはそう説得した。あんな小さかったら、それに虫の成虫は美味しくなさそうだと直感が告げていた。

蝶の場合、多分鱗粉とかのせいで余計に美味しくないはず。

それに、エリオンの家の子には魔法の言葉がある。

「それにラスタル様が持つてくるお肉と比べたら、アレは全然美味しくないと思う」

「お肉！ 食べたい！」

そう、時折開催されるお肉洗パー編ティー教であるっ!!？ 孤児の子達からすればお肉の食

べ放題は夢のようで、しかもコロニーなどで栽培されている合成肉などではなくちゃんと地球産の、畜産で採れた新鮮なお肉だ。

さすがセブンスターズの一角。豪勢なものである。

言葉だけでヨダレを出すジュリエッタだが、カインは更に追い打ちとして額を合わせ、今まで食べてきたお肉の味とイメージをジュリエッタに感応波として送る。

牛、鶏、豚はもちろんのこと、本当にごく稀に持つてくる羊、馬、兎などもある。そのお肉と、タレの味を事細かに伝えた。

するとどうだろう。

ジュリエッタは蝶を食べようとしていたこともすっかり忘れてしまったようだ。

「おっにくー！ー！」

「ラストル様、あと三日くらいしたら来ると思う」

「兄様の予言、よく当たるから楽しみー！」

「予言？」

「みんな言ってるよ。カイン兄様はよげんしゃだつて！」

カインとしてはなんとなくそう思っただけで、確たる自信があるわけではない。ただ勘が冴えてそのことを言葉にしているだけなのだが、それがかなりの中するから不思議だ。

例えば雨が降りそうだとか、さつきもあつたようにラストルがいつ来るかとか。色々当ててしまうために孤児院でも有り難がられている。

カインはジュリエッタに蝶のことを思い出させないために、手を引いて孤児院に戻る。

カインが五歳、ジュリエッタが三歳の時の話である。

2 契機

カインが六歳になって。予定通りカインは幼年学校に入学した。普通教育の学校ではなく、ギヤラルホルンが運営する士官学校の下部学校だ。

普通教育学校と同じように学年に応じた勉学もさせるが、大きな違いは運動量と、軍用知識を学ばせることだろう。

この幼年学校に通う者は、ほとんどが親がギヤラルホルンの関係者である子供だ。軍人から研究者に技術者、もしくはは事務方の者も入れたりする。

セブンスターズの子息も、将来を見越して入る者もいるがそれは七家ごとの教育方針にもよる。フアリド家はセブンスターズでも序列が高いが、特殊な事情で子供を幼年学校に通わせていなかった。

セブンスターズ第一席であるイシユー家は子供が女兒であることも関係し、ある程度普通教育をしてから編入させる手筈を整えていた。ボードウィン家は年齢に則して長男を幼年学校に入れていた。

ギヤラルホルンの上の者も通えば、もちろん下の者も通う。学校とは社会の縮図だ。ギヤラルホルンでは地球出身者が優遇される。だがもちろん地球には宇宙出身者の子

供もいる。その子供達もこの学校に通うことになる。

そしてどこ出身なのかわからない——カインのような孤児院出身の者もいる。それも数多く。

なぜ孤児院出身の者が多いのか。

軍人は、死ぬ。ギャラルホルンが治安維持組織として睨みを利かせているとしても、戦闘行為はどこでも起きる上に死者は確実に出る。確実に矢面で死ぬのは軍人だ。

そんな軍人達の上層部は、自分が死ぬことを恐れた。では自分が死なないためにはどうすればいいか。

後方で踏ん返り返っていられるほど、矢面に立つ使い捨ての駒がいればいい。

こう考えた結果、孤児院出身者や地球出身ではない者を広く受け入れていた。

孤児院出身者や親が軍人である者には幼年学校及び士官学校にかかる費用を全てギャラルホルンが補う。するとバカな親や経営に苦しい孤児院の運営者が喜んで駒を送る。

初期投資で安全な盾を用意し、軍人になったら地球出身じゃないとして昇進をさせずに経費を削減し、困窮を作り出す。そしてできた子供は親の生活が厳しいか戦死して行き場をなくす。

となると、無償で通える場所へ送り出すしかなくなる。無償の教育機関など地球と宇

宙を見渡してもギャラルホルンの軍学校しかない。

選択肢がないように世界を整える。三百年もあれば造作もないことだった。

こうして負のスパイラルを産み出して、長期的に壁を補充していた。

これがギャラルホルンの腐敗の一部。こんなのは序の口だった。

こんな経緯もあつて、カインが名も知らぬ孤児院から送り込まれたことになつても誰も気にしなかつたりする。

まあ、問題は起こつてしまうのだが。

「カインが飛び級？」

「はい。いささか優秀過ぎまして……。教師陣は一回生にしておくことは勿体無いとして特例として三回生にすると」

「……入学前に詰め込み過ぎたか？」

幼年学校にいるエリオン家の手の者から報告を受けたラスタルはもらった幼年学校の成績表を端末で確認する。

座学は文句なしの成績。とはいえ一・二回生の座学なんて簡単な文字の読み書きと四則計算の一部だ。MSのシミュレーターに乗せる関係で最低限のことを教えていたらそれで充分だったらしい。

運動能力も、申し分なし。四歳の時点でギャラルホルンの軍人から意表を突いて盗み

を成功させたのだ。幼年学校の低学年程度の基準は、容易に跳び抜けているようだ。

三回生ともなると、銃の組み立てなど軍人としての実践的な講義も増えてくる。バリケードの作成、塹壕の作り方、応急手当の方法などなど。それを一回生の年齢の子供にやらせるのはどうかという話もあるが、飛び級については前例があるので見過ごされるだろう。

もつと大きな問題は。

「ボードウィン家の長子と同じ学年になってしまうのか」

「イシュー家の長女も、四回生から編入予定です」

「……ファリド家の養子も、同い年だったな」

セブンスターズの子息が同じ学年に揃っているというのは頭を抱えなくなる事案だ。子宝は恵まれるものなので学年についてはとやかく言いたくなかったが、ファリド家の養子はどうともなったはずだ。

そしてカインも、良い感じがズレているので秘密兵器たり得ると考えていたのに、まさか優秀過ぎて思惑からズレてしまうとは思っていなかった。

優秀だということは嬉しいことなのだが、この飛び級は誤算だ。これからのことでどう転ぶかわからなくなった。

「幼年学校のことでは私は口を出せん。飛び級はこのまま見送るしかないだろう。……他

家へ、探りを入れておくか」

「私も引き続き、カインのことを見守りつつ情報を仕入れてみようと思います。特にフアリド家が最近では強引に権力を集めているという話もあります」

「ああ、頼む。……カインには手抜きもさせるか。これ以上目立って私との関わりが露見しても困る。その辺り、学校では大丈夫か？」

「はい。ラスタル様のことはもちろん、エリオン家のことも話題に上げることにはほぼないです。セブンスターズ絡みの雑談で時たま、くらいです」

「なら良い。引き続き彼の教育を頼むぞ」

フアリド家の権力拡大に向けた噂はセブンスターズだけではなく、表社会でも噂され始めているほどに動き出している。政界に対する根回しや、セブンスターズの子息の情報を集めるなど、イズナリオ・フアリドは随分と野心家な一面があるようだ。

カインは何も、海賊やら何やらへ対する兵士として育てているわけではない。どちらかという引いてはギャラルホルンのため、その敵対する全ての者に対する抑止力として育てているのだ。^{カウンター}

その相手となる者はギャラルホルンそのものや、セブンスターズすらも想定している。むしろセブンスターズは一番の干渉対象だ。

そうなるの特にセブンスターズについてはラスタルとカインの関係を知られるわけ

にはいかない。

ラストルは必要ともあれば、セブンスターズすら切り捨てる覚悟がある。

ギャラルホルンが腐り落ちていく前に、全てを浄化するための希望^機なのだ。カインという存在は。

ラストルはセブンスターズの会合に父と参加するために、ヴィーンゴールヴを訪れていた。あと数年もすればラストルは父からエリオン家の当主の座を受け継ぐことになった。

それも士官学校を卒業してアリアンロッドに入隊し、この二年で犯罪者の検挙などで成果を挙げたからだ。

だが、正式に当主になったわけではないラストルでは会合に参加することはできない。だからあたりの散策をしつつ情報収集を行うことにした。

中庭を一人で歩いていると、ベンチに一人で座って本を読んでいるマクギリス・ファリドを見付けた。彼の境遇を知っているからこそ、カインやジュリエッタという引き取った子達がマクギリスの立場になっていたらと考えると、同情心が浮かんできた。

そのため、ラストルはマクギリスに目線を合わせるために片膝を地面につけてマクギリスに質問を試してみた。

「マクギリス・フアリド君。初めまして。こんな所に一人だと暇だろう？ 何か欲しいものがあるなら言ってみると良い。可能なら用意しよう」

この質問がいけなかった。子供だからと、おそらく菓子の一つでも用意すれば良いだろうとたかか括ってしまった。

ラストルが声を掛けたことで、マクギリスの顔がようやく本から離れる。本からズレたその瞳は冷たく光がなく、だが野心を覗かせる強い目だった。

そんな瞳を、この齢の子がするのかと、ラストルは背筋が凍る思いをした。

「バエル」

マクギリスの返答はそれだけ。だが、それが全てだった。

それ以上に欲しい物などないと断言し、欲している理由も察してしまった。

ガンダム・バエル。ギャラルホルンの英雄アグニカ・カイエルと共に世界を救済した悪魔の機体。

バエルを動かした者にはアグニカを継ぐ者としてギャラルホルンの全権が委譲されるといふ眉唾話もセブンスターズには残っている。

たったそれだけの一言なのに、ラストルはマクギリスを気に入ってしまった。ある意味同族で、一番に警戒しなければならぬ相手だと。

子供の要求に、ラストルは大人の対応をする。

「すまない。それはどこにあるのか、知らないんだ」

表向き、この返しは正しい。バエルの所在地を知っているのはセブンスターズの当主と、整備に関係する技術者だけ。それ以外にはどれだけギヤラルホルンで階級が高からうが知ることはできない。

ラスタルは既に当主への引き継ぎが始まっているので知っていたが、まだ引き継ぎした内容は話す訳にはいかなかったので誤魔化した。

マクギリスはラスタルのことを知らないのか、本当にバエルにしか興味がないのか、ラスタルが情報源にならないと知ると目線は本に戻っていった。本のタイトルは「アゲニカ・カイエル伝説」というギヤラルホルン創設に関わる伝記だ。

この達観している様。そして立場からラスタルはマクギリスを警戒するようになる。ギヤラルホルンにとって希望の灯火にもなれば、全てを喰らう破滅の顎あぎとにもなりかねない。

現状どちらに転ぶかもわからなかったので、注意深く観察することにする。

マクギリスは本当にラスタルから興味を失ったようなので、彼は足早にこの場を去った。そしてすぐに父に報告をして宇宙に戻る前に地球でやることがあると伝える。

向かった場所は、とある懇意にしている孤児院。その一室を借りて、切り札と密会を行う。

「カイン。私の部下として命じる。マクギリス・ファリドを幼年学校からこの先、監視しろ。私との関係を漏らさず、彼の部下に入り込めるように信頼関係を築け」

「今まで通りのことに加えて、マクギリス・ファリドの監視が追加、ということでしょうか？」

「そうだ。感じたことを全て報告しろ。彼はすぐにでも幼年学校に編入してくる手筈になっている。……ジュリエッタにも伝えることはできず、辛い孤独を強いることになる。……すまない」

ラスタルとて、命令を出すのはもつと後のことだと思っていた。せめて士官学校に通つてから、どこかの家へ探りを入れることを想定していたが、イズナリオ・ファリドが手にした寵児は獅子の類だ。

決して愛を語り合うような、生易しい関係ではないとヴァインゴールヴを任されている男は気付いているかどうか。

計画がかなり変更されたために、ラスタルは誠意を持つてカインに頭を下げる。いくらニュータイプとはいえ、聡い子であるとはいえ、まだ子供。

そんな子供に、スパイをやらせるのだ。

だがカインは、そんなラスタルの目線より低くなるように片膝をついて胸に手を当てた。騎士が忠誠を誓う絵画のように。

「ラストル様。オレは、あなたに拾われて、嬉しかった。あなたのためにできることで恩返しができるのなら、これ以上の喜びはありません」

「……この孤児院はエリオン家と繋がっていると知られている。もう戻ってこれられないぞ?。」

「はい」

「誰にも口を開いてはダメだ。ジュリエッタに、例の力で伝えるのも禁止する」

「はい。使いません」

「時には私と敵対する。ジュリエッタとも、銃を向け合わなければならなくなるかもしれない」

その最後の確認だけは、即答できなかったカイン。

その場面を、想像したのだろう。それでも、彼の忠義は変わらなかった。

「その時は、オレが撃たれます。ラストル様はともかく、ジュリエッタには伝えなければわからないです」

「ジュリエッタはそうだろうな……。——カイン。お前の覚悟は受け取った。その忠義、嬉しく思う」

それは誰も知らない、孤児院での忠誠の儀。見ているのは窓の外に浮かぶ宇宙^{ソラ}の綺羅星だけ。

誰もが寝静まった夜。薄く輝く三日月と満天の星空が、カインの契機の日。
この日以降、彼がこの孤児院を訪れることは、なかった。

3 偽り

カインが飛び級をしてすぐ。途中からクラスに編入するため自己紹介をさせられた。孤児だということを素直に話してすぐ授業を受けて。

二限の射撃訓練のために移動をしようとしたら、廊下で後ろから声をかけられた。

「おい、お前。カインとやら。いきなり三回生に上がって大丈夫か？ 教養はあるようだが、三回生からは実技が増えるぞ」

(この方、確か……)

「心配していただきありがとうございます。ボードウィン卿」

カインはそう言い、頭を下げた。薄紫色の髪をしたカインより少しだけ背の高い少年。制服は幼年学校で共通のもので変わらないはずなのに、どこか気品を感じる少年だった。

それもそのはず。

彼はセブンスターズの正統後継者。ボードウィン家の長子、ガエリオ・ボードウィンだった。

「ボードウィン卿はやめてくれ。ガエリオでいい」

「では、ガエリオ様。自分を評価してくれた先生のためにも頑張るだけです」

「そうか！ 孤児にしては見上げた根性だ。産まれを気にせずギャラルホルンのために頑張るお前のような人間がいるのは心強い。将来的にお前のような部下が欲しいな！

—
ガエリオは純粋な気持ちでそう言っていた。それを言葉の雰囲気からカインも読み取る。

ガエリオはセブンスターズの一員でありながら、出自を気にしない性格をしている。最近も正妻ではなく愛人の子だというマクギリスと親友になったばかりだ。

だから孤児という理由でカインを差別したりしない。むしろ飛び級してみせた凄い奴だと褒め称えていた。

セブンスターズの場合は武功を挙げずともその席は確約されているために、飛び級などで急ぐ必要はないとして飛び級をする者はいなかった。戦場に向かう期間を長引かせるなど、保守的なセブンスターズは誰も良しとしなかったのだ。

そういう裏事情を知らないガエリオは、自分にはできなかったことをしたカインをセブンスターズとして配下に欲しいと、上の者として当然のように思っていた。

（このガエリオは要注意対象と親友だとラスタル様も仰っていた。二人して叛逆するかもしれない。なら彼とも関わっておいた方がいい）

ラストルからの情報を加味して、カインはそう打算を働かせる。マクギリスも来年になればこの幼年学校に通うのだ。

今の内からガエリオと仲良くしておけば、マクギリスとの接触も簡単になると思い、ガエリオにもいい顔をしておこうと関係性の構築を決定した。

「そうなれば、嬉しいです」

「約束だからな！ よし、じゃあ次の授業について俺が教えてやろう。銃と言っても本物の銃を使うわけじゃなくて、モデルガンを使う。弾丸もゴム弾だ。その辺は実際に持ってみるとわかるぞ」

こうして三回生の段階でガエリオと渡りをつけられた。そのおかげで四回生に上がった際に、予定通りにマクギリスとカルタ・イシューを紹介された。

このセブンスターズ三羽鳥とカインは幼年学校でも話題になっていく。全員が幼年学校で首位争いを繰り広げたので、幼年学校どころか士官学校でも名を知られていく。

カインはギャラルホルンへ名前を売り、そしてセブンスターズに匹敵する者として、三家と交流がある人間としてカインは注目されていく。

そうなれば。

彼から声を掛けられるのも当然の流れだった。

「カイン。君は何の為にギャラルホルンへ入隊するんだ？」

「自分達のような孤児を出さない為。孤児は辛いことが多いです。そんな孤児を、一人でも減らしたい。その為には、ギャラルホルンがもっと正しく、強くなければならないと考えます。孤児を減らすには、戦闘行為を減らすことが一番の近道だと考えました」

呼び出されたカインは、マクギリスに半分本音、半分建前の言葉を告げる。

この部屋は寮の一室で、セブンスターズの権力を使って抑えた小さな部屋で詰問されたカイン。

孤児ながら優れた成績で、セブンスターズとして教育されてきたマクギリス達に匹敵する能力を持ち。更に歳下ときた。マクギリスも興味を抱いて当然の天才児。

そして聞き出せば、今のギャラルホルン、ひいてはセブンスターズを否定するような発言が出てきた。

思わず、マクギリスは笑みを浮かべてしまう。

「つまりは、力が欲しいと？」

「はい。悪を討つ、正義の力が欲しい」

「……同志になろう。カイン」

「はい？」

上手くないった感触はあっても、突然の誘いに首を傾げてしまうカイン。

孤児が少しでも減って欲しいと思っっているのは事実だ。だが、そんな理由でカインは力を求めている。

全てはラスタルの思い描く世界のために。その世界の実現のために必要なものがMSの操縦だったり軍人としての力量であれば学ぶだけだ。

正義だの悪だので、力を求めている。

「その世界の実現のためには、今のギャラルホルンではダメだ。ここはギャラルホルンのお膝元だからわからないだろうが、ギャラルホルンは腐敗している。君のような孤児は増える一方だ。それは地球でも、その他の人類圏でも」

「そう、なのですか？」

「ああ。俺がその腐敗の最たる証拠だ。俺も孤児。イズナリオに拾われた、血縁もないただの子供。それがセブンスターズを名乗っていることが、歯車の狂いを示している」

マクギリスの唐突な告白に、カインは驚いた。演技などではなく、本心からマクギリスの偽りない言葉に驚愕を隠せなかった。

「ふふ、驚いたか？ 君と変わらない立場の者が、セブンスターズとして崇められている。愛人の子というのは真つ赤な嘘だ」

（ラスタル様からそんなことは聞いていない……。養子とは聞いていたけど、血の繋がりはあるものとはばかり。確認しないと）

「俺は男娼としてイズナリオに気に入られたただけだ。俺のような存在は宇宙にたくさんいる。これを変えるにはギャラルホルンの抜本的改革がいる。力による、腐敗など起きない絶対的な統治が。伝説の力が再び必要なんだ。アグニカ・カイエルのような英雄が」

マクギリスの言葉に熱が籠る。頬も上気して気分が昂っているようだ。

カインには男娼など知らない単語もあつたが、マクギリスがロクでもない目に遭つてきたのだと察する。

そしてマクギリスがカインも授業で習つたアグニカ・カイエルを随分と盲信しているのだということも。

マクギリスの思考が危険だとわかつては、ラスタルのためにも彼の代わりの目になることを選ぶ。

「……もしもあなたが本当に世界を変えられるなら。オレはいくらでも力を貸します。孤児が悲しまない世界を。同じ孤児だったあなたならきつと——」

「ああ。ありがとうカイン。まず俺がセブンスターズとして、跡取りとして相応しいと思われるように実績を積む。カインもこの学校と士官学校で優秀な成績を納めてくれ。そして俺が直属の部下として引き抜く」

「わかりました」

「俺と二人の時はそんな固い言葉じゃなくていい。俺も襟を広げているだろう？」
「……わかったよ。マクギリス」

二人の偽りの協力関係が、ここに構築された。

カインはそのことと、マクギリスの素性もラスタルへ報告したが、ラスタルはカインが男娼という言葉を知ってしまいショックで一日寝込んだ。

カインとジュリエッタがイズナリオに拾われてマクギリスと同じようにハーレムに加えられる予定だったことだけは墓まで持つていくと、今度こそラスタルは誓う。

その日は新入生が入って二週間ほど経った日。

新入生は一団となって野外の演習場を訪れていた。学校から距離のあるそこにはバスを使って移動したため、新入生からすれば遠足気分だ。

演習場に近付いてくると、キヤイキヤイと騒いでいる生徒達へ担任が声をかける。

「まもなくモビルワーカーを使った実機演習場に到着する。演習を行なっているのは五回生。みんなより四歳歳上の先輩達だ。そしてこの五回生にはセブンスターズのご息が三名もいらっしやる。心して見学するように」

「知ってる！ マクギリス様とガエリオ様！」

「カルタおねー様もいらっしやるわ！」

担任の言葉はむしろ子供達のミーハー心を刺激してしまっただけのようだ。

そんな騒がしい新入生達をよそに、窓の外を眺めている少女が一人。

入学した、ジュリエッタだ。

ジュリエッタの考えていることは、この学校にいる兄貴分のこと。突然孤児院から出て行き、幼年学校の寮生活を始めて一切孤児院へ帰ってこなくなった。

時折来るラスタルはカインが幼年学校で元気にやっていると教えてくれたが今までいた暖かさをいきなり感じられなくなつて、ジュリエッタは不安だった。

一緒にやっていた研究所の試験も、一人だと味気なかった。大好きな焼肉を食べても、どこか寂しかった。

ポツカリと空いてしまった空白が、とても気持ち悪かった。

だからジュリエッタは早くカインと会いたかったのだが、この二週間会うことはできなかつた。構内にいる感覚はあるのに、授業やら何やらで会うタイミングがなかつた。

最悪寮の部屋に殴り込みに行こうかと思っていたが、男女で寮は別れている。そう易々と異性の寮には近付けなかつた。それだけ学校とそれぞれの寮は引き離されている。

強硬手段をするには、ジュリエッタは幼すぎた。

だから、悪態をつく。

「バカ兄様……」

五回生なんて四つ上にジュリエッタは興味なんて欠片もなかった。用があるのは二個上の三回生。

折角同じ幼年学校に入ったのに、二週間も会えていないせいで向かう先からカインの波長を感じ取ってしまうジュリエッタ。疲れているのだろうとジュリエッタは首を横に振る。

演習場に着いて、観覧席に座るジュリエッタ。そして電光掲示板に現れる、演習を見せてくれる生徒の名前を見てジュリエッタは立ち上がってしまった。

二対二の形式のようだ。四人の内三人は担任が言っていたセブンスターズの跡取り。そしてもう一人は。

「カイン兄様……」

演習場にいるMWから感じる感覚は偽物ではなかった。そこにカインがいる。飛び級しているなんて、ラスタルから聞いていなかった。

周りはセブンスターズの跡取り達が総出で戦うということに興奮しているようだったが、ジュリエッタにはもうカインしか見えていなかった。

模擬戦が始まる。

使われるのはペイント弾のようで、地面が真っ赤になっていく。それなりに近い距離

のはずなのに、誰一人被弾していなかった。その技量の高さを見せつけていた。

だが、ジュリエッタは変だと感じる。

研究所でカインとジュリエッタはMWとMSの操縦訓練をシミュレーターとはいえ行なってきた。その時の動きと比較しても、動きが悪い。実機とシミュレーターという差がそこまであるのか。

ジュリエッタは他の三人についても感覚の波を広げて読み取る。

その結果、三人は必死ながらも、カインには余裕があるとわかった。

（兄様、手を抜いてる……？ あ、ラスタル様との関係を疑われないため！ 私も言われてたんだった！）

カインの動きが緩慢な理由には思い至った。そして手を抜いていてもそこまで実力が離れていないとわかる。

「ちよつとガエリオ坊や！ もっとマクギリスを引き付けて！」

「む、無理言うなってカルタ！ マクギリスは俺達の中でトップの成績だぞ!!? カインもこのところすつごく実力をつけてるし！」

「ああ、もうっ！ こうなったら菖蒲しよぶの陣よ！」

「何それ!!? 俺も知らない戦法口にされても困るんだけど！」

結果としてマクギリス以外が全員撃破判定。マクギリスがぶつちぎりなことは事実

だが、カインも負けていないとジュリエッタは思った。

「あれがセブンスターズのご子息の皆様と、五回生で唯一の飛び級生カインだ。あれだけMWを操縦できるとなると、士官学校生も顔負けだ。成績が良ければカイン五回生のように飛び級できる。皆も頑張ってほしい」

最後にカインのことを担任が褒めたことでジュリエッタは我がことのように鼻が高くなっていった。

自慢の兄が相変わらずで、ジュリエッタは嬉しかったのだ。兄も頑張っていると、ジュリエッタも幼年学校で頑張ろうと志を新たにした。

4 秘密の逢瀬

カインはマクギリスと契約を結んでから、放課後に一緒にいることが多くなった。

大抵の場合はガエリオとカルタもいるのだが、時たまマクギリスと二人だけの時がある。そういった時は未来に向けての打ち合わせが多かった。

幼年学校の中でもできる限り人目のないところへ行き、そして聞かれても大丈夫な会話をするように心掛けてはいた。たまには危ない発言も出てしまうが。

「やっぱり同志は必要だよ。たった二人じゃ手が足りない」

「それはそうだ。MSを使うにしても、整備士がいなければ運用に困る。武器弾薬の確保も必要だろう」

「弾薬とかはほら。海賊とか倒して押収品をどこかに一纏めにしておいて、後で回収したりすればいいんじゃないか？ 馬鹿正直に全部をギヤラルホルンに渡す必要もないし、工場を抑えるのは大変だよな？」

「そうだな……。では俺の方でペーパーカンパニーを作っておこう。そこに集めた弾薬などを隠しておけばいい」

ギヤラルホルンを改革するにしても、力は必要だとカインとマクギリスは共通の認識

を持つていた。力がなければ訴えも通らない、ただの弱者の嘆きになってしまふ。

意見を述べるにしても、それをまず述べられる立場。そして説得力を持たせられるような実績。いざという時に動ける戦力が必要だった。

そのために今からできること、できないこと。準備しておいた方がよいことなどをリストアップしていた。

二人集まれば文殊の知恵、ではないが片方に欠けている視線を補えるのでこのデイスカッションはマクギリスの改革について具体性が増していった。

「集めるのは早い方がよいけど……。幼年学校で優秀な人が一番身近かな？」

「いや、それは早計だ。カインは特殊パターン、こんな幼少期から優秀な人間なんて英才教育を受けたか、俺達のような過酷な生活を受けたか。その程度だ。幼年学校の最上級生、もしくは士官学校に入ってからでも遅くはない。まずは名声稼ぎだ」

「じゃあ当分は表向き凄い所を見せて注目を浴びておけばいいってこと？」

「そんな所だ。特に今の年代では深く物事を考えられないだろう。俺達の理想を理解できるかどうかもわからない」

軍事学校とはいえ、通っている人間はまだ幼い。この段階から同志を増やすのではなく、羨望を集めて信望者を作り、そこから選別する方が良いとマクギリスは判断した。

この幼年学校から先へ進むたびに、この場にいた者は目となり耳となり、口となる。

知らずのうちにマクギリスを褒める宣伝塔になる。それを見越してマクギリスは幼年学校で伝説となるべく様々な記録を塗り立てていった。

カインはそのフォロワーだ。カインが目立ってしまったのは本末転倒で、他のセブンスターズも圧倒する素晴らしい人という印象を与えるための、黒子。それがカインの役割。

ラスタルからもマクギリスからも手を抜けと命令されているので、どっちも同じことを言う分には楽だった。カインの年齢のことを考慮すれば、マクギリスやガエリオ達に及ばないことこそ正しい姿なのだから。

「セブンスターズが繁栄した最大の理由は三百年前の厄災戦でガンダム・フレイムを駆りアグニカ・カイエルと共に人類を守ったからだ。厄災戦直後はギャラルホルンも人類も秩序が残っていた。——となると、俺達もMSを、ガンダム・フレイムを最大限使える程強くならなければならない」

「海賊や反逆者を倒すための力。悲しむ人を減らすための、正しい力。……一番は人類を滅ぼそうとしていたMAでもいて、それを倒せたら良い宣伝になるんだろうけど」

「MAは殲滅されたはずだ。たとえ残っていたとしても、また人類が苦境に立たされる。眠っているならそれが一番良い」

マクギリスはファリド家に秘蔵されている歴史書を読み解き、三百年前に何があつた

のか大まかなことを把握していた。それをカインにも伝え、どうすれば理想の世界が作れるか考え込む。

この辺りの知識について、カインはラスタルに情報の正否を問わなかった。そこで齟齬が出てしまったらマクギリスに怪しまれるからだ。セブンスターズ由来の情報をカインが別口で知っていれば、裏にいるラスタルに辿り着かれる可能性がある。

知識の調整については、カインとラスタルはうまくやっていった。ラスタル側がほぼ情報を遮断し、カインだけがラスタルへ情報を流すことで齟齬が出ないようにしていた。

あとはマクギリスから習ったことを他の人間に言わなければいいだけ。

「ガンダム・フレームもMAも、一般のギャラルホルンの隊員は知らなくて良いんだろ
うか？」

「良いのさ。歴史を作り、管理する者が世界の統治者なんだ。それが今の世だとセブンスターズに当たる。……そしてその歴史を隠したということは、不都合な何かがあるはずだ。それこそが逆転の一手になるだろう」

「MAが人類を滅ぼす脅威だつてことはわかったけど、ガンダム・フレームは凄いの？」

七十二機でMAを殲滅したのは凄いことだろうけど、三百年前の機体でしょ？ 技術は積み重ねを経て進化する。MSもそれは変わらないはず」

ギャラルホルンがMSの製造技術——正確にはエイハブ・リアクター技術——をほぼ

独占しているため、発展性は少ないかもしれないが三百年前と比べて進歩しているだろうとカインは考えた。

幼年学校でもMSのシミュレーターはあるのでグレイズ・フレームの有能さは理解しているつもりだった。傑作機たる量産機。カスタムさえすれば海賊達の使うMSなどには負けないスペックを有している。

ガンダム・フレームとはそんな技術の足跡を超えるほどの代物なのかカインは純粋に疑問だったのだ。

「時代錯誤遺物も技術的特異点も技術的な言葉として使われる。MAやガンダム・フレームは我々現代人や三百年前当時からしてそういう呼称をされるような異様な代物だったのだろう。ガンダム・フレームの異常性はエイハブ・リアクターを二基搭載して並列稼働をさせている点だ。これは現存の技術では到底再現できない、まさしく大戦下における奇跡の産物だろう」

「それは……出力が段違いな筈だ」

「ただ整備性と操縦性が劣悪で人を選ぶそうだ」

「それくらいの不便がなきゃ、インチキすぎるよ」

エイハブ・リアクターは機械の動力炉だ。一つだけでもMSや艦船、スペースコロニーの動力にもなっている優れたもので、そのエネルギーは莫大なものだ。

それを二つ使っているのだから高性能にもなる。じゃじゃ馬にもなったようだが。

「現在ギヤラルホルンが確認できているガンダム・フレームの数は二十六。セブンスターズとバエルで八だが、それ以外はギヤラルホルン外で運用されている機体もある。ギヤラルホルンには半分以上の十八が残されているが、大半は整備もされず骨董品扱いだ」

「二十六……。勝者側だからだろうけど、それなりに残ってるな。けど今も使ってるのは海賊とか、傭兵くらい？」

「そうだな。ギヤラルホルンとしては安定性と量産性を鑑みて、新造フレームの方が良いと考えている。それに数が数だ。量産できない機体を主力にするより、カスタムもできて数を揃えられる機体の方がギヤラルホルンという組織が運用する兵器としては合っている」

ガンダム・フレームなど、幼年学校では習っていない。他のフレームと、採用された機体などは教えられているが、今のギヤラルホルンが教える歴史は厄災戦以降発展してきた新機体についてばかりだ。

厄災戦の時に大量生産され、今でも海賊や傭兵が再利用しているフレームや機体についても敵性戦力を知るために学んでいるが、厄災戦の英雄はアグニカ・カイエルとセブンスターズという話ばかりで活躍した機体については学ばない。

そもそもM Aという単語すら、学ばないのだ。人類が脅威に晒され、それを防いで統治したのがギャラルホルンという程度の話で終わってしまうのが厄災戦について。

M Aという強力な敵がいたとわからなければ、それと対になる英雄の機体についてもわかるはずがない。

「そうなんだよな……。今のギャラルホルンの任務はほとんどが暴動・内紛の鎮圧くらいで、大きな戦いも海賊退治くらいだ。凄く強い敵もいなくて、エースという存在も必要なければ量産機で十分になる」

「量産機で物足りない者にはカスタムした機体か指揮官機を与えれば終わってしまう。相手の規模と組織の形態からして、ワントップの超高性能機など過剰なだけだ。むしろ整備費の方が高くつく」

「ガンダム・フレームが使われないわけだ。それにバエルは動かせたらギャラルホルンの全権を与えられるってことは、動かせない理由があるんでしょ？」

「ああ。必要でもなく動かせないのなら、倉庫で埃を被らせる者も多くなる。当然の帰結だ」

ガンダム・フレームが強力ながら使われない理由がわかったカイン。ガンダム・フレームが戦うべきM Aもないのだから、使わなくてもいいのだ。

それに現在のグレイズ・フレームはとても良い量産機だ。訓練用のゲイレール・フ

レームよりもよっぽど安心して操縦できる。そんな機体が量産されているのだから、操縦性の悪い機体は飾りになる。

「だが将来的に、カインにはガンダム・フレームに乗ってもらうぞ？ 整備さえできて操縦できる腕があればこれ以上ない戦力となる。俺がバエルに乗るから、ファリド家のガンダムを使うと良い」

「奪うの？」

「そんなことをしなくても、イズナリオを引き摺り下ろせばあの家の物は全て俺の物だ。イズナリオもMSに興味などない。奪うまでもないさ」

マクギリスは養父であるイズナリオへ強い侮蔑の感情をあらわにして吐き捨てる。

イズナリオを陥れるのは計画の第一段階とも言えるだろう。マクギリスがファリド家の実権を握らなくては、理想の世界の構築など不可能だ。

イズナリオのことを思い出したのか、マクギリスは懐から懐中時計を取り出す。そして時刻を確認して、席を立ち上がった。

「すまない。あの男と会う時間に間に合わなくなる。今日はここまでだ」

「えっと、あの。頑張つて？」

「何を頑張れと言うんだ……。いや、良い。カインはまだ知らなくて良い」

「あー、うん。えっとオレはMSのシミュレーターで訓練しておくよ。また明日」

「ああ、また明日」

マクギリスは校門に来ているであろう迎えの車に乗り込むために帰っていった。これからマクギリスがされることはカインには想像も付かないが、辛いことだということにはわかっている。

部屋から出てシミュレーター室へ向かう。シミュレーター室は時間が許す限り使うことができるが、あまり人気があるとは言えない。何故ならMSの性能は実機と変わらないため幼年学校の生徒では扱いが難しく、その上自習をしても成績には反映されない。

それにMWならまだ実機演習やシミュレーター練習も授業で行うが、MSは基本的に士官学校に上がってからの項目だ。セブンスターズの子息も通う学校なので名目上置いてあるが、使う者はほぼいない。

下手な者が使えば、酔ってしまつて次の日からに差し障つてしまう。使うとすれば、勤勉な最上級生である九回生くらいだろう。卒業試験にMSの操縦技能は含まれていないために、無用の長物となつてしまつている。

そんなMS用のシミュレーター室に着いて準備を進めていると、外から懐かしい感覚の人物が近付いていることにカインは気付く。

その人物は自動扉を潜つて、室内に入つてきた。

「カインおにい——」

「初めまして。ジュリエッタ・ジュリス一回生。君にはまだこの部屋を使用するには早いと思うぞ」

入ってきたジュリエッタは、面を食らっていた。ここには二人しかいないのに、初対面のフリをする必要があるのかと。

だが、ここはギャラルホルンの施設。どこから誰に何がバレるかわからない。そしてジュリエッタはともかく、カインは表向きのラスタルとの関係性を一切断ち切っている。

ジュリエッタはエリオン家が支援する孤児院出身ということを偽らずに入学している。だからこそ、カインは対応を徹底した。

ジュリエッタは最初こそ戸惑ったが、カインの目を見て合わせなくちゃいけないと察して不器用な敬礼をする。

「は、初めまして！ 私は、カイン五回生の模擬戦を見て興味を持ちました！ 手合わせをお願いいたします！」

「操作方法は知っているのか？」

「はい！ シミュレーターならバツチリです！」

ジュリエッタの返答を聞いて、カインは隣のシミュレーターに座るように促す。それ

を見たジュリエッタは目を輝かせて隣のシミュレーターに座った。

「一度だけでぞ。……まあ、良い成績だったら次も考えなくてもないが」

「頑張ります！」

「どちらも機体はグレイズで。……酔うなよ？」

そして始まる、久しぶりの二人のワルツ。

お互いがお互いを感じ合い、そして二年振りの手合わせだったために最高潮まで共感し合ってしまった、かなりデタラメな試合になってしまった。

シミュレーターなお互いお互いが撃ったバズーカの弾を予測したように撃ち落とし、片方が近接ブレードを持てば同じように近接ブレードを出して打ち合い。

決定打が決まらないまま時間切れ。

それでは収まりがつかないとすぐに再戦。同じような試合結果をいくつか残した。

冷静になったカインが最後に試合のデータを消したが、ジュリエッタは大汗を掻いていたものの凄く満足したのかムフと得意げな顔をしていた。

「有意義な時間だった。ありがとう。もうすぐ寮へ帰る最終バスの時間だ。……オレは毎週火曜日この時間なら一人にいる。暇なら来ると良い」

「わかりました！ 毎週来ます！」

カインがジュリエッタにしてあげられることはこれくらいだった。そして関係を

偽った上でできる最低限の接触方法が、この模擬戦。

誰かに知られたら、ファンの子と遊びでシミュレーターをやったら腕が良かったのでそのまま訓練に付き合ってもらったとでも言うつもりだ。

セブンスターズの面々は放課後に家の用事ですぐ帰ることが多いので、バレることはないだろうとカインは勘が告げていたので信じることにした。

その勘の通り、ギャラルホルンに入隊してもジュリエッタとの逢瀬はバレることがなかった。

5 初陣

カインが六回生になって幼年学校が夏の長期休業に突入した時。

カインはアフリカンユニオン（ヨーロッパとアフリカ、中東、中央アジアを中心とした経済圏）に来ていた。学校側には孤児院に帰ると伝えて、ジュリエッタにはいつも通り寮に残ると伝えた。

ジュリエッタには嘘だとバレていたようだが、深く言及はされなかった。

カインは今、両目にカラーコンタクトを入れて緑色の目にして、髪も真っ赤に染めていた。

カインという幼年学校生が、紛争地帯にいたという証拠を残さなかったためだ。

そんな場所にカインが一人で来られる訳が無い。手引きをしたのはもちろんラスタルだ。そしてラスタルがカインに同行させた人物もいる。

黒髭を伸ばし、傭兵らしいガタイの良さと戦場の臭いを纏わせた、歴戦の漢を思わせる人物だ。

「ここではお前のことをアベルと呼ぶ。俺のことはノドか、『髭のおじさま』とでも呼ぶがいい」

「わかりました。ノドさん」

「可愛くないな……。まあ、ラストルが送り込んだ奴だ。そういう奴なんだろうが。……アベル。お前のここでの立場は、傭兵が雇っているMS乗りのヒューマンデブリだ。今回の敵は中東の反体制派。ギャラルホルンと共同して物事に当たる。わかったな？」

「はい」

そう、これは実戦経験を積むためにラストルがカインに出した試練。中東で小規模な紛争が起きているので、旧知の仲のノドを通してカインに実戦を知ってもらおうという考えだった。

今の情勢で、いつ大規模な紛争になるかわかったものじゃないほどギャラルホルンは腐敗している。そのため実戦経験を積むことは急務だった。

最近特に宇宙でギャラルホルンに反発する勢力が増えている。幼年学校や士官学校に通っている間に大きな反乱に巻き込まれてそのまま死んでしまったとなると困るので、ラストルは子を谷に落とすような所業で実戦投入を早めた。

カインはノドに案内されるがまま、とある倉庫に着く。

そこに格納されていたのは一つのMS。細身のバランスに深緑色の各部位装甲が付けられた、現ギヤラルホルンの主力機であるグレイズの前身となった量産型MSだった。

「これがアベルに支給される機体。ゲイレール・カスタムだ。通常のゲイレールと違うのはコックピット周りだな。中を見ればわかる」

ノドと共にアンカーを伝ってコックピットに上がる。中を見れば一目瞭然、最新式のコックピットと遜色ないほど洗練された座席。そしてレバーなどは教本でも見たことのない物となっていた。

「俺もラスタルから詳しくは聞いていないが、とある研究所で作られた脳波を感じやすく、お前さんの脳波をMSに直接フィードバックさせるシステムが組み込まれているらしい。阿頼耶識システムの亜種だそう。このシステムを組んだがために、このゲイレールはグレイズ六機分の費用がかかっているらしいぞ？」

ノドがおどけてそう言う。カインは実際に火を入れてみて、どのように動くのか確認し始めた。

研究所で取ったデータを参照しているのだろう。軽く動かしただけでシミュレーターよりも機敏に動かせた。ノドも補助席でその試運転を見ていたが、まるで人体のように動くMSに、感嘆の意味で口笛を鳴らす。

「ヒュー。お前さん、本当にまだ十歳か？ 傭兵として十分やってけるぞ。これで戦場処女とはなあ」

「……凄いいシャープにオレに応えてくれます。この機体の性能が良いんですよ」

「いくら操縦が上手くたって、戦場では何かがあるかわからない。それだけは覚えておけよ」

「はっ」

倉庫に機体を戻して、これからの活動をノドから聞こうとした。

その前にノドが、ある物をカインに手渡す。

「今後アベルを名乗る際はこのサングラスを付けろ。誰かに聞かれたら色覚異常とでも言っておけ」

「自分を隠すため、ですか？」

「カラーコンタクトも染髪も、一時凌ぎでしかない。それなら顔の輪郭を誤魔化す大きな物があれば良いんだ。仮面も考えたが、そうしたら俺の品性が疑われるからな」

「サングラスで十分です」

受け取ったサングラスをすぐにかける。視界が不鮮明になることもなく、色の見え方も普段と変わらなかった。

「うーん。やはり似合わないな。幼すぎる子供にサングラスってなあ」

「それは言わないでください」

機体を受領して、カインは初陣に挑む。

相手はMWを中心とした少数の反抗勢力。地元の民族と、雇われた傭兵による混合部

隊だ。こちらもギャラルホルンの部隊と、ノドが率いる傭兵団の混合部隊。

こちらの指揮官はギャラルホルンの三佐。傭兵団は主に左翼を受け持つて敵を各個撃破とのこと。

ノドの傭兵団は珍しくMSを所持している傭兵団だ。この時代ではMSを所持している地球内にいる組織はかなり希少で、ギャラルホルンが見逃している、ある種公認の傭兵達だった。

自分達を守る壁であり、金さえ払えば危険を減らせるならこういった傭兵を雇うことも厭わない。

ただし自分達の敵になったら面倒なので逐一活動は監視されている。ノドもラストルに恩義があるため、基本的にはギャラルホルンを敵に回すことはしなかった。

カインは初日、ノドと一緒に偵察任務に出た。

戦端が開かれているのは森林地帯だった。カインもノドもゲイレールに乗って木々の間に機体を隠しながら戦場を俯瞰していた。今日はカインに戦場というものを実感してもらおう日に当てていた。

カインは機体に立膝を付かせて、頭部の球状のセンサーユニットを使って戦場を見ていた。

お互いのMWが機銃を吹かせて、どうにか突破しようとしている反抗勢力と、国境線

を守ろうとするギャラルホルンのシンボルマークを掲げたMW達。

「どうだ？ アベル。これが戦場だ」

「……気持ち悪い」

「ほう？ 初の感想がそれか。やはりまだ戦場は早かったか？」

ノドはカインの感想を聞いて年齢的に若かったかと懸念を述べる。六回生になったとはいえ、まだ十歳。ヒューマンデブリならとつくに戦場を経験していてもおかしくない年齢ではあるが。

カインが元ヒューマンデブリだとしても、そこから脱却したのが四歳。それでは戦場も経験していないだろうとわかっていた。

だが、おかしい感想でもある。

怖い、ではなく気持ち悪い、なのだから。

ノドはラスタルからカインの感受性について聞き及んでいる。だから、その感想を抱いたのはどういうことか尋ねる。

「何が気持ち悪いと感じた？」

「何の為に戦っているのか、その信念がありません。恐怖、お金、自己顕示欲、根拠のない自信、ただの八つ当たり。そういうものがあそこには渦巻いている。誰かのために、という思いが欠如した戦いなんて、気持ち悪いとしか思えません」

「……お前は戦士というより、昔の騎士に近い精神性を持っているな。いや、それがお前の戦う理由になっっているのならそれで良い。今日はここまでだな。ベースキャンプに戻るぞ」

「はっ」

戦場の視察という大目的を達成したため、二人は帰還した。

戦場を本格的に経験するのは、次の日からだ。

この紛争は、正直そこまで長引かなかった。

相手の戦力が、ギャラルホルンにケンカを売るに足らずに脆弱すぎたからだ。

古くからこの地に住む先住民と呼ばれる現地に住む人間の、ギャラルホルンが定められた国境線に対する抗議の意味で勃発した紛争。

ギャラルホルンが「武力を持って武力を制す世界平和維持のための暴力装置」と呼ばれていることを鑑みればよほどのことがない限り暴力で訴えるのは愚かだ。

特に地球圏ではMWを始めとした武力を持つことはギャラルホルンが厳に監視している。MSなんて以ての外で、持っていたとしてもコレクションやエネルギー設備の電源代わりが精々。

現役のMSを持つ武力組織など、一部の例外を除いて地球上にはいなかった。

MWですら集めるには苦勞する。もちろんMWだけ用意したとしても弾丸がなければ無用の長物。その弾丸ですら、地球では高い。

MSと違ってMWや弾丸程度なら自作することもできるが、その製作工場が摘発されないかどうかは別の問題。やはり戦力を集めるのは大変だという話。

高い金を支払って傭兵を雇っても、その傭兵がギャラルホルンに勝てるかと言われたら勝てないだろう。何せMSの装甲は強固だ。MWが使用する銃火器程度ではビクともせず、磨り潰されるだけ。

そしてMSの技術を独占しているのも、ギャラルホルンだ。

MSという絶対な力が敵勢力にある時点で、暴力に訴えるのは間違っている。

ラストルもそれがわかっているのでカインを派遣したのだし、相手は小国。雇える傭兵もたかが知れていた。

では、何故傭兵などの中でMSを所持する者がいるのか。それも地球圏に、という話だが、もちろんこれには裏がある。

ギャラルホルンを退役した軍人の天下り先として人気なのが傭兵と民間警備会社だ。傭兵は雇われなければ悠々自適に暮らせて、雇われたとしても前払いで金銭を受け取った後に危なくなったら離脱すればいい。

民間警備会社もギャラルホルンに任せておけば、ただ街中を巡回してい流だけでお金

が貰えるのだ。これ以上ない再就職先だった。

そんなところのお飾りとしてギヤラルホルンで不要になったMWやMSを払い下げていた。それがMSを持つ理由。

これは元ギヤラルホルンの人間だけではなく、関係ない傭兵や民間会社にもギヤラルホルンから旧式の兵器を卸していたりする。

まず第一に、良い収入源になるからだ。

MSは一つでもかなりの戦力となる。MSに対抗するにはMSが必要だ。力を求める者は是が非でも求める。そういう相手に要らないMSを売ればかなりの高額な収入となる。

軍事は維持するのにお金が掛かる。そのためMS以外にもギヤラルホルンが裏から手を回して払い下げたりしているのだ。

海賊などが使っている大半のMSは、厄災戦で宇宙などに捨てられた物を改修して使っているだけ。純正品を使っている訳ではなく、骨董品を無理矢理動かしているだけだ。

そんな傷だらけでまともに運用できるかどうかは直してみなければわからない骨董品を拾って修理する手間を考えると、ギヤラルホルン製の旧式の方が性能も良くて整備性も良く、何より修理が要らない。

こういう事情からMSを求める客はいて、傭兵達はギヤラルホルンにとって良い財布だった。

また、MSはともかくMWや弾丸などを卸す理由は、敵性勢力を完全に除去してしまえばギヤラルホルンの暴力機構は必要なくなってしまうからだ。

軍事を維持させるために、自分達で兵器を売り戦えるようにして、武力の必要性を証明して軍事費をせびる。所謂マッチポンプというやつだ。

これらの理由から、地球圏の傭兵や民間警備会社、または反抗しようとしている者達が武力を整えられる環境ができていた。

まさしく、ギヤラルホルンが世界を統べていた。

とはいえ、こういった調整ができるのも精々地球圏が精一杯。宇宙は広く、圏外圏である火星や木星などの人類が住む場所はギヤラルホルンの手が行き届いてなかったり、ギヤラルホルンの腐敗が一層酷かったりする。

とにかく。

ギヤラルホルンの手引きのせいで目の前の紛争は行われていた。しかもギヤラルホルンにとってかなり安全な紛争が。

この紛争に勝てば相手に言うことを聞かせられて、色々と搾り取れる。それを考えればMWを払い下げるといふ初期投資など全く痛くなく、むしろ収支はプラスになる予定

だった。

そんな出来すぎた戦場で、カインはゲイレールを駆って右へ左への大立ち回りを披露していた。

「俺も近くで控えているが、基本はアベルが一人で立ち回れ。戦場を知ること、MSの有用性を肌で感じることに、人を殺すとはどういうことか。それを全て味わってこい」

ノドにそう言われて、カインは相手のMWを蹴散らしていた。ギヤラルホルンもMWを出して紛争を長引かせていたが、大人気なくても結果としては大勝利としなければならぬ。

そのため雇った傭兵団にも花を持たせるために左翼は完全に傭兵団に任せてMSの出撃を許可していた。今頃中央と右翼でもギヤラルホルンのグレイズが暴れている頃だろう。

『グアアア！ 祖国バンザイ！』

『ヒツ!?? 嫌だ嫌だ！ 死にたくない!??』

『ええい、ギヤラルホルンのMSはバケモノか！』

『お、お母さ——！』

『チクシヨウ！ ギヤラルホルンなんて糞食らえ——！』

『我々は部族と、誇りある聖地のために……！ 何故邪魔をするウ!??』

『俺達は、強いられているんだ！』

『金と暴力で弱者を潰して、楽しいのかよ!?!?』

『だってよ、パーサーなんだぜ!?!?』

『こんな憎しみが憎しみを産んで……!?!?』

様々な怨嗟の声が、生々しい声が、カインに届く。特別製のコックピットはエイハブ・ウエーブの影響下であっても爆散する直前の声を拾ってしまい、死の恐怖がカインの頭にくびり付く。

それでもカインはフットペダルを踏んで敵に近付き。レバーを操作して鉄剣を振るい。トリガーを引いて大火力でMWを吹き飛ばした。

肉の音が届くたびに胃から込み上げるものがあり、何度かえづきながらもカインは突き進んだ。あまりにも感じすぎてしまうために戦場の感覚は常人よりも辛かったが、カインは理想のために前へ足掻く。

これからはもつと酷いことがあるかもしれない。そしてそれを止めるために、いざという時に動けるようにと、カインは人を殺した感覚をしっかりと受け入れながら歩む。

辺りのMWをカイン一人で壊滅させた頃、カインは肩で息をしていた。疲労はもちろんのこと、様々な感情が襲ってきて精神的にも参っていた。

そんな時、コックピットからアラーム音が鳴る。特徴的なエイハブ・ウエーブを感知

した音だ。レーダーを見て、頭部のカメラでそのシグナルを視認して。

味方ではないゲイレールが、カインの元へ向かっていた。

すぐさまカインはその場を離れる。すると今までいた場所にマシンガンによる銃撃が地面へ着弾していた。少しでも遅れていたら装甲に傷が付いていただろう。

「クソが！ ギャラルホルンもこんなちやな戦争でMSを二十機以上動員しやがって！ 商売上がったらだぜ!!？」 悪いがご同輩！ 俺サマが生き残るための礎になつてくれ！」

右手のマシンガンで牽制してきた傭兵のゲイレールは、左手で持った鉄剣をカインのゲイレールへ振り下ろしてきた。カインもすぐさま右手の鉄剣で受け止めて、長く鏝迫り合いをすることなく離れる。

初めて、コックピットを大きく揺らす衝撃を受けた。MSとの実戦。直に受ける衝撃はシミュレーターで受ける揺さぶりよりも大分酷く、不規則なものだった。

マシンガンが放たれれば避ける。スラストーのガスを多く使うことになるがこれが最適解だった。いくらMSが強固とはいえ、当たりどころが悪ければカメラがやられる上に、精密機械であるMSの駆動部をやられたら後は良い的になるだけ。

カインは近接戦を仕掛けながらも、避けられる攻撃はできるだけ避けていた。

「お前の動き、気持ち悪いな……。まるでこつちの動きを察知してるかのようだぜ。で

もな、こっちもベテランの傭兵として、同じ傭兵には負けてらんねーのよ！ 周りにギヤラルホルンもいねえ、たった一機のゲイレール！ 傭兵の虎の子の戦力つてところだろ！」

相手の傭兵は随分と饒舌だった。カインはその受け答えをする余裕などなく、ひたすら剣を叩きつけて避けるだけ。

ゲイレールは、ギヤラルホルンにとつて旧式のMSだ。グレイズ・フレームがあまりにも優秀すぎたため、一世代前の機体ながらもさつさと流出させてしまうほど性能差があるとギヤラルホルンは考えている。

だからそんなゲイレールに乗っている者はよつほどの老兵ロートルか、傭兵しか考えられない。それが傭兵にとつての常識。

ギヤラルホルンの手の者が偽装工作でわざわざゲイレールを使うなどという考えには思い至らないのだ。

「お前の動き、どこかで……？ ツ！ その人体を模した機体の動き！ そうか、テメエ宇宙ネズミか！」

「だったら、何だ！」

「はっ、やっぱり声が若え！ ヒューマンデブリめ、地球でもお仕事ご苦労様つてなあ！ テメエの居場所はこちらにはねえよ！ 産まれ落ちた宇宙で死ねなくてご愁傷さん！

「
傭兵の男は阿頼耶識手術を受けた者だと考えていたが、カインは阿頼耶識についてあまり詳しくなかった。宇宙ネズミと言えば粗悪品の阿頼耶識システムを着けた者の詐称なのだが、そうとは知らずカインはその言葉をヒューマンデブリの詐称だと思った。カインがヒューマンデブリだったということは事実だ。今更覆ることはない。そして宇宙でも要らないとされて地球に捨てられた。」

どこにも居場所がない子供だった。

それを助けてくれた人がいた。

一緒にいた子も助けてくれた。

それだけで、カインは戦う理由にできた。生きたいと、少女の顔が思い浮かびながら願ってしまった。

その想いを機体が応えたのか。徐々にカインの振るう鉄剣が敵の関節部を捉えるようになってきた。動きも更に俊敏になり、鉄剣で敵の両脚を叩き潰して地面に転がしていた。

傭兵はまだ諦めずにマシンガンを向けるが、そのマシンガンは銃身ごと蹴り潰される。両肩に脚を乗せ、完全に身動きが取れなくしていた。

「……ハッ。俺も鈍ったかねえ……。地球の肥溜めの俺と、宇宙ネズミのお前。どこにも差はねえか」

「……あなたは、強かった。オレは、そう思う。それにきつと、オレとあなたは違うんだ」
「どうだかねえ。……まあいい。この選択をした俺自身は何も後悔はねえ。先にヴァルハラで待つてるぜ！ 我が好敵手よ！」

その叫びを聞き届けて。

カインは鉄剣をコックピットに突き刺した。

生命の灯火が消える感覚を味わって。本当に後悔がないような満足感だけを残されて。

「……………ウエッ」

カインは盛大に吐瀉物をぶちまけた。

「どうだった？ 『髭のおじさま』」

「お前がそう呼ぶなよ……。最後はえづいていたが、結果だけを見れば最良だろう。戦場を怖がっている様子もない。戦果も申し分ない。お前への忠誠も変わらずだ」

「そうか。……酷な事をさせた」

「全くだ。早すぎる。……なあ、あの『疾風のイグザ』を雇ったの、お前だろう？ あんな小国がアイツを雇える金があるとは思えない。MWやら弾薬やらで手一杯のはずだ」
「……ああ。MWだけではなく、MSとの戦闘も経験させておきたかった。それにお前もいたのだから、もしもはないと思ってな。結局一人で倒してしまおうとは」

「あの機体があつてこそその成果だな。普通のゲイレールだったらやられていただろう。イグザのゲイレールは通常の物よりかなりチェインアップされていたようだからな」

「だが、あの辺りで有力なエースも倒せたというのはかなりの経験値になっただろう。後は集団戦だが、この夏期休暇では無理だな。じっくりと経験させよう」

「またその時は俺頼みか？」

「そうなる。よろしく頼むぞ、友よ」

「ハア。わかったよ、友よ」

6 セブンスターズの変化

カインは九回生、つまり幼年学校で最上級生になった。

カインも最初以外の飛び級はせず、ジュリエッタもそこそ良い成績を残したが、飛び級はしなかった。実技は良いのだが、いかんせん座学の成績は良くないので飛び級を勧められることはなかった。

カインはいつもセブンスターズの幼年学校三羽鳥こと、マクギリス・ガエリオ・カルタと一緒にいた。この四人組は幼年学校でも有名な四人組だった。

カインだけ産まれが異なるが、三人全員がカインを認めているためにやつかみを受けることはなかった。陰口はたくさんもらっていたが。

今日は珍しく四人組ではなく、カルタがいない。出席すらしていなかった。セブンスターズは自分の邸宅から通っているのだから察を確認しても無駄だ。

三人は中庭でサンドウィッチ片手にベンチに座って昼食を食べていた。マクギリスは出自動的にそんな姿を見せても自然だったが、ガエリオは雰囲気から家柄から本当に良いところのお坊ちゃんという感じなので結構珍しい姿だ。

マクギリスがやったことでガエリオとカルタも真似して見た所、二人とも片手で物を

食べるという習慣がなかったので最初は苦労していたが、今では割と様になっている。むしろやんごとなない英雄の家系がそんな庶民的な行動をして、しかも不器用にあたふたしている様は特に下級生の女子に大好評だった。

今では様式美になっている様子を見せながら、カインは尋ねる。

「ガエリオ様。カルタ様はどうかされたのでしょうか？」

「あー、最近カルタの親父さんの調子が良くなってな。多分その見舞いだらう」

「なるほど……。親の一大事でしたか」

「……カインは、親のことなんて知らないんだよな？」

「はい。気付いたら孤児院の前だったので。記憶もなく、名前も知りません。名前は孤児院でつけていただきました」

「ホント、戦争孤児なんてなくなれば良いのにな……。マクギリス！俺達でギャラルホルンを率いて、カインのような存在を一人でも減らそうぜ！」

「無論だ。私はそのために今も精進している」

カインの憂いげな空気を、ガエリオは快活に吹き飛ばす。マクギリスもクールに返しているが、それも大目標の一部だろう。だから力強く頷いていた。

そのマクギリスが、確認をする。

「そういえば最近、クジャン家の一人息子が編入してきたな。四回生だったか。御当主

が戦死なさって、エリオン家のラスタル様に引き取られたと父上から伺っている」

「宇宙海賊の討伐任務と聞いている。前当主が臨時でクジャン家を率いているようだが、あの方もいいお年だ。だからこそエリオン家に頼ったのだろう」

マクギリスとガエリオが話している内容について、カインはもちろんラスタルから聞いていた。下手に接触する理由はないため、学年も下ということも相まって会わないと腹を括っていた。

敵を騙すなら味方からという言葉もある。

ジュリエッタとの秘密の逢瀬はノーカウント。

「そうそう。ガエリオ、奥様が御懐妊なさったとか。おめでどう」

「え？ そうなのですか？ ガエリオ様、おめでどうございます」

「止せ止せ。まだ四ヶ月だ。産まれてから祝ってくれ」

「フ。そうさせてもらうよ」

この情報はカインも知らなかった。セブンスターズの情報も逐一入ってくるわけではない。ラスタルとの通信も不定期で、情報も全部流してくれるわけではない。

クジャン家のこともあるために後継は一人だけというのも不安なのだろう。だからもう一人こさえた。

とはいえ。ガエリオと年齢差がありすぎる。ボードウィン家の奥方は下手したら高

齡出産だ。そういう心配もあつてガエリオはまだ祝うなど言つていた。

「ご飯も食べ終わつて雑談をしていると、カルタがこちらに向かつていることに気が付く。どうやら午後から出席するようだ。

だが、そのカルタの顔は優れない。

「カルタ、遅かつたな！……顔が険しいぞ？」

「ガエリオ坊や、あなたのそれは最早才能の一つね。……三人には、お別れを言いに来たの」

「お別れ？ 不穏だな」

マクギリスも顔を顰める。カインも哀しみの感情は読み取れても、本題の内容までは察せなかつた。

「——お父様の具合を鑑みて、私カルタ・イシユーは幼年学校を繰り上げ卒業。士官学校二回生へ編入することになりました。その報告を」

いつもとは違う口調。そして語られた内容は三人を驚かせるものだった。

もう彼らは十五歳になった。セブンスターズという枠組みを十分に理解し、敢えて飛び級をしないことは知つていた。

その暗黙の了解を破つてまで、カルタは飛び級をする。それほど御当主の容体がよろしくないのだろう。

「——なに。士官学校は三年ある。来年私達は同じ学び舎にいるのだ。そう悲観することではないだろう？ カルタ先輩？」

「マクギリス……」

「重圧とか大変だろうけど頑張れよ！ 俺達は守ってやれないんだからな」

「ガエリオ坊やに心配されるまでもないわよ……」

「カルタ様はカルタ様に変わりありません。どこにいようと、あなたはあなたですよ」

「カイン……。ええ。そうね。私は私だわ」

各々が激励の言葉を贈る。

四人の友情は変わらないのだと。全員が拳を前に突き出して合わせていた。

その一部始終を見ていた女子生徒があまりのエモさに鼻血を出して倒れていたのは完全なる余談である。

——
もう毎週の決まりごとになった火曜日。

カインとジュリエッタはどちらが早く来ると決まっていたわけではなかったが、早く来た方がシミュレーターのセッティングをしていた。今日はカインが早く来ていた。

相変わらずMSのシミュレーターは不人気だ。卒業資格の単位として実機演習があるのがMWなので幼年学校の内はMWを慣らしておけばいいと考えているのだろう。

あとは少なからずMSとMWは操作方法に共通性があるので、MWが操縦できればある程度はMSも操縦できるという事実も関連している。士官学校でやればいいと高を括っている者がほとんど。

幼年学校の教官にも苦笑されるレベルでMSのシミュレーターをやっているのはカインだけだ。予定が合えばマクギリスやガエリオともやるが、二人はセブンスターズとしての教育で忙しい。

カインがジュリエッタを待っていると、ジュリエッタ以外の人物がシミュレーター室に向かつて来ているのを感じ取った。教官かとも思ったが、感覚は幼い子供だ。大人じゃない。

「イオク様！　ここまでついてこないでください！」

「私はお前の実力に興味がある！　将来の部下になる人間の實力を見極めておこうと考えたまでだ」

「ハア？　誰が将来のあなたの部下ですか！　確かに私の第一志望はアリアンロッドですが！」

「アリアンロッドはクジャン家とエリオン家が代々指揮をしている。要するに私の部下だろう？」

ジュリエッタとイオクの声はシミュレーター室の中まで届いていた。そしてジュリ

エツタがイオクを連れてこの中に入っていいものかと逡巡しているのを感じ取った。

溜息をついてから、カインはジュリエッタを助けるために扉を開いて廊下に出る。

「あ……。カイン九回生」

「ジュリエッタ五回生。遅かったな。イオク・クジャン様、お初にお目にかかります。カイン・ベリアルと申します。ジュリエッタ五回生の実力が知りたくてこちらまでいらつしやつたので？」

「ああ、そうだ。ここはMSのシミュレーターじゃないか。アリアンロッドともなればMSの操縦技術は必須。もう学んでいるとは私も鼻が高いぞ！」

カインが下手に出て、そのままをよしとしたことにジュリエッタはウワーと引いていた。ジュリエッタが九回生と言ったのだからたとえどんな立場だろうと幼年学校では目上の人物だ。

だというのに畏まる態度を取られて当然という横柄な様子。セブンスターズとはいえ、軍内での規律や階級は守らなければならない。ギャラルホルンの下部組織である幼年学校でもそれは同じだ。

この場合は学年になる。

他のセブンスターズは自分達がセブンスターズだからといってその立場をひけらかして好き勝手にしてきたわけではない。学年などが上の相手には敬意を示していた。

イオクのこの態度は、クジャン家で甘やかされてきたためにそういう常識を学んでこなかったからだ。

カインもイオクのことはラスタルから掻い摘んで聞いてはいたが、実際に目にしてみると酷いとわかる。

それでも、そんなことを思ったとは露ほども表情に出さず、カインはこのまま対応を続ける。

「それではイオク様。見学なさいますか？」

「いや、私が直接実力を見よう！ これでもアリアンロットを率いるための教育を受けてきたからな。ジュリエッタと戦わせてもらおう」

ジュリエッタが不安そうにカインのを見てきたが、カインは頷くしかなかった。カインが使おうと思っていた方を初期設定に変えて、ジュリエッタはいつも通りにカスタム。

双方グレイズを使って模擬戦が始まった。
のだが。

「グオオオオオオオオ!!?」

「え……?」

牽制で放った滑空砲に直撃するイオクのグレイズ。まさか当たるとは思っていな

かったのか呆けた声を出してしまおうジュリエッタ。シミュレーターとはいえ受けた衝撃は疑似体験としてコックピットを揺らす。

揺れるコックピットなんて初めてだったのか、イオクは大声で叫んでいた。

ジュリエッタは接近戦なら大丈夫かなと、嫌な予感がしながらも近づく。近づく間も、イオクのグレイズは迎撃射撃を行うことはなかった。

目の前まで接近できてしまい、鉄剣を振るう。特に抵抗もなく叩けてしまった。

「うおおおおおお!?」

「ええー……」

豪語してた割には抵抗もなく叩けてしまったので、ジュリエッタはさっさとこの茶番を終わらせてしまおうと容赦なく叩き続ける。響くソプラノの声は無視した。

ジュリエッタとしてはさっさとカインと同じ時間を共有したいのだ。

すぐに撃破判定が出て、模擬戦が終わる。結局まともに動かせなかったイオクに対してジュリエッタは絶対零度の目を向けていた。

「馬鹿な!?」 我が家のシミュレーターではこのようなことはなかったのに!」

これもクジャン家の甘やかしの弊害だ。ゲーム感覚でシミュレーターをやらせていて、しかも自動操縦補助にオートロックオンなどシミュレーターだからこそできる機能がたくさんあった。

機械にAIを積むことは厄災戦を経てギヤラルホルンが禁止したため、実機にはそんな素敵機能はついていない。それにオートロックオンなども実戦に耐えられる精度ではなかった。

捕虜などを得たい時などに弊害にしかならないのだ。ならそんな機能は初めからつけない方がいい。

「このシミュレーターがおかしいんじゃないか!?？」

「士官学校やギヤラルホルン本隊で使われている初期設定と同じだと教官から伺っています。私が同じ設定でジュリエッタ五回生と戦いましょう」

「珍しいですね。カイン九回生がグレイズを使うなんて」

「いつもはグレイールだからな」

今度はきちんと、模擬戦が始まった。

カインとしては使い慣れない設定だったが、それでも試合にはなった。その映像を見ていて、イオクは呆然とするしかなかった。

7 宇宙演習・1

カイン達は問題なく幼年学校を卒業し、予定通り士官学校に進学していた。幼年学校を卒業したからといって全員が士官学校に進学するわけではない。技術職や事務職希望は他の学校に行くからだ。

ちなみにカインの代で首席卒業はマクギリス。次席はガエリオ。カインは出しゃばる真似をしなくて済んで、心から安堵していた。

そして士官学校の一回生になって。カイン達はクラス全員を乗せた宇宙用のシヤトルにいた。間も無く宇宙へ飛び出すために発射台から射出される。

地球出身者が多いために、初めての宇宙で沸き立つクラスメイトも多い。地球はある種、居ることこそが特権のようになっていて、宇宙ともなれば海賊やらヒューマンデブリやらの問題があり、しかも労働賃金も低いと来た。

しかも宇宙にあるものは全て人造物。地球が産み出した母なる自然を感じられないとなれば、宇宙旅行や宇宙進出などする地球人はいなかった。

地球だって孤児の問題や労働環境問題はあるが、宇宙よりはだいぶマシである。ギャラルホルンの力が強いので余計に。

カインが誰とも話さず一人の席でポケーと窓の外の景色を見てみると、一回生の騒ぎが気になったのか、監督生である三回生が近付いてきて一喝。

「そろそろ静かにしなさい！ この移動も演習の一環です！ あなた達は任官してもそうやって遠足のように騒ぐつもり?!？」

カルタ・イシュー三回生だ。セブンスターズの彼女の叱責に騒ぐ者はいなくなり、その様子にマクギリスとガエリオはフツと笑った。

カインは周りの様子を気にせず、興味は宇宙にばかり向いていた。ある意味一番集中していなかったが、カルタはカインの様子に気が付かなかったのか注意をしない。

発射シュークエンスに移って、窓は防壁が降りて見れなくなったのでカインは目を閉じて宇宙に着くのをただ待つ。

士官学校に上がってからも、カインは順調だった。マクギリスとの関係も良好で、マクギリスのペーパーカンパニーであるモンターク商会の準備も出来上がっていた。その情報をラスタルに流すことも。

唯一の不満は、ジュリエッタとの模擬戦ができなくなってしまったことか。幼年学校と士官学校はかなり離れているので、わざわざ会おうということはできない。

シミュレーターをオンラインで繋ぐこともできないので、その辺りはジュリエッタに我慢してもらった。

去年が最後の、ジュリエッタと一緒に居られる時間だった。士官学校はたったの三年間。学年が四つも離れていて、それ以降二人は同じ部隊に配属される予定はなかったの
で、ギャラルホルンでも顔を合わせることはなくなる。

カインはこのままだとマクギリスに引き抜かれて監査局へ。ラスタルも一応優秀な生徒として引き抜くことをポーズとして取るが、あくまでポーズだ。マクギリスを監視する人間としてマクギリスの近くに配置する予定だった。人事部にもそういう風
に手を回す予定だ。

ジュリエッタは隠すことなくラスタルの腹心の部下としてアリアンロッドに引き抜く。ギャラルホルンは巨大な組織なので所属する部隊が異なればほぼほぼ顔を合わせなくなるだろう。

カインはギャラルホルンがある場所全てを巡り、ジュリエッタは基本的に地球圏から少し離れた宇宙に滞在する。

「宇宙は、広いな」

そうボソリと呟いたのと同時に、窓の防壁は上がり。

どこまでも続きそうな夜のカーテンが、そこにはあつた。

宇宙演習が始まって。シャトルが地球衛星軌道上に存在するギャラルホルンのサテ

ライトベースであるグラスヘイムに寄港し、それからは士官学校生はビスコー級クルーザーという非武装の箱型宇宙艦艇に乗り込んでMSによる飛行訓練が実施されていた。

デブリの多い宙域でデブリを避けながら決められたルートを操縦し、レコードを競う訓練。ただ宇宙で飛ぶだけならできる者も多いが、障害物を避けながらというのはとても難しい。

だがアリアンロッドにでも配属になったらできないと困る操縦でもある。宇宙をメインに活動するなら経験しておかなければならない訓練だ。宇宙での艦隊戦ともなれば様々に弾丸が飛び交うのだから、デブリくらい避けられなければならない。

既に何人か訓練を終えていた。初めての宇宙空間ということで操縦に慣れずデブリに激突した者もいた。地上とは勝手が違う無重力空間だ。足が着く地上とは勝手が違いすぎる。

そんな中でもトップの成績で、しかも監督生である三回生をも唸らせる成績を叩き出したマクギリスがおかしいのだ。比較として三回生の平均タイムも提示されていたが、マクギリスはそれよりも三十秒以上短いブッチギリ。

ガエリオも頑張ったのだが、マクギリスには及ばない。二人ともセブンスターズとして宇宙が上がったことがあったのでそれなりに宇宙での行動にも慣れていたが、それよりも驚くのはカインだ。

まるで我が意を得たかのように自由自在に戦艦内でも活動していた。まるで宇宙が本拠地であったかのように、水の中の魚のようだった。

それもそのはず。カインはラスタル以外に誰にも伝えてなかったが、産まれてから四年間ずっと宇宙に漂っていたのだ。宇宙で過ごす方が、正直容易かった。

その感覚はこの訓練でも現れることになる。

「カイン・ベリアル。出ます」

訓練機であるゲイレールに乗って、戦艦のカタパルトから発進する。

フットペダルを踏んでスラストを吹かす。そしてデブリが数ある中でも恐れることなく突っ込んでいった。

その度胸に、訓練を一緒に見ていたガエリオはハラハラとする。

「飛ばしすぎじゃないか？ あれ、ほぼトップスピードだろ？」

「いいや、大丈夫だ。カインは普通じゃない」

「そりゃあ飛び級して俺達についてくる成績なんだから普通じゃないだろうけど……」

「そういう意味じゃないが、まあ見ているといいさ」

マクギリスがそう言うので画面に目線を戻すと、デブリの中に入ってジグザグと進んでいく姿を艦の望遠カメラが捉えていた。

だが、その動きが訓練を終えたガエリオだからおかしいと気付く。

「んんっ!!? あいつ、避ける時に減速したか!!?」

「してないな。各種アポジモーターの僅かなスラスタ噴出だけでデブリを避けてい
る」

「そんなこと初見でできるのか!!? デブリなんてどう動かわからないんだぞ!!?
」

「だが実際カインはやっているぞ? まあ、私でもアレはできないな」

マクギリスは苦笑しながら映像を見続けている。ガエリオの叫びに周りの全員がカ
インの異常性に気付いて、何度も宇宙空間でMSの操縦をしている監督生達はおろか、
この艦を動かしているギャラルホルン本隊ですらその映像は信じられなかった。

あんな未来予測じみた動き、博打過ぎて誰もできない。それをほぼトップスピードを
維持したままなんて誰ができるものか。

高速で宇宙空間を移動する物体は、物にぶつかった際破壊力が増す。あのスピードで
デブリにぶつかれば、いくら頑丈なMSといえども大破するだろう。そんなこと怖くて
誰もできない。

だが、それを今目の前で見せつけられている。恐怖という脳のリミッターが存在しな
いようだ。それほどの暴挙を見せつけられて、背筋が凍る者ばかり。

「む、無茶苦茶すぎる……!」

「カルタ三回生。アレを見てから仰った方が宜しいかと」

「アレ？」

カルタはマクギリスに言われて艦の望遠レンズで映っている映像、ではない方を見る。それは何かあつた時のために付けられているMSのコックピット内を映すインナーカメラの映像。

そこにはノーマルスーツを着たカインの姿と。

「う、嘘でしょ……!!？」

「全く。カインにはいつも驚かされる」

「〜♪」

鼻歌交じりに、両目を閉じて操縦するカインの姿があつた。

目視していかないのにデブリを完璧に避けて、なおかつスピードは緩めないままにチエックポイントを越えていく。その通過速度はブツチギリだったはずのマクギリスすら超えていた。

カイン本人は久しぶりの宇宙で高揚してしまい、身を包む宇宙の感覚に全てを委ねているだけ。

それが常軌を逸した行動だと理解せずに、見せつけてしまっていた。

だが、それも長く続かない。

カインが唐突に、機体を静止させる。そして腰にマウントされていたマシンガンを装備した。

スピーカーから、カインの声が流れる。

「すみません。十時方向から戦艦が来ます。MSもいるかもしれません」

「何？」

これを聞いていたブリッジは即座に十時方向ヘレーダーを向けると、エイハブ・ウエーブの反応が一気に増大し始めた。

スクランブルとして警報を鳴らし、第一種戦闘配備に移る。その警報が鳴る前にカインの様子を見ていたマクギリスとガエリオはMSデッキに向かっていった。

「待ちなさい！ マクギリス、ガエリオ坊や！」

「カインが危ない！ アレはペイント弾しかないんだ！ 私達が行くしかないだろう！」

「そうそう、ゲイレルは後二つあるんだからな！ カインに実弾を運ぶ係が必要だろ！」

「……全く！ 私もグレイズで出るから無茶だけはしないように！」

「了解！」

幼年学校三羽鳥が動き出す。マクギリスとガエリオは訓練で使っていたゲイレル

を実戦仕様に武器を変えて出撃。カルタも艦長を説得して名目上は監督生として飛び出した一回生を連れ戻すということで予備機のグレイズを借りて出撃した。

ギャラルホルンの本隊も、三機のグレイズを出撃させる準備をしていたが、士官学校の演習中に襲撃されるとは想定していなかったのかパイロットの搭乗が間に合っていないなかった。

そのため、結局迎撃に出たのは先行して出撃した四人だけだった。

「カイン！ 受け取れ！」

「ありがとうございます。マクギリス様」

カインは後ろからやって来たマクギリスから滑空砲を受け取る。それを左手に持った。

ギャラルホルンのデータベースは優秀で、近付いてくる艦のエイハブ・リアクターから相手の所属を割り出していた。

「海賊の『夜明けの地平線団』だな。だが艦は一隻だけ。本隊ではないんだろう」

「MSの出撃を確認。ヘキサ・フレームのユーゴー三機とロデイ・フレームのガラム・ロデイを六機確認。戦力差三倍ですね」

「後ろからカルタも来るぞ。けどなあ、初陣が襲撃かよ」

「我々の伝説の始まりにしては、些か敵が軟弱だな。そうは思わないか？」

「思わないわよ！ 海賊としては規模だけでも最大級と呼ばれる『夜明けの地平線団』！

援軍は時間がかかるし、こっちの艦は非武装！戦力は実質これだけってことよ！」

「カルタ様」

唯一のグレイズが到着する。カルタの言葉を受けて、マクギリスはふむと一つ提案をした。

「カイン。君には危険が伴うが、君にしかできない役目を任せたい。頼めるか？」

「はい。それが作戦で、今取り得る最良なら」

「最良だ。その作戦とは——」

マクギリスが作戦内容を三人に伝える。三人も吟味して、その内容が今の最良であり最善だと結論を出した。

その作戦にあたり、持つべき武器を交換し始める。エンゲージまで後三分。

8 宇宙演習・2

地球圏にわざわざやってきた『夜明けの地平線団』の分隊。『夜明けの地平線団』は元々十隻以上の戦艦と数多のMSを所持する、宇宙海賊でも最大規模を誇る戦力だ。

普段であればギャラルホルンの影響力の強い地球圏にまで出張ってくることはない。アリアンロッドに加え、地球外縁軌道統制統合艦隊もいるからだ。そんな場所へ海賊稼業に出れば、いくら最大規模の海賊と言ってもタダではすまない。

だというのに、今回彼らが危険であるはずの地球圏に來た理由は、ギャラルホルンが隙を見せたからだ。

一番戦力の多いアリアンロッドが大規模演習という名のコロニー視察や海賊狩りにほとんどが駆り出されていて不在。更には地球へ降りる、近付く者を監視する地球外縁軌道統制統合艦隊はリーダーであるイシユウ家の者が空座となっていて統制が取れていない。

地球圏の宇宙で暴れるには最適な時期だったということだ。

更に今回狙った艦はギャラルホルンの艦とはいえ一隻の上に非武装。そして主に使っているのが士官学校生という情報まで得ていた。護衛艦もおらず、ヒョッコどもを

襲えば武器や最新のMSを手に入れられるという寸法。

何もかもが完璧だと、彼らは考えていた。

ガラム・ロデイに乗ったパイロット達がデブリの中を泳ぎながら談笑していた。今回の任務の簡単さから、そしてギャラルホルンの腐敗は本当だったのだと思い知ってバカにする意味でも余裕をかましていた。

「本当にバカだよな。まだ任官もしてない、戦場処女ばつかなのに非武装艦で護衛もなし？ おまけに艦はデブリ帯のすぐ側で即座に後退もできない。訓練中の士官学校生を見捨てて逃げたら、奴らの名声も終わりだからな」

「奴らは驕りゆえに逃げ出さない。適当に包囲して叩けば新型MSゲットってわけだ。ギャラルホルンに一泡吹かせたとなれば俺達の名声も上がる。傘下になる奴も増えるだろうし、いよいよ敵なしになるぜ」

「笑いが止まらないよなあ」

乗ってきた戦艦に搭載されている全てのMSで出撃し、既に作戦の成功を疑っていないパイロット全員が笑っていた。それほどまでに簡単な任務。百戦錬磨の彼らからすれば、戦場を知らない相手を刈り取るなんて赤子の手を捻るより簡単なこと。

そんな彼らは、レーダーが告げる警告音に気持ちを引き締める。こちらに近付いてくるエイハブ・ウェーブを感知した音だ。

モニターに出るシグナルはゲイレル一機。おそらく訓練をしていた機体だ。

「ハハッ！ ほうら、ヴァルハラを志す勇猛果敢な学生くんは早くも英雄になろうと突貫して来たぞ？ 全員で出迎えてやれ！」

「了解！」

MS部隊のリーダーがバカな学生を嘲笑いながら指示を出す。大方戦艦のエイハブ・リアクターと九機のMSのシグナルを見て混乱してしまったのだろう。

全員がマシンガンやバズーカなどの銃火器を構える。だが、よく見るとモニターに映る信号は故障かと思うほどの動きを見せていた。

「いや、おい待て!? なんだコイツ、デブリの中をどんな速度で突っ込んでやがる!?」

「

「アニキ、こいつオレ達の三倍の速度でデブリの中を飛んできやがる！ 正気じゃねえ

!?？」

「進路上に適当に弾幕を張れ！ たまたまデブリにぶつかってないマグレ野郎を撃ち落

とせ！」

その声と共に多種多様な弾丸が飛び交う。シグナル目当てに撃ち込むが、そのシグナルは大きな動きをすることなく、速度も落とすことなく突っ込んできた。

普通感覚なら、いくら頑丈なMSといえども弾丸の直撃は避ける。頑丈とはいえ数

発受ければ操縦できなくなることもあるからだ。その普通の感覚に従って彼らは射撃を敢行し、それを避けようとしてデブリにぶつかるだろうと予測していた。

だが、その予想は簡単に裏切られる。普通が通じないからこそ、普通に従って勝ちを重ねてきた者達は錯乱して、まだMSの影も捉えていないのに更に弾丸を消費した。

人間は未知の恐怖には、とことん弱い生き物であるために。

そしてとうとうモノアイのメインカメラが捉えた視覚モニターにもその機体が映る。どこからどう見てもギャラルホルンで今は訓練機に成り下がっている一般的なゲイレールだ。特別なカスタムや配色は見受けられない。

肉眼で捉えれば、流星に当てられるだろうとカートリッジを替えながらトリガーを引く。

そこで彼らの常識は完璧に壊された。

「避けるのは良い！ デブリを蹴って方向転換とか、あれは本当にガキか!?」

「何であんな無茶苦茶な機動ができるんだよ!?」 スラスターも脚部フレームもガタが出るぞー！

「速度が落ちないカラクリはわかったが、だからってアレは人間にできるのかよ!?」

何で機体が保つのか、そもそもそんな操作ができるのかわからなかった。相手はギャラルホルンの士官学校生か、あり得るとしても本隊のパイロットだろう。

それにしても、『夜明けの地平線団』を翻弄するエースのような動きをゲイレルでされる脳が様々な可能性を拒絶していく。

「アニキ、アレ宇宙ネズミなんじゃ!?? あんなキモい機動するMW見たことあるけど、そういうのって全部宇宙ネズミだったぜ！」

「阿頼耶識システムだったか!?? 何でその宇宙ネズミがギャラルホルンにいるんだよ!!?」

「オレが聞きてえよ！」

宇宙ネズミ——阿頼耶識システムを施術されたヒューマンデブリ——の可能性に行き着くが、なら今度は何で宇宙ゴミがギャラルホルンのMSに乗っているのかという疑問に行き着く。

阿頼耶識システムは空間認識能力の補助などがナノマシンによって施されるが、生身の人間だって熟練度を上げれば似たようなことができる。変な動きだから阿頼耶識を使っている、という誤解は彼らの戦場におけるただの思考停止。

自分の知識が世界の全てだと誤認している者の、弱者の思考だった。

ゲイレルはとうとうガラム・ロデイに弾丸が届く距離まで近付いた。右手にマシンガン、左手に滑空砲を持ったゲイレルはマシンガンで牽制しつつ、近寄ってきたMSには確実にコックピットに滑空砲の大口径の鉛玉を喰らわせていた。

「シド、クルムがやられた！ ユーゴーに乗ってる奴の援護が足りないからだぞ！ 支援をしっかりとしやがれ！」

「あんなのにどうやって当てろってんだよ！！？」

「あんな無茶な機動だ！ すぐにガス欠かフレームがお釈迦になる！」

「近寄るな！ ガス欠になってから叩け！」

二機落とされたものの、まだ数的有利を保っていたのでそれを活かしてどうかしようとうと飽和攻撃を仕掛ける。

いや、しようとした、だろう。

トリガーをいくら引いても、ガチャンガチャンと鳴るだけで一向に弾丸が発射されない。ジャムつた訳ではなく、弾切れだと表示されていた。

「んなつ！！？ そんなに撃ったか！！？」

「艦隊戦に挑める量の弾薬を用意したはずだ！ だっていうのにどいつもこいつも弾切れ！！？」

携行武器を替えれば、もしくはマガジンを取り替えればまだ弾薬はあったが、最初に持っていた銃火器がどれも弾切れを起こすなんてそれだけの弾幕を形成してしまったということだ。

しかもそれだけの弾を消費して、相手には有効打を与えられていない。

「くそー！ どうせ敵は一機だ！ ユーゴーは援護射撃、ガラム・ロデイは接近戦で囲め！
いくらギャラルホルンのMSって言っても、ガラム・ロデイの装甲は驚異なはずだ！
」

リーダーはそう言ってマガジンを替えることより近接武器を取り出すことを優先した。それぞれハンマーチョップパーやブースト・ハンマー、バスターソードを構える。

囲むために動き出そうとした時、弾切れを知らせるようにビービー！と特大の警告音
が全員のコックピットに鳴り響いた。

いきなりの警告音に誰もが気を取られてしまう。先ほどまでなかったエイハブ・リア
クターの反応が直前に現れ、奇襲に備えなくてはならなかった。

だが、すぐそばまで接近を許した時点で遅かった。なにせ相手はギャラルホルンの本
隊でもバケモノとしか言えない成績を残すセブンスターズの跡取り。

マクギリスは指示を出していたガラム・ロデイの背中から直剣を突き刺してリーダー
を絶命させた。機体の構造を完璧に把握していたことと、確実に突き刺す技量があった
からこそ為し得た絶技。

一撃必殺をかました瞬間にその場から離脱していた。

「アニキイイイ！！？」

「やろう、反応はなかったのにどうやって近付きやがった？？」

困惑している間に最初のゲイレールに近付かれ滑空砲で風穴を開けられ。マクギリスのゲイレールに剣で釘刺しにされていた。

原理は至って簡単。エイハブ・ウエーブはその機体を起動させなければ感知されない。

そのため休眠状態にしたマクギリスのゲイレールを、カインのゲイレールによってワイヤークローを利用して牽引し、近くの宙域まで引っ張ってきた。あとはスラスターを用いない力学的移動だけで近寄ってデブリに身を隠し、ここぞという時に起動して近寄っただけだ。

エイハブ・ウエーブを感知されないためにはモニターも何もかも消す必要がある。予備カメラを除いて全ての電源を落とし、エイハブ・リアクターからのエネルギー供給を絶たなければならない。

マクギリスは本当に小さい映像だけでデブリ帯の高速移動を経験する羽目になった。だがそれはカインを信頼してこそ。

実際、最上の結果をもたらした。

合流した二機はカインが牽制をして、マクギリスがトドメを刺すという連携を取っていた。その連携があまりにも息が合いすぎていて、頭もやられた『夜明けの地平線団』は平静を保つことはできなかった。

（素晴らしい！ カインはどこまでも俺についてこられる！ 俺に必要なものを提示してくれる！ やはり俺の同志足り得るのは君しかいない!!?）

マクギリスは高揚しながら最後のユーゴーを撃墜する。残り二機となったガルム・ロディに乗ったパイロットはもう作戦の成否など気にせず後退していた。不意打ちもあつたとはいえ、海賊でも上澄みの自分達の大多数を屠ったバケモノを相手にする理由はない。

「逃げるぞ！ ギャラルホルンに嵌められたってサンドバルの大アニキに伝えねえと

……！」

「馬鹿な!? オレ達の艦がないぞ！」

「あ!? エイハブ・リアクターの反応が、ない!?？」

モニターの表記が信じられなくて立ち止まってしまふ二機。

そこを見逃す二人ではなく、二機ともそれぞれの鉄剣にコックピットを貫かれてコックピット周辺が爆散した。

「完全勝利だ。後の二人も作戦を完遂したようだな」

マクギリスは感慨深く呟く。

少し遠い宙域で、大きな閃光が一つ打ち上がった。

『二人にも危険なことをしてもらう。デブリ帯を迂回して、敵の旗艦を潰してくれ。その後挟撃をしてMSを全て撃破する』

『MSが九機も出撃してて、危険か？』

『危険だとも。九が最大数とは限らない。それに敵は武装艦だろう。二機のMSじゃ火力も限られている中で、確実に落とすとして欲しいと言っているんだから。これはカルタ先輩の腕の見せ所だぞ？』

『全く……。ガエリオ坊や、やるわよ！ マクギリスとカインも危険な役割をこなすのだから、私達も敵艦を落とすわ！』

『……わかった。MSが出てくる前に、敵艦を落とすぞ』

それが作戦会議の内容。カルタとガエリオはデブリ帯を抜けて最大加速で敵艦に向かった。敵艦はデブリ帯に入り込んでいないので、外から迂回するのが一番の近道だった。

相手に感知されることを前提に、二人はスロットルを全開に突っ込んでいった。敵艦から対空射撃が繰り出されたが、ギャラルホルン製のMS特有の加速力を活かして避けていた。ミサイルや対空機銃などは、高速で移動するMSに当てるのは至難の技だ。

特に戦闘艦の方は今回の作戦で艦隊戦を行う羽目になるとは考えておらず、MS部隊に丸投げしておけばいいと思っていたために反応も遅れてしまった。適当に放たれた

迎撃射撃に当たるほど、カルタとガエリオは落ちぶれていない。

そして弾幕を抜けた先で、有効射程距離に入った瞬間、火力のあるレールガンで二人を掃射する。

「落ちろ！」

遠距離武器の中でも特に弾数が少なく火力の高いレールガンは全弾敵艦に命中し、ブリッジやスラストを貫通して動力源に引火したのか内部から大きく爆発した。

爆発に巻き込まれないように二人は離脱する。MSが出てこず、対空射撃も大したことはなかったのも二人は安堵していた。

「フウ……。ガエリオ坊や、無事ね？」

「一発も当たってないぞ。……抵抗が少なくて良かった」

「まだ片方の任務が終わっただけよ。マクギリス達の援護に行かなくちゃ。レールガンは荷物になるわ。置いていくわよ」

「了解。カルタ三回生」

後で回収するつもりでレールガンを放棄してデブリ帯に戻ろうとする二人。だがその前にエイハブ・ウエーブの増大をレーダーが感知したのと同時に二人へ不鮮明ながらも通信が入る。

「いや、その必要はない。君達はこちらの艦に收容しよう」

「この声、エリオン公？」

「オイオイマジか……。スキップジャック級。アリアンロッドの旗艦だぜ……」

二人のモニターには通常の宇宙戦艦の倍はある全長をした真つ白の戦艦。

ラストル・エリオンが乗るスキップジャック級が映っていた。

9 事後処理

『夜明けの地平線団』の分隊を完全撃破した後。

マクギリス達は全員スキップジャック級に收容されていた。元々乗っていたビスコー級クルーザーにも連絡を入れ訓練は中止。このまま戦闘を行なった四人はスキップジャック級で事情聴取をされることになった。

戦闘記録を得るために、乗っていたMSも全て臨検されていた。そこで驚くべき結果が出たのだがそれは後。

まずはセブンスターズの三羽鳥に用があると、ラストルが常時使っている艦長室に三人を呼び出していた。全員ビシッと敬礼をしたが、ラストルは軽く手を振って硬い態度をやめさせる。

「楽にしてくれ。と言つても、士官学校生ではそうもいかないか。セブンスターズの末席にいる者同士、襟を広げて話したいだけなんだがな」

「エリオン准将。そうは仰られても……」

「今は准将もなしだ。先程の戦闘について聞きたいが、これはそう。親戚同士の語らいだと思つてくれ」

そう言われて三人は視線を合わせる。ラスタルが引かないと思ったのか、諦めて態度を軟化させた。

関係性としては全く親戚でもなんでもないのであるが、同じ立場の者として話したいと言われて意固地になるのもどうかと考えた次第だ。最もラスタルは既にエリオン家を継承した本物のセブンスターズの一角であり、他の三人は良くても代行ではない。

「まずはよく初めての戦場で何も犠牲にせず生き残ってくれた。しかも多大なる戦果付きでだ。これは同じセブンスターズとして鼻が高い」

「はっ。ありがとうございます」

「たった四機のMSで戦艦一隻とMS九機撃破。私のアリアンロッドがギャラルホルンの中で一番の練度を誇ると自負していたが、この大戦果には劣る。作戦を考案したのはマクギリスと聞いたが？」

「はい。その通りであります」

マクギリスがそう答えたので、ラスタルが自分の背後のモニターにさつきまでの戦闘のチャートを表示する。

青いシグナルの四機が二と二に別れて独自行動。それぞれがMSと戦艦を沈めるといふ、無茶苦茶な作戦だ。

「戦艦を沈めたカルタとガエリオはまだわかる。ギャラルホルン製のレールガンがあれ

ば上手くやれば可能だからな。そして戦艦を沈めた後、挟撃の予定だったと」

「実際はマクギリスとカインの二人だけで壊滅させてしまいましたか？」

「そう、それだ。三人はカイン一回生が乗っていたゲイレールの状態を見たか？」

その質問に全員が首を横に振る。三人ともここに連れてこられてから最低限の水分補給と汗をタオルで拭つてすぐにラスタルの元まで来たので実機はもちろん、データなども一切見ていない。

唯一一緒に着艦したマクギリスだけがラスタルの言いたいことを理解する。

「脚部の損傷が酷く、数々のワイヤーアンカーを用いて回収をしていましたが、そのことに関係が？」

「その通りだ。このデータを見たまえ」

ラスタルが出したタブレットに表示されたデータを三人が覗き込む。

そしてデータを見た結果、ガエリオは顎を外しかけていた。カルタも特徴的な眉をピクピクとさせて、マクギリスはさも当然のように頷いていた。

「脚部の装甲はおろか、フレームそのものが修復不可能って……」

「あの子、どんな無茶を……」

「一応解析結果も出ているが。マクギリス。どんな無茶をさせたんだ？」

「デブリ帯を全速力で飛んでもらいました。私を牽引した状態でデブリを蹴って最大速

度で敵に近付き、回避行動で敵を混乱させるためにその際もデブリを利用した機動をさせました。度重なるデブリへの衝突でフレームにもガタが出たのでしよう」

「ハア!? マクギリス、ワイヤーを用いた牽引は聞いてたけど、デブリを蹴らせて移動させたのか!? お前もエイハブ・リアクターの反応を誤魔化すためにMSを休眠状態にしてただろ！」

「ああ。かなりのスリルだった。だが敵の意表を付くにはあの速度が必要だった」

「データラメすぎてガエリオがマクギリスに食って掛かったが、マクギリスはあくまで冷静に返す。そのクールさにカルタの乙女心がキュンキュンと高鳴っていた。」

ガエリオは同期二人のバカさ加減に溜息を吐く。

「一歩間違えていたら二人ともデブリに衝突して宇宙の塵だったぞ？」

「それはないとわかっていた。直前の訓練で目を閉じて鼻歌交じりで最速タイムを更新していたカインだぞ？ デブリのことなんてわかりきって避けられるという確信があった」

「ああ……。そういやそんな離れ業をやってたな。すっかり忘れてたよ」

「それも加味した作戦だったわけだ。正直海賊相手よりカインに牽引される方が怖かったのは……」

「その結果MS一機ぶっ壊してるのはシャレにならないぞ……。カインが宇宙戦をやっ

「たらの度にMSを壊しかねないんだからな」

「ゲイレールじゃなく、それこそフレームが強固な専用機でも渡せば無双してくれるという証左でもあるぞ？」

「ゲイレールだって十分フレームは頑丈な機体のはずだぞ」

「マクギリスとガエリオの容赦のない言葉の応酬にラスタルは楽しそうに笑う。その笑いが少し豪快だったために二人の話も中断された。

「ハハハハハッ！ おっと、すまん。いやいや三人の腕ももちろんだが、今回の作戦の成功にはこのカイン一回生の力も大きいということか。飛び級もしている優秀なパイロット。しかも宇宙でここまで暴れられるのか。欲しいな」

「アリアンロツドの司令としての顔を覗かせたラスタルに、カルタが一応問いかける。
「エリオン公。まさかカインをすぐに引き抜くおつもりですか？」

「ん？ いや、そんなことはしないさ。一度飛び級もしているし、今は喫緊の情勢というわけでもない。むしろじっくりと士官学校で育成してもらい、そのちにアリアンロツドへ欲しいというだけだ」

「やはりデブリを蹴って高速移動など、前代未聞ですか？」

「いや、アグニカ・カイエルがやったという記録が残っている。それ以降は、やる必要もなかっただろうから記録に残っていないな」

ラストルがカルタの質問に答えると、僅かにだがマクギリスの口角が上がった。それを見逃すラストルではないが、指摘することはなかった。

「だが、できる人間がいるなら検証はする。デブリ帯での戦闘を有利に運ぶなら、アリアンロッドにとつてかなり重要なデータだからな」

「手加減を、してあげてください。エリオン公」

「そこまで気にかける存在か？ カルタ」

「あの子は、優秀すぎるのです。幼い時から今のような才覚を示す片鱗がありました。彼は早熟すぎて周りの要求に応えるしかなかったのでしょうか。そうすることでしか、価値を示せなかった。……私のように」

「父君が倒れたから気付けたと。……オルフェンズ、どうにかしなければならぬ問題だな。カルタ、心配しなくていい。彼の今回のデータを貰うだけで、後は卒業時点で粉をかけるだけに留める。道は、彼が選ぶだけだ。その選択肢を私は一つ増やすだけだよ」

ラストルのその言葉に、カルタは安堵した。

父が倒れてから、地球外縁軌道統制統合艦隊を率いるに相応しい者として精進してきた。周りの目線を更に気にしている内にカインの状態に気付いた。

近くではなく、離れてみて気付けることがあった。今のカルタの状態と、今までの力

インの様子は似ているのではないかと。

セブンスターズの嫡子三人と同じ学年にいたのだ。その上ラスタルにも目を掛けたらプレッシャーで潰れてしまうのではないかと心配した。

背は伸び始めたが、カインはまだ十三歳の子供なのだから。

「うむ。詳細はわかった。三人にはこれからも武勲を期待する。マクギリスとガエリオは退室していい。疲れただろうから食堂へ案内させよう。カルタには、別個に話がある」

「失礼いたします」

マクギリスとガエリオは綺麗に敬礼をした後退室し、外に控えていた兵士に食堂へ案内させた。一人残されたカルタは何を言われるのかと気を引き締めた。

ラスタルも先程までの親しみやすい雰囲気ではなく、一人の将としての厳かな雰囲気を醸し出していた。

「ここからはギャラルホルンとしての話だ。カルタ三回生に、今後を見据えた話だ」

「はっ！」

カルタは背筋を伸ばして顎を引いて話を聞く姿勢になる。

先程までは褒められていたが、ここからはそうではないということだ。

「カイン一回生は出撃していたから仕方がない部分がある。マクギリス一回生とガエリ

オ一回生も、まだ将兵課程をこなしていないために慢心したとしよう。だがカルタ三回生。君は既に将兵課程を済ませ、今回は監督生という立場だった。一回生の暴走を止める側の立場だったはずだ」

「……仰る通りです」

「セブンスターズという立場を利用して艦長からグレイズの使用許可の承諾ももぎ取ったな。装備品も全部使用するように整備兵に命令した。どれも越権行為だ。セブンスターズは何をしてもいい免罪符ではない」

特例を許してしまえばそこから腐敗が始まる。その積み重ねの結果が今の惨状だ。三百年凝り固まった腐敗の温床は簡単に除去できない。

カルタは卒業と同時に、一応ではあるがイシュー家を継承する。当分の間はイズナリオ・フアードが当主代行を務め、カルタが実績を残せば正式に継承する予定だ。

カルタは卒業後、地球外縁軌道統制統合艦隊に所属する。そして数年の内に地球外縁軌道統制統合艦隊司令官に就任する。

ラスタルのように大部隊を率いる将になるのだ。だからこそ短絡的ではいけないと釘を刺す。

「今回のマクギリス一回生の作戦。さつきは褒めたが、こんな博打の作戦はどここの作戦司令部も許可を出さない代物だ。マクギリス一回生とカイン一回生の実力がずば抜け

ていたこと。二対九で圧倒できるポテンシャルがあったこと。敵MS部隊が全てデブリ帯に突っ込んだこと。敵艦の対処が遅かったこと。予備戦力が相手方に全くなかったこと。手持ちに最新式のレールガンがあったこと。どれか一つでも欠けていれば貴官らは全滅していた。それを覚えておけ」

「はっ」

「……まあ、今回の訓練に使用された艦がビスコー級クルーザーだったこと。敵の襲撃を全く予見していなかったこと。戦闘配備に至る遅さ。親しい者が戦場になる場所に孤立していたこと。これらの擁護すべき点も確かにある。だが、だからこそこういう時こそ冷静に物事を判断して状況を推移し、行動に移して命令を出さなければならない。士官学校生に言うことではないが、数年などあつという間だぞ？」

「厳しい薫陶、ありがとうございます。准将閣下の鞭を胸に刻み、これからも精進してまいります」

カルタは綺麗に敬礼し、それに満足そうにラスタルは頷いた。

将来を見据えて、誰かが言っておかなければならないことだった。カルタはすぐにラスタルと同じ立場になる。地球外縁部と地球内のどちらも指揮しなければならぬ役職だ。他のセブンスターズやヴィーンゴールヴも地球のことならば手を貸してくれるだろうが、それでも広い範囲だ。

それもこれも、三百年間セブンスターズの筆頭だったイシュー家の優秀さ故のこと。

「話は以上だ。期待しているぞ、カルタ三回生。……それと、少ない弾数で敵艦を的確に落としたその腕は見事だった」

「……っ！ 失礼いたします！」

カルタは厳しい言葉の後に褒められたことで、セブンスターズとしての格の違いを見せつけられていた。目尻には僅かながら涙を見せて退室。

ラスタルは女性の涙には一切触れず、ようやく一人になった部屋で内線用の受話器を取り出してある部屋に繋いだ。

コールが二度鳴ってすぐ相手は通信を受ける。

「私だ。周りには誰かいるか？」

「いえ、いません。この通信は大丈夫なのででしょうか？」

「私の艦だぞ？ その辺りは抜かりない。……今回もご苦労だった。しかし、少々暴れすぎだな」

「次回は抑えます。宇宙だといつも以上に感覚が敏感で」

「そうなのか？ できれば言語化していつも通り報告書を作成せよ」

「畏まりました。……やはり今回のリーク者はラスタル様なのですね？」

「ふむ。どこで気付いた？」

「『状況を宇宙規模で転がせるのは奴だけだ』と『髭のおじさま』から」

「あとは勘か? ……まあ、その通りなのだがな。士官学校及び本隊の引き締め、そしてセブンスターズ跡取り達へ初陣の経験と今後についての見識を確認しておきたかった。ギヤラルホルンを盤石な状態にするには、危機感が必要だ。そして、上もまともでなくてはならない」

「その割にはクジヤン家の跡取りは悪い噂ばかり聞くのですが」

「イオクは、ダメだ。セブンスターズの選民思想に毒されている。自分も客観視できないように甘やかされてしまった。アレは上に立つ者の器ではない。私の元で首輪をつけておくことが最小限の出血になる。クジヤン家に妄信的な者を側に置いて殿様ごっこにでも興じさせておけばいい。……最終的にはイズナリオ同様、セブンスターズを解体するための人身御供だ。その程度の使い道しかない」

「なるほど。特権階級の排除ですか」

「地球外縁軌道統制統合艦隊を一つの家でのみ引き継ぐなど狂気の沙汰だ。家ではなく優秀な者が率いる形こそ、人類の歩みの正しさだ。貴族制はどこでも破綻している。その歴史を忘却していることが厄介なところだが」

「その辺りは、やはりセブンスターズが統治しやすいように隠したのでしょうか? 戦火で消失したということも事実でしょうが」

「だろ。うな。人類の立て直しのために、不必要な物は隠した。それでよくも三百年も保たせたものだ。……脱線したな。今後もマクギリスとガエリオの後背に徹しろ。マクギリスの狗を演じ続ける。卒業後は監査局へ入隊するように」

「はっ」

「以上だ。ではな」

通信を切つて、ラストアルは一つ溜息をつく。

優秀な部下をありがたく思う反面、申し訳なくも思つてしまう。

モニターから辛うじて見える地球を目の端に捉えて、小さく呟いた。

「すまないな、ジュリエッタ。カインに会えるのは当分先になりそうだ」

この部屋は当然のように防音加工がされていたので、その呟きは誰にも聞かれなかった。

またジュリエッタに会いに行つた時に、カインのことについて散々文句を言われることを覚悟して今回の後処理を始めた。

10 配属先

カインは士官学校の三年間を、宇宙演習以外は平穩無事に過ごした。学校生活では何も問題がなかったとはいえ、長期休暇中は『髭のおじさま』にかなり絞られた。それでも五体満足な上に戦場を経験できたのだから感謝すべきだろう。

宇宙演習以降表向きラスタルとは関わっていないかった。アリアンロッドと関わるような出来事がなかったことと、マクギリスの監視、モンターク商会の実績作りなど多忙を極めた。士官学校の訓練も肉体疲労が多く、宇宙にいたことが多いアリアンロッドと接触する機会が少なかったということもある。

ラスタルが地球に降りてきた時も大半はヴィーンゴールヴに用事があった際か、孤児院に顔を出すくらいのもので、長く地球に滞在できなかったという理由もある。だからこそ、カインとラスタルの関係も露見しなかったのだろう。

そしてカイン自身も成績の調整や、エリオン家の研究所に通って能力測定など、やることは山積みだった。それがラスタル側の用事で、ここにマクギリスの同志集めが加わる。

幼年学校ではまだ見込みが不鮮明ということであまり人財発掘を行わなかったのだ

が、士官学校に進んでギャラルホルンの実態が見えてきた者なら引き込めると少しずつ接触を行ってきた。

士官学校に上がってからは他の地域の士官学校との交流会などもあったので、そこで地道にマクギリスが矢面になって同志を集めた。

カインも裏方ながら人財を集めることに成功する。別にマクギリスに対するスパイとして集めたのではなく、純粹にマクギリスの改革——不平等に支配されない世界の構築——に賛同した者を集めた。

スパイはカイン一人でない。

カインは勘も用いてマシな人財を集めた。マクギリスに惹かれる者は多かれ少なかれクセが強いのでカインはある程度能力は平凡で性格も過激ではない者を中心に声を掛ける。マクギリスに惹かれるものの、セブンスターズの一角に声を掛けるのは恐れ多い、という心情の相手が多かった。

カインなら孤児な上に、成績を残していてマクギリスとも親交があるので相手も話しやすかったというのものもあるのだろう。結果、カインはそれなりの人数を確保することに成功する。いくら優秀な者がいても、ある程度の数がいないと組織とは呼べないのだ。

特に兵站部に進む者と整備科の者をいくらか引き込めたのはマクギリス派閥としても大きいだろう。大きなことを起こす際にはそれらの人物の力が大事になってくる。

マクギリスもこの成果に喜びの笑みを浮かべた。

なにせマクギリスに同意するということとは成り上がりた人物ばかり。もしくは過去に辛い想いを重ねて、それでも立ち上がってきた人物。

そういう人物は簡単に成り上がる手段としてMSパイロットか、指揮官職を目指す。上に立つ人物や前線に立つ人物ばかりいても意味がないのだ。

マクギリスには普段からセブンスターズとしての立ち振る舞いを求められるので暗躍は難しい。できても短い時間が精々だ。その短い時間でかなり優秀なパイロットを集めた手腕は褒めるところである。

カインは飛び級して優秀な成績を残しても、セブンスターズの同期二人に比べれば注目は少なく、成績も二人には劣るように調整していた。二人に追いつくために訓練するとも言えば自由な時間は割とあった。その時間に様々な人物と接触したのだ。

表は士官学校生として優秀な成績を修めて。裏ではマクギリスが動くための組織の構築を。仮面の奥ではラスタルへの貢献。

正直身体が一つでは全く足りない多忙っぷりだった。

そのせいでジュリエッタの成長記録を残したアルバムを、ラスタルからせめてもの罪滅ぼしとして渡された。それを眺めるのが一番の癒しになってしまった。

この日もその写真を見てから、士官学校の談話室へ向かう。卒業が近く、席次も確定

したこの時期に呼ばれるということは確実に、進路に関わる話し合いだ。

カインの席次は三席だった。ちなみに次席がガエリオで首席はマクギリス。

談話室の扉の前にはギャラルホルン本隊の制服に身を包んだ警護兵二人がいて、扉を開いてくれた。カインが入室することを中に伝えて、カインは歩き出す。

「失礼いたします。カイン・ベリアル、ただいま参上いたしました」

「よろしい。掛けたまえ、カイン三尉」

「はっ」

ソファに掛けていた一佐と准将に対面するようにカインは自分側のソファに座る。

どちらも参謀本部人事局の人間だ。この二人が優秀な成績を修めた者の進路を言い渡す。十席以内であればこういう待遇になるが、それ以外は進路希望を提出して審査をして入隊となる。

優秀な者は様々な部隊が欲しがることと、本人の希望を確認したいこと。そして人事局から辞令が出る場合がある。

三尉と呼ばれたために、既に階級は決まっていた。とはいえよつほど優秀な者でもない限り入隊した直後は准尉か三尉が士官学校卒業生に与えられるのが一般的だ。

「カイン三尉。予想はできていると思うが、貴官の配属についてだ。優秀な貴官のことだ。できる限りの希望は考慮しよう」

「ありがとうございます」

「さしあたっては、これが人事局に提出してきた部隊名のリストだ」

「受け取ります」

一佐から差し出された書類を両手で受け取るカイン。

書類は十枚ほどあつたが、部隊名は多種多様だつた。地球の地域名まで詳細に書いてある部隊もあれば、ただ単に火星支部とだけ書いてある書類もある。

火星支部があるように、圏外圏の支部から地球の各支部、地球外縁軌道統制統合艦隊にアリアンロッドなど多種多様だ。どこもかしこもパイロットとして引き抜こうとしている。カルタが純粹に引き抜きたいこと、ラスタルが形だけの要求をしたことが透けて見えてカインは思わず笑ってしまった。

書類一枚取ってみて、その書式の丁寧さと雑さを比べれば一目瞭然だ。アリアンロッドのものは優秀な成績を修めた者に一斉に送る当たり障りのない文章が続くの、地球外縁軌道統制統合艦隊はカルタの直筆だ。

書類を眺めているだけでその部隊の特色が浮き彫りになって面白かつた。

「形式ばった書類が多いのは勘弁してほしい。彼らも忙しいのだ」

「選り取り見取りで迷ってしまいます」

「特に三尉はMSの操縦成績が群を抜いていたからな。一回生時の宇宙演習の件も大い

に關係しているのだろう」

書類を一枚ずつ丁寧に確認していき、とある本命がなかったことにカインは訝しむ。そこから引き抜きのための嘆願書がないことはあり得ないのだ。

要求書を全て見終わつたカインへ、一佐がもう二枚の書類を茶封筒から取り出した。わざわざ後に渡してきた書類だ。これこそが本命。

その本命が二枚あることに首を傾げたくなつたが、階級の上位が二人もいる場面であることはできないのでグツと堪えた。

「そしてもう二つ、ヴィーンゴールヴ参謀本部からも届いている」

目の前の二人も参謀本部の人事局の間人だ。つまりはさつきまでの複数枚あつた書類は前座。この二つから選べという圧を掛けられた。

俺達を選んでやつたんだから従えという圧迫面接をされた気分だ。

「隠すことではないが、各士官学校の卒業トップには毎回この二つが提示される。事務方や整備職以外でこれを渡されるのは選ばれた者だと理解してほしい」

「……？ 失礼ながら自分の卒業席次は三席のはずです」

「トップ二人がセブンスターズだろう？ セブンスターズは除外対象だ。それぞれの家で進路がほぼ固定されているからな」

「失礼しました。拝見いたします」

渡された二枚はなんてことのない。

ヴェインゴールヴ本部勤務か、監査局入隊か。その二択だった。

どちらもエリートのみで構成されているという士官学校生が夢見る憧れの勤務先。その二つがカインには手渡されていた。

士官学校でもこの二つに入るには席次が十以内であることが求められると噂が広まっていた。卒業した先輩方の進路からその噂はほぼ事実として広まっていたが。

本部と監査局は十席より下の者が希望を出しても弾かれる。だからこの二つに入るために卒業席次を上げようと躍起になる者が多かった。要らない人材だと思つた者はマクギリスとカインが徹底的に潰して自信を喪失させておいたので変な人材は十席には残っていない。

「すまないが、この場で所属を決めてもらう。貴官以降の進路が滞っているのにな」

「わかりました。監査局にします」

「ほう？ 即答だな。何故か理由を聞いても？」

「自分は地球よりも宇宙が好きなのはと士官学校に上がってから思い至つたからであります。ですが、地球は我が故郷。監査局であればどちらにも行くことができますが、本部勤務では海の上でしょう？」

「フツ、なるほど。忌憚のない理由だな。ではそのように進めよう。詳細は追つて伝え

る。これからも貴官の武勲を期待しているぞ」

「はつ。ご期待に沿えるよう精進いたします」

こうして予定通り、カインはマクギリス・ガエリオと同じく監査局に勤めることとなった。

「カイン。石動は予定通り監査局に、ライザ以下その他の者は各方面に散り散りになった。これで我々の繋がりには露見しないだろう」

「マクギリスは監査局で良かったの？ いや、秘密裏に動くとしたら監査局しかないんだらうけど、将来は地球本部を継ぐと思われてるのに」

カインとマクギリスが定例となった会合の席で進路について話し合っていた。カインは上手く監査局に滑り込んだので士官学校でやるべきことは終わっている。

マクギリスの養父イズナリオは地球本部司令官だ。セブンスターズはお互いの領分を守って一家相続のようにどこかの部隊に所属するか決まっている。その常識に照らし合わせればマクギリスはヴィーンゴールヴに所属しなければならなかった。

だがマクギリスはそのしきたりを破った形になる。だが、それは問題ないとマクギリスは言う。

「経験を積むことで広い視野を持ち、最終的に本部を纏める際に必要な見識を積むとい

うことを言えば納得された。それに俺ももう十八だ。奴も用済みになったのだろう。今では俺以外を抱いているさ」

「……本当に、長い間お疲れ様」

「もう済んだことだ。奴としても俺を近くに置いておきたくないのだろう。あつさりとして許可は出された。奴はもう権力と幼い子供しか見えていないのさ」

「アルミリアと、婚約するんだって？」

「そういう話を持ち上がったっているだけだ。正式決定ではない」

イズナリオの話題になったので、そのままガエリオの妹の話題になった。

イズナリオは自分の地位を盤石にするためにカルタの後見人を務め、ボードウィン家とも関わりを持つとうとマクギリスを用いて家同士の繋がりを強めようとしている。

アルミリアは今の所深く理解しておらず、ただマクギリスやカインを兄のように慕っているだけだ。カインも何度か会ったことがある、まだただの三歳の女の子。

年齢差十五歳。

そこまでするのか、というのがカインの正直な思いだ。

いくら女性を愛せず、本物の子供に恵まれないからといって自分は繁栄しようとしている。

イズナリオはまさしくギャラルホルンを体現する負の象徴だった。

「士官学校は卒業したが、まだ雌伏の時だ。立場を固め、確実にあの男を落とす。他の家は後回しだ」

「了解。でも調べられることはやっておくよ。何が弱みになるかわからないから」

ギヤラルホルンに入隊が決まっても二人はまだ万全ではないと準備を続ける。

動き出すには大きな爆弾がもう一つは必要だった。

その起爆剤は、火星で産声を上げる――。

――
後日。

監査局に入隊したカインの元にあるMSが届けられた。監査局は様々な場所へ出張するという職務上、配属は部隊ごとの搭乗艦になる。監査局も有事の際に備えてMSが配備されているが、まさか入隊したその日付けで専用機が渡されるとは思わなかった。

MSハンガーに並ぶ、最新鋭機が三機、カラーリングが異なるとある種圧巻だ。

マクギリスの青い機体。ガエリオの紫の機体。そしてカインの紅い機体。

「目立ちすぎる……。あのカラーリングを考えた人は誰だ……？」

「あつはつはつは！ カイン、いくら気に入られたからってこれは……！ お前もかわ

いそーだな！」

「笑ってやるな、ガエリオ。おそらく私達のカラーリングを考慮したのだろう。青と赤

を混ぜれば紫になる。そら、我々を象徴する三色だ」

新しく配属になった監査局三人の機体。

それは最近開発されたばかりのグレイズのカスタム機、シュヴァルベ・グレイズだった。

グレイズは確かに優秀な機体だが、指揮官やエースパイロットにとつては安定性重視で面白くない、もとい物足りないとして独自にカスタムをしていたのだが、ならいつそ同じフレームで強化機体を開発しようとなつて着手された物がこのシュヴァルベだった。

カインの機体は装備こそ他の機体とあまり変わらないが、コックピット周りは特殊な実験機というのが正しいところだった。

「カインの宇宙での空間認識能力を活かすために、脳波を観測するユニットを付け。各アポジモーターが反応するように改造された実験機だそうだ。リアンロットで運用されている実験機と同様の処置が施されているらしい」

「エリオン公は随分と革新的な人物らしい。宇宙演習のデータをよつぽど面白がったと見える」

「だがガエリオ、確かなデータもあるようだぞ？ カインのデータを用いられて作られた実験機、宇宙空間での戦闘行動で通常よりも三十%ほど機動性が上昇され、エースと

呼ばれる者からは好評らしい」

「そのデータのお礼ってことか」

マクギリスとガエリオがタブレットでカインのシユヴァルベのデータを見ながら話し合う。

このシユヴァルベの開発をアリアンロッドの研究所が、MS開発費は地球外縁軌道統制統合艦隊とギャラルホルン本部が出していた。

本部は本来であればトップの成績だったカインへの、飛び級もしたことによる期待の現れとして。カルタは引き抜いてやろうという魂胆から予備費をカインの機体作成へ回していた。

「カルタもエリオン公も、カインのことを諦めきれないらしい。よつ、人気者！」

「さつさと転属しろって強請られていると判断していいのでしょうか？」

「言外に、そう言っているな。監査局を選んだのはカイン自身だろうに」

ガエリオが煽り、カインが項垂れ、マクギリスがクールに嗜める。

数年ほど続く、この三人の監査局での変わらない姿だった。

11 監査

カインが監査局に入って四年が経過した。最初の一年目は仕事を覚えるのに必死だったが、二年目からは摘発率の高さから監査局の中でも有望視され始める。

特にとある宇宙支部が企てていたコロニー公社との闇取引を発見し、強引にもみ消そうとした事件が有望視の要因だ。宇宙支部はコロニー公社と共に所有するMSで反乱を企ててカインを抹殺しようとした。それをマクギリスとガエリオ含む少数の監査局で封殺してしまったのだ。

戦力差五十対五だったのだが、その五が圧勝してしかも首謀者達を殺さず捕縛したことでギヤラルホルン内ではかなり有名になった。

外部にバレるのは身内の恥ということで徹底的に情報を封鎖し、外部で知っているのは本当に情報通な裏組織だけという事件となった。

そんなカインは監査局として艦ごと移動するのではなく、たった一人で行動をしていた。簡単に言えば出張のようなものか。

マクギリスとガエリオが様々な功績を立てたことで特務三佐への昇進試験を受けている。これに受かれば監査局を大々的に動かせる立場となる。一応カインの直属の上

司はマクギリスということになっていたので休暇にしても良かったのだが、とある査察が残っているのを見てカインが引き受けた次第だ。

カインがやってきたのはスキップジャック級。つまるところアリアンロッドの監査だ。

末端の監査は既に終了しているのだが、何故か誰もスキップジャック級の監査だけは手を出していなかった。アリアンロッドの総本山たる艦に物怖じしたのか、手に余ると考えたのか。

どちらにしる仕事として残っていたので、ちょうど良いとカインが受領して一人でやってきたわけだ。スキップジャック級はギャラルホルンでも最大級の宇宙艦で全長800mを越す。そんな船をたった一人で監査するのは大変だが、カインとしては都合が良いし、同僚が賄賂でも受け取っていたら目も当てられない。

ゆっくり時間をかけて監査をするつもりだった。

もしもがあつた時のためにシュヴァルベ・グレイズごと着艦する。紅というカラーリングから様々な視線を浴びたが、努めて無視をする。着艦許可は下りているので誘導に従いデッキに入り込む。

着艦したのち、案内兵によつて艦長室に連れて行かれる。入室と同時に、カインはそこにいたラスタルへ敬礼をした。

「カイン二尉、監査局の任務にて出頭いたしました」

「ご苦労。……随分背が伸びたな」

「もう二十歳ですよ？ 身長もそれなりに伸びます」

部屋に二人つきりになったことで砕けた口調で話すカインとラスタル。階級など関係なく、今は家族のように話す。二人がこうして顔を合わせるのそれはそれこそ宇宙演習以来。それ以降も連絡は取り合っていたが、映像付きの通信はしたことがなかった。

ジュリエッタのアルバムすら郵送で送られてきて、實際顔を合わせるのは六年振りとなる。だからこそ、二人が繋がっているなんて誰もわからないのだ。

カインはここ数年で身長が一気に伸びた。180cmを超えて、身体も将兵に相応しい細身ながらも筋肉質ながっしりとした肉体になり、孤児だったとは思えない容姿にはなっていた。経歴は変えられないので、知っている者は知っている。

だがそんな下賤な身の上だということを実績と実力で振じ伏せてきた。孤児が監査局だということを認められない落選者元エリートが突つかかってくることもある。そういう輩は実力を誇示したくて模擬戦を挑んでくる。

カインは断るのも面倒なのでマクギリスに許可をもらい、模擬戦を行なってペイント弾塗れにしてやったことも多数。

「数々の噂を聞いているが、随分やんちゃをしたようだな？」

「させられた、が正しいですね。真つ当な職務を遂行していて、邪魔をしてきた火の粉を払っただけです」

「そういうことにおこう。ここにはそういう輩はいないので安心してくれ」

「本当ですか？ 若干一名、突つかかつてきそうですが」

ラスタルの言葉に、カインは溜息をつく。

今年アリアンロッドに入隊したとある准尉が二人の脳内に浮かぶ。彼女に至っては幼年学校以降会っていない。七年以上と、ラスタルより間が空いている。カインは写真で変遷を知っているが、向こうは全く変化を知らない。

なにせ相手の写真を撮る理由があっても、カインの写真を撮る理由がなく、例えば写真を撮ることがあつたとしてもそれを彼女に送る理由がない。

そういうわけで関わりの薄い彼女が飛び込んできそうだなと二人は予想していた。

「勤務時間中だったら適度にあしらってくれ。その辺りは軍人として徹底させる必要がある」

「ええ。こちらの邪魔になるようでしたら冷たく接します。ですが士官学校を卒業したのですから、その辺りの分別はついていてでしょう？ 士官学校の成績を見る限り問題ないと感じましたが」

「教養・態度はしっかり士官学校で学んだようだな。今の所は問題なくMS部隊に編入

している」

カインは監査局の人事に関わっているわけではないが、士官学校で優秀な成績を残している後輩のことは噂として流れてくる。特に士官学校で優秀な成績を残していれば監査局に入隊する可能性も高い。

優秀な者がいれば仕事の効率も上がるので、後輩の情報は積極的に集めている。そのついでに悪い噂も届くものだ。

「そういえばかの士官学校に在籍するセブンスターズの者の変わりなさに、監査局でも悪い噂が流れていて上官が嘆いていましたか……」

「私が引き取るのだから問題ないだろう？」

「アリアンロッドに進路が確定しているので、そこは安堵していますが。何でもMSの扱いがメチャクチャで危なっかしいという散々な評価だとか。セブンスターズだからといってMSの操縦をする必要はないでしょう？ ラスタル様のように」

「私だつて最低限動かせるぞ？ 前線に出られるほどではないがな」

いくらセブンスターズが三百年前の英雄でMSを駆って貢献したからといって子孫全員がMSの操縦に優れていないといけない理由はない。今の当主達も全員が優れたパイロットというわけでもない上に、加齢と共に前線に出るのは厳しくなる。

上に立つ者だからこそ自分の適性を客観視して相応しい立ち振る舞いが求められる。

まだ十代の若者にその選択を迫ることがおかしいのかもしれないが、十代で道を決めるなど特別なことではない。

むしろ自分で道を選んだ者こそ、幼年学校や士官学校に通っている。十代後半で自分の道を選べるなど恵まれているのだ。

ラストルという実例もいるのだからMSパイロットに固執せず、指揮官コースへ進むことも考えなければいけなかったはずだ。だが話題になっているイオク・クジャンという男は愚直にMSパイロット養成コースを士官学校で選択し、そこで平凡以下の成績を修めている。

そこまで愚かなのかと、カインはラストルに聞いてみたかったのだ。

「まさか彼は家に残るガンダム・フレームを使いこなそうとしているのですか？ そんなもの、クジャン家を名乗る資格になるはずがないのに」

「そういう側面もあるようだ。あとは私が艦隊指揮官ならば自分は前線指揮官になると。それに年齢の近いセブンスターズの嫡子が全員優秀なパイロットということも関与しているだろう。マクギリス達三羽鳥はあまりにも有名だ。劣等感が刺激されているのだろうか。あとはそう、目の前で見たとある幼年学校生の先輩二人によるシミュレーターの映像を見て奮起しているようだぞ？」

ラストルが笑いながら言った最後の言葉に、カインは物凄く心当たりがあった。

初めて彼と対面した時のことだ。

「まさか自分のせいだと？」

「カインの実力に感心したらしい。士官学校で見せる変な動きとやらはカインの模倣らしいぞ？ そのせいでよくデブリに衝突しているらしい」

「オレの動きを映像とデータだけを見て真似しても無意味です。アリアンロッドのようにデータを事細かく解析した補助プログラムを搭載するならまだしも、ただの勘でデブリ帯を高速で飛ぶならオレと同じ感覚が必要です」

「それができてしまうパイロットが、すぐ上にいたことが問題だな。アリアンロッドを目指す優秀な先輩が補助プログラムのない訓練機でやってみせた。上司になる者として負けられないと考えたのだろう」

「なんて傍迷惑な思考回路……」

イオクがバカなことをする理由、諦めきれないワケを知って頭を抱えなくなった。

どうやら十人十色という言葉^{ヒロイック、シンドローム}を知らず、上に立つならば部下の誰よりも優れていなければならぬという間違った英雄症候群に罹患しているようだ。

「まあ、アレのことは深く気にするな。私が飼い殺しにする」

「わかりました。頭の隅に追いやります」

「それでいい。ああそれと。仕事内容とは直接関係ないが、この記事に目を通しておけ」

無重力によつてフワリと投げ渡されたタブレットを受け取り、そこに書かれている記事を見る。

そこには「革命の乙女」という見出しで書かれた火星独立運動を主導する少女のことが大きく取り沙汰されていた。

「クーデリア・藍那・バーンスタイン……。このような少女が独立運動、ですか」

「今度の『ノアキスの七月会議』ではアープラウの蒔苗東護ノ介も来るといふ。それが成功すると火星が大きく動くな」

「……わかりました。彼女のことも調べてみます」

時代の移ろいを感じながらも、カインは仕事に取り掛かる。

ラストルの旗艦とはいへ一切妥協なく監査を始めた。

勤務時間外にて。

カインは誰かが自身のシユヴァルベにちよつかいをかけないかと一応ポーズとして確認しつつラストルに貰ったタブレットの記事を詳しく読んでいた。仕事中は読む時間がなかったのどんな人物でどんなことをしようとしているのか知ろうとしていた。

画面へ、影が落ちる。彼女の接近はわかっていたが、あえて反応は何もしなかった。

「ふーん？ 随分熱心にその少女のことを見ているんですね。なるほど、そういう少女

「が好みですか？」

「……まあ、誰もいないから良いか。久しぶりだなジュリエッタ」

「否定しないと？ 少し離れた間に、あなたは変わりましたね」

「茶化すな。お前なら感じ取れるだろ。彼女はギャラルホルンの脅威になりかねない要注意人物だ。それ以上でも以下でもない」

「……そうですか。言っておきますけど、私カインより正確に他人のことを把握できませんからね？ それにカインはどこか壁を作っているの今はよくわかりません」

カインは敢えて作っている壁のことを看破されたので、ジュリエッタの感じ方が自分と変わらないと把握する。ある程度のジュリエッタの現状を把握できたのでそれだけでよしとする。

あとは後ろ横め流りたいしこともあつたのでそれはひたすらに隠すことにした。

バレなくて良かったとも思っている。

「監査局にいるなら仮面の一つもなければ立ち回れない。それだけだ」

「それはです。どうしてアリアンロッドに入らなかつたのですか？ 私達がいるべき場所は、ここです。ここ以外にありません」

「そうだろうな。……簡単な話が、アリアンロッドじゃできないことをオレが担当しているだけだ。ラスタル様とて何でもできるワケじゃない。宇宙も地球も確認するなら

監査局が一番適している。それだけだ」

「ラスタル様のためですか？」

「そうだ。ジュリエッタがあの方の側にいるから、オレは遠くで別なことをできる」

カインがそう言うのと、ジュリエッタはいじけた子供のようにそっぽを向く。筋の通った話に、嘘がないという自身の直感に、納得はできた。だが理性の方で受け入れられない。

家族なのだから一緒にいたいと思う。その当然がうまくいかなくて拗ねているのだ。

「……孤児院に帰ってこなくて、寂しかった」

「ラスタル様との接点を消すためだ」

「飛び級したせいで学校でも一緒にいる時間が少なかった」

「ラスタル様の役に立つために一刻も早く入隊する必要があった」

「……連絡一つくれないのはどうかと思います」

「表面上はただ幼年学校で親しかった後輩だ。手紙も出せない立場だし、仕方がないだろう」

「カインのその不思議な力で、たとえ宇宙の端にいても想いを届けてください」

「無茶を言う。なんでもできる力じゃないとジュリエッタもわかってるだろう？」

「それだけあなたが兄として不甲斐ないということですよ」

「……悪いな。孤児院のことやお前のことを忘れたわけじゃない。その、忙しくて」

「はいはい。わかっていますよ。そうじゃなければギヤラルホルン名義で毎月孤児院に援助金なんて送ってこないでしょうから。士官学校の頃から出ている給料を送ってるって、あなたの普段の生活が心配です」

「お金の使い道がないからな。軍からの支給品があれば生活できる」

「……ホント、そういうところですよ。ムカつきました。シミュレーターに付き合ってください」

「仰せのままに、姫」

「——ッ！ 本当に！ 本当にそういうところですよ!!? 彼の女性士官にそういう発

言していないでしょうね!!?」

「してないさ。こんな冗談を言える相手は他にいない」

それから二人は勤務時間外だというのにみっちりシミュレーターで汗を流した。なおジュリエッタはグレイズだったためにシユヴァルベを使ったカインには勝てず、終わった後に何度もカインの脛を蹴っていた。

原作一期（P. D. 323）

12 火星へ

カインがたった一週間でアリアンロッドの本部とも言えるスキップジャック級を監査した一件からしばらくして。

カイン達は火星に行く準備をしていた。

乗っているのはハーブビーク級戦艦。ギャラルホルンの宇宙艦隊の主力戦艦だ。監査局は宇宙での監査にはこの艦を使う。

「今回の監査対象は火星支部と支部所属の士官学校及び幼年学校だ。ギャラルホルンは地球外出身者に厳しいからな。腐敗の温床などいくらでもあるだろう。だが本部には一切そのような報告が届いていない。腐敗があると決めつけるのはまずいかもしれないが、私は十中八九あると思う」

「マクギリス、その心は？」

「監査が実に五年振りということ。そして『革命の乙女』と称されるクーデリア・藍那・バースタインが擁立するほどの劣悪な環境だということ。地球から離れていること。この辺りか」

マクギリスとガエリオがそう話している中、カインはシュヴァルベの整備を行なっていた。カインの勘が告げている。今回の査察では戦闘が発生すると。

この勘が外れたことはないので、今回も念入りに整備を手伝っていた。カインも通りの知識はあったので整備を手伝えるが、本職ではないので手伝い程度だ。

特にカインのシュヴァルベはコックピット周りが特殊なので整備・調整には時間がかかる。

実のところマクギリスとガエリオもカインの機体の運動性が実証されたために後から改造を施している。シュヴァルベは元々扱いづらい機体だったのだが、もはや専用機となつて調整した専属のパイロット以外乗れなくなっていた。

カインも他の二人のシュヴァルベは乗れない。セツティングからしてカインの物と違いすぎるのだ。

「カイン。戦闘があるという勘だが、どの程度なんだ？ お前の勘はよく当たるから参考にさせてくれ」

「MS同士の衝突になると思います、ガエリオ特務三佐。……嫌な予感があるので」

「それは敵性勢力がMSを所持している？ それとも火星支部が反旗を翻すってことか？」

「半々、かと。クーデリア女史が地球を目指すならばギャラルホルンのアリアドネを搦

い潜る航路を知っている組織の後ろ盾が必要だ。自衛手段でMSを持っている組織も多いでしょう。裏をかくて海賊に護衛を頼むとか、一般の積み荷に混ぜてくる可能性もありますが、その可能性は低いと思います」

ガエリオに話しかけられたので手を止めて答えると、ほうと顎に手を当ててカインの意見を真剣に考慮していた。

幼年学校から続く不思議なよく当たる勘による意見だ。カインの勘はほぼ的中すると長年の付き合いから判断していた。それはマクギリスも同様だ。

「可能性が低いと断じる理由は？」

「今ではギャラルホルンでも注目の的である彼女のことを調べましたが、随分と高潔な少女のようです。飛び級を重ね、火星に住む者の待遇改善を願う。大学の論文も入手しましたが、夢見る少女そのものです。それほど綺麗であり、ギャラルホルンに狙われることがわかるほどの知性もある。……火星の行く末を案じ、名目上汚い手段は取らないでしょう。となると、真つ当な組織を雇っての強行突破」

「なるほど。じゃあ俺達とやりあえる組織が出てくると予想しているんだな？」

「そんな組織が火星にあつたかまでは覚えていませんが。火星支部が正式な調査をしていてその内容が正しいならば、そんな組織は火星にありません」

「一気に不安になったな。俺達の誰も火星には行ったことがないから詳しくないぞ？」

「カインもだからこそ、戦うとしたら半々だと答えた。ラスタルにクーデリアのことを教えてもらってから火星のことを調べ始めたが、まともな情報が出てこない。火星の周りにいるだろう海賊の情報も山ほどあったが、火星の情勢や民間警備会社の情報は全くと言っていいほどない。」

クーデリアの卒業論文を探すことすら一苦労だった。火星の大学だったので調査の手を伸ばし、データベースに電子化していたのを漸く見付けて、内容を精査していた。

十六歳の少女であり、現実を知らなそうだなというのがカインの第一印象だった。だが、それでも『ノアキスの七月会議』に参加し、成功を収めたのだ。行動力と度量、そして能力があることの証左。

そして地球の重鎮も認める資質。これらのことからカインは少女と言いなながらも警戒していた。

「カインの不安も理解した。では最悪を想定して我々も航行に挑もう。我々が火星支部では矢面に立つので、いざという時にはカインに戦場を支配してもらおう」

「了解しました。他のMSパイロットにも伝えておきます」

この艦には五機のMSしか搭載されていない。MS戦を想定した部隊ではないからだ。最低限戦えるようにはなっているが、アリアンロッドなどの戦闘部隊とはいくらか

劣る。エリート部隊であっても監査をすることが中心で戦闘になることは少ないからだ。

それに五機の内の二機がマクギリスとガエリオの機体なのであまり戦力計算したくないというのがクルーの本音。御曹司達を監査の仕事ならばともかく戦場の矢面に立たせるのは胃に悪くなる。

それでも二人は嬉々として戦場へ向かっていくが。カインに止めるように進言が来るが、ただの一尉であるカインに特務三佐という一時的に二階級上の権限を持ち実質一佐であるセブンスターズの嫡子達に申し出などできないのだ。

二人と親しくしていることも、あくまで幼年学校からの付き合いがあつてこそ。上司に向かつて危ないから戦場に出るななど恐れ多くて言えない。

というのが、表向き理由。本音としては言うのも面倒なだけ。

二人が出た方が簡単に戦闘を終わりに導けるので、カインは出撃を止めることはしない。

マクギリスが指揮するハーフブーク級は臨戦態勢を整えたまま火星へと出港していった。

ギヤラルホルンの航路を使ったために、二週間ほどで火星へと辿り着いた。赤い星を

外から見てカインは小さく眩く。

「大きな火種が二つ。休眠中みたいな感覚が二つ。……渦巻いてる馬鹿さ加減が多数。これまで訪れた星で最悪規模だ。だからあの少女は立ち上がった……？　こんな末期の星を勝手に救ってくれると言うのなら放っておけばいいものを。それだけ遠くの場所にながら、利権を手放せないのか……」

MSのコックピットでそう眩く。誰にも聞かれないように火は落としたままだ。マクギリスの合図がなければ火を入れることはない。

マクギリスとガエリオが火星支部を訪れていて、叛意ありとされたらカインがすぐさま飛び出し施設を武力制圧する手筈だ。今のところそんな風潮はなさそうなのでカインもゆっくりしている。

むしろ何かをやらかして必死に隠そうとしている慌て方を感じ取っていた。それが結構な被害が出ている雰囲気醸し出していたので余計怪しいと勘繰る。

二人が帰ってくるまでカインはすることがないので胸ポケットに入れておいた写真を手に取る。この前のアリアンロッド監査の際に撮ったジュリエッタとのツーショット写真だ。お互いが並んで撮っているだけなので、なんとも殺風景な写真だ。

それでもこの写真を宝物のように扱うカイン。

「……綺麗に育った。ラスタル様のおかげだろうな。『髭のおじさま』にも教導を受け

たつて言つてたし、成績を見る限り優秀だ。……それにアリアンロッドなら孤児だなんてバカにされないだろう」

出発前にマクギリスが言つていた地球出身者以外への差別。それと同じように孤児にも差別はある。どれだけ優秀な成績で士官学校を卒業してしようと、ギャラルホルンに入隊してから功績を立てようと、バカにされるのだ。親の顔も知らない、家もないくせにと。

カインもそうだった。監査局の同僚はマクギリスとガエリオの目もあるからだろうがそういったことはせず、監査先で陰口を言われるのだ。

もつともそんなことは幼年学校からずっとなので、全て無視するだけだ。

ジュリエッタもそういう苦勞をしてきただろうが、これからはなさそうだと安心する。

「親がいることがそんなに偉大なのか？ 帰る家が最初からあることがそんなに優劣を決めるのか？ ……後から得た親も、家も。大事で、大切に、尊くて。その何がいけないんだ……」

カインが頑張る理由としてはそれだけのこと。

それが認められない組織は、世界は。

変革されるべきだろうという考えが根本にはあつた。

しばらくすると、艦内放送で二人が戻ってきたと知る。それと同時にカインはコックピットから出る。

マクギリスが火星支部の監査に取り掛かるように指示を出す。カインもそれに続くようとして準備をするためにノーマルスーツを脱ぎに更衣室へ向かうと、そこにはマクギリスとガエリオがいた。

「おかえりなさい。着替えるのですか？」

「ああ。カインも護衛としてついてこい。コーラルが隠した不祥事を調査する。隊服以外に着替えるように」

「やっぱり何か起きていたのですね？」

「MW中隊二つとMS二機を損失した実弾演習だそうだ。損耗した兵器の状態は見せられないと言う。隠しているようがいまいかわかるとしても、管理者として杜撰すぎる。大方『革命の乙女』関連だろう」

「カインの悪い予感が当たったな。MSを二機撃破となると、相手もMSを持つてることだ。MW中隊二つは、向こうも手練れだったんだろう」

マクギリスとガエリオの説明で、火星に降りることを決める。と言うより命令だから決定事項だ。

カインは外向けの私服など持ってきておらず、黒いスーツに袖を通す。隊服を着ない

際の緊急時用及び隠密行動用として支給されているものだ。何かしらの式典がある際などは隊服こそが儀礼服となる軍人なのでスーツもこの支給品しか用意していなかった。

他の隊員ならまともなファッションセンスを活かした私服を持っていただろうが、カインは寝巻きと運動着以外の服なんて持つてきていなかった。その辺りは無頓着だからだ。

マクギリスとガエリオもスーツに着替えていたので自分だけ浮くことがなくて安堵するカインの姿があった。

火星支部であるアーレス静止軌道基地から火星に降りた後は、軍に配備されている軍車両を用いて戦闘があっただろう場所を巡る。軍車両には堂々と角笛を吹く獅子というギヤラルホルンのシンボルマークが施されていてとてもじゃないが隠密行動とは言えなかった。

これ以外に車両がなかったため諦めた。車もなしに火星を巡るなんて不可能だからだ。運転は一番階級の低いカインが行おうとしたが、ガエリオが運転したいと駄々をこねたので譲るという騒ぎもあった。

後部座席から火星の大地を見たカインの感想は、なんとも貧しい土地だな、ということだった。テラフォーミングをして三百年以上。緑は少なく大地だらけ。都市部は地

球の都市と相違無いが、少し外れば寂れた街並みと畑が広がるばかり。

若干の自治権を得ているとはいえ、地球の経済圏によって分割統治されている植民地状態。貧富の差や資源の枯渇から独立運動が活発になることもおかしい状況ではないとアリアリと感じた。

彼らにとっては地球人と火星人ほどに、意識が違うのだ。だというのに地球は豊かさとはまりの土地という特権から実質支配をしている。搾取される側としては、遠い場所にいる人間の言いなりにはならないと叫びたくなるのだろう。

だから、クーデリア・藍那・バーンスタインが旗頭として担ぎ上げられる。独立運動の機運が高まっているのも当たり前前の積み重ねがあっただけだ。

三人は戦闘痕の確認をした後、近くに基地がある民間警備会社とやりに足を運ぶためにトウモロコシ畑の近く、舗装されていない道を走っていた。

「しかし、アルミリアとマクギリスが婚約なあ。妹はまだ九歳だぞ?」

「両家が決めたことだ。お兄様と呼ぼうか? ガエリオ」

「やめてくれ。背筋が凍る」

正式決定されたマクギリスとガエリオの妹のアルミリア・ボードウインの婚約について冗談混じりで話している頃、カインは子供の純真さを感じ取った。それがどのような行動を取るのかわかったカインはすぐ叫ぶ。

「ガエリオ様、ブレーキ！ 子供が飛び出してきました！」
「何ッ!?？」

ガエリオはパイロットということもあり、すぐさまブレーキを目一杯踏み込んだ。幼女の甲高い悲鳴と無理矢理轟く急ブレーキの音。

双子らしい少女二人は車が現れたことと急ブレーキの音にその場でしゃがみ込んでしまった。轢くようなことにならなかつたのは幸いだが、即座にガエリオ達は幼女達の容態を確認する。

マクギリスとガエリオにとってはアルミリアに。カインにとっては幼いジュリエッタにその双子が重なったからだ。

「大丈夫か!?？」

一番近かったガエリオが二人の様子を確認しようとした際にカインは殺気を感じてその方向を向く。農作業でもやっていたようなタンクトップ姿の小柄な少年がガエリオに向かって腕を伸ばしていた。

カインはその間に入って手首を掴んで防ぐ。そうしたこと初めてカインのことを認知しようだが、即座にカインを排除しようと空いている左手で首を狙ってきた。

そちらももう片方の手で防ぐと、器用に地面を蹴って蹴りを仕掛けてくる。カインが固定した手を基点にしていたので、両手を離して距離を取ったことで蹴りも避ける。

「クツキーとクラツカーを、よくも！」

「獣だな。君は」

話を聞こうともしない少年は更に畳み掛けようとしてくる。カインもどうやって阿頼耶識を得ている少年兵相手に無傷で取り抑えようかと逡巡していると、思わぬところから仲裁が入る。

農家の服装をしたお婆さんが、少年の頭を叩いたのだ。

「どうやら少年は身内からの悪意のない攻撃は感知できないようだった。叩かれたことで殺気も霧散していく。」

「バカタレ。よく周りを見な。二人とも無事だよ」

「桜ちゃん」

「これがこれからの世界を変動させていく、オルフェンズの初めての邂逅だった。」

13 火星から飛び立つ旗手

襲ってきた少年——三日月・オーガスのことだ——の同僚であるビスケット・グリフォンと友達であるアトラ・ミクススタがカイン達に頭を下げてきて、三日月も頭を下げた。轢かれたと思っていたビスケットの妹であるクッキーとクラッカーが無事で誤解だとわかったからだ。

襲われた側のカインも快く許した。それにガエリオが口を挟む。

「いいのかカイン？ お前、蹴られそうになってただろ？」

「当たっていませんから。ガエリオ特務三佐、ここは現地の者と諍いを起こしても仕方がないかと」

「それもそうか。おい、ガキ。本来だったら捕まえてるからな？ 特にこのマークを見たら気を付けろ」

ガエリオは車体に記されていたギヤラルホルンのシンボルを叩く。むしろギヤラルホルンに手を出して無罪放免という方がおかしいのだ。二度目はないとして注意喚起に留めた。

ギヤラルホルンのマークを見てアトラは顔を蒼褪めさせて、ビスケットはガエリオが

特務三佐というお偉いさんだったことに驚いていた。二人とも身なりは良かったのでそれなりの人だろうと予想はしていても、その予想を超えていた。

カインが敢えて隠した苗字を知ったらもっと狼狽するだろう。そういう意味でもカインは情報を隠していた。それは三日月の背中の突起を見たからだだった。

「もう、三日月！ 気を付けてよ！」

「ごめん、アトラ。二人が轢かれたと思って……。そつちの人も、ごめん」

「構わない。ただ、こんな道でも車は通るだろう？ 飛び出しについてはもう一度指導すべきだ」

「気を付けます。妹達がすみません」

ビスケットがペコペコと頭を下げる。轢かれそうになった二人は今やビスケットに抱きついていている。どうにか立てるようになっていたが、それでも轢かれかけるといふ経験は怖くて兄にしがみついているようだ。

そんなビスケットの上半身を沈めた様子からガエリオは背中の突起に気付いて、三日月には三つも付いていることに目を見開く。

「お、お前達……。その背中のやつは、なんだ？」

「ガエリオ。アレは阿頼耶識システムだ。厄災戦の遺産、体内にナノマシンを入れることで人間の知覚領域を広げるものだ。ギャラルホルンが禁止したために、残っているも

少数だと思っていたが……」

ガエリオの疑問にマクギリスが答える。ガエリオも阿頼耶識システムについては知っていたが、火星でそんな非合法の物が出回っていて、庶民までもが付けているほど治安が悪いなどとは思わなかった。

阿頼耶識をつけている人間は宇宙ネズミと呼ばれるヒューマンデブリばかりだ。つまりは奴隷と変わらないはず。女子の背中を確認して手当たり次第ではないことに気付くが、それでもこの在り方を許せなくてガエリオは戻っていた。

カインはガエリオのプライドを刺激しないためにも背中をさすったりはしなかった。彼は高潔だからこそ戻しているのだ。受け入れるかどうかはガエリオ次第。

そして戻しているガエリオよりも重要な案件があった。少し離れている場所に隠れ潜む一人の少女と一人の女性。重要な方は少女。ただ畑の中に姿を隠しているだけだが、軍人などではないようで気配そのものは隠せていない。だからカインは気付けた。実際姿は隠れているし、息遣いが聞こえる距離でもないのだが、カインの感性に引っかけた時点で隠遁は無意味となってしまう。特に疚しい気配を隠そうとしているのなら、畑という近場ならカインにはすぐにわかる。

その少女がどう動くか、カインはそちらに意識を向けていた。

カインが何かに気を払っているとはわかって、マクギリスは自分のやるべきことを

するために地面に膝をついて双子の少女に目線を合わせる。そして懐からある物を取り出した。

「怖い思いをさせて済まなかった。これは地球から持ってきたチョコレートだ。二人で食べるといい」

「わあ！ ありがとうございます！」

「ありがとうございます！ チョコレートだあ！」

「す、すみません！ そんな高価な物を……！」

「気にしないでくれ。我々がここを通らなければ起こらなかったことだ。お詫びの品を渡すのはおかしなことではないだろう。……代わりと言ってはなんだが、質問したいことがある。最近この辺りで戦闘行為などなかっただろうか？」

お詫びの品というのも本音だが、マクギリスとしてはこちらが本命。ビスケットもその本心に気付いていたが、ここで自分達が関わった戦闘ですなんて話したら拘束されかねないと一瞬の内に頭を働かせて誤魔化すことにした。

ちなみに。

マクギリスがクッキーとクラッカーに優しくしているのはアルミアと被ったから。カインが今回の件を不問にしたのは幼い頃のジュリエッタと重なったからである。

「近くに民間警備会社があるんです。よく訓練とかをしているので、それを間違えたと

かではないでしょうか？　ね、三日月」

「うん。地雷とかよく爆発してるし……」

「なるほど。ありがとう。有意義な情報だった。ガエリオ、帰るぞ。カイン、運転を頼めるか？」

「はい」

カインが後部座席にガエリオを入れて、運転席に座る。そのまま三人を乗せた車は走り去っていった。

なんとか誤魔化したことと、クーデリアがここにいることがバレなくてビスケットは安堵の息を深く吐いていた。

車の中では。

「ふむ。民間警備会社CGSか。だが最近廃業しているな。その土地から所有物まで全て新しい会社の鉄華団に引き継がれている。これだ」

「……そことウチの火星支部が戦闘したってことか？　マクギリス」

「確実にな。しかしまだ青い。あれで誤魔化したつもりとは」

「ん？　どういうことだ……？」

「頭が回っていないな、ガエリオ。一般人が阿頼耶識手術なんて受けているはずがない。さつき会った二人はこの民間警備会社の関係者だ。ヒューマンデブリか、家族がいた彼

は会社に入るために手術を受けたというところだろう」

タブレットで得た情報も合わせたマクギリスの予測を聞いて横になっていたガエリオはガバツと起き上がった。一瞬表情を歪めたが、それでも助手席に乗るマクギリスへ詰め寄る。

「そこまでわかっていて見逃したのか!?!?」

「この事実はそこまで大事じゃない。おそらく民間警備会社の近くで火星支部所属の部隊が演習をして、部隊に多大なる被害が出たということが分かればコーラルを更迭できる。それ以上の事実は要らないのだよ」

「そりやあまあそうだが……。カイン、お前も気付いてたのか?」

「はい。それにさっきの畑に、クーデリア・藍那・バーンスタインが居ましたね」

「……ハア!?!? 『革命の乙女』が!?!?」

ガエリオの驚きは更に増す。ガエリオは気付かなかったが、カインが言うなら確実にだと思っている。

マクギリスはフツと小さく笑うだけ。

「繋がったじゃないか。かの乙女はクリュセの少年兵を頼り地球にやってくる。それを知ったコーラルが点数稼ぎに籠の中の小鳥ごと襲撃したが返り討ち。どういう理由かはわからないが組織を新しくして改革の旗頭を送り届ける騎士になろうとしている。

……彼らを頼ったのはただの同情心からか、火星の人間だからか、それとも何かがあるのか……」

「カイン、車を戻せ。クーデリアを捕まえれば厄介ごとの芽を摘める」

「無駄でしょう。そもそもどんな名目で捕まえるのです？　まだ彼女は火星の独立を訴えているだけの少女ですよ？」

「……可能性があるだけで、まだ俺達には何もしていないか」

そう、やっていることはギャラルホルンにとつては不都合があるかもしれないが、それでも捕まえる名目がないのだ。彼女が交渉している相手もアープラウの人間でギャラルホルンは関われない。

経済圏とはある程度の線引きをしているのだ。経済圏とはある種独立した組織なのだから、過干渉はしない方がいい。

そこからまた腐敗に繋がる可能性があるからだ。

「我々は予定通り、火星支部と士官学校、幼年学校の監査をしていけばいい。コーラルのあの性格を考えれば、もう一つくらいはバカをしてくれると思うぞ？」

「まあ、しそうだよなあ。それこそクーデリアが地球に向かう時に、どうにか情報を手にして捕まえるとかだろうが」

「我々が居座る中で無断出撃をすればどうなるかわかっているだろう。そうとなれば

我々にも出撃要請をしてくる。クーデリアにはそれだけの価値があると思っただろう。正確には火種を処理できなかつた汚点がなくなるだけで、ギャラルホルンとしては彼女の首を取ることで得られる加点などないわけだが――

つまるところ、カイン達は当初の目的通りいつもの仕事としての監査を始める。それに出発前の不安も当たってしまったていた。

というわけで仕事をしつつも、MSの整備は万全にしておいた。

監査の仕事でも色々とマズイ物を見付けてしまって、これだけでも十分コーラルの今は真つ暗になることが確定。

地球に応援を頼むこともする。あまりにも腐敗が進みすぎていたたつた一隻だけの監査局員では足りないほどに問題があつたのだ。

資金の横流しはもちろん、金銭のやり取りがあつた組織への優遇、接待の甘受。暴動鎮圧要請の無視など多岐に渡る。コーラルは随分と甘い汁を吸っていたようだった。

地球へのアリアドネを介した通信ではそこまで細かい情報を伝えられず、長い間映像を繋ぐわけにもいかなかった。長く通信していればコーラルにも閲覧され、夜逃げされかねない。そのため文章だけで応援を呼んだ。

鉄華団が地球へ行く準備を整えている間に、コーラルを軍事裁判に出席させて確実に葬ることができるだけの準備が整つた頃。

アリアドネをチエツクしていたカインがマクギリスを訪れる。

「フアリド特務三佐。この基地に入ってきた通信を確認したところ、コーラルとオルクス商会の代表なる者が密会をしていました。どうやらクーデリア嬢のスケジュールを密告していたようで……」

「なんともまあ、杜撰だな。我々がいる間は様々な通信を確認していると思わなかったのか？」

「コーラルはアウトすぎてカインは既に上司として扱っていない。だから呼び捨てだ。オルクス商会という地球への航路を知っている業者がクーデリアについて話したいと切り出してきたためにそのまま通信を繋げたコーラルの迂闊さが現れていた。」

「それだけ追い詰められていたのだろう。安全を確保するということも考えられないほど崖っぷちのようだ。」

「コーラルは自分で確保して、こちらへ手柄を明け渡すようです」

「……火星の暴動は全てコーラルのせいにはできる。それにこれはきつかけになり得るか……？ ギャラルホルンは愚か、世界全てを巻き込む騒動になれば今の世界にヒビを入れられる。それほどまでの器が彼女にはあるか……。カイン、いつもの勘で答えてくれ」

「クーデリア嬢は、今は少女です。ですが、幼いということは逆に強さになる。成長をす

るということです。片鱗はあります。地球への旅がキツカケでその器へ昇華する可能性は大かと」

「そうか。では我々は彼らへ一当たりして見逃す。ガエリオにはそれを伝えたら臍を曲げるな。敢えて言わずにコーラルに乗せられたと言っておこう。カイン、今一度出撃用意を」

「はっ」

カインが敬礼したのと同時に。

マクギリスへコーラルからの通信が入った。

14 火星軌道上での鎮圧

結局コーラルの打診からカインとガエリオは作戦開始時にMSデッキで待機となった。マクギリスは一応艦長という扱いなので状況次第で出撃となる。鉄華団の出方次第などところもあるが、基本はこの二人に任されている。

いくら鉄華団が火星支部の襲撃を撃退したからといって、元が地方の民間警備会社であればそこまでの数のMSを所持していないはずだ。下手したらシユヴァルベ二機だけでも過剰戦力になりかねないので、マクギリスは上司として待機をしている。

既に火星支部のMS隊はクーデリアを乗せたシャトルが火星から飛び立ったと連絡を受けて航路宙域で待ち伏せをしていた。

カインはシユヴァルベのカメラを艦と接続して宇宙の様子を見ていた。

シャトルが上がっているが、それを取り囲むように近づく火星支部のグレイズ達。そしてオルクス商会なる火星の会社が型落ちの戦艦に乗ってシャトルへ通信を送っていた。どうやら鉄華団を裏切ってギャラルホルンに組みしたことを伝えていた。

コーラル自身も自分の手で功績を立てることで汚点の穴埋めとしたいのか、基地司令ながらもグレイズで出撃していた。彼程度には普通のグレイズしか配備されない。

「カイン、出ろぞ。オルクス商会も出てきたならアレも確保する」

「わかりました。ブリッジ、出ます」

「ガエリオ、カイン。あのシャトルからエイハブ・リアクターの反応がある。今こちらで照合中だがすぐに結果が出ないことからアンノウンの可能性ありだ。気を付けてくれ」

「アンノウン？ そんな骨董品を引っ張り出してきた可能性があるってか？」

「厄災戦による廃棄MSは宇宙のどこにでも浮遊していますから。零細組織であれば貴重なMSとして使用するでしょう」

ブリッジにいるマクギリスから警告を聞かされて、ガエリオは自分達の知らないMSとなれば厄災戦で少数生産されて実戦に耐えられなかった機体だと考える。あの時代は生き残るために様々なMSが作られ、名も影も残さず消えていった機体もある。

ギヤラルホルン以外にMSのエイハブ・リアクターを新造できないので、リアクターの判別に時間がかかるということはそういうことだと推察できる。

「さてさて。どこまで奴らは抵抗するんだか。ガエリオ・ボードウィン。シュヴァルベ・グレイズ出ろぞ！」

「カイン・ベリアル。同じく出ます！」

二機のシュヴァルベ・グレイズが発艦する。宇宙に飛び出てまず見た光景が、コーラルのグレイズがシャトルから出てきたMSの大口径滑空砲にコックピットへの超至近

距離狙撃を喰らって風穴が空いていたというもの。

誰がどう見ても撃墜判定、戦死扱いにするやられ方だった。

シャトルから出てきた、見たことのない白い細身のMSはそのまま滑空砲を手に火星支部のグレイズを相手取っていた。

「コーラルはなんとというか……功を焦りすぎたな。カイン、あのMSに見覚えは？」

「特徴的な二本角にツインアイ。我々の知らないMSとなると、ガンダム・フレイムかもしれません」

「ガンダム・フレイムう？ 火星で現存してたつてののか？ 稼働できる状態で？」

「そうだと仮定すれば母艦で判別できない理由に納得できるだけです」

カインも話聞いたことはあっても、実際にガンダム・フレイムを見るのは初めてだった。だから推測になってしまいが、勘がそうだと訴えてくる。

妙な胸騒ぎもあった。カインは見たことがないはずなのに、どこか心惹かれる。郷愁の念に駆られたかのようなよくわからない感覚が押し寄せる。

カインに故郷なんてないはずなのに。

（なんだ？ 一体何があるというんだ……。ガンダム・フレイム。厄災戦の英雄、戦争を終わらせた七二機の伝説的MS。それが現れたからって、オレに何の関係がある……？

そんな疑問を浮かべながらも、やるべきことのために行動を開始する。目標は二つだ。

「こちらも二機。だから上官に伺いを立てる。」

「答えは性格的に予想できていたが。」

「ガエリオ特務三佐。鉄華団とオルクス商会。どちらを？」

「もちろんあのガンダム・フレームの方だ。武力行使されてしまったら手を出す口実ができただろう？」 その部分だけはコーラルに感謝だな」

「先に出したのは火星支部です。彼らはあくまで自己防衛の範疇でしょう。……とはいえ、目の前の戦闘行為を見逃す理由にはなりませんか」

「そういうことだ。いつぞやの宇宙演習の逆と行くぞ」

ガエリオはグレイズと合流して白いガンダム・フレームを追う。カインはオルクス商会の戦艦へ向かおうとしたら新たに赤い戦艦が宙域に侵入してきた。しかもその戦艦がクーデリアの乗ったシャトルを収容しているではないか。

それは鉄華団が所有する、地球へ向かうための艦だった。それを追うように後ろへ着くオルクス商会の艦。オルクスは取引相手であるコーラルがいなくなってしまうもまだクーデリアを追うようだ。

「監査局に引き渡せば同じような取引ができると思っているのかもしれない。」

そんな思考をしている頃、鉄華団の艦であるイサリビからギャラルホルンのMSであるはずのグレイズが出てきたことにカインは眉を顰める。見た目はどこを見てもグレイズ。

まだグレイズは经济圈などの防衛部隊にも卸していない最新の量産機だ。それを火星の一組織が所有している。

エイハブ・リアクターの周波数も調べるが、間違いなくグレイズだった。グレイズなんて元民間警備会社がどうやって手に入れたのかと考えてしまう。

（ああ、火星支部にはグレイズが配備されているんだ。それで二機を失っている。鹵獲されたのか。いや？ ギャラルホルンに嫌気が差して機体ごと脱走したという可能性もあるか。世界秩序を守るために入隊したら汚職の塊を目にしたのだろうか）

グレイズに乗っている人物が誰であろうと、機体をどのように鉄華団が手にしようとして、そういうこともあるだろうと納得してしまうカイン。

そのグレイズはガンダム・フレームの援護に行くようだったので、結局戦艦同士戦いになっていた。邪魔が入らないならそれでいいと、カインは行動を開始しようとしてトペダルを踏む。

追いかけることをしようとしている二つの戦艦をカインも追いかけてようと進んでいる頃、母艦から通信が入る。マクギリスからだった。

「ガンダム・フレームは想定外だった。私も出る」

「ガエリオ特務三佐の援護、ですか？」

「ああ。ガエリオも阿頼耶識の動きに翻弄されているようだからな。そっちは任せる」

「了解しました」

母艦から青いシユヴァルベも出撃したことを見て、カインはオルクス商会の艦の後ろに着く。すると相手から通信が届いた。

「ギャラルホルンの方、最新鋭機による援護とはありがたい。我々はMSなど所有していないのでどうにも目の前の相手には逃げられそうで。エース様が援軍に加わっていただけるとは百人力ですな」

オルクス商会の代表であろう人物がブリッジの艦長席に座っておべっかを使ってくる。

カインはその言葉を無視してバズーカを構え、照準を合わせた。

トリガーを引き、バズーカ弾が発射される。それが突き刺さったのは、オルクスの艦。そんなカインの行動に二つの艦には困惑が広がる。

「ば、バカナ！ なぜこちらを撃ってきた!? アレは間違いなくギャラルホルンのM

Sだろう？」

「はい！ 識別信号は確実にギャラルホルンのものです！」

「なら何故!?？」

オルクス商会が揺れる艦内でそう叫ぶ中、鉄華団もブリッジでは撃たれていないのに初めての戦艦戦でいきなりのイレギュラーの発生で参謀のビスケットが慌てた声を上げてしまう。

敵のはずのオルクス商会とギャラルホルンが争っていれば戦場が初めてのビスケットからすれば仕方ない困惑だ。

「オルガ、状況が全く読めなくなつた! どうする!?？」

「いや、この状況は利用できる! ユージーンの出用意! 作戦はそのままだ!」

鉄華団の団長、オルガ・イツカの一喝でイサリビに乗っている鉄華団の困惑はとりあえず放置された。そのまま目の前の資源衛星にワイヤーアンカーを打ち込む作戦を実行する気だつた。

「ギャラルホルンの! 何故我々を攻撃する!?？」

「あなた方は火星支部のコーラルとの癒着が露見している。コーラルが戦死した以上、重要参考人としてオルクス商会を監査することが我々監査局の仕事だ!」

「こ、コーラルめええええ!?？」 あの疫病神があ!」

カインは臆面もなく真実を告げる。そうして足止めをしている内にイサリビからワイヤーアンカーとMWが一機、大きな資源衛星に向かって射出された。

アンカーによってイサリビは強引な方向転換を成し遂げて、オルクス商会の艦の正面を取る。アンカーとMWを回収すると同時にイサリビは一斉射を敢行。カインは当たらないように上昇してイサリビからの砲撃を避ける。

イサリビも逃げるのが優先だったようでも、同時に射撃戦を行うつもりはなかったようだ。少しだけ当てて全速力で距離を離していた。そのまま所属するMSがいる宙域へ回収のために突っ込んでいった。

それを見送ったカインはオルクスの艦の後ろについて、スラスターに向かつてマシンガンを放つ。スラスターは繊細な機器なのでマシンガン程度の攻撃で機能不全に陥る。小さな爆発を数回起こした艦は動きが止まる。

沈黙したオルクスへ、カインは通信を試みる。

「抵抗はしないように。貴様らの余罪は明らかだ。命あつての物種とはよく言うだろう？」

それだけ言って視線をイサリビの方へ向けると、しつかりと二機のMSを回収してこの戦域から脱出していた。地球へそのまま向かうわけではなく、ひとまずこの場所を去ることを選択したようだ。

案内人もなしに地球へ向かうのは自殺行為だ。それはギャラルホルンに所属し、アリアンロッドに詳しいカインだからこそ断言できた。

母艦にオルクス達のは任せてガエリオとマクギリスのところへ向かう。ガエリオは若干機体が損傷しているようだが、傷は浅いようだ。

「カイン、逃げられたのか？」

「オルクスを優先したと言ってください。コーラルが死んだ以上、生き証人が必要です。彼らはこのままなら宇宙で彷徨って死ぬ。案内人を見付けられたとしても、地球で綱を張っていれば捕まえられます」

「それはそうか。……マクギリス、カイン。あのガンダム・フレームのパイロット、火星の畑で会った生意気なガキだったぞ」

「ああ、彼ですか。阿頼耶識の手術を三回もしているのなら、一番の適任でしょうね。アレは手術を重ねることに致死率が上がる危険な物ですから。彼以外に三回も手術をしている人間はいないのでは？」

粗悪品の阿頼耶識は複数回手術をすると死亡率が跳ね上がる。ギャラルホルンは粗悪品を扱っていないので詳しいデータはなかったが、三回成功している三日月という少年兵は奇跡の上に立っていると行って良かった。

本題はそこではなく、これからについてのこと。

「コーラルが死んだせいで、私達はやる事が山積みだ。当分地球には帰れないな」
「うげえ。さつきはコーラルに感謝したが、前言撤回だ。俺は火星の空気が合わん」

「実際地球よりは環境が良くありません。データで確認しますか？」

「いや、見ないでおく。時には見たくない現実もある……」

ガエリオの弱気に苦笑し、三人は母艦に戻って行く。

母艦に戻ってすぐオルクス達の身柄を確保し、会社や艦を確認しようとしたところに火星基地から連絡が来る。

そこには鉄華団から送られてきたと思わしき、タコ殴りにして縛られた中年のおっさんが。

これどうしようと、三人は顔を合わせてしまった。

とりあえずトドという男は治療した後、事情聴取をすることにする。

そして監査をして行く中で、さらなる巨悪を発見してしまうマクギリス達だった。幸い今なら火星にいるようなので、すぐに介入することにした。

15 広義の監査

火星のアーブラウ領独立自治区クリュセ。そこは地球の一都市と変わらないほど発展していた。コンクリートで舗装された道。立ち並ぶビル群。適度に植えられた緑の数々。火星でも一・二を争う広大な都市群だった。

火星は厄災戦後の経済協定によって実質的に地球圏の植民地と化しているが、だからこそ様々な企業が利権を求めて支部を置いたり、より搾取しようと思徳企業をそれとわからず置いてある者もいる。

そんなビル群へ、ギヤラルホルンのマークが施された軍車両が入って行く。それだけで民衆の注目を浴びるが、車を運転する者はそれを気にせず突っ切って行く。

今日は大きな独立運動を訴えかけるデモ行進などは起こっていないので、治安維持活動の一環ではないことだけは民衆にもわかった。

その車はある場所で停まる。そこは周りのビルの中でも一際大きなビルで、それだけで儲けていることが丸わりの富を象徴していた。そのビルに入ろうとするのはたった一人。

ギヤラルホルンの隊服に身を包んだカインだった。

そんなビルにはもちろん、警備の人間がいる。ギャラルホルンの者が訪れるなんてアポイントメントは受けていなかったもので、当然のように呼び止めていた。

「止まれ。何用だ？」

「火星支部から参りました。ノブリス・ゴルドン氏に確認していただきたくてございまして。機密に関わりますので詳細は話せませんが、ゴルドン氏ならば用件を把握してくださいさつているはずですよ」

「……確認を取る。そこから動くな」

二人いた警備員は片方が懐の拳銃に手を掛けて、もう片方は無線機で確認を取り始める。その間カインは手ぶらなまま車の前で微動だにしなかった。

話がついたのか、無線機を下ろした片方が指示を出してもう一人の手を銃の引き金から外させた。

「話は聞いてやる、とのことだ。着いてこい」

「わかりました」

車から資料が入ったトランクケースを持って、カインは警備員に着いていく。ビルに入る前に身体チェックをされて、銃火器を所持していないことをカインは証明していた。トランクの中も見せて武器を隠し持っていないことを相手に示す。

エレベーターまで案内された後は違う者が、それでも警護を主とする屈強な男によつ

て仕事引き継がれて会長室へ案内された。

中にいたのはノブリス本人と、護衛と思わしき黒服が三人。ノブリスは柔らかそうな椅子に座って優雅にアイスを食べていた。カインの方へ向くこともなく、対応は全て黒服に任せているようだった。

ここはギャラルホルンではないので、カインも敬礼などをするわけもない。挨拶もせずには部屋に入ってしまった。

「コーラルの後釜か。随分と無作法だな？」

「あなたは私の上司ではありませんので。確認したいことがあるだけです」

「フン。コーラルの失敗で火星支部の建て直しに儂の力が必要なのだろう？ 見返りは

何だ？ こちらとしても慈善事業ではないのだぞ？」

たったこれだけの会話でカインの目的は達成できていた。

あまりの呆気なさに、カインは拍子抜けする。だから言葉が漏れてしまった。

「所詮は武器商人か。大きな利益ばかりに目が行き、小さなことには目が行かない。金に目が眩み、蟻の侵入にも気付けないとは」

「何だと？」

不遜な言葉を使うカインに対して黒服達は銃を取り出そうとするが、身体が上手く動かないのか銃を床に溢したり、膝を付いて喘いでいた。

その様子にノブリスは眉を顰めるが、持っていたアイスの器を落として胸の痛みを自覚したことでこの状況が仕組まれたものだとは知る。

胸の痛みに加え、肌が嫌に痒い。腕を捲った先には蕁麻疹が大量にできていた。

「な、何をした……!?」

「地球のとある風土病。そのウイルスをこのビルに流し込んだだけだ。この風土病の厄介なところは若い者ほど罹患しやすく、最初は症状は薄いが日にちが経つにつれて重症化していく。老人の方が症状は軽く、罹患しにくい。S P 達は随分と仕事熱心だったようだ。それとも、蕁麻疹程度では仕事を休まなかったのかな？」

ジュリエッタも罹った風土病。そのウイルスをナノマシンを使ってこのビルの内部にだけ送り込んでいた。大きな組織を鎮圧するために監査局がよくやる手だった。カインは発症しないように事前にワクチンを打っている。

そしてカインの言うように、風土病の初期症状である蕁麻疹が出た程度ではノブリスは仕事を休ませなかった。そのためこの建物内にいる人間はほぼ全員発症しており、しかもカインが訪れる時間にピークになるようにナノマシンを調整してウイルス散布を行っていた。

監査局がよく使う手なので、ウイルスを注入してどれだけの時間で重篤化のピークになるのかは研究され尽くしている。

ついでにこの部屋の空調から大量に散布されるようにナノマシンを操作したので、この部屋は今やウィルスの温床だ。

だから高齢のノブリスにも症状がかなり出ている。

「我々監査局はギャラルホルンの不貞を許さない。他企業からの利益享受、武器・弾薬の受領、共謀して治安を悪化させ、自分の功績にする。こういったことは組織を腐敗させる土壌になる。実際火星支部は酷い有様だ。」

——火星独立運動のデモ活動にお前が武器を流し、コーラルに始末をさせる。武装勢力を鎮圧するならば弾薬を消費するためにコーラルには商品が売れ、コーラルが失敗したとしても火種が大きくなれば宇宙中でお前の商品は売れる。精々海賊辺りとの契約で済ませておけば良かったな。ギャラルホルンは武器・弾薬の全てを自分達で賄える。他企業から買い付ける理由がない。あつた場合は組織的な理由ではなく、個人の私腹を肥やす場合のみだ」

カインは説明しながら黒服達の手足を丁寧に折っていく。いくら風土病に冒されて意識が朦朧としていても、火事場の馬鹿力を発揮されて動かれたら面倒だからだ。縄など拘束する物を持ってきていないし持ち込めもしなかったので、手足を折って意識を奪うのが反抗されない唯一の方法だ。

殺すのも面倒なので、ひとまずの処理をしているだけだ。

カインはトランクの中に入れていた、資料提示用として持ち込んだタブレットを取り出す。それはトランクの中身を確認された時に盗聴できるよう触れていたカインの監査局での仕事用のタブレットだ。

後から起動するようにセットされていたウエイクアップ機能とタイマー設定を仕込んでおいた物で、このタブレットが今までの会話を全て記録していた。

「コーラルと関係があつたと言う趣旨の会話は録音させてもらった。コーラル側に契約書があつたとはいえ、シラを切られたら面倒だったから確実な証拠が欲しかったが、こんなにもあつさりど吐くなんて思いもしなかった。コーラルが死んだことしか情報を得ていなかったのは失敗だったな。世界全てを回しているつもりになるからこうやって足元から崩れる。利権のみに盲目となった金の亡者は、こんなものか」

「あ、があ……」

もうノブリスも限界のようだった。

これで監査局としての仕事は終わりなのだが、マクギリスから一つ密命を受けている。それを遂行するために一つの紙を用意し、そこにノブリスの血判を着ける。そしてノブリスの席の引き出しにでも仕舞っておいた。

指紋をつけないように手袋を着けて行えばミッションコンプリートだ。トランクの中に入れていたタブレットを操作してウイルス散布を止めて、マクギリスへ監査局の人

間として報告をする。

「フアリド特務三佐。任務完了いたしました。重症者複数ですのでいつも通り防護服を着て突入してください」

「ご苦労だった。カイン一尉もすぐに離脱し、精密検査を受けるように。録音したタブレットだけ提出を忘れるな」

「はっ。すぐに離脱します」

カインはすぐに出て行き、防護服を着た同僚にアルコールスプレーを大量に噴射された後、精密検査を受けた。ワクチンを打ったとはいえ大量にウイルスが散布されている場所に短時間とはいえ生身で居たのだ。

精密検査の結果問題なし。ただし三日間の療養を言い渡された。

ノブリスの会社は解体され、武器・弾薬はギャラルホルンに押収され、無事だった従業員は監査をして処罰を下された。クロと判断された者はブタ箱行きで、それ以外はただの解雇処分。

ノブリスも辛うじて生きているが、寝たきり状態だ。

カインのメツセージを理解したマクギリスは、ある書類を手にして、その正式な手続きを済ませる。

これで残るは火星支部のゴタゴタだけとなった。それもカインが復活してからは

さっさと進めて二週間後には全ての報告書が出来上がっていた。

マクギリス・ガエリオ・カインの三人がいたからこそそのスピードだった。報告書が完成した頃に本部へ要請していた代わりの火星支部を指揮する人間を乗せた応援が到着し、カイン達は火星を後にした。

その頃鉄華団はようやく、木星圏に辿り着いていた。

地球へ帰る航路の途中で。

火星のことに掛かりつきりだったカイン達は鉄華団について話し合う。火星での衛星軌道上での戦闘は痛み分けという戦果だ。これはカイン達が監査局に入って初めて勝利を収められなかったMS戦闘の結果だった。

だから特にガエリオが苛立っていた。彼の傷も完治したが、負傷したということも大いに関係している。

火星支部から引き抜いたアイン・ダルトン三尉の話も聞いて、正義漢であるガエリオはアインに同情するのと同時に力になってやろうと決心していた。その結果が鉄華団を迫える立場を得るための引き抜きだった。

「ガンダム・バルバトス。後はクランクという古参兵の乗機だったグレイズの二機が主な戦力か。ガンダム・フレームなんて小さな組織が整備して使い切れるのか？ ギャラ

ルホルンでも稼働させていないMSだぞ？」

「マニアやオタクという者はどこにでもいるものだぞ、ガエリオ。厄災戦という謎が多い世界を決定付けた戦争を調べる者はいる。そのついでにガンダム・フレームの整備方法に行き当たることもあるだろう。それに先の戦闘のデータだけでも出力・馬力はシユヴァルベを凌駕していた。リアクターを二基搭載しているというだけはある」

「……ウチの倉庫で埃を被つてる物を引っ張り出すか？」

ギヤラルホルンならガンダム・フレームを産み出した者達なので厄災戦当時の性能に近付けることはできる。ある種オーパーツのような物なので今でも研究されていて、整備も欠かしていない。

ガエリオが望めば地球圏に戻る頃には使えるように用意されているだろう。

「厄介なことはあの機体を十分に以上に操作できる阿頼耶識システムを得たパイロットがあちらにいること。通常のMSでも阿頼耶識システムを用いた操作をされれば厄介ですが、ガンダム・フレームと合わさると更に手に負えない」

「あの機動、人体の動きに近かった。マシーンを相手にしている感じがしなかったな。……ああ、どこか既視感があると思つたら、カインの動きに似ているんだ」

「オレに、ですか？」

ガエリオの言葉にカインは首を傾げる。

火星衛星軌道上の戦闘データは映像も含めて確認していたが、カイン自身の動きと比較しようとは思っていなかった。

カインは幼年学校の頃から戦場を経験していて、それこそ阿頼耶識適合者ともMSで戦闘をしていたが、その動きが自分に似ていると言われてもわからなかった。自分の縦に阿頼耶識システムの動きを取り入れようと考えたこともない。

自分が動きたいように動いていることが誰かと似ていると言われても困るだけだ。

「カインも存外マシーンのような動きから外れているぞ？　そうでなければあれほどデブリを避けられないだろう。人体を模した物を動かしても、人体そのものの動きはできない。骨格から何から違うからな。だから人間のような動きをされるとこちらは困惑する。そういうことだろう？　ガエリオ」

「ああ、そうだ。いや、カインの場合は攻撃予測が正確すぎて全然攻撃が当たらないことなんだけだな。……そんな動きに加えて劣る出力か。マクギリス、アリアドネを使うぞ」

「艦は今静止している。好きに使え」

ガエリオが実家へ連絡をするために部屋から出ていく。

二人つきりになったことで、マクギリスの空気が変わった。それを感じ取ってカインも従者のようになる。

「カイン。俺も本格的に動こう。クーデリア・藍那・バーンスタインを援助する。全員に通達を出すぞ」

「わかりました。差し当たって次はどう動きますか？」

「ノブリスの駒がそのまま使えるんだ。クーデリアの行動はこちらに筒抜け。地球圏にやってきたところへ接触をかける。彼らはテイワズの後ろ盾を得るようだが、それだけで万全の援助とは言えないだろう」

「つまり、モンターク商会を使うと」

「そうだ。……だが、まずは家の使命を済まさなければならぬ。カイン、お前も出席するように」

カインはこれからのマクギリスとガエリオの予定を把握していたので何を指しているのかわかったが、それに出席する理由が思い当たらなかった。

というより、立場的に出づらひ。

「いえ、あの。上流階級の方々が集まるパーティーですよ？ 孤児の身の上で参加するのは場違いとしか言いようがありません」

「アルミリアも折角の晴れの舞台でカインに逢いたがっていたぞ？」

「ハア……。主賓二人の招待であれば、断れませんね。隊服で構いませんか？」

「ああ、いいとも。我々へ挨拶を済ませた後は、令嬢の華を愛でるといい」

「……あまり興味がありませんね。身分が違いすぎます。それにダンスとか苦手です」
「ギヤラルホルン内でもエリートの監査局に所属し、まだ二十歳という年齢で既に一尉だ。ご令嬢達も婚期を逃さないために必死で口説いてくると思うぞ？」

その言葉で余計に参加する気が失せたカインだった。

だが、上司の命令には逆らえない。カインは仕方がなくマクギリスとアルミリアの婚約パーティーに参加することとなった。

16 婚約パーティーにて

テイワズもしくは木星へ向かう途中で、鉄華団のMSパイロットである三日月と明弘はテイワズの傘下であるタービンズとひよんなことから巡り合っており、そのタービンズがクーデリアを地球へ送り届けるための案内役を務めてくれることになり、その縁からタービンズの艦であるハンマーヘッドを訪れていた。

そのハンマーヘッドでシミュレーターを使っていた時に、三日月がシミュレーターの結果に不服を申す。

「こんなんじやあのチョコにも、猫の人にも勝てない……」

「チョコ？ 猫？」

「ああ、あのギャラルホルンの」

「明弘。三日月は誰のことを言ってるの？」

シミュレーターに付き合っていたアジールとラフタには三日月が勝てないと言う人物に心当たりがなかった。チョコも猫も人を指すのに使う言葉ではないのだ。

明弘は同じ戦場にいたし、その後三日月とも話していたのでそんな特徴的な渾名でも誰を指しているのかわかった。

明弘は説明用にとビスケットに持たされたタブレットを用意して火星を飛び出た直後の戦闘映像を見せる。

それを見たラフタとアジーはああと納得する。

「この映像なら見たよ。よくシユヴァルベ三機から逃げられたよね。しかもカラーリングまでしちゃってるエース・オブ・エースが、だよ？」

「運が良かったんだろうね。グレイズとシユヴァルベの足並みが揃ってないし、紅いのはアンタ達を追ってる艦を攻撃してる。ギャラルホルンとして逃せないのはどちらかって天秤にかけたんでしょ。……バーンスタインよりも優先する理由はわからないけど」

それぞれがそう言う。紅いシユヴァルベの行動は不可解なもの、ギャラルホルンから逃げ切った運と実力は二人とも褒めていた。

「シユヴァルベって、こいつ？」

「何？ 三日月知らなかったの？」

「グレイズとは違うなって思っただけ。こつちにはエイハブ・リアクターの照合なんてやってる暇なかったし」

「火星の民間警備会社だとそんなものかもね。シユヴァルベ・グレイズ。グレイズ・フレームの長所である安定性を捨て去ってエース用の調整をしたとんでもないピーキー

な機体だ。そのおかげもあって高性能、配備されている数も少ない実質的な専用機。それが三機も同じ戦場にいるなんて悪夢さ」

三日月も明弘も知らなそうだったのでアジーが説明した。

シヴアルベなんて一部隊に一機配備されているかどうか。アリアンロッドなら複数体配備されているが、アリアンロッド以外の小規模部隊にこれだけのエース機がいるなんてかなり特殊な事例だ。

「あ、でもアジー？　ダーリンが言ってなかったっけ。確か紅・蒼・紫のシヴアルベには気を付けろって」

「ああ。どこぞのコロニー公社の反乱を制圧した戦力比十倍の奴か。映像は手に入らなかったけど、手を出すなって言われてたね」

「それがチヨコの人達ってこと？」

「三日月、どれがチヨコの人なのよ？」

「この蒼いの」

蒼がビスケットの妹達にチヨコをあげてた人、紫がその隣にいたガリガリ、紅が多分猫の人だと三日月が説明し、火星で会っていたと話す。

「何で猫なのよ？」

「目がそんな感じかなって。昔見た猫っぽかった。金髪金目で、どっしりしてた」

「金で猫っぼいって……。それ、むしろライオンじゃないの？」

「らいおん？ 何それ」

「あー、知らないか。ギャラルホルンの、笛持つてる生き物。アレがライオン」

「アレがそうなのか。うん、猫よりは確かにそれっぼい」

比較対象が誰だかさツキリしたところで、その三機に勝てるようにまたシミュレーターを起動する三日月と明弘だった。

地球。とある領地にて。

ボードウイン家が所有する別荘にて、マクギリスとアルミアの婚約パーティーが行われるのでオレは隊服を着て会場入りしていた。参加している人間は男はスーツ、女性
はドレスだったために浮いていた。

上流階級、及びギャラルホルンでも上位の階級の人々がたくさん集まっている。ゲストだけで六十人以上はいるだろうか。スタッフも含めれば二百人はいるだろう。その中でオレとガエリオだけがギャラルホルンの隊服なので浮いている。

むしろホストの嫡子なのに隊服でいいんだらうか。花嫁の兄君なのにそれでいいんだらうか。セブンスターズよりもギャラルホルンの一員としての立場を示しているんだらう。他のギャラルホルン関係者はスーツやドレスだけだ。

軍人としては隊服が儀礼服にもなるので、オレは間違っていないとは思うのだが。婚約パーティーなんて参加することが初めてなために、勝手がわからない。監査局に務めていてもこんな経験は初めてだ。

マクギリスは主賓なので別口からアルミリアと一緒に入ってくるだろう。むしろホストであるはずのガエリオがオレと一緒に入ってくるのがおかしいと思うんだけど。

「ガエリオ様。こちらにいらっしやつていいのですか？ ホストでしょう？」

「いいんだよ。それに本当のホストは親父だ。俺はアルミリアをある程度見守ってればいいんだよ」

とのこと。

オレもアルミリアに挨拶をしたら壁際で退いていればいい。ギャラルホルンのお偉いさん方に挨拶をして、その程度だ。

オレがここに来たのはアルミリアの懇願で、それだけだ。それがなかったら来なかった場所。

空気が違いすぎる。ここにいる人間はほぼ全てが特に不自由なく生きてこられた。今も談笑しながら片手に持っているお酒を嗜んで。

使用人が配膳する食べ物をお皿に載せてもらい、摘んでいて。

着飾っている衣服はどれも煌びやかで、何枚も着回すことができるほど所持してい

て。洗濯もしたことがなくて。

首や耳に着けているアクセサリーもふんだんに宝石や細かい職人の細工が施されていて。その美しさを褒め合っている。

自分を着飾るためのものはアクセサリーだけじゃない。化粧品や整髪料など、豪勢に使っているのだろう。それを使えるだけの豊かさがあると魅せ付けていた。

軍隊という金食い虫に所属しているオレが何を憚んでいるのかと言われてしまえばそれまでだが、あまり見たくない景色ではある。

ボードウィン公もガエリオの相手探しも含めてここまで盛大なパーティーを開いているのだろう。それを見させられる孤児の立場は。

壁の近くでひっそりと息を吐くと、ここに来場者に新たな人物が加わるのを感じた。まさか来られるとは思わず、ボロが出ないように仮面を被る。

扉が開かれて入ってくるのは、オレと同じくギャラルホルンの隊服を着た偉丈夫であるラスタル様と。

真紅の肩出しドレスに身を包んだジュリエッタだった。

二人が来たことはわかっていても、立場的にどちらも隊服を着ているものだと思っていた。だから不意打ちを喰らった気分だ。ドッキリに成功したかのように、オレを視線の端で捉えたラスタル様は笑みを隠さなかった。

「エリオン公だわ……。いつ見ても渋くて素敵。まだ独身ですもの。狙っちゃおうかしら？」

「あの女、何者？ エリオン公と一緒に入場してきたけど……。見覚えがないわ。まさか婚約者、とか？」

「でも本当にそうなら腕を組んで入場してくるでしょう？ 後ろに控えているから、着飾っただけの従者じゃないかしら？」

令嬢達はラスタル様とジュリエッタの関係性についてあれこれと話し合っていた。親しい間柄の男女であれば腕を組んで入場することが常なのだとか。

妻でも娘でも婚約者でもないジュリエッタとは、ただ単に部下だから腕を絡ませずに入ってきたんだろう。

一応ホストのガエリオが二人に近づく。ボードウィン公はアルミアと一緒に出てくる予定なので、それまでのゲストの応対はガエリオに任されていた。オレも部下として手招きされて二人に近づく。

ガエリオはセブンススターズとして、現当主と次期当主という立場の違いこそあれどホスト側とゲストという関係性から自然体で接していた。

オレはもちろん、階級が上なので敬礼をする。

「このような場で敬礼は不必要だ。カイン一尉。隊服を着ているとはいえ、今日はただ

の「ゲストだ」

「は。失礼いたしました」

不敬にならないように手を降ろすと、頷いてからラスタル様はガエリオに祝辞を伝える。

「ガエリオ・ボードウィン特務三佐。この度は妹君のご婚約おめでとう。次は君の番だ
な？」

「エリオン公がそれを仰いますか？ いえ、後ろの姫君が御相手で？」

「ああ、違う。彼女は私の護衛だよ。アリアンロッドの隊員だ。アルミリア嬢に挨拶に
伺うというのに、むき苦しい男を何人も連れてくるのは紳士ではなからう？ 君達への
紹介がてら優秀な女性を連れてきたというわけだ。ジュリエッタ、挨拶を」

「はっ。お初にお目にかかります。ガエリオ・ボードウィン特務三佐、カイン・ベリアル
一尉。このような格好で失礼いたします。アリアンロッド所属、ジュリエッタ・ジュリ
ス准尉であります。本日はラスタル様の護衛として参りました」

真紅のドレスを着ながら、ジュリエッタは敬礼を見せる。オレはジュリエッタのことを
知っていたが、ガエリオには知らせていなかったのでお初にお目にかかるというのは
本当だ。

幼年学校で一緒だったとはいえ、四学年も離れていれば接点など無いに等しい。

「エリオン公。彼女はパイロットですか？」

「ああ、そうだ。この前もとある制圧任務で貢献してくれてな。士官学校を出たばかりだが優秀だよ」

「なるほど。エリオン公が推す人物ということはさぞ優秀なのでしょう」

ラストル様とガエリオだけの会話が続く。オレ達は護衛なので口を挟まない。

ジュリエッタもオレがここにいると知らなかったようで、鋭い視線を向けてくる。勘弁してくれ。オレも望んでこの場にいるつもりはないんだ。

（カインに見せる気なんてなかったのに……。ラストル様のバカ）

あ、ここで能力を使ってオレにわかるように思念をダダ漏れにして考えるのはマズイぞ、ジュリエッタ。

なにせここには彼女がいる。彼女も感受性という意味ではかなりオレ達に近い。

そう思って特に何も考えないよう思念を送る。ブスツとされてしまったが仕方がない。この場は彼女が主役なんだから。

ラストル様が最後のゲストだったのか、入り口が閉められる。そして入ってくるマクギリスとアルミリア。その後ろにボードウィン公。

今回のパーティーはボードウィン家が主導であることと、イズナリオ・ファリドは忙しいということでは彼は来ない。いたらいたで面倒だったと思うのでいなくて良かった

と知っている。マクギリスへの仕打ちを考えると、この場には相応しくない。

忙しい理由も、ハーレムを相手に行っているか、アーブラウでの支援に精を出しているだけだろう。もうこちらは確定事項だから顔を出す必要もないと。

下種が。

ボードウィン公の、感謝の祝辞が語られる中、やはりご令嬢方はヒソヒソと話し合う。やれアルミリアはまだオムツが取れたばかりの子供だと。マクギリスは妾の子で、うまく使つてボードウインの権力も手に入れたのだの。

セブンスターズの一角が下種なら、集まっている上流階級も下種の集まりか。色々なところが腐っているなど本気で思う。ジュリエッタも来たばかりだが、婚約パーティーという祝福されるべき場でこのような悪感情が蔓延していることに眉を顰めていた。

この実態を知らせるために、ラストル様はこの場にジュリエッタを呼んできたのだらう。

よく感じ取れてしまう彼女も、嬉しさよりも悲しさが浮かんでいる。

地球はこんなにも綺麗なのに、そこにいる生き物が美しくない。こんな地球に誰がしろと願つて、彼らは『方舟』を送り出したのか――。

(ん？ 彼ら？ 『方舟』……？ ダメだ、ガンダム・フレイムを見てから記憶が混濁している気がする。オレはやっぱり、昔ガンダム・フレイムを見たことがある……？ ……この場の悪意も関係しているんだらうか。感情が揺さぶられる)

変なものを受信して、頭を軽く横に振つた。近くにいたジュリエッタもオレの怪電波が届いていたのか、心配するような、胡乱げな視線を送ってきた。大丈夫だと思念で伝

えて、ゲストの中でも一番立場のあるラスタル様が真つ先に挨拶に行く。ジュリエッタはその護衛としてついていった。

オレはただのマクギリスの部下なので、挨拶は最後だ。待つ間、マクギリスの言うように様々な女性に話しかけられる。職務について聞かれ、守秘義務に抵触しない程度に話す。ポイントはマクギリスとガエリオの活躍を増すこと。

これでオレへの注目を下げようと思つたが。あまり効果は感じられなかった。

正直、家のためだろうと本人のためだろうと、ここまで結婚にがつつかれると怖さしかない。目が、ギラギラとしすぎていて飢えた狼のようだ。狼など見たことないが。

つまり未知の生き物じみた根源的恐怖を味わっていた。

それから解き放たれて、ようやくアルミリアと話せる。アルミリアに視線を合わせるために、床に膝を着けて右手を心臓に当てる。

「ご婚約、おめでとうございます。マクギリス・ファリド様、アルミリア・ボードウィン様」

「ありがとうカイン」

「ありがと、カイン！ 無理を言つてごめんね？」

マクギリスはいつも通りに、アルミリアは無理をして笑顔を貼り付けてる。

だから、失礼を承知で伝える。

「アルミリア様。耳を塞ぐのではなく、心を塞ぐのです。身体の内側へ壁を作り、本当の心は信頼できる人の元へ預ける。それだけで、有象無象の声は聞こえなくなります」

「カイン……？ アルミリア？」

「んんっ……。……んー、こんな感じ？」

「繋がりを感じ取るためには、身体的接触が最も有効です。マクギリス様の手を取るとわかりやすいかと」

「マツキー、手を貸して？」

「ああ、いいとも」

ガエリオは困惑し、マクギリスはなんとなくわかったのか遠慮なく手を貸し出す。

マクギリスと手を繋いだアルミリアは何度か呼吸を繰り返して徐々にその状態に慣れていった。マクギリスも自分でその状態を初めて経験したからか、未知の感覚に心が躍っているようだ。

オレの後ろでジュリエッタがアルミリアのやっていることに気付いてラスタル様に耳打ちをしている。

アルミリアの状態を確認して、マクギリスの心と繋がったようだ。少し強引だったが、九歳の少女がこれで安心できるのなら安いものだろう。

「その感覚を忘れないでください。あなたはそれだけで、アルミリア・ボードウィンだと

いうことを忘れない」

「……ふふ。うん、わかっちゃったかも。マツキーやお兄様がカインを欲しが理由」
「私にできるのはこの程度です。マクギリス様が居てこそでしょう」

「ううん、ありがとう！ マツキー、踊りましょう？ 魅せ付けてやるんだから」

「ああ、わかったよ。愛しのアルミリア」

本当の笑顔を浮かべたアルミリアが、マクギリスの腕を引つ張つてダンスを始める。
あまりの変わり様にボードウィン公もガエリオも驚いていた。

「カイン、お前何したんだ？」

「特別なことは何も。ただアルミリア様は耳が良すぎたので、音を拾わない手段を教えただけです」

「耳、ねえ」

挨拶も終わったので、ホストに頭を下げて立ち去る。また壁際に戻ると、ジュリエッタが近付いてきた。ラスタル様はボードウィン公と話しているようで、護衛は不要と言われたのだろう。

「カイン、あの子は……」

「セブンスターズで唯一の同類、だな。彼女の教育係も務めた」

「私の時のように、ですね。……やはりロリコンでは？」

「あんな年端も行かない少女が苦しんでいたことを見逃せなかったただけだ。それに彼女はマクギリス様一筋だよ」

婚約パーティーはこれ以降問題もなく終わり。

地球近郊のドルトコロニーにおける騒乱が、近付いていた。

17 『マクギリス』の休暇

一方鉄華団は、木星圏に着くとそのままファイアでありながら木星で一番力のある企業テイワズの傘下に入ることとなり、タービンスの弟分となることが決定した。そういった関係性が構築されたことでガンダム・バルバトスが修理を受けたり、テイワズからの紹介ということで船医が派遣されたりした。

木星から改めて地球へ向かう旅が再開したが、ここで宇宙海賊の一つブルワーズの襲撃を受ける。ブルワーズの一員に明弘の弟昌弘がヒューマンデブリとして所属していることを知った鉄華団はブルワーズを倒し、昌弘達ヒューマンデブリを救おうとする。

ブルワーズは装甲の堅いロディ・フレームを主に用いていたことと、ガンダム・フレームの一機、ガンダム・グシオンがいたために鉄華団とタービンスのMS部隊も苦戦する。戦闘の結果昌弘や鉄華団のメンバーを数人失うことになったが、それでも勝利を収めた。

残ったヒューマンデブリを鉄華団の一員として受け入れて、彼らは地球へ降りる前にテイワズのボス、マクマード・バリストンから地球へ行くついでにと受けた依頼があったため、補給ついでにドルトコロニーへ寄港する。

そこに、テイワズとギャラルホルンのクーデリアを見極めようという試練があるとは知らぬまま。

『マクギリス』は火星監査の功をもって休暇を取得していた。婚約パーティーの時も一日だけ取得していたが、それもヴィーンゴールヴで仕事をしていた間の短い休みだ。パーティーの後には火星での出来事の報告や処分者への対応などで仕事をしていた。

次の監査先が決まるまではマクギリスの部隊は動く理由はなかった。長い航海も仕事に含まれるので休む時は一斉に長い休暇が与えられる。特に今回は火星でのやらかしの規模が大きかったために火星に残つての後始末も、地球に戻つてきても報告など様々な事務処理を行なつていたために時間が余計にかかった。

一つの案件に充てる予定を大きく超過したため、纏まった休暇が与えられたのだ。

フアリド家に戻るわけもなく、『マクギリス』がやることは一つ。ボードウィン家を訪れることだ。

「いらつしやい、マツキーー！」

『ああ。お邪魔するよ、アルミリア』

「お父様から聞いたわ。マツキーの部隊が一斉休暇をもらつたつて。なのにお兄様つたら宇宙に上がつてしまつたのでしょう？」

『火星でできた因縁の相手が近くに来ているところからか聞いたらしくてね。スレイプニルまで借りて出ていったそうじゃないか』

「そうなの！ 折角のお休みだからマツキーとカインも誘ってスレイプニルで宇宙旅行にでも行こうかと考えてたのに！」

アルミリアは立てていた予定をガエリオに壊されてしまったことにプリプリと怒っていた。その年齢相応の怒り方に『マクギリス』は苦笑を零してしまう。

スレイプニル。ボードウィン家が所有する宇宙艦だ。戦闘も行えるれつきとした戦闘艦なのだが、それを宇宙旅行に使いたいと考えるアルミリアは幼くてもセブンスターズの一員だった。

『カインにもカインの都合があるだろう？』

「それはそうかも。カインって長いお休みは何をしているの？」

『お世話になった孤児院に顔を出しているそうだ。そこがカインにとっての家らしくてな』

これは正しくない。長期休暇であってもカインはマクギリス派閥の人間と連絡を取り合ったりモニター商会の状況を確認したり、エリオン家の研究所を訪れて実験を受けていたり、一切孤児院には帰っていない。

だがそれでも表向きカインの休暇を要請する理由は孤児院へ帰ることとなっている。

それがギャラルホルンの目から逃れるのに適した言い訳だからだ。

「そっか……。カインにとつては、そこが家なのね。カインはご両親の顔も知らないのかしら？」

『知らないそうさ。名前も孤児院で付けてもらったらしい。だが、孤児院の運営も大変らしくてな。迷惑をかけないように給料ももらえ、寮生活ができる幼年学校を選んだそうさ』

「わたし、カインのことは士官学校の頃からしか知らないから、あんまりそういうこと聞けなかったな……。もう立派なお兄さんだったのだから」

十一も年齢が離れていれば幼い少女の目からすれば大人のお兄さんにしか見えないだろう。年齢が五も上だったら凄くお兄さんに見える。カインの場合はその倍も上の年齢。本当の兄であるガエリオとも仲良くしている様子を見れば、一回りも年齢が異なるために余計に大人に見えてしまう。

物心が付いた頃にはもう入隊して軍人になっていたのだ。働いていて、しかも優秀だと知れば色眼鏡でしか見えなくても仕方ないだろう。

しかもアルミリアの場合、自身のよくわからない力についても指導してくれたのはカインなのだ。ガエリオでもマクギリスでもダメで、両親や教育係も首を傾げる中カインだけは正しく教育してくれた。

子供の頃の、苦勞していた頃のカインなんて想像も付かないのだ。

いつまでも玄関で話しているわけにはいかなかったので、アルミリアの私室へ向かう。そこで使用人にお茶を用意してもらって、お菓子をつまみながら話をする。

それから数日、『マクギリス』とアルミリアは乗馬を楽しんだり、車でどこか遠くへ一緒に出掛けたり、街へショッピングに行ったりと休暇を楽しんでいた。

ギヤラルホルンで何かがあればすぐに連絡を受けることとなっていたが、そんな連絡は一切『マクギリス』に届かなかった。そのためゆくりと婚約者との逢瀬へ費やす。

アリアンロッドの一大作戦、ドルトコロニーの反乱鎮圧作戦が実行されることは知っていたが、地球にいる『マクギリス』にはできることはない。そういう作戦があるのでアリアンロッド以外の部隊はドルトコロニー周辺へ近付くなどというお達しがあっただけ。

『マクギリス』は想像以上の火種になると直感していたが、動くつもりはなかった。それこそアルミリアの兄ガエリオはこの作戦に乗じるようにスレイプニルを動かしたが、あくまでボードウィン家として動くのなら『マクギリス』にできることはない。

ガエリオは一応マクギリスの部下だが、そのマクギリスが休暇の内に自分の家の戦力を動かすことは止められない。マクギリスも一緒に乗って戦うとなったら監査局として動くことと変わらず、そうしたらアリアンロッドの邪魔をすることとなる。

ガエリオも作戦区域にはなるべく入らず、どうにか言い訳を並べて戦線に加わるつもりなのだ。マクギリスが手綱を握っていないからこそできる暴挙でもある。

カインもボードウインの手駒というわけではないので、その行動には参加しなかった。休みは休みなのだ。やることもあつたので誘われたものの拒否した。

そんなカインの代わりに、火星で部下に加えたアイン・ダルトン三尉はガエリオについていった。尊敬する上司を殺して、乗機も奪った鉄華団が許せないという理由でガエリオの部下になった男だ。

鉄華団が近付いていると知れば是が非でも参加するに決まっていた。

そんなドルトコロニーの騒乱が近付いている頃。

この日もボードウイン家の庭でお茶を楽しんでいた『マクギリス』とアルミアだった。

「マッキー、カインったら酷いのよ？ 力のことは教えてくれても、カイン自身のことは」と話してくれないんだもの！」

『孤児だった、なんて話したくないのだろう。カインも同情を引きたいわけではない。辛いことをアルミアには話したくなかったのさ』

「私、そこまで無知な女の子じゃないわよ？ お父様達のお陰で裕福な生活はしてこれたけど、カインのような人がいることも知っているもの」

『知っていることと、実体験を得ていることは何倍も理解度が違う。私だって知識では戦場のことを知っていても、初めての戦いは困惑したものだ』

「マツキーでもそうなの？」

アルミリアが首を傾げながら聞いてきたことに、『マクギリス』は頷く。

今思いついてもマクギリスの最初の作戦はメチャクチャだった。

『一応ギャラルホルンの戦闘記録に含まれているから詳しいことは話せないが。私発案の作戦でカインに無茶をさせてな。MSで私のMSを牽引させたのだよ。しかもデブリ帯で。正直、敵と戦うよりカインに引つ張られる方が怖かった』

「それ、マツキーの自業自得だよ？」

『その通りだ。完全にMSを動かさずにカインに全てを委ねるなど、二度とやろうとは思わないよ』

「でもそれだけカインのことを信頼してるってことでしょう？」

『幼年学校からの付き合いだからな』

共犯者などとアルミリアに言えるわけもなく、幼馴染のような存在だから信用していると答える。

マクギリスがファリド家に引き取られて最初に友となったのはガエリオとカルタだが、カインともそう違わない時期に出会っている。十分幼馴染に入る範疇だった。

『しかし、カインの話題ばかりだな？ 私としては少し嫉妬してしまうぞ？』

「うふふ。安心して、私が好きなのはマツキーだけ。カインはもう一人のお兄ちゃんみたいなものよ」

『兄、か。私にはわからない感覚だな。……いや、今後はガエリオが兄になるのか』

「複雑？」

『兄というにはしつくり来ないだけだ。今後公的な場やおふぎけ以外でガエリオを兄と呼ぶことはなさそうだな』

関係性で言えばやはり義兄弟というよりは幼馴染となってしまう。たとえそれはアルミリアと結婚しても変わらないだろうと『マクギリス』は確信していた。

「私とカインの関係性と、マツキーとお兄様との関係性は別だもの。同じ言葉で括ろうとしても、きっと同じ関係なんて一つもないわ」

『おや？ 今日随分と詩的だ、レディ』

「マツキーの隣に相応しくなれるよう、教養は必要だもの。それにカインが力のことを信じてもらうなら語彙力を増やすと良いって言ったの」

『言葉に当てはめて、共通認識を探すというのは大事だな。相互理解に最も便利なもの言葉だ。未知を既知に変えるには、隣人との共通項を増やすことが一番の近道だろう』

「マツキーも難しいことを言ってるわ。でも、気持ちを伝えるには行動で示しても良いはずよ」

そんな身辺の話を、ゆったりとした時間の流れに身を任せてお茶が進む。

だが、この時間も終わってしまう。ボードウィン家に来客があるとのことでお茶会は中止。そんな話を『マクギリス』もアルミリアも聞いていなかったのも、お茶もお菓子も用意してもらったものを片さなくてはならなかった。

『マクギリス』は用意してくれて片してくれた使用人に申し訳なくなってしまう。孤児なので食材を無駄にするというのは遣る瀬無いのだ。

ボードウィン家に来たので用事があるのはボードウィン公だと思っただが、なんと来客の目的はマクギリスにあるという。アポイントもなかったのに『マクギリス』は訝しみながらも応対のために来客を出迎える。

そこにいたのは。

「マクギリス・フアリド！ 休暇中にフアリド家に帰らずボードウィン家にずっと滞在するとは何事か!? 道理で文を出しても返事がないはずだ!!?」

クジャン家の当主、イオク・クジャンだった。年下ではあるが、セブンスターズという括りであれば当主と次期当主ではイオクの方が立場は上になる。イオクはまだ士官学校を卒業していないが、去年当主を襲名した。

『マクギリス』はフェアリド家に帰る予定がなかったので、ずっとボードウィン家に滞在していただけだ。将来嫁になるアルミリアと、義父になるボードウィン公と少しでも親睦を深めようとした結果がボードウィン家滞在の理由だ。

ボードウィン公もアルミリアの外泊を許可しなかったのでフェアリド家に連れて行くことはできなかった。『マクギリス』もフェアリド家に近寄りたくなかったので、アルミリアの側にいるとなると泊まるしかない。

まさかずつとホテルか、一々家に帰る意味もない。婚約者と過ごすのにそんな無駄なことをする意味はなく、マクギリスが泊まることをボードウィン公も認めていた。

流石に寝室は別だったが。

今はマクギリスは休暇中だったのでギャラルホルンの階級は意味を為さない。そうになると一応タメ口もおかしいことではない。

一緒にいたボードウィン公とアルミリアは嫌そうな顔を隠さなかったが。

『マクギリス』もそういう微妙な力関係を一旦置いて対応することにする。

『クジャン公。あなたも士官学校が休暇中でしたか』

「ああ、そうだ。マクギリス・フェアリド。貴様に聞きたいことがある」

『何でしょうか？』

「貴様が妾の子というのは事実か？」

『マクギリス』の後ろで、ボードウィン公とアルミリアの息を呑む音が聞こえた。たとえそれが事実であつても、問い質すとはなんたる無礼か。

いくらセブンスターズを引き継いだとはいえ、他家に殴り込んでまで聞き出すことではない。マクギリスがファリド家にいたのなら、実家で問い質していたのだろう。

ボードウィン公もアルミリアも、その事実を受け入れて婚約を結んだ。だというのにセブンスターズとはいえ若輩者であるイオクに文句を言われる筋合いはなかった。

『マクギリス』は少しだけ逡巡するが、知っている者も多く、セブンスターズともなれば知っている者ばかりなのだから素直に答える。

オルフェンであることがバレたわけではないのだ。表の素性がどうこうと言われても大丈夫だろうと判断した。

『ええ、正妻の子ではありません。それが何か？』

「そうかそうか！ いや何、ギャラルホルンは血統と秩序を重んじる。妾の子がセブンスターズを継ぐなど、認められなくてな」

『……それで？』

「マクギリス・ファリド！ イオク・クジャンが貴様に決闘を申し込む！」
厄介なことになったなど。『マクギリス』は心の中で溜息をついた。

18 決闘もどき

事前に決闘をすると決めてあったのか。話はトントン拍子に進み、日時も場所も簡単に決まってしまった。『マクギリス』に決闘を受けないという選択肢はなかったので準備を粛々と進めている間にギャラルホルンではドルトコロニーの騒乱が話題になっていた。

そんな変遷期にこのようなことをやらなければならない立場であることに、『マクギリス』はそつと溜息をつく。

決闘のルールは簡単で、MSによる戦闘で決着をつけるということ。ただし相手を殺害することは禁止で、弾丸はペイント弾を使うこと。殺害を禁止したのはいくらギャラルホルンの正当な決闘とはいえ、セブンスターズを欠くわけにはいかないからだ。

場所はヴィーンゴールヴ内の地上演習場。そのため暇なセブンスターズや地球本部に配属になっているギャラルホルン所属の隊員が観戦するという。

衆目の場で、結果にイチャモンを言わせないための処置だろう。

使用するMSは公平性を保つたためお互いグレイズでも使うのかと尋ねたが、イオクはそれを突っぱねた。曰く『私は専用機を使うから、貴様も自分の機体を使え』とのこ

と。何故士官学校生が専用機を持っているのかと疑問に思ったが、口出しするのをやめた。

『マクギリス』は日時も決められてしまったため、即座に連絡。シユヴァルベを地球に降ろしてもらい、地上用にスラストターなどを調整する羽目になった。

前회가火星支部の監査だったために、調整の諸々が宇宙仕様のままだったのだ。次の監査先も決まっていなかったので機体は宇宙艦に搭載したまま。シユヴァルベが届いて次の日には決闘の日になっていた。

なので『マクギリス』は専属の整備士を休暇中なのに呼び出して整備させることになった。今もコックピットで様々な調整をしている。

『すまないな。休暇中に呼び出して』

「いいえ、いいんですよ。というか、決闘なんて聞いたらおちおち休んでいられませんって。特務三佐」

『ここに来るまでの移動日も含めて、倍の特別休暇を勝ち取ってきた。次の休みはゆっくりとしてくれ』

「ありがとうございます。絶対勝ってくださいよ」

整備士の男性軍曹と軽口を叩きながら独特のコックピットの調整をたった二人で行なっていく。これはマクギリスの個人データの塊なので、おいそれと他人に見せるわけ

にはいかなかった。しかも今調整しているのは『マクギリス』だ。余計に見せられなかった。

様々なデータを書き換えていく。元々のデータもバックアップは取っておくものの、今は新しくフィッティングをしていく。

今回の決闘は負けられない。負けるとは思っていないが、もしもを排除するために万全を期す。負けられない理由が『マクギリス』にはあった。

決闘による取り決めは簡単だ。

イオクが勝った場合、マクギリス・ファリドのセブンスターズ就任権利の破棄。

マクギリスが勝った場合、金輪際のマクギリス・ファリドとアルミリア・ボードウィンへの接触禁止。

ボードウィン公とガエリオも含もうと思ったが、あくまで本人達の決闘なのでマクギリスとその婚約者しか適応しなくていいとボードウィン公に言われてこの内容となった。

地上用のスラスタ調整と、コックピット内の感応波受信設定を書き換え終わった頃にはすっかり真つ暗になっていた。

なので『マクギリス』は半日以上付き合ってくれた軍曹に缶コーヒーの差し入れをする。

『助かった、軍曹。これで私は明日負けないだろう』

「お役に立てたんなら良かった。あ、煙草吸っていいです？」

『構わない。労働の後の一服も必要だろう』

軍曹がポケットから煙草を取り出してライターで火を点ける。『マクギリス』は一切吸わないので、煙に当たらない少し離れた場所の椅子へ腰をかけていた。

「いやしかし、大変ですなあ。クジヤン家の御曹司と決闘だなんて。のくせにペイント弾って、昔の決闘はそうじゃなかったんでしょ？」

『らしいな。私も話に聞く限りで、すっかり廃れた風習だと思っていたが』

「色々と思惑があるんでしようけど。……いつも戦闘を見てる俺からすりゃ何も心配はしてないんですけど、しくじらないでくださいよ？」

『わかっているとも。明日はマクギリス・ファリドらしい戦い方で勝利を収めてみせる』
「間違つて奴さん殺さないでくださいよ？」

『色々と因縁のある相手だが……。ルールは守るさ。これでも堪忍袋の帯はきつく締められているらしい』

冗談を口にしながら、『マクギリス』は暖かいコーヒーへ口を付ける。

ボードウイン家で飲んだお茶に比べると、随分と味気ないものだった。

決闘の時間がやってきた。

『マクギリス』は既にギャラルホルン内でも有名になっている蒼いシユヴァルベ・グレイズに乗って現れる。

一方イオクは黒を基調として黄色を節々に使ったグレイズに乗って現れる。イオクの操縦技術ははつきり言って低い。MSを用意した者もシユヴァルベはピーキーすぎて扱えないと思つてただのグレイズにしたのだという思考が明け透けだった。

今回の決闘を見に来たセブンスターズはボードウィン公とイズナリオ、それにアルミリアだけ。他のセブンスターズは宇宙にいたり、作戦完了の撤退行動をしていたり、地球にいても純粹に用事があつたりと、不参加な理由がきちんとあつた。

そもそもいくらセブンスターズ所縁の者の決闘とはいえ、急遽決まった話に駆けつけられるほど暇でもないのだ。関係者としてここに来た者はいても、ギャラルホルンのトップが急に仕事を休んで来られるはずもない。

ということでセブンスターズの観客は少なかつたが、その代わり一般将兵の観客は多かった。

クジャン家の信奉者達やマクギリスのファン。純粹にセブンスターズに憧れる者、次のトップの実力が気になる者など、理由は様々だが集まる要因は多数あるようだ。

観客達は演習場から離れた場所で、ペイント弾が飛んでこないように透明な防弾ガラ

スに囲まれた観客席から映像を繋いで観戦する運びとなっていた。

セブンスターズ用の観覧席にて。いずれ親子になるイズナリオとアルミアが話していた。

「アルミア。君には不思議な力があるという。その不思議な力とやらはどういったものなのかな？」

「ちよつと勘が良いだけです。雨が降りそうとか、この人悪い人だなとか。そのくらいです」

「いやいや興味深い。ボードウィン公の英才教育のおかげかな？」

「いえいえ。私はこれといって何かしたわけではありませんよ」

イズナリオも含めて、セブンスターズでは有名な話だ。アルミアは異様に勘が良いと。それは時に勘の範疇を超えており、是が非でもその勘の正体を知りたいと願ってしまふほど常軌を逸したものだ。

ボードウィン公が遊びで遊戯場に連れて行ったら、様々なゲームで予感を的中させて大勝ちしたというのだ。しかも彼女は一つ一つのゲームのルールを把握していたわけではなく、なんとなくに従っていたら勝ち続けたという。

その力も興味深くて、イズナリオはセブンスターズの立場を磐石とするための駒にアルミアを選んだのだ。カルタと婚約させても、地球外縁軌道統制統合艦隊の実権など

既に握っているので無駄になる。

他にセブンスターズに子女がいなかったの、当たり前前の選択肢ではあった。
あと。

アルミリアの勘がイズナリオのことを悪い人だと訴えかけていた。生理的に受け付けないというか、女として嫌いだった。

「アルミリア。どちらが勝つと思う？」

「決まっています。フェアリド公。マクギリス・フェアリドが負けるはずがありません」
断言する。

アルミリアはイオクの悪評をほとんど知らない。ボードウィン公やガエリオが特に話していないからだ。マクギリスもカインも、イオクについて語るくらいなら他に話すことが山ほどあった。

MSの操縦の出来など知らなくても、アルミリアははっきり言える。

自分の夫になるマクギリス・フェアリドは、ギャラルホルンの中で最強なのだと思っていなかった。

イズナリオはその力強い言葉に感心して頷くと、始まる直前というタイミングでイオクが鉄剣を向けて宣言をしていた。

「マクギリス・フェアリド。貴様の名声もここまでだ。この私が直々に、正義の鉄槌を食ら

わせてやる！」

『正義の鉄槌とは？ 私はギャラルホルンに不貞を働いた覚えはないが』

「白々しい！ 正統なる後継者でもない貴様がセブンスターズを名乗るのは分不相応であり、貴様がその椅子に座ろうとしているなど、セブンスターズへの侮辱でしかないだろう！」

その物言いに、『マクギリス』はブチッ、という音が自分の身体の中から聞こえた気がした。いや、気ではなく、実は左手に力が入りすぎて血が出ていた。手袋に血が滲み始める。

アルミリアも遠いながらもそのブチッという音が聞こえたために「あ」と淑女らしからぬ声が漏れていた。

『……セブンスターズといえども、ギャラルホルンの一部だろうに。軍隊に所属する者が信賞必罰を否定するだと？ 特権を知り、井の中で吠える俗物か』

「俗物だとツッ？ 妾の子の貴様が言うことかツッ？」

『そう、それだ。来年には軍人となり、アリアンロッドを指揮する立場になるはずだ。だと言うのに身分で人に優劣を付け、優秀な者を飼ひ殺しにする。アリアンロッドは多種多様な身分の人間が所属している。アリアンロッドは違うと鼻根にするつもりか？』

「セブンスターズはギャラルホルンの象徴！ 栄光の証だ！ そこに不純物が混ざるこ

とをおかしいと述べて何が悪い!?!?」

イオクの叫びから、『マクギリス』は目の前の男がギャラルホルンの負の象徴だと理解した。イズナリオもそうだが、ここまで今のギャラルホルンを体現する男もいないだろうとむしろ呆れてくる。

何故この男についていく者がいるのだろうか、そればかりは不思議で疑問は解決しなかった。

まさか前当主への恩義から忠誠を子に捧げる前時代的な人間が多数いるとは思ってもしなかったのだ。後日、歴史は繰り返されるという言葉を実感した『マクギリス』だった。

「時間です。双方私語は慎むように」

審判にそう言われて、一方的な言葉の応酬は止まる。

ここからはMSで語ると、イオクは意気込む。『マクギリス』は痛い目に遭わせると決めて開始のコールを待つ。

機械によるカウントダウンが始まる。五から下がっていく数字を見ながら、両者とも最初の行動を頭に思い浮かべていた。

0と同時に、甲高いブザー音と共に決闘が始まる。

イオクは右のマニピュレーターに持っていたサブマシンガンの引き金を引く。『マク

ギリス』のシュヴァルベに向かって放つたが、シュヴァルベが即座に開始位置から横へ移動したことでペイントを一切受けなかった。

「決闘の初手が回避だと!?」 はっ、まさしく貴様の性根を表しているな!」

『むしろ開始位置から動かないとは、戦場を知らないと見える。足を止めたら死ぬぞ?』

『マクギリス』は右に持っていたサブマシンガンを後ろ腰のラックに戻した。代わりに側面に配置していた鉄剣を二本とも引き抜き、両手に装備する。

そのまま細かいバーニア制御を行いながら戦場を駆ける。その動きに合わせてイオクも散弾を撒き散らす、地面を染めるだけでシュヴァルベは蒼いままだ。

「クッ!」 回避行動はそれなりだな!」 だが、カインの方がよっぽど恐ろしいぞ!」 アレに比べれば貴様の動きなど……っ!」

『カイン・ベリアル一尉のことを言っているのか?」 なるほど、彼を知ったつもりになっているらしい』

一切被弾しないまま、シュヴァルベは距離を詰める。もしどちらかの手に銃火器を持つていれば既にイオクは被弾していただろう。なにせまだ最初の位置から動いていない。機体を動かしながら射撃を行うということはできないようだった。

『マクギリス』はさもカインのことを知っているかのように語るイオクにムカついて

いた。どうせ知っている内容は幼い時のシミュレーターの内容と、今の表のプロフィールだけ。カインは幼年学校以降イオクに会っていないので、イオクが知る由もないのだ。

ギャラルホルンの一隊員であるカインの戦闘記録なんて全て公開しているはずがない。デブリ帯での戦闘データも共有しているのはアリアンロッドだけ。士官学校生に見せて下手に真似されると事故が増えると判断されて外には漏れていない。

実質的には何も知らないくせに、幼年期の幻影に魘されているなんてどんな茶番か。『マクギリス』は左の剣でサブマシンガンを破壊する。頭と身体で違うものを描いていれば現実の対処なんてできるわけもない。

「クオ!?？」

『自分とカインは別人だと自覚すべきだ。人間は他者になれない。カインを追っても、自分を見失うだけだ』

「部下として引き抜いたからこそ、そんなことが言える！あの恐怖を味わっていない貴様に何がわかる!?？」

『監査局を敵に回す予定でもあるのだろうか？味方を過剰に恐れるなんて、理解できない感情だ』

今度は右の剣で左腕の関節部を狙い、切断する。結合部を叩き折ったという言い方が

正しいか。左腕を失ってバランスを失ったことで、グレイズが数歩後退する。

サブマシンガンは破壊され、左手に持っていた鉄剣は握られたまま地面に落ちてい
る。腰に残っているのはバトルアックスだが、それを即座に取り出すという頭も回らな
いらしい。

このまま達磨にでもしてやろうかと、『マクギリス』は苛立ちをぶつけるように鉄剣を
向けるが、それはイオクの言葉で止まってしまふ。

「アレを平然と部下に置いてある貴様の神経を疑うぞ!!? 自分のことをいなかのよ
うに扱われて、その高い実力を見せつけていく! それも目に見える功績を、孤児が!

アレはおかしい! まともな教育を受けていないはずなのに、セブンスターズに追い
絶る成績を残し続けるだど!!? そんなバケモノ、産まれからしてありえない変異種と
しか思えないだろう!!?」

イオクの言い分に一度動きが止まるが、すぐに両腕を動かして頭と右腕を潰す。

これでもうグレイズは武器を持つことができず、足だけで万全なシユヴァルベに勝て
るわけがない。

そう判断したのか、審判が終わりのホイッスルを鳴らす。感慨もなく『マクギリス』は
鉄剣を降ろす。

差別意識に囚われた目の前の男に、何かの感情を向けるのがバカらしいと遅まきなが

ら気付いた。

『……努力を、鍛錬を。何とも思わないのか。産まれだけで全ての事柄が決まるのか。だからドルトコロニーで反乱が起きたのだろう。起こるべくして起こった事件だったと、今の発言を聞いて嘸み締めたよ』

『マクギリス』はそれだけ言つて演習場を去る。

まるでここに勝者はいないようだった。

『ボードウィン公、お世話になりました』

「いつでも来なさい。お世話になったなんて言わなくていい」

『マクギリス』は休暇も終わりを迎えようとしていたのでボードウィン家から出立しようとしていた。見送りにボードウィン公とアルミリアが来ていた。

『アルミリアも、また次の休暇に』

「うん、またねマツキー。あ、そこにかがんで？」

『? ああ』

アルミリアのお願いを聞き入れてかがむ『マクギリス』。アルミリアは彼に近付くと耳元でボードウィン公に聞かれないように囁く。

「今度はマツキーを連れて来てね。カイン」

その言葉に、悪戯がバレたかのように『マクギリス』は破顔して、大きく頷く。

『約束しよう、レディ。次には必ず』

「ええ、約束ね！」

これにてボードウィン家での偽りの生活はおしまい。

これからはギャラルホルンで同じように影武者として指示を出すことになる。

カインにはアリアンロッドの監査の分余計に休暇があるので、カインが復帰しなくても問題はない。

マクギリスはモンタークとして、カインは『マクギリス』としてもう暫く動くことになる。

19 思想・主義の違い

鉄華団はブルワーズとの戦いを終えた後は順調に地球への航路を進み、第一中継地点とも呼べるドルトコロニーに到着した。アフリカンユニオンの公営企業であるドルトが所有するスペースコロニー群のことで、幾つものスペースコロニーがそこにはあった。

そのコロニーの一つ、ドルト2にテイワズから依頼された荷物を届ける仕事があった。鉄華団はその荷物の中身を知らず、見ることなく届けるという依頼だった。タービンスの名瀬曰くよくあることで、運送をする際は中の物など確認しない、詮索しないことが生き残るコツだという。

運送業で今の地位を築いた名瀬の言葉だったので、鉄華団は素直に聞くことにする。そのため誰も荷物のコンテナに触れることもなかった。

クーデリアは鉄華団が仕事をしている間に、ドルト3で買い物があったいとオルガに進言していた。木星である歳屋で買い物をしたとはいえ、地球へ降りる前の最後の補給ポイントでもある。アトラとフミタンも誘って買い物に行くことになった。

もしもがあってもいけないということで三日月とビスケットを護衛につけることに

なる。ビスケットは兄が働いているので顔を出したいということで志願していた。

ここで護衛の人選に驚くクーデリアと、向かう場所について表情を硬くするフミタンがいた。

クーデリアは昨日三日月にオールフェーンズ^キ！されたことで三日月のことを意識しており、フミタンはノブリスの命令でクーデリアをドルト2に連れて行くように言われていた。そのためちよつとした動揺はあつたものの、別行動は始まる。

オルガ達はドルト2へ積み荷の受け渡しに。三日月達は買い物へドルト3に。

彼らが近付くドルトコロニーが浮かぶ宙域にガエリオの乗ったスレイプニルが演習という名目で近付いていく。

そして銀色の髪をしたこの男も。

「さあ、見せてくれ。『革命の乙女』よ。アリアンロッドの鎮圧作戦を見て、君は何を感じる？ どうやって世界へ嘆きを届ける？」

そのつぶやきを拾い上げたかのように、そこかしこで事態は動いていく。

オルガ達は荷物の受け渡しにきたただけなのに相手の歓迎モードと、鉄華団やクーデリアのことを知っているドルトコロニーの貧困労働組合員達のが妙に感じ、詳しく話を聞いてみる。

するとどうだ。支援者なる者がクーデリアと鉄華団のことを伝えたという。名前も

名乗らず、ただクーデリアの代理とだけ名乗って、火星以外の場所でも地球への反抗の狼煙をあげようとクーデリアが呼びかけているという話だった。

そう言われてオルガ達が持ってきた積荷を確認すると、戦闘用のMWに加えて武器弾薬が山ほど入っているではないか。

オルガも中身こそ確認していなかったが、リストには工業用の物資としか書いていなかった。それが蓋を開けてみれば随分と物騒な物が出てきたとなればオルガ達も警戒する。

そもそもの話。

クーデリアは武力を行使して経済圏と話し合うつもりは毛頭ない。クーデリア自身が戦えない人間だということもあるが、平和を勝ち取るために武力を使っては火星は本当の意味で幸せになれないという信念を持っていた。

鉄華団を雇ったのはあくまで自衛のため。圏外圏とは無法地帯と同義で海賊が多数のさばっているために、最低限の自衛手段が必要だった。クーデリアとしてもギャラルホルンが襲ってくることは想定外で、あくまで安全な航路のために武力を借りただけ。

武力で地球圏に訴えかけようなんて微塵も思っていないことをオルガは聞いていた

ために、労働組合員に訴えかける。

「なあ。あんた達は何をしようとしてるんだ？ クーデリアは武力による反抗なんてしようとしてねえぞ？ あんた達は武器を取って、誰と戦うつもりなんだ？」

「そりやあもちろん——」

「ちよ、やべえ！ ギャラルホルンだ！」

「何？？」

組合員の焦る声と共に、ギャラルホルンの制服に身を包んだ者達が入ってくる。その者達はMWを見て携帯していた小銃を取り出した。

「違法な取引があるという通報は本当だったようだな！ 全員その場を動くな！ これより検閲を始める！」

「お、おいオルガ。どうする？」

「ひとまず見付からないように身を隠すぞ。向こうだって火星の騒ぎのことは知ってるだろ」

ユージンの問い掛けに、この場に來た鉄華団のメンバーはコンテナの奥へ隠れることにする。積荷を運んできてギャラルホルンと鉢合わせしました、となればクーデリアの依頼を完遂できないからだ。

荷を運び入れたことでテイワズからの依頼自体は終わっている。きな臭くなってきた

だが、すべきことはここを離れることだ。

幸いギャラルホルンの隊員は人数が少ない。どうにか目を掻い潜って船に戻ろうとする。

しかし。

「うおおおおお！」

「なっ、嘘だろ!?」

ここにある物が見られては不味いものだったからか、組合員側が発砲をしてしまう。それを皮切りに銃撃戦が発生。MWに乗り込んで生身の人間を追い出そうとする者もいた。

「それは……それは違うだろ！」

力を手に入れた途端、暴虐に走ってしまう者達を見て、オルガはコンテナの奥から叫ぶ。鉄華団の面々は姿を隠しながらも、この惨状を受け入れ難かった。

彼らもCGS時代に壱番隊の大人を殺して会社を奪っている。だが、殺した者はクズ筆頭で、それ以外には脅したものの退職金を払いもした。それ以外の戦闘はあくまで降り掛かる火の粉を払うようなもので、自分達から積極的に仕掛けた戦闘はテイワズの傘下になるために覚悟を示すためにタービンズと戦った時の一度きりだ。

労働組合の者達が立ち上がるとしても、武器は必要ないはずだ。しかもその上で検閲

に來たギャラルホルンへ反抗するように引き金を引く必要も。

特にMWに乗って生身のギャラルホルンの人間を追い払おうとするなど、明確な殺意がありすぎる。轆くにしろ、引き金を引くにしろ。過剰すぎる攻撃だ。

今反抗している彼らの姿が。

火星で襲つて來た、MSに乗ってCGSのMWを蹴飛ばした姿とダブって見えた。

「くっ、負傷者が出た！ 撤退しろ！」

その言葉でギャラルホルンは撤退。検閲に來たら負傷者が出た、もしくは死者が出たなど許せないのだろう。

それに忠実に仕事をこなそうとしたら撃たれたのだ。この状況はどう考えてもギャラルホルンに理がある。

積荷が届いてすぐにギャラルホルンがやってくるのは都合が良すぎる気がするが、それでもこの状況が非常にマズイのはわかる。

「よし、勝ったぞ！ 奴ら逃げていきやがった！」

「ざまあみやがれ！」

圧倒的な数を持つてして勝った組合員達は大喜びしているが、勝って当たり前の小競り合いだった。

戦力比から武器の違い、待ち伏せに近い状況。MWまで起動したのだ。勝って当然な

のだが、今まで苦汁を嘗めてきたのか大喜びする者ばかり。

こんな小さな勝利による美酒がよほど美味かつたらしい。そしてもう酔ってしまった。非常に危険な状態だ。

「オルガ……。ヤバくねえか？」

「ヤバいに決まってるんだろ。名瀬の兄貴とも揉め事を起こすなって言われてる。ユーージン、イサリビに戻るぞ」

「団長。あれ、ほっといいのかよ？ ギャラルホルンが何もしないでこの状況を見逃すとは思えねえぜ？」

撤退行動を開始しようとして、情が深いシノが歓喜に溢れている連中を親指で指して尋ねる。

このままでは破滅すると、ブルワーズとの戦闘で仲間を失ったシノだからこそ気にかけてしまったのだろう。

だが、オルガは見ず知らずの相手にまで同情はしない。ヒューマンデブリとして過酷に使役されていたとなれば手を差し伸べるが、今回の事案は違う。

いい大人が自分の意思で武器を持ったのだ。しかもクーデリアを隠れ蓑にして。情報も精査しないままに。彼らの事情は知らないが、鉄華団として関わるのは違々とオルガは決断する。

「オレ達には関わりのない出来事だ。クーデリアの名前を勝手に使われるのは問題だが……主義主張が違いすぎる。こいつらの妄言としか思われねえだろ。本人がここに来たわけでも、正式な声明があるわけでもない。行くぞ」

「……ま、それもそうか。お嬢さんがいいように使われるのは俺も嫌けどよ。関わったら余計にヤバいから引くんだな？」

「そうだ。三日月達とも連絡を取って引き上げさせろ。すぐにこのコロニーから離脱する。名瀬の兄貴にも報告だ。補給はしなくても大丈夫な量を歳屋で確保してきたはずだ」

浮かれている連中を尻目にオルガ達は移動を開始する。ここにきたスペースランチがあるのでそれで帰ろうとした。

だが、それを止める者がいた。労働組合の、この反発行動の代表のようだ。

「鉄華団の皆さんですネ？ ナボナ・ミンゴと申します。この度はこれらの提供、ありがとうございます。ご迷惑です。我々もクーデリアさんに感化された者同士、詳しいお話といきませんか？」

「悪いな、ナボナさんとやら。オレ達はギャラルホルンと事を構えるつもりはねえ。他を当たってくれ。荷物運びっていう仕事は終わった。受領のサインももらったし、振り込みをここで待つつもりもねえんだ」

「え？ あ、あなた方はクーデリアさんの護衛をしているんですよね？ ギャラルホルンと戦うのではないのですか？」

「それとギャラルホルンと戦うことと、何が繋がるんだよ？」

実際、この後はギャラルホルンと戦うこともあるだろうと考えていた。クーデリアは有名なので地球へ降りるために無茶をしなければならぬだろう。これからのことはタービーズと相談もしているので地球へ降りる時に地球外縁軌道統制統合艦隊と一当たりする可能性はあったが、それ以外に手を出すつもりはない。

元々向こうから手を出してくるのであって、鉄華団としては戦うつもりはなかった。

「経済圏の人間に会いに行つて交渉をするのに、何でギャラルホルンと戦うんだよ？」

ギャラルホルンは世界の治安維持組織だ。経済圏へ戦争を起こさないように監視はしているものの、組織系統は別のものだ。

このコロニーを経営しているのはアフリカンユニオンという四大勢力に数えられる経済圏の一つ。

労働組合が訴えかける相手はアフリカンユニオンであつて、ギャラルホルンではない。ギャラルホルンはアフリカンユニオンからの依頼でこのコロニーの暴動鎮圧などを請け負っているのだろうが、労働組合には直接的な関与がない。

先ほどの行為は、本当にただの暴動でしかなかった。

鉄華団としても、向こうが何かと理由をつけて戦いを仕掛けてくれば迎え撃つが、嬉々として殴り込みに行くような者はいない。ギヤラルホルンの巨大さはわかってい
るからだ。

「行くぞ、お前ら」

「あの、団長。三日月さん達には通信手段がなくて、定時連絡以外で連絡が取り合えませ
ん」

「そうだった……。とにかく、イサリビに戻ってからだ。ヤマギ、戻ったら整備班を動か
してくれ。何かあるかわからない」

「はい」

オルガ達は移動を開始する。ランチに乗って積荷の依頼主がGNトレーディングと
いう会社だったこと、タービンのハンマーヘッドへの連絡。出航準備。

そういうことをしている間に、ドルト3で労働環境改善のためのデモ行進が始まった
と一報が入る。それと時を同じく、三日月から定時連絡が入ったので今すぐ脱出するよ
うに命令を出した。

兄に会いに行つたビスケットだけ戻ってきていなかったもので、戻ってきたらすぐに脱
出すると三日月が言い。

オルガは三日月達を拾うためにスペースランチの用意をする。イサリビで着艦する

のは危険だと考え、鉄華団のマークが付いていないランチを差し向けた。その周りに、多数の戦艦が向かってきていると知らないまま。

「鉄華団……。お前達が武器なんて持ってこなければ……！」

「え？ 武器……？ サヴァラン兄さん、どういうこと？」

ドルト3の公園のベンチに座って話していたビスケットと兄のサヴァラン。

家族二人つきりで会って話していて、途中までは普通の会話だったのだが、ビスケットが今は鉄華団で働いていると話した途端、サヴァランが顔を蒼くさせたのだ。

話がわからずビスケットは聞き返すと、オルガ達が知ったことをビスケットも把握した。

積荷の中身。労働組合がやろうとしていること。兄がその労働組合とドルトカンパニーの折衝役をこなしていること。サヴァランとしては武力による行動なんてとって欲しくないこと。

「労働環境も、生活環境も酷いことはわかってる……。だが、武器を持つことだけは違うんだ。そんな暴力的な訴えをドルトカンパニーが、アフリカユニオンが聞き入れるわけがない！ コロニー公社なんてもんは、利権のことしか頭にないんだから！」

「交渉をしても無駄だから、武装蜂起……！」

「抗議デモとは言っているが、過激派も多い。確実にそうなる。それに武器を運び入れられる場所なんて限られている。今頃はギャラルホルンに嗅ぎつけられているだろう。お前も、利用されたんだよ……！」

これから起こることを理解したビスケットは、立ち上がる。

彼は彼で鉄華団としてやるべきことがあるのだ。ここにはいるは巻き込まれる。そして組合が後ろ盾として使いたい人間が、ここにはいる。

「兄さん。俺達を火星に送ってくれて、ありがとうごさいます。クッキーもクラッカーも、元気に過ごしています。生活はまだ、苦しいけど」

「……二人と、桜ばあちゃんによく伝えてくれ。生きて火星に帰れよ」

「兄さんも巻き込まれないように気を付けて」

ビスケットは走り出す。幸い三日月達との集合場所はさほど離れておらず、向こうもオルガから連絡を受けて走り出していた。

クーデリアに最低限の変装をさせて、五人は港へ向かう。できるだけ路地裏を通って最短距離でオルガ達と合流しようとする。

その行く先を止める不審な人物がいた。

腰に近いほど伸ばした銀の髪に、目を隠す金の仮面。成人男性にしては高い背丈、がっしりとした体格。着ている服もどこかの貴族を思わせる気品のある物だった。

仮面のせいで怪しき全開だった。

「二度お目に掛かりたいと思っていましたよ。クーデリア・藍那・バーンスタイン。ここがどうなるか、ご存知の様子。それなら話は早い。私からあなたへ、一つ贈り物だ。鉄華団に武器を運ばせた者の依頼書。これをテイワズからの依頼書と照らし合わせるといい。ノブリス・ゴールドンが浮かび上がるはずだ」

「え……？ あなたは一体……？」

「あ、良かった。クーデリアさん、この変な人と知り合いなのかと思っちゃった」

仮面の人物を知らないと言ったクーデリアにアトラは一安心する。

そのアトラの隣で、三日月が首を傾げながら問い掛ける。

「チヨコの人、何やってんの？」

「「……………え？」」

三日月の言うチヨコの人。それは他の四人全員が知っていた。

なにせ火星で会った時に、全員その場にいたからだ。クーデリアとフミタンは隠れていたが、フミタンだけは声に出さなかったものの、三日月と仮面の人物へ視線を行き来させている。

仮面の人物は面白いと言いたげに、口角を上げた。

20 作戦開始と告げ口

「ふむ。バレてしまったか。なら仕方がない」

指摘された仮面の男——マクギリスは辺りを警戒して誰の目線もないことを確認して仮面に手をかける。

金の仮面と銀髪のカツラを外して現れた姿は、確かに火星のトウモロコシ畑で見たギヤラルホルンの人間だった。

ギヤラルホルンの人間が現れたことで、特にアトラが怯えて三日月の袖を掴んでいた。ギヤラルホルンには火星を出る時に襲われたことから、良い印象がないのだ。

「わわ……！ どうしよう、三日月っ。逃げるべき？」

「別にいいんじゃない？ チョコの人、俺達をどうしようって思ってたなさそうだし」
「ああ、今の私は休暇中だね。ギヤラルホルンとしては行動していい。君達を捕まえる理由もないのだから、危害は加えないとも」

「何をしに来たのですか？ 私に用があつたようですが……」

「身近で君を見たかった。アリアンロッドの暴虐を見て、何を思うかと気になったのだよ」

マクギリスは誰かに見られたらマズイと、仮面とカツラを付け直す。センスが悪いと誰もが思ったが、口にはしなかった。

マクギリスは装着が終わると、懐から出した小型の物体を三日月へ放る。宙に浮いたそれは放物線を描きながら三日月の手に収まり、それを見た三日月はそのまま疑問を投げかける。

「何これ？」

「このドルトにおける情報端末だ。今も様々な放送局がデモ活動の様子を生中継している。見てみるといい。じきに趨勢は変化する」

確かにドルトの様子がライブ中継されているようだった。それを全員で覗き込んでみると、労働組合の者達が労働環境、賃金についての改善を求める抗議をマイクを通して行なっていた。

MWの上にも何人かが乗っていて、オルガに振られたナボナの姿もそこにあった。

「すみません。あなたはなぜアリアンロッドの暴虐があると仰つたのですか？ それが真実とすれば、あのデモは……」

「簡単な話、溜まった不平不満のガス抜きだ。君の存在に惹かれて、地球圏では特にあのような状況がどこでも起き始めている。だがギャラルホルンは秩序を司る。このような暴動を抑える立場だ。では、武器を持った暴徒はどうなると思う？ 君に続けと交渉

のパイプ作りではなく、危険な物を持って立ち上がる愚者はどうなると思う？」
「武器を持つていることが違法だとしても理由を付けて、上回る暴力で押さえ付ける……？」

話の流れと、ギャラルホルンの今までの噂から、そしてサヴァランからの情報でビスケットはそう推論を立てる。それが正解だったようで、マクギリスは頷いた。

「力のない者は力のある者に搾取される。その世界を私は否定しない。だが、力にも種類がある。暴力なんて知らないお嬢様の奮闘で経済圏の大物が動いたように。暴力以外にも手段はあるのだよ。個人にあつた力を発揮し、その力ある者を認める。そして力のない者は力のある者の庇護下に入る。いつかは力を手にするために。そういった循環こそが理想の世界だが……。あの労働組合の者達はダメだ。ギャラルホルンの力を過小評価し、訴える先を間違えた愚者。それに君達のような者が巻き込まれてはならない」

「難しいことはわかんないけど、アンタが俺達を助けてくれるってこと？」

「このコロニーから出るまでの、ささやかな支援だがね。宙域から出るまでは、流石に無理だ。どこかに隠れてアリアンロッドをやり過ぎし、奴らが去った後に地球へ向かうといい。……ああ、始まるぞ」

マクギリスの言葉の通り、画面の中では爆発が起きたのが見えた。ドルトカンパニー

の本社の入り口が爆発したようだ。このコロニーの中のことなので、その振動は三日月達にも届いていた。

その爆発をマクギリスが予見できたのは労働組合が用意したMWがギャラルホルンのMWの迎撃範囲に全機入ったから。アリアンロッドのやり方はギャラルホルンの最大派閥故に熟知しており、今回の作戦の概要も把握していたからできたことだ。

爆発を引き起こしたのは、常識的に考えて労働組合側だ。そして暴力行為に打って出たのであれば、ギャラルホルンは更なる被害を増やさないために迎撃を開始する。

放送局のカメラはたちまちガスによって視界を塞がれた後、多数の銃撃音と爆発音が聞こえてきた。その音の悲惨さと、生の音に女性陣は顔が蒼褪めていた。

「な、なぜこのようなことを……？」

「効率が良いからだ。一つの行動で地球圏の他の場所の動きも抑制できる。それにこれはエリオン公の善意でもある。たった一箇所の犠牲と、地球圏全ての労働者達の犠牲。どちらが全てにおいて利益が多いか。ギャラルホルンの被害、経済圏への影響。鎮圧にかかる防衛費、労働力の低下。そして反発の意志を削ぐ。このドルトでギャラルホルンの力を見せるだけで、今言ったことのほとんどを抑えられる。

ドルトが選ばれた理由は、地球ではない地球圏でありながら圏外圏への入り口でもあるから。どちらにも話を伝播させるには好立地だったわけだ。それにクーデリア嬢が

立ち寄る可能性も高かったからな」

ラストルはクーデリアを排除できるなら排除しても良いくらいの軽い意気込みではあったが、一応作戦の中にそれを組み込んでいた。死が与えるものもある。それは良いことも悪いこともどちらもあり、どっちでも良かった。

だからクーデリアのことはついで程度だ。

この一件を持って成長しても良い。死んでも良い。クーデリアへの評価は今の所そんなものだった。

マクギリスがこうもラストルについて詳しい理由は、アリアンロッドに潜らせた派閥の者がいるから。その者がマクギリスへ作戦の本質などを流していた。

そのスパイの存在をラストルもカインも把握している。ラストルはむしろその人物を利用してマクギリスがどう動くかを測っていた。クーデリアがついでな理由は、もつと警戒すべきマクギリスの動きを優先したからだ。

「さて。デモの本隊が鎮圧されたことで安全弁が外れた。ここからはコロニーのどこでも暴動が起きるだろう。この近くに信頼できる場所はあるか？」

「そ、それでしたらドルト6に。俺達を匿ってくれるはずです」

「テイワズの影響力が強いコロニーだな。なるほど、あそこの後ろ盾を得たのか。わかった。そこへ行かせよう。付いて来たまえ」

マクギリスを先頭に、三日月達は移動をする。着いた場所は港ではなく、外にも通じている商業区の会社のようなだった。

そこから直接宇宙へ行けるようで、ハンガーに向かうとスペースランチが用意されていた。そのスペースランチに身体を預けていた人物に誰もが見覚えがあり、その特徴的なちよび髭はマクギリスが近付くと陽気に手を挙げた。

「お、モンタークの旦那！ 待ってましたぜ！ おめえらも久しぶりだな」

「トドさん!?? 生きてたんですか!??」

「おめえらがボコボコにしてカプセルを放流したせいで死ぬに死ねなかつたんだよ！ 相変わらずポツチャリとしてんなビスケット君はヨオ！」

トド。クーデリアを火星でオルクスに売り飛ばそうとした元CGSの壱番組だ。彼はマクギリスに引き取られて、今ではモンターク商会で様々なことをさせられている。

「トド。彼らをドルト6へ。私の名前を出して良い」

「へい。旦那は？」

「下手に動くとアリアンロッドに把握されかねん。私はここに残るさ」

「了解です。さあおめえら、乗った乗った！」

「三日月……。大丈夫なの？」

「良いんじゃない？ 何かあつたら撃つてランチを奪えば良い」

「その物騒な発想やめやがれ!!?」今の俺はモンタークの旦那の元で真っ当に生きてんだよ!」

モンタークの指示に従おうとしたら、三日月とアトラがトドは信用できないと小声で相談していたが、耳の良いトドはそれが聞こえていた。

今は他に取れる手段がないということでランチの中に入り込む。全てのドルトコロニーで港が封鎖された上に、労働者達がコロニー公社のMSや兵器を奪って暴走し、この宙域に来ていたアリアンロッドの艦隊がその制圧に入っていると言う。

その放送を見た上で、トドは無事にドルト6に行けると豪語するのでスペースランチに入るしかなかった。

全員が搭乗した後、乗り込まなかったマクギリスが通信を繋いできた。

「クーデリア嬢。最後のお節介をば。信用することと疑わないことは別だ。なぜあかも都合よく君を狙うブルワーズという海賊がやってきたか、考えてみると良い」

「私をよく思わない者がいることは知っています。テイワズも一枚岩ではないでしょうし、マクマード氏も私を試しているでしょう」

「ふむ。やはり頭の回転は悪くないようだ。だが、それでは足りない。——フミタン・アドモス。これ以上ノブリス・ゴルドンへの報告はしなくて良い。彼は体調を崩されて会社経営も困難だ。もう、君を縛るものはない」

マクギリスの言葉に、全員がフミタンの方を見た。フミタンも一瞬驚いたものの、すぐにいつもの鉄面皮を作って頷く。

もうバレてしまったなら、どうでも良いというように。

「ふ、フミタン？」

「申し訳ありません。あの男の言う通りです。私は今までアリアドネを利用してノブリスと連絡を取っていました。あの男は、お嬢様を殺すことで利益を得ようとしていた。私は言われるがままに従っていたのです」

「フミタンさんどうして?!? フミタンさんはクーデリアさんのメイドさんでしょ?!?」

「私が、バーンスタイン家に拾われる前にあの男に拾われたからですよ」

動揺するクーデリアと激昂するアトラにも、淡々と返すフミタン。

三日月は敵認定していつでも彼女を捕らえられるように身を構える。

「拾われた恩義で、あの男に従っていました。……チヨコの方。あの男が倒れたという確かな証拠は？」

「君の能力ならあの会社がどうなったか調べられるだろう。ギャラルホルンへ違法に献金をしていたために我々監査局が穏便に潰したとも。そろそろ外も激しくなる。トド、出発してくれ」

「アイアイサー」

マクギリスは爆弾を起爆だけさせて通信を切った。

ランチは宇宙へ旅立つが、宇宙では大多数の戦艦が集まっていて労働者達は蜂起したものの、まともにMSなどを動かさないままアアンロッドのMS部隊に制圧されていく。

クーデリアの目には、弱者を罵る強者の凶にしか見えなかった。火星で貧しい者を弾圧する姿と、何も変わらなかつた。

トドは戦場から避けるように運転していると、戦場の端の方で見覚えのある赤い戦艦が戦闘に巻き込まれているのを見付ける。

「おいおい！ ウイル・オー・ザ・ウイスプが襲われてるじゃねえか！」

「え？？」

イサリビが二本角に特徴的な上に伸びた頭部をしている白いMSと、紫色のシユヴァルベに襲われていた。イサリビもシノが乗ったピンク色のグレイズと明弘が乗った、ブルワーズから鹵獲・改修したガンダム・グシオン・リベイクで応戦していた。

他のアリアンロッドはイサリビには手を出していないようだ。おそらく戦艦の相手は任務外だからだろう。

白いMS——ガンダム・キマリスに乗ったガエリオと元々ガエリオの乗機だった紫色

のシユヴァルベに乗ったアイン・ダルトンはイサリビがドルト6に向かうのを見ていて、この好機を逃せないと出撃していた。それほどまでにイサリビという艦に二人は敵意を滲ませていた。

ちなみにシユヴァルベのコックピットは通常のものに換装されている。アインは通常のものにシユヴァルベを操縦するのが手一杯で、脳波を読み取るコックピットだと余計に動きが悪くなっていた。

「トド。元CGSならイサリビに連絡付けられるでしょ。バルバトスこっちに送つてもらうて」

「マジか!? 俺は巻き込まれるのはごめんだぞ！」

「俺が引き離す。その間に皆をイサリビに乗せてくれれば良い。そのあとは好きにして」

「くそそう、好き勝手言いやがって……」

悪態をつきながらも、トドは三日月に言われたように動き出す。三日月もノーマルスーツに着替えるためにランチの中を移動しようとするが、その前に懐から拳銃を出してビスケットに渡していた。

「ビスケット。あの人が怪しかったらこれで撃つて」

「三日月！」

「良いのです、お嬢様。私を拘束してください。それで彼が安心して戦えるのなら」

「いいえ、フミタン。あなたにはイサリビに着いたらやつてもらいたいことがあります。マクマード氏に繋いで、この戦闘を止めます」

「……止められるの？」

「ラストル・エリオンが、先程の方の言った通りの人物であるのなら。確実に」

クーデリアの覚悟を決めた貌を見て。

三日月も飛び出す。クーデリアの言う準備までの時間稼ぎのために。

21 正義と正当性

三日月は射出されたバルバトスに乗り込み、明弘達の援護に入り込む。ガンダム・キマリスに乗ったガエリオも止めようと思ったが、明弘の乗るガンダム・グシオンリベイクに邪魔をされて防ぐことができなかった。

明弘とシノもクーデリア達を乗せたランチがイサリビに入るののでできるだけ二機のMSを引き離せと言われていたのでバルバトスという惹きつけ役もいたことで成功。クーデリア達を降ろしたランチは即座に戦闘域を離脱していた。

「明弘、シノ。お待たせ」

「待つちやいねえよ。こいつの試運転がしつかりできたところだ」

「俺の流星号の初陣の時間、もっとくれても良かったんだぜ？」

三日月の言葉に軽く返す明弘とシノ。

紫色のシュヴァルベの相手はシノに任せて、三日月と明弘がガンダム・キマリスに突っ込む。

グシオンの射撃を避けつつ、バルバトスの太刀による袈裟斬りをキマリスが持つていたランスで受け止めた。どちらも強固に作られているため壊れることはなかったが、ガ

ンダム・フレーム同士の脅力による罅迫り合いはどちらのコックピットも揺らした。

「くっ！ まさかお前達がガンダム・フレームを二機も運用しているとは……！」

「その声、ガリガリ？ そっちの紫のに乗ってるんじゃないんだ」

「俺はっ！ ガエリオ・ボードウィンだ！」

接触回線で相手の正体がわかった三日月は、むしろシュヴァルベに乗っている人物がわからなかった。マクギリスには先程会い、紅くないからカインではないと察して。

その二人じゃなければ誰でもいいかと無視した。かなりシノの乗るグレイズに執心しているようだが、三日月には関係ないことだ。

ガエリオは二対一ながら、ギャラルホルンできちんと整備されたガンダム・フレームであることと、カイン同様の特別性のコックピットのおかげでギリギリ渡り合っていた。避けようと考えた時にはコックピットで受けた脳波と機体のアポジモーターが反応してバックアップに徹している明弘の射撃を避けていたのだ。

「やりづらいな……」

三日月も攻め込もうと思っていたのだが、戦闘範囲がズレ込んでアリアンロッドの機体も援護射撃をしてきたのだ。

アリアンロッドは精鋭というだけあって、射撃や回避行動の質が高かった。数の優越状況がひっくり返ったこともあって、三機全員が多対一を強いられていた。

全員阿頼耶識のコックピットだったため致命的な一撃はもらっていないが、それだつていつまで続くか。

三日月が一番機体に慣れ、MS戦闘にも秀でていたのでアリアンロッドのグレイズを潰しつつガエリオと渡り合っていたが、不意に一発のバズーカが胸部装甲に直撃した。

テイワズの改造によって装甲が増していたので大きな被害はなかったが、コックピットは大きく揺れた。この戦闘で初めてのクリーンヒットだ。

ラフタに負けて、それからシミュレーターでかなり訓練を積んできた。バルバトスの性能も上げてもらい、ブルワーズとの戦いでは全く損傷しなかった。

だというのに、見事に一撃を喰らったのだ。三日月はバズーカを放った一機の、通常のカラーリングのグレイズを睨みつける。

「なるっ………！」

「ボードウィン特務三佐。我々の作戦域に侵入しています。即座にその三機を追い出すよう、命令を受けました。我々が援護します」

「ジュリエッタ准尉か！　こりゃあ後でエリオン公に大目玉だな………！」

ジュリエッタ含むラスタル選抜部隊、参戦。

クーデリアがイサリビに着いてすぐ、フミタンにアリアドネを繋いで木星のマクマー

ドに連絡を取るようお願いをした。その後はこの一带にクーデリアの言葉を伝えられるようにこの辺りの通信状況のジャック。

クーデリアは変装していたので、マクマードと話すために着替えた後、マクマードと映像付きで通話をしていた。

「クーデリアの嬢ちゃんじゃねえか。何か用か？」

「マクマードさん。テイワズのトップであるあなたにお願いがあります。アフリカンユニオンへ、労働者の声を聞くように圧力をかけていただけませんか？」

「圧力とは穏便じゃねえ。それにオレは木星圏では名が知れていても、地球の四大経済圏の一つに顔が効くとも？」

「ヘリウムガス。それが木星圏が独立できていて、あなたが恐れられている理由です」
「ほう……」

クーデリアが断言したことで、マクマードは髭を摩りながらニヤリと笑う。
ヘリウムガス。様々な推進剤に使われている、木星で採掘できる天然ガスだ。

MSの推進剤はもちろん、戦艦や輸送艦、更にはコロニーを回転させているのもこのヘリウムガスによるものだ。

木星以外でも生成することができるようになったが、天然物には効率が到底及ばない。輸送費を考えても、生成する時間とお金を考えれば木星から取り寄せる方が遥か早

く、安く済む代物だ。

これの輸送もあって、タービンスは発展した。安全な独自航路を切り開いたとなれば、マクマードも名瀬に一目置いてくれるわけだ。

テイワズには他にも以前から輸送部門はあったが、タービンスほどの確実性はなかった。タービンスの武力と、宇宙航行技術、それに彼らの経験に任せた勘も合わさってタービンスは一躍テイワズの輸送部門トップに躍り出た。

アフリカンユニオンを含む経済圏は、コロニーの運営のために木星から数多のヘリウムガスを仕入れている。限られた領土以外の土地を求めるなら、火星のようなテラフォーミングをした惑星か、コロニーしかないのだ。

そして今や、各経済圏はコロニーを手放せない。それだけコロニーの生み出す利益は莫大になっていた。

だからコロニーを動かすために必要なヘリウムガスを取り仕切っている木星のドンの言葉に、経済圏——特にコロニー事業に出資しているような者は逆らえない。

それをクーデリアはお願いしているのだ。

「まあ、そうだな。オレの言葉があればアフリカンユニオンは止まるかもしれない。だが、嬢ちゃんにそこまでする価値があるか？」

「—」

「火星のハーフメタル事業。これの正式な参入権では不足していますか？ ノブリス・

ゴルドンが脱落した今、圏外圏であなたを邪魔できる者はいません」

ハーフメタルはエイハブ・ウエーブによる電波障害を防ぐという特性があり、エイハブ・ウエーブの影響下における電子機器の保護には必須の金属だ。

通常の電子機器はもちろん、MSにも使われるためにかなり優良な資源である。

これの発掘場への参入権は、木星の人間であるマクマードでは本来得られないものだ。

今回の見返りに、となればクーデリアが最善を尽くすつもりだった。

「まだ正式に決まっていない事柄で、オレを動かそうと？」

「それだけの見返りがある取引だと考えています」

クーデリアが目を逸らさずに断言する。

齢十六の少女が、圏外圏で最も恐れる男に堂々と弁舌を交わしているのだ。

木星に来た時よりも成長したと、マクマードは感慨深くなる。

「ドルトへ武器を送る依頼を取り付けたのはオレだぞ？」

「ノブリスへ脅しをかけてハーフメタル事業に割り込むため、そして私を見極めるため
でしよう？」

「そこまでわかってるのか。ノブリスが倒れたのはどこから情報を知ったとしても
……。及第点だ。アフリカユニオンに話を通してやろう。生き残って、地球でコトを

成し遂げろ」

「はい、必ず」

マクマードは最後に笑顔を見せて、通信を切る。

通信が切れたことでクーデリアはひと息ついたが、まだここは山の中腹にただけ。頂上へ登りきって降りきるまでまだ関門は残っている。

その関門を突破するために、水分を口に含んだ後ブリッジへ向かった。

ブリッジに着いた頃、三日月達が限界に近いと知り、即座にこの圏内に放送を流す。

「私の名前はクーデリア・藍那・パーンスタイン。私の話を聞いてください——」

三日月達は奮戦した。イサリビも駆けつけたことでどうか数的不利をどうにかできていたが、損傷は激しい。キマリスの加速力はこの場にいるどの機体よりも速く、スピードを活かした連撃でグシオンリベイクの隠し腕の一本を破損させていた。

シノも初陣ということもあって健闘した方だが、弾丸は使い切り、一番損傷が激しく甲板の上で身動きが取れなくなっていた。

バルバトスはせつかく追加装甲を施したのに、その装甲はガリオとジュリエッタによつて徹底的に剥がされていた。そのせいで元の細身のフレームが剥き出しになっていた。見た目だけなら一番酷いかもしれない。

自慢の太刀も、途中からポツキリと折れていた。

相手のグレイズを六機ほど落として、アインのシュヴァルベも半壊に追い込み、それでもまだ死人が出ていないのだから大金星と言つていい戦果ではある。

だが、ここまでだ。

デモの鎮圧をほぼ終えたのか、やってくるグレイズの数が増えてイサリビは包围されていた。銃口は向けられているが、一応相手がデモの関係者ではないためにトリガーを引いていないだけの状況。

一斉射をされれば、すぐに沈没するほどの戦力差ができていた。

その状況になって、キマリスが近付いてくる。動ける三日月と明弘がキマリスへ注意を向けた。

「大人しく停船しろ！ 抵抗をするな！ こちらの要求としては貴様らが接収したグレイズの返却のみだ！ その後接収した経緯を聴取するが、内容次第では監査局としてはこれ以上の追求をしない！」

「ハア？ 俺の流星号が目的なのかよ！」

「貴様の物ではない！ クランク二尉の機体だ!!？」

ガエリオの通達にシノが思わず返したら、アインに逆ギレをされた。

だが、鉄華団としてはこのグレイズはクランクが仕掛けて来た決闘とやらの正当な戦

利品なのだ。改造などはしてしまっているが、返す謂れはない。

クランクもクーデリアの身柄を要求してきた。その決闘の勝者は三日月だ。返還要求が正しくない行為なのだが、それはここで言っても仕方がないだろう。

あと。彼は名譽の戦死をしたために、二階級特進して三佐になっている。

捕まるわけにはいかないと三日月と明弘がフットペダルを踏もうとした瞬間に、その声が戦場に響く。

「私の名前はクーデリア・藍那・バーンスタイン。私の話を聞いてください——」
「クーデリア？」

戦域ほぼ全ての通信がジャックされたことに、アリアンロッドといえども困惑した。しかもアリアンロッドが警戒している「革命の乙女」を名乗る人物だ。

生きている通信網を使って、ラスタルは全軍に動くなと告げる。スキップジャック級のブリッジでラスタルは楽しそうに笑みを浮かべた。

最低限の力はあるようだ。指導者としてのライバルの誕生に話を聞く姿勢を作る。

「この宇宙の片隅、ドルトコロニーで、戦火が広がっています。私は生まれ育った火星のために行動をしています。ここにも、火星のように苦しむ人々がいました。彼らは環境を変えようと、デモという手段を選びました。武器を手に取り、訴えかけたのです。

それしか手段がなかったのでしょう。ストライキや、弁論による抗議ではなく武器を

取るという行為が正しいか、私はこのドルトについてあまりにも無知なために判断がつきません。ですが、鎮圧の名目上、今ドルトではギャラルホルンによる虐殺が行われています。

徹底的な武力による鎮圧。過剰とも思える戦力の稼働。そして、今ドルトを囲うアリアンロッドの大戦力。この不自然な周到さについては触れません。

ですが、これだけは確認したいのです。あなた方ギャラルホルンは正義を守る存在ではないのですか？ この虐殺が、人々を捕らえるのではなく、徹底的に潰すことが正義なのですか？ ならば、私はそんな正義は認められない。

あなた方が正義の番人だというのなら。もっと穏便な手段が取れたはずです。ここまで血が流れる結末になるはずがなかった。

そして、私の乗る船もあなた方に包囲される理由はないはず。私達はギャラルホルンに襲われる正当性など一欠片もないのですから。

もし私の発言が間違っているとすれば、構いません。今すぐ私の船を落とさなさい！

クーデリアの発言に敵味方関係なく慌て出す。

一部の敵はクーデリアを襲う理由がないはずがないと憤るが、火星の出来事は火星支部が逸って問題行動を起こしただけ。今回襲われているのはガエリオの独断によるも

の。

グレイズだって決闘の戦利品で返却義務などあるはずもなく。

ギャラルホルンが鉄華団の行動で死者が出ていたとしても、それは正当防衛で罷り通つてしまうことばかり。

味方は本当に撃つてきたらどうするという慌て方を各所でしていた。

決定権を持つ、この作戦の総司令ラスタルは指示を全軍に出す。

「これ以上の制圧行動は、手厚い保護をするように。証言者も残す必要がある。その強襲装甲艦は見逃せ。我々の作戦に関係のない艦だ。ガエリオ特務三佐の部隊も下がらせるように。これ以上の追撃はなしだ」

「よろしいのですか？」

「アフリカンユニオンからもこれ以上は醜態になるから止めるようにと通達が来ているからな。これ以上労働者が死んではドルトの運営にも差し障る。今回の行動が虐殺と捉われないように、抵抗されたから撃ち返しただけで、きちんと捕縛した者も多いと彼女に見せなければ世界が納得せんよ」

ラスタルは副官にそう伝える。

イサリビは艦隊の間を抜けていく。それを誰もがただ見送るだけ。

「……及第点でしかなかったな。自分の正当性の断言でプラス。労働者の武力行使が最

初だと知らなかったのか、隠したのか。とにかくこれを先程の放送で流さなかったのはマイナス。真実だけで切り抜けず、ブラフで切り抜ける覚悟にプラス。私という相手を知っていたようだが、ああ言えば撃ち落とさないと信用してしまったことがマイナス。やはり及第点が精々。地球に降りたら更なる羽ばたきを見せるかな? 『革命の乙女』よ」

ラスタルはシビアに今回のクーデリアの発言を評価していた。まだ少女の年齢である彼女がやったという事実は賞賛したが、それ以上褒めたりはしない。

作戦の後始末をさせている間に、とある情報が入ってきてそれを見て大爆笑をするラスタル。一緒にいたジュリエッタが首を傾げた。

「ラスタル様。どうかなされたのですか?」

「いや、何。これを見るといい、ジュリエッタ」

ジュリエッタは渡されたタブレットを見ると、そこにはマクギリス・ファリドとイオク・クジャンのMSによる決闘の日時を知らせる通達が書いてあった。

ジュリエッタはどちらが仕掛けたのかわかって、眉を顰めた。

「……またですか、イオク様の暴走は。マクギリス特務三佐に勝てると思っ
ているのでしょうか?」

「勝てるわけがないな。イオクの実力は並以下だ。マクギリスの実力はカインに匹敵す

る」

ラストアルは断言をする。

しかも今はカインがマクギリスの影武者をしているとラストアルは知っていたので、余計勝てるわけがないと確信していた。

ラストアルの秘蔵っ子に、御曹司が勝てるわけがないのだ。

22 暗躍

鉄華団がアリアンロッドの艦隊から逃げ切ってしばらくして、タービンスのハンマーヘッドと合流した。先程の戦闘はテイワズとして有名すぎる彼らは加わることができなかつたのだ。

合流してすぐに行なつたことは鉄華団のMSの修復だ。今回の戦闘でかなり派手にやられたために、地球へ降りる前にどうにか準備を整えなければならない。

先程の戦闘は、クーデリアの機転で止められたが、やったことはアリアンロッドの作戦行動の妨害だ。MSも複数倒してしまったので、ガエリオの横入りが原因だとしてもギヤラルホルンの敵として認定されてしまったことだろう。

つまり、確実に地球外縁軌道統制統合艦隊と事を構えることになる。そうなるだろうと予測していても、本当にそうなるとわかっていけば入念な準備が必要になる。

ポロポロのままのMSではダメだ。だから移動しながらやれることを始める。

そこへ、モンターク商会を名乗る船が接近してきた。

「モンターク……」

「確か、火星で三日月達が会ったギヤラルホルンの一人が名乗ってたんだっただか？」

「はい。ドルトでは私達に手を貸してくれましたが、警戒が必要な相手でしょう」
「トドもいるんだよな……」

クーデリアとオルガは確認した後に、名瀬も含めて会うことにする。真意を測ろうとしたのだ。

代表のモニターはドルトの時と同じく仮面を被ったままだった。

「こっちはあんたがギャラルホルンの人間だとわかってる。そっちもそれを承知の上で商談と言いに来たんだろう？ 目的は何だ？」

「ドルトでは話していませんでしたね。簡単な話、ギャラルホルンという組織における革命を為したいと考えています。内部からするにも限度がありまして。あなた方は外部から働きかけるには最適の人物だと判断したためです」

「……内部から？ 名前は」

「失敬。マクギリス・フアリドという」

マクギリスは仮面を外しながら名乗る。素顔を見たことで、そして名前を知ったことでその場にいた全員がマクギリスの正体を把握した。

名瀬は顔写真も見ることがあった。それほどまでに有名な人物だったからだ。

「フアリド家の嫡男……！ 驚いた、そんな人物が出て来るなんてな」

「セブンスターズの一角……。そんな特権階級様が改革だと？」

「特権階級だからこそだとも。あの組織は腐っている。内部からどうにかできるレベルを超えた。外的刺激がないと更に腐敗を増やすだけだ」

「だから、クーデリアの革命の支援をしたいと？ お前さん、ハーフェタルの利権なんて口実に過ぎないだろうか？」

「いえいえ、実益も兼ねている。モンターク商会としては見逃すわけにはいかない。革命の支援も、もちろんさせてもらおうが」

名瀬はセブンスターズが相手だとわかってても、その特権を使用してこないことがわかったためにタメ口で話していた。マクギリスも自分を売り込むための交渉に来ていたので、立場は自分の方が低いと感じて何も言わず。

だが、正体を言ったことでマクギリスも敬語はやめていた。

「支援って、具体的には？」

「地球降下のためのシャトルを用意した。武器弾薬はもちろん、地上で使うことになるMW、そしてMSの予備パーツ。リストはこれだ。特にガンダム・フレイムの予備パーツともなれば貴重のはず」

オルガがタブレットを受け取り、リストを確認していく。かなりの納品数にオルガは驚き、横から覗き込んだ名瀬も、物品のリストから本当に貴重なガンダム・フレイムの拡張パーツがあったことに本気さを知った。

「そしてこれも見ていただきたい」

「これは……？」

「ノブリス・ゴルドンの、遺産相続に関する書類だ。彼の会社を監査したところ、これを見付けて手続きは済ませてきた。彼の物は一切合切君に引き継がれる。クーデリア嬢」

「え……？」

同席していたクーデリアは、額縁に入れられ嚴重に保管されたソレを見る。高級な和紙で作られたその書類は、本人に何かあった時のために資産家が用意しておく遺書のよきな物だ。遺産相続で揉め事になることは目に見えているので、資産家は必ずこういった誓約書を作成している。

その効力は絶大だ。電子書類ではハッキングなどで改竄される可能性があるので電子で用意された相続書の効果は薄いが、紙でできた物なら誰もがその文言に従う。

しかも、署名の脇にとある物が付いていれば確実だ。

「おいおい、血判付きつてことはマジじゃねえか……！　これの、DNA判定は？」

「もちろん済んでいる。今回の納入品のほとんどは、彼の会社の商品だ。クーデリア嬢の物を持ってきただけで、サービスになるのは一部の商品と運送費だけと考えていい」

「……確かに私の支援をノブリスはしてくれましたが、自分が倒れたら会社の名義以外の全てを私に移譲？　血縁でもない私に……？」

「ノブリスってのはどうなったんだ？」

「地球の風土病を患ったようだな。寝たきりになってしまった。既に生きていないだけの植物人間だよ。大方地球へ旅行にでも行った際に発症したのだろう」

ノブリスの遺産が相続されるなら本人がおかしくなつたはずだとオルガが確認すると、マクギリスが律儀に答えた。

これはフミタンが調べた情報と合致する。地球のとある地域で有名な風土病で、老人はあまり罹らず、感染しても発症までに時間がかかるものだという。

「詳しい相続についての書類も用意した。これらには君のサインも必要だから後で目を通しておいてくれ」

「は、はい」

「ああ、それと。地球外縁部で待ち受けている地球外縁軌道統制統合艦隊の戦力図も渡しておこう。これで作戦を立てるといい」

「……これ、アンタも組織の腐敗の一部だよな？」

「むしろ象徴かもしれん。だからこそ壊したいのだ」

「ああ？」

オルガは訳の分からない返答をされて首を傾げる。

鉄華団は十分な補給を受けて地球降下作戦を実行。ブルワーズから拿捕した戦艦を

囿にする作戦で戦場を混乱させ、シャトルによる降下を実施。

その際また突つかかかってきたガエリオとアインを三日月が返り討ちにし、アインが重傷を負う。

鉄華団は負傷者を出すことなく降下を成功させた。

その様子を紅いMS、ヴァルクキュリア・フレームの一機グリムゲルデから見ていたマクギリスは小さく嘆息する。

「……ガエリオ、俺を失望させないでくれ。権力を笠に着た出撃、お前もただのセブンスターズに成り下がるのか？ そうなれば、お前は邪魔になる……。アルミリアの手前、俺に手を下させないでくれ」

そう呟いた後、カインへメールを送る。

これから取るカルタの行動が、手に取るように分かったからだ。

彼女は自分の役目を全うしようと躍起になっている。だというのにギャラルホルンが警戒する鉄華団とクーデリアの地球降下を許してしまった形だ。

いくらマクギリスが戦場でも彼らを支援したとはいえ、本当にお節介程度の支援だった。それがなくても彼らは作戦を成功させていただろう。

今、カルタ・イシューという存在に脱落されては困るのだ。だが、ガエリオ・ボードウィンなら替えが効く。効いてしまう。

「さて、どうしたものか」

「マクギリス、どうして私達が地球へ降りることに許可が下りないの!!? 地球外縁軌道統制統合艦隊の作戦行動圏内に地球も含まれているのよ!!?」

『それは百も承知の上だ、カルタ。それでも私はヴァインゴールヴ本部の決定を君へ伝えなければならぬ。カルタ・イシユ一佐、地球外縁軌道統制統合艦隊の宇宙戦力は現状維持のまま、宇宙の監視を続けること。これが本部の決定だ』

カルタがヴァインゴールヴへ通信を行なったところ、受けたのはマクギリスに変装しているカインだった。マクギリスからメールを受けて、本部でカルタが獲り逃した事実を確認し、本部がどうするのかの決定を聞かされ、そのまま伝書鳩の役割を担っていた。

「この役割をさせられた理由は同じセブンスターズで腐れ縁だからだ。」

「……私達は領分を犯していないわよ?」

『カルタはな。だがガエリオが二度も監査局以上の権限で戦場へ出撃している。部下も引き連れた上に、その部下を負傷させたという。それに本来であればガエリオの休暇も終わっているが、まだ戻ってきていない。私達もヴァインゴールヴで待機している状態だ』

「ガエリオ坊やのせいじゃない……!」

カルタが齒軋りをする。

ガエリオが参加した作戦で、どちらも鉄華団を逃しているというのがヴィーンゴールヴでは問題になっていた。火星では火星支部のあまりのやらかしのせいで見逃され、監査局としての仕事は全うしたのでお咎めなし。

その頃はクーデリアも注意人物程度で、今のように危険視していなかった。だがドルトの一件で一気に重要人物となり、次もまた何かやられそうだと警戒しているのである。

ドルトの一件ではクーデリアを逃す口実作りに貢献してしまったのがガエリオだという見方もできる。鉄華団のイサリビはたまたまあの宙域を航行していただけとも言える中、見付けたからと攻撃したのはガエリオが先。

火星支部に犠牲を出した鉄華団だが、火星支部は然るべくして被害を出したのだ。追撃に出たのは彼の独自判断で、監査局の権限を超えている。ギャラルホルンの意向も無視した形だ。

ドルトでの作戦を遂行していたラスタルはガエリオの行動について気にしていないとは公言しているものの、ラスタルの邪魔をしたという意見を出す者もいる。

そして今回の地球外縁軌道統制統合艦隊へ参加してまた失敗したことが大きい。しかも本来であれば監査局に所属する者として職務に戻っていなければいけないのに、そ

れをぶつちぎっての独断行動だ。

その上で部下を負傷させたとなると、組織としてはセブンスターズの御曹司ともいえども忠言しなければならぬ。

いや、この場合はセブンスターズだからこそと言った方がいい。それほど彼らはギャラルホルンの象徴になっているのだ。

このような処置をされた理由の一端には、イオクの決闘騒ぎがある。セブンスターズの愚行がギャラルホルンに知れ渡ってしまったことが大きい。二人目となると、セブンスターズの威光が陰るのだ。

同じような失敗をカルタにもされては堪らないと、行動を制限。幸いなことにクーデリアが誰を頼って、次にどういう行動に移るのかは分かっていたので、そこで網を張って待つていればいいのだ。

『カルタ。ガエリオはいつになったらこっちに戻ってくる？』

「負傷した部下の治療がひとまず済んだから、これからシャトルに乗せて降ろすわ。ただ今日中には無理よ」

『アインの容体は？』

「……生命維持装置で生かされているだけよ。コックピットの損傷と一緒に四肢と内臓のいくつかをやられて、ヘルメットも割れたことで酸素も減っていた。生きているのが

奇跡というほどの重傷ね」

『……分かった。ヴィーンゴールヴに直接降りてくるんだな？』

「ええ、そうよ」

それだけ聞ければカインとしては十分だった。

これ以降は、カルタを宇宙へ留まらせるための言葉を吐くだけだ。

『カルタ。宇宙にはドルトの時のように、クーデリアを担ぎ上げて武力蜂起しようとしている者がまだいるようだ。アリアンロッドも捕捉次第制圧しているようだが、彼女に続けと地球へやってくるかもしれない』

「そこまでする連中がいるの？」

『可能性の話だ。そしてそれが事実ならば、地球圏が火の海になる。ギャラルホルンを、地球を殴っても何をしてもいいナニカだと誤認して襲ってくるだろう。それを防ぐ防波堤になってほしい。それができるのは地球外縁軌道統制統合艦隊のカルタだけだ』

「マクギリス……」

マクギリスが言いそうなことをトレースするカイン。ギャラルホルンの総意をまるで自分の言葉のように使うマクギリスの思考にカインは少しだけ辟易する。

そしてそんな言葉で頬を赤くしているカルタのチョロさも心配してしまう。

『私達は監査局だから何ができるかはわからないが、地球のことは地球に任せてくれ。』

今は宇宙の方が混沌としている。エリオン中将とも連携してギャラルホルンの確固たる力と立場を示せとのことだ。イシユ一佐』

「ええ、分かったわ。フェアルド特務三佐。こっちはこっちでなんとかする。もう二度と失態を見せないわ」

『張り切りすぎて視野を狭めないように。幼年学校から君にはそういう癖がある』

「~~~~~ツ！ ええ、忠告ありがとう！ もうあの宇宙演習のような失敗はしないわ！」

カルタはそう言い切って通信を切る。

一仕事を終えたカインは息をゆっくり吐きながら、マクギリスが早く帰ってくることを願った。

他人のフリをするのは思考を別にするために結構疲れるのだ。

23 エドモントンの乱

ガエリオがヴィーンゴールヴに帰ってきた時には、既にマクギリスとカインの入れ替えは終わっていた。カインからすれば重い荷がようやく降りたと思っっている。

一緒に帰ってきたアインの様子を診断書と一緒に見る。彼が乗っていたシユヴァアルべの状態も確認して、どんな有様が把握した。

メイスのような物がコックピットにほぼ直撃。むしろ即死していないのは幸運と言っただけの酷い状態だった。生命維持装置で生かしているだけというのも正しい。この装置から外したら彼は生きていけない。

だからこそ、マクギリスはガエリオへ選択肢を与える。

「ガエリオ。二つに一つだろう。このままにするか、身体を機械に委ねるか。ギャラルホルンの技術力といえども、彼がこのまま目覚めることはない」

「……アイツの復讐心。上官の敵討ちはどうなる」

「叶えるなら選択肢は一つしかないぞ。ギャラルホルンだからと、何でもできるわけではない」

「アインが復讐を叶えるには、阿頼耶識システムに身を任せるしかない。それ以外に意

識を取り戻す手段は存在しなかった。

ガエリオもそのことをわかつている。だが、阿頼耶識システムを受け入れられないガエリオのことだ。人間が人間らしい証拠を失うのを恐れている。

マクギリスが説得しようと歩み寄ったが、その前にカインがガエリオに近付く。

「ガエリオ様。阿頼耶識システムは義足や義手と何ら変わりません。あなたは、それらを着けた者は人間と認めないのですか？」

「それとこれとは違うだろ?!? 阿頼耶識は、ギャラルホルンが禁止した技術だ！」

「なぜ禁止したのか、知っていますか？」

「それは、危険だからだろう？」

「いいえ。必要のない世の中を願ったからです」

「……は？」

カインの言葉に、ガエリオはもちろん、マクギリスも破顔する。

カインのほとんどの情報源はマクギリスだ。だが、マクギリスはカインにそんなことを教えた覚えはなかった。

だが、このまま説得できそうならいかと傍観することにする。

「阿頼耶識は本来、ガンダム・フレームに乗るために開発された物です。昔は危険でもなんでもなかったと、研究の結果判明しているようです」

「だが、ナノマシンは子供の時にしか定着せず、致死率も高かったはずだろう？」

「それは今出回っている物が粗悪品だからです。子供にしか使用できないのであれば、アインに使用するなんて話になっていません」

「……そうだな。となると、ギャラルホルンが阿頼耶識を禁止したのは……」

「使えば誰でも、戦力になってしまいます。字の読めない子供がMSを操り、ヒューマンデブリとして使い潰されるように。人類が下手に戦力を得て戦争をしないためと、子供の未来を案じてのためです」

カインがそう言うと、ガエリオは腑に落ちたように頷く。

鉄華団と直接戦ったからこそ、身に染みているのだろう。そしてヒューマンデブリという存在についても。

禁止する理由はわかったが、ではそれをアインに使用するのには良いのかという話になる。

「抑制しようとするギャラルホルンが、禁忌のシステムを使うのか」

「ダインスレイヴと同じく、いざという時に使えるように技術を、兵器を所持することは抑止力として必要です。MAがこの時代に発見されないとは限らないので」

「奴らはMAではないぞ？」

「この一連の騒動は厄災戦に匹敵しかねないほどの火種に膨れ上がっています。燃え上

「がる前に止めなくてはならないのです」

「このまま放つておいたら、そうなる。いつもの勘か？」

「はい」

迷いなく言葉を並べ、断言するカインの様子を見てガエリオも決心をする。

アインへ手術を行うことを。

「ガエリオ。これ以上の独断行動は禁止だぞ。お前には監査局として働いてもらわなければならぬ」

「……アインは大丈夫なのか？」

「火星支部からの預かりで監査局の我々と同行してもらっただけだ。まだ彼の所属は宙ぶらりんのまま。アーブラウ方面軍に振り込むくらいはできる。それしかできないと言わなきゃ」

「わかった。今度は仕事をしよう。アインのことを信じて送り出すだけだ」

二度の無断出撃によって、ボードウィン公に絞られたのだろう。覇気がないながらも頷いていた。

「で？ 今度の出張先はどこだ？」

「喜べ。今回の監査先はヴィーンゴールヴ。移動は必要ない」

「……（こ）？ いや、確かにヴィーンゴールヴの監査なんてしかなかったか……」

？」

「本部だけしないということはおかしいだろう。いくら我々が本部付きの部隊だとしてもな。ガエリオ、アインの手術が終わってからの仕事でいい。それを見守る義務が、お前にはある」

「……ありがとう。マクギリス」

「カインは悪いがすぐに仕事に取り掛かってくれ」

「はい」

こうしてガエリオの拘束と、本部を調べる口実を手にしたマクギリス。実際ヴィーン・ゴールヴは百年単位で監査されていなかったもので、他の場所を監査する以上、一度は監査した方が面目が立つのだ。

マクギリスが思い浮かべる絵は簡単だ。

ギャラルホルンが腐敗したことを多くの者の目に届かせる。復讐心に囚われたアインは鉄華団を殺そうと暴走するだろう。

アーブラウの首都エドモントンに住む住民や、そこで行われる選挙のことなど二の次で鉄華団を優先する。それは今までガエリオに同行したということから、ギャラルホルンの本質を捨てて私心で行動しているとわかる。

クーデリアと鉄華団の最後の成功談には大きな障害が必要だ。アインにはその障害

になってもらう。

ガンダム・フレームという、厄災戦の英雄同士が戦うのは美しくない。そういう理由でガエリオとガンダム・キマリスをアーブラウから排除した。

このついでにイズナリオの癒着やギャラルホルンそのものの腐敗を暴くつもりだった。

アインの手術が始まった頃、マクギリスとカインは例の如く密会をしていた。

「しかしカイン。ああも簡単にアインを見捨てるとは思わなかったぞ?」

「克蘭クという上官だった男に囚われすぎて現実が見えていない男です。MSの操縦技術も並。庇う理由がありません」

「そう言ってるやいな。アレは犬と同じだ。自分の主人を見付けて、それにくつつくだけの迷い子。ギャラルホルンではないのさ」

「そもそも、秩序の番人が私怨で動くことがおかしいのです。我々の計画を推し進めるための礎になれる。彼も復讐心を満たされる。結構なことではないですか」

これはマクギリスの狗としての言葉ではなく、カインの本音だった。

上官の間違いを諫めず、自分にとって都合の良い上官に尻尾を振るう。組織の法を破ることも厭わない。

アインの行動にはガエリオも悪い部分はあるが、ガエリオはまだ間に合う。今回勝手に

にエドモントンに向かわなければ修正が効く。

だが、アインは手遅れだ。彼はクジャン家に仕える家臣と同じように思考を放棄している。

カインが気に食わないのは、クジャン家を思い出すからというものもある。

「アレがギャラルホルンの末端なのだよ。中枢部が腐敗していれば、枝の先も腐敗して当然。あの思考こそ唾棄すべきもので、排除すべき象徴そのものだ。出身そのものから迫害を受けていたとしても、俺やカインはどうなる？ アインはただ、弱かつただけだ」

「強くなろうとするのではなく、八つ当たりがしたいだけ。与えられた力で満足する子供です」

「その子供にはめいいっぱい暴れてもらおうじゃないか。英雄の名声を高めるには、巨悪が必要なのだから」

鉄華団は地球に降りた後、クーデリアが交渉をしようとしていたアープブラウの代表、蒔苗東護ノ介と合流するが、彼は失脚して亡命中だったために交渉も何もなかった。その代わり選挙に出れば勝てるというので彼をエドモントンまで運ぶことになる。

クーデリアと鉄華団はギャラルホルンの様々な部隊と交戦してしまつたために、街へ

入るどころか応戦されてしまった。これはイズナリオが手を組んでいるアンリ・フリユウに当選してもらったために蒔苗をエドモントンへ入れないために戦力を動員したためだった。

お互い市街地戦をしない良識があり、鉄華団は蒔苗とクーデリアを議事堂に運ぶためにMSで大規模な陽動を行い、その間に車両で彼らを運び入れる作戦に出る。

結果、街の外では紛争と言つていいほどの戦闘行為が勃発。どちらも本気でぶつかり合ったことで膠着状態ができていた。

三日も戦闘が続いたために、選挙の期日が間近となつてオルガはMS部隊に指示を出す。

街のギリギリまで突っ込んで、相手の注目を浴びることだ。MWでも違う方面から攻撃を仕掛ける二面作戦。護衛はオルガとビスケットのMWのみという強行突破作戦を発動。

その作戦も途中までは上手く行っていた。ギャラルホルンが、いや、彼がやらかさなければ。

間に合つてしまった援軍、グレイズ・アインに乗ったアインがエドモントン内に降り立ったのだ。

MSのエイハブ・リアクターは様々な電気機器へ電波障害を起こすため、市街地やコ

ロニー内で使用することは禁止されていた。主に使う側のギャラルホルンが禁止したのだが、今回はギャラルホルン側が破った。

この映像は、マクギリスの手の者である戦場カメラマンがバッチリ撮影しており、すぐに全世界にこの悪行が広まる。

三日月もオルガ達を守るために街へ入って交戦。激しい戦闘になり、エドモントンの住民を巻き込んだ破壊活動が続く。

結果として。三日月が阿頼耶識を通してバルバトスの力を引き出して勝利。代償に右目の視力と右手の自由を失ったが、クーデリアの護衛をやり遂げた。

蒔苗も再選し、ハーフメタル事業やクリュセに関する交渉を火星と執り行うこととなる。

これにて鉄華団の初仕事は終了。

これに合わせてイズナリオの癒着も明るみとなり失脚。ヴィーンゴールヴはマクギリスが率いることとなる。

ガエリオも今回の一件で監査局ではなく、ボードウィン家の職務である四大経済圏の監視業務を行うこととなる。

ギャラルホルンでも大々的な人事異動が起こり、様々な問題に対処していくことになる。

カインもまた、これまでの立場とは異なる職務に就くこととなった。

幕間（一期〜二期）

24 戦乱の間に

エドモントンでの一件から数日が経つて。

鉄華団は火星に帰る準備と並行して、蒔苗の手引きもあつて負傷者は費用も気にせず入院できていた。選挙で勝つことができた大きな要因に関わっているので、これくらいの援助は蒔苗としても当然の措置だった。

幸い鉄華団は損耗を抑えた戦いを仕掛けていたこともあつて死者は少なかつた。多かれ少なかれ怪我はしているものの、MWでの戦闘は阿頼耶識があつたこともあり、終始有利に進んだ。

怪我人の中で一番重傷だったのは三日月だ。グレイズ・アインとの戦闘で負つた怪我ももちろんあるが、一番は阿頼耶識を通じたバルバトスとの適合率を高めてしまったこと。人とマシンを一体化させるには粗悪品の阿頼耶識が三本あつても容易ではなく、右腕が動かなくなり、右目も光を捉えることができるだけになつてしまった。

バルバトスと繋がればどちらも十全に動かすことができるのだが、日常生活には確実に影響が出るようになっていた。

このような症状は一般の病院では治療することができず、治る見込みもないのと。
と。

そんな折、鉄華団を訪れる者達がいた。

モンターク商会の名前で来たマクギリスとカインだった。

その来訪者に、鉄華団の面々は驚きを隠せない。ギャラルホルンの隊服を着ずに変装はしているものの、グレイズ・アインがもたらした被害のせいでギャラルホルンの一般兵はこの辺りを巡回しているのだ。

鉄華団はお目溢しをもらっているだけ。そんな敵対組織へセブンスターズの一人がやってくるなど正気の沙汰ではないだろう。

一応マクギリスはモンタークの変装を。カインも赤髪のカツラを被り、サングラスをつけている。

「よく来られたな……。外、ギャラルホルンで酷いだろう？」

「いや、それも今日までだとも。オルガ・イツカ。市民がMSを市街地に入れたギャラルホルンを信用できなくなったようだな。復興作業はギャラルホルンではなく、地元の土木業者に任せるようだ」

病室でオルガの質問にマクギリスは本部での決定を告げる。エドモントンでは現在ギャラルホルンへの不信感が高まっている。そんな中、壊したギャラルホルンが大きな

顔で修繕作業に当たられても住民は困るのだ。

「んで、そつちのは？」

「ライオンの人じゃん」

「ライオン？ ミカ、知ってるのか？」

オルガが見覚えのない人物がいたために尋ねると、ベッドの上に寝かされた三日月が例の愛称で呟く。カインは一応バレない程度の変装をしてきたつもりだったが、直感で見破った三日月には失笑を隠せない。

ビスケットと明弘は三日月のその愛称を聞いていたので誰だかわかった。

「火星でモニタークさんと一緒にいた人だよ。確かその時はカインって呼ばれてたはず」

「よく覚えているな。今はジェーン・ドウと名乗っている」

「クク。ジェーン、君がライオンとは彼の感性もなかなかではないか？」

「それは背負うには重すぎる愛称です。彼には今すぐやめてもらいたい」

「何で？」

三日月は純粹な疑問を投げかける。ただ動物に例えただけなのに、やたら辛気臭い顔をカインはしたのだ。

「……ライオンとは、ギャラルホルンを象徴する生き物。全てを率いる存在、強者の暗喩

だ。そんなモノを一介の兵士であるオレが背負うには、重すぎる称号だ」

「ふーん。言葉一つで大変なんだね」

「言葉で人を殺すこともできる。逆に生かすこともできる。軽視しない方がいい」

「そうですよ三日月。言葉には力があります。文字や言葉に籠められたものは想像以上に大きいものですよ」

「……クーデリアが言うなら、そうなんだろうな。言葉だけでギャラルホルンを止めたんだし」

三日月も最近では文字や言葉というものを大事にしていた。将来的に農場を経営したいと考えている三日月は、文字が読めないと大変だと今更ながら思い至ったのだ。

「さて、本題に入ろう。クーデリア・藍那・バーンスタイン。この度は革命の成就おめでとう」

「あ、ありがとうございます。あなた方の支援のおかげでもあります」

「それはハーフメタル利権あつてのもの。今回来たのは三日月・オーガス。君のことだ」

「俺？」

「ああ、その症状についてジェーンが見たいと言ってな。ジェーン」

カインは三日月の身体を診ていく。彼は本業が医者というわけではないので本格的な治療はできないだろうが、阿頼耶識とガンダム・フレームが起こした現象と聞いて興

味深くなったのだ。

カインは三日月の右腕を握る。

「感触は？」

「あるよ。動かないだけ」

「どこから動かない？」

「右肩から先が全部。動かそうとしても全く動かない」

「なるほど」

今度は右目の様子を見ていく。光は感じて、視力自体は全くないらしい。

だが、バルバトスと繋がっていた時は問題なく見えて、動かせたという。そのことからカインは結論を出した。

「阿頼耶識システムによる、情報制限ですね。彼の身体はバルバトスと同化現象を起こしている。そうすることでガンダム・フレームはありのままの性能を引き出すので。もちろんMSの中でも高出力のガンダム・フレームの情報量にただの人間が耐えられるはずがありません。ガンダム・フレームによる警告の現れです。そして、これならどうにかできる」

「ハア？ 医者が匙を投げたんだぞ？」

「ガンダム・フレームと彼を繋げているのは阿頼耶識システム。これは粗悪品なので純

正品に変えられればまだ症状は和らぐのですが、それはそれで彼の命が危ない。……失礼」

オルガの言葉を聞きながらも、カインは施術を続ける。カインは阿頼耶識の突起に触る。入院着越しとはいえ、どんな感触なのかカインはわからないので一応断りを入れる。

触られた三日月は感触こそあるものの、何ともなかったのか表情を動かさなかった。

「集中。この背中に意識を向けてくれ」

「阿頼耶識に？」

「そう。正確には阿頼耶識が送り出すナノマシンに。まずはそこに集中して、その後全身のナノマシンを把握してもらおう」

「難しいことを言うな……」

「目を閉じて、耳も塞ぐといい。身体の内側にだけ集中すること。呼吸をゆっくりするように」

まるで坐禅をさせるように三日月へ意識を向けるように指示を出す。

約一時間ほど深呼吸を繰り返した頃に、カインは頷く。

「そう。それがナノマシンだ。そのナノマシンを右腕と右目に集中する」

カインはCTで見たわけでもなく、三日月がナノマシンを把握したことを理解してい

た。三日月は言われた通りにナノマシンの動きを右腕と右目に集中させる。
すると。

「……………ん？」

三日月が両目を開ける。まずは包帯で吊っていた右腕を自力で取り出して軽く動かした。

「お、動いた」

「ま、マジか……………。医者が無理だって言ったのに」

「三日月っ！　これ何本に見える!?？」

アトラが駆け寄って、右目に向かって三本指を立てる。三日月の右目の瞳孔が動いて、頷いた。

「ちよつとぼやけてるけど、三本？」

「よ、良かった〜！　三日月見えるようになった！」

アトラは嬉しそうに三日月に抱き着く。三日月はベッドの上にいるので避けられず、動きはゆっくりながらも右腕も動かしてアトラを抱きしめていた。

その感動の場面に、カインは水を差したりしない。

「団長さん。彼の目と腕はあくまで最低限動かせるようになっただけです。重い物を持たせたり、右腕を激しく動かせることはしないでください」

「……アンタ、何者なんだ？ 何をしたんだ？」

「オレはただの孤児ですよ。それと、身体の中にあるものならどうにかする方法を知っていただけなので、今回はそれを応用しただけです。彼をバルバトスに乗せるのは良いですが、白兵戦はさせない方がいいでしょう。右目の弱視はそれだけ致命的だ」

オルガに今後の三日月について伝える。

実質的に彼はバルバトスに乗るだけの兵器に一步近付いてしまった。それを意識させないようにカインは応急処置をしたただけだ。日常生活はある程度送れるが、先程の状態よりはマシというだけ。

「……阿頼耶識って、何なんだ？」

「元はと言えば、ガンダム・フレームを操る為の外付けハードウェアだ。最終的にMSと一体化させるためにナノマシンが身体を作り変える。そんな悪魔のシステムだよ」

「ガンダム・フレームのための物だと？」

「そうだ。そして最強のMSが動かせるなら他のMSや戦艦、MWだって動かせる。

……アグニカ・カイエルは、人類のためにその肉体を捨てた。——まさしく英雄なのだ
よ」

「誰だ？ それ」

カインに代わってマクギリスがオルガの疑問に答える。

オルガはアグニカについて知らなかったが、火星圏の人間であれば知らなくても当然だ。ギャラルホルンなら知っているが、地球圏の人間でも知っている人間はどの程度いるものか。

「団長さん。彼にこれ以上リミッターを外させないようにしてください。次の段階に進んでは、今回のような誤魔化しも効きません」

「あ、ああ。それは気を付ける。ミカにこれ以上負担を掛けさせるつもりはねえよ」

「では、我々の鉄華団に対する用事は終わりだ。次はクーデリア・藍那・バーンスタインと利権に関わる話をしたいのだが」

マクギリスが目線を向けると、そこには三日月の右手を掴んで自分の胸元へ運んでいる『革命の乙女』の姿が。

抱きついている栗毛の少女といい、『革命の乙女』といい。病室で人目もあるというのにピンク色の空間が出来上がっていることに驚く。

「……クーデリア嬢？」

「は、はいっ!?？」

「出直した方が良いと見た。馬に蹴られる趣味はないのでね、連絡先を置いていこう。鉄華団にもこれを。何か困ることがあったら連絡してほしい。できる限り力になろう」

「それでは失礼します」

「あ、ライオンの人。ありがとう」

「……どういたしまして」

女の子に抱きしめられて『革命の乙女』にも手を握り締められている三日月にお礼を言われて微妙な気分になったが、一応言葉を残して病室を去る。

カインとしてはそういう恋愛を捨てて生きてきたので、なおさら羨ましく映る。

アルミリアと婚約者ごっこをしようと、どれだけジュリエッタを想つていようと。寂しいものは寂しいのだ。

ヴィーンゴールヴに戻り、本来の監査の仕事に打ち込んで。

イズナリオの腐敗を散々見付けて確実に左遷をさせてマクギリスがフアリド家の実権を握り。

ガエリオもボードウィン家を継承することとなり、セブンスターズが代替わりを始める。

そしてカインも、人事部に呼び出されていた。

「カイン一尉。貴官の実績を鑑みて、異動を勧告する」

「は。受領します」

配属先が示された紙を受け取る。

そこには昇進についてと、配属先について書かれた書類を受け取る。この人事につい

てラスタルからもマクギリスからも聞いていなかった。なので全く心当たりのない人
事だ。

どこに飛ばされるのだろうかとうと警戒して目を通す。

「……監査局、特別監査顧問。ですか？ 申し訳ありません、聞き覚えのない異動先です
が説明をいただけるのでしょうか？」

「もちろんだとも。カイン・ベリアル特務三佐。職務は貴官個人による全てのギャラル
ホルンの監査だ。行く先も自分で決め、監査の期間も全て独自裁量を与える。MSの整
備と移動用シャトルの人員のみで構成された部隊を率いて監査を行なってくれ」

「二人、ですか」

「アリアンロッドの監査を一人でしたことを評価してな。監査結果を本部に伝えるだけ
で、行き先も期間も本部に伝える必要はない。先日までしていたように、本部を監査し
てもいい」

ある意味自由で、ある意味閑職に飛ばされたようなものだ。そんな失態をやらかした
かとも思ったが、これはカインが原因ではないと知る。

むしろギャラルホルン側の問題だと。

「本部や火星支部での腐敗のせい、でしょうか？」

「耳の痛い話だが、その通りだ。先日のエドモントンの事件のせいで武装蜂起を考える

者も増えるとギヤラルホルンは判断した。火星の弱小組織がギヤラルホルンに一矢報いたのだ。ヒューマンデブリを使えば自分達もできると驕る組織も出てくるだろう。その対処に追われる中、内側から崩れるわけにはいかん」

「わかりました。部隊はいつまでに選定すれば良いのでしょうか」

「詳しい内容はこちらの資料に書かれている。目を通してくれ」

「はっ」

人事が決まり、これからのことについて動き出す前に監査局の面々であるマクギリスとガエリオで集まっていた。これからは全員バラバラだ。

「俺達はセブンスターズだからバラバラになるとわかっていたが、まさかカインも誰とも一緒にならないとはな」

「カルタが悔しがっていたぞ。次は引き抜くって言ってたのにな」

「シユヴァルベにも出資していただいたのに申し訳ないです。監査局から出る時には地球外縁軌道統制統合艦隊に行かなければカルタ様に怒られそうです」

そんな話題を出したことから、次は適当に地球外縁軌道統制統合艦隊にでも監査に行こうかなと考えていたカイン。カルタに顔を出した方が良いだろうと直感が告げている。

「行く道が違ってても、これからも頑張っていこう。俺達はいっだって、この宇宙で繋がっ

ている」

「フ。ガエリオ、良いことを言つたつもりだろうが、私とお前は基本的に地球にいるのだぞ？」

「ぐ。カインは方々に顔を出すんだから、そう言うしかないだろ」

「休暇を合わせて、カルタ様とアルミリア様も含めて会いましょう。幼年学校からの腐れ縁として」

「ああ、そうだな。全員で会おう。約束だ」

マクギリスが拳を出したことで、カインとガエリオも拳を合わせる。

この別れからすぐ。宇宙は混沌に包まれた。

25 出自

この端末には324年分のログがあります。どこから再生しますか？

—— 畏まりました。では最初のログより、再生いたします。

そこはどこかの研究所。白衣の男達が様々な機械を操作していた。その動きはどこか必死で、まるで明日にでも死んでしまうからやり残しがないようにと自分達の全てを注ぎ込んでいるように見える。

そこに、金髪に金の瞳で野性味の溢れた髪型をしているのに緑色の軍服はしつかりと着込んだ長身の人物が入ってくる。その人物は中を一通り見渡すと、何かに落胆したのか溜息をつきながら近くの研究員に話しかける。

「まったく、馬鹿げているとしか思えない。いつの間にかこんな準備をしていたのか……。本人に許可を取らずにここまで進めるなんて、人類の生き汚なさを見せ付けられたよ」「人類は生き残らなければなりません。あんな機械チクシヨウに滅ぼされていいわけがないのです。ガンダム・フレームでも無理ならば、もう逃げの一手しかないでしょう。悪魔で不可能なら神を造り上げるしかない。天使を超える神を。……その時間がない

ので、可能性の種を放出するしかないのですが」

『「方舟計画」』。オレのクローンを水星まで逃がして、火星のようにテラフォーミングを自動機械オートマトンに任せる。その間にガンダム・フレームを超える機体の作成もCADにやらせて、作成が完了次第オレのクローンをワールドスリープから目覚めさせ、阿頼耶識システムを組み込み尖兵とする。……まさしく人間の屑だな」

記録媒体ではないタブレットに表示されている計画の草案を見て、金髪の男は反吐が出そうだった。

それでも人類のことを考えたら、計画を中止する判断を下せなかった。人類はいつ死滅してもおかしくはないのだから。

「おい。何でオレのクローンなのに女がいる？」

「ホルモンバランスを変更しました。いざという時にはアダムとイブになってもらうために」

「何で同一人物の遺伝子で人類相続をさせなくちゃならないんだ……。遺伝子異常でも起こるんじゃないのか？」

「さあ？ 実験データが足りません。それに神に最も近い男が後続人類の祖となれば、これ以上ない名誉でしょう」

「……」

研究員の、男を神だと信じている狂信っぷりに、思わず黙り込んでしまった。

男が本当に神ならば、取り零す命などなかった。今でも死んでいく人類の全てを救える救世主と呼ばれるはずだった。

だが彼はあくまでガンダム・フレームを上手く使えるだけの男で。

機械を壊すしか能のない、人間だった。

「……あんなMAを作った奴こそ、神なのではないかとオレは思うがね。これは人類に与えられた試験なのだと。それにしても被害が大きすぎる上に、神は既に死んだときた。これが終末の世という奴だろう」

「なら奴は悪神ですな。戦争を経た進化などロクなものではない。人間の行き着く先も見守ろうとしない神など、悪魔と何も変わらない。天使の名を与えた殺戮機械で虐殺を楽しみ、先にくたばる神など道化でしょう」

「問題はその道化が真の天才だったことだ。悪魔の名を騙り、悪魔に魂を売り払うようなおぞましいことをしても、まだ勝利を掴めないのだから」

男は悔しそうに自分の拳を握りしめる。

犠牲を払って、犠牲を払って、犠牲を払って。

まだ足りない！と非人道的なことに手を出して。

仲間を失い。故郷を焼かれ。義憤に駆られ。

また今も人間としての道を踏み外して、それでも人類が勝てるとは断言できなかった。

だから、人類を生き残らせるために、この方舟を送り出す。

「参考機体としてガンダム・フレームも載せるのか？」

「ええ。ASW—G—72アンドロマリウスを。ダンタリオンも高性能になりましたが、アンドロマリウスはそれを越す。人類が操れないほどに。今から適合率を上げるのも非効率ですし、パイロットがいない。あなたはバエルに適合しすぎている」

「アンドロマリウスは万能機だろうか？ オレの趣味ではない」

「あなたの感応波を活かす兵器を搭載できれば、戦力は増すんですがね」

「勘弁してくれ。頭に響いて戦闘に集中できなくなる。身体を全て推力と臂力に割り当てた方が速い」

「ええ、そのように。あなたに追従できるのはイシューとエリオンだけです。その二人すらあなたは引き剥がす。たった一人の彗星だ」

この持ち上げが、男は嫌だった。

今もMAは暴れている。自分の遺伝子が関わる計画だったので顔を出しただけ。

今地球で一番の権限を持つのもこの男だったために、この計画に承諾のサインを書いてまた戦場に向かうつもりだった。

「オレ達は、地獄に落ちるな」

「そうかも知れません。ですが、のちの人類はあなた方に感謝しますよ。カイエル」
「人類が生き延びるのならば、地獄に落ちる程度は瑣末なことか」

人類の救世主、アグニカ・カイエルは。

『方舟』が眠ったままであることを祈って、戦場に散っていった。

このログは323年と8ヶ月前の物です。

人類の希望を載せたプラント艦『方舟』は、水星へ着々と進路を向けていた。

人類を襲うMAも、コールドスリープした幼子は発見できなかったよう道中に現れることはなかった。

だが、機械が邪魔をしなくても、人類が邪魔をすることもある。

この時代の人間は末期状態だった。食料も空気もなくても、地球や火星のような星の上ではMAが来るからと宇宙へ逃げ出して。見付けた他の艦から全てを略奪すること
で何とか生き永らえているという倫理なんて失った時代だった。

これが宇宙海賊の起源だと推測される。

そしてこの『方舟』も同じように襲撃された。ガンダム・フレームがあっても操縦者

がないのであれば、海賊に蹂躪されることは当然の結果だった。人類は守るもの。

そうプログラムされた内部の機械達は悪意ある人間に対してあまりにも無力だった。全てが奪われる、その前に。

最大の不運は宇宙に出ていたMAの一機、ケルビムにその海賊が捕捉されていたことか。

MSもなく、阿頼耶識をつけた人間もいないことから全滅すると機械は判断した。

だがその時、奇跡は起こった。

誰も乗っていないはずのアンドロマリウスが動き出し、ケルビムと同士討ち。プラント艦も半壊しながらも水星に辿り着いた。

だが、自動機械が全て破損。テラフォーミングなど行なえず、新たなMSを生産することも不可能だった。

そして、生き残っていた希望の種も、たった三人にまで減っていた。五十人以上いた

のだが、そのほとんどが脳死となっていた。

機械は動けず。子供達も取り残されたまま、時代は移ろう。

このログは17年と1ヶ月前の物です。

「ハツハー！ やつぱりな！ 誰も手をつけてねえ水星ならお宝がたくさんあるって思ってたぜ！ 厄災戦の時も水星に目を付けた奴がいやがった！」

「お頭！ まだ使えそうなMSのフレームに、なんかガキがいますぜ！ しかも使えそうな機械もいっぱい！」

「エイハブ・リアクターが生きてるなら、同じ時代の機械も残ってるってわけか……。全部詰め込め！ ガキは売れそうだな。機械類は俺らのもん、命は金に変えてやる！ これで俺らは成り上がるぞ！」

そんな海賊達に回収されて。

最後の希望の種は、遙かな時を超えて、目を覚ましたのです。

ログを見終わったラスタルは、一人深い息を吐く。

水星の近くでここ二十年ほどで成り上がってきたジャンク屋。その摘発をした結

果、戦艦にはガンダム・フレームが動力として使われていて、今の技術ではありえない
プラント技術やコールドスリープ技術を保持していたのだ。

摘発の理由はイズナリオが過去に依頼した発注書を元に、人身売買の嫌疑があつたた
め。事実カインとジュリエッタを売り飛ばした組織に間違いなかつた。商人として律
儀だつたのか、伝票が残つていたので。

どうやらこのジャンク屋のリーダーは相当金にがめつかつたようで、何がどうい
う利益を生んだかしっかりと記録して、金儲けに全てを注いでいたらしい。

カインの出自を知つて、どう受け止めればいいのかわからなかつた。健康診断などは
ずつとしてきているので遺伝子には問題がないとわかつている。

それでも、三百年前の人間だとは思わなかつた。

ジュリエッタのことは、あるコロニーで攫つた孤児だとわかつた。再現しようとして
劣化したコールドスリープ技術と引き換えに手に入れた子供のようで、こちらも出自が
わかつた。

これをジュリエッタに伝えるかどうかは保留。

カインにはどうするか、ラストアルは即断した。

「伝えよう。これらは本来、カインの物なのだから。……まさか、子供達全員に名前を付
けていたとはな。律儀なものだ、アグニカ・カイエル……」

オーパーツとも呼ぶべき一つの機械。

そこにはカインと、しっかりと彫られていた。

エドモンソンの反乱から一年。

ジュリエッタは功績が認められて二尉となっていた。宇宙では特に経済圏からの独立運動が活発になっており、武装蜂起が多発していた。その鎮圧にアリアンロッドのエースとして獅子奮迅の活躍をしていた。

ただ、最近は余計な仕事が増えて苛立っていた。

「ジュリエッタ。今回も素晴らしい戦果だったではないか。私も鼻が高いぞ！」

「……ええ。イオク様もご活躍だったようで」

イオク・クジャンが士官学校を卒業して、正式にアリアンロッドに編入してきたのだ。しかも最近ロールアウトしたばかりの最新鋭機レギンレイズのカスタム機が与えられているため、天狗になっていた。

ジュリエッタもカラーリングこそ他のレギンレイズと変わりないが、スラスターなどはジュリエッタ専用にかスタマイズされていた。だがその事実を知らないイオクは、カラーリングされていることを自慢してくるのだ。

ジュリエッタは幼年学校の頃から培ったおべんちやらでイオクを躲し、ブリッジへ急

ぐ。ラスタルに呼ばれているのだ。

今回の戦闘報告ももちろんだが、他にも理由があるとわかっていった。MSデッキに新しいMSが納品されていたのだ。その姿を見ていたために、ジュリエッタは困惑していた。

そのMSは、ガンダム・フレームだったからだ。

(あの機体、誰がパイロットになるのでしょうか？ 相応しいパイロットがいらないような

……。外部から編入、という可能性も？)

ジュリエッタはそう思いながらスキップジャック級の艦内を進む。後ろのイオクの言葉は適当な相槌を返すだけだ。

(最近のラスタル様は、難しい表情が増えられた……。イオク様が入隊してから……。いえ、その前。三ヶ月前の、水星近辺で幅を利かせていたジャンク屋を摘発してから。あのジャンク屋に何かがあった？ ……こういう時こそ、あなたが側にいればいいのに。ラスタル様はいつだってあなたを案じているのに……)

胸のつかえを隠して、ブリッジの前の隔壁に着いた時にはいつもの軍人としての表情を浮かべていたジュリエッタ。入室すると、そこではラスタルの笑い声が響いていた。

久しぶりに聞いたラスタルの笑い声に、ジュリエッタは眉を顰める。『髭のおじさま』

でも来たのだろうかとも思ったが、そうではないらしい。

ラスタルが笑いながら肩を叩く長身の人物。背の高いラスタルよりも更に頭一つ大きかった。アリアンロッドの緑色の隊服ではなく、濃い青である紺色に近いギャラルホルンの隊服を着た人物は異様だった。

なにせ頭に、鉄仮面と呼ぶべき顔全てを覆う物を被っていたのだから。

後ろでイオクがその異様に驚き、ジュリエッタは別の意味で驚いていた。

(……本当に、そこに人間がいるのですか？ 私が何も感じられないなんて……)

ジュリエッタの力は、人に敏感だった。たとえ隠れていても人間がいれば確実に感じられる。近ければどういう感情なのかも把握できる。

だというのに目の前の、仮面の男からは無しか感じられなかった。

ジュリエッタとイオクが驚いていると、入室した二人に気付いた仮面の男の視線と、それにつられたラスタルが振り向いていた。

「おお、イオク。ジュリエッタ。鎮圧任務ご苦労。報告書を後で提出してくれ」

「はっ」

「で、本題だ。今日付けでアリアンロッドに編入したレメゲトン・クロウリーだ。階級は特務准将。場合によって私と同等の権限を持つ」

「特務准将？ そのような階級、聞いたことがありませんが……」

「アリアンロッド内のみのも階級だからな。他の場所では准将で通す」

イオクの質問にも平然と返すラスタル。

レメゲトン・クロウリーと紹介された男が一步、踏み出す。

『紹介に預かったレメゲトン・クロウリーだ。できればクロウリーと呼んでほしい。ラスタルにもそう頼んである』

「なっ!?？」

「貴様っ！ ラスタル様を呼び捨てとは、どういう了見だ！」

イオクと同意見というのは癩に障ったが、ジュリエッタも同様の思いを抱いた。

アリアンロッドの司令であり、唯一の主君。その人物を呼び捨てにするこの男は何者なのかと。

明らかな電子音による加工声。誰にも正体を話したくないと意思表示しているようだった。鉄仮面はおろか、肌がどこも露出していない。どんな人物なのか推察するための情報が何も見えてこなかった。

ジュリエッタの能力でも感じ取れないとなると、お手上げだ。

『イオク・クジャン。何かおかしいことはあったか？ 私は特務階級のおかげで一時的に中将と同じ権限を持つ。ラスタルと階級は同じだ。もちろんアリアンロッドの司令としてワントップであるのは彼であり、彼の命令を私も聞こう。だが、それだけだ。旧

友である彼を呼び捨てにして何か不便はあるのか？」

「セブンスターズでもない者がラスタル様と対等なはずがないだろう！ 旧友だとして、公私は分けるべきだ！」

『……それを貴官が言うのか。もちろん公の場ではエリオン公やエリオン中将と呼ぶとも。だが今は作戦行動中でもないだろう？ 久方振りの親交の場に、敬称など無粋ではないか』

「ここはアリアンロッドの旗艦、スキップジャック級のブリッジだぞ！ プライベートなはずがないだろう!!？」

イオクが大きな手振りで反論する。

クロウリーはそれを無視して、隣のラスタルの方を向いた。

『随分とお堅い部隊になったな？』

「これでも秩序の番人だからな。皆の者も聞いてほしい。私とクロウリーの物言いは気にするな。彼が砕けた口調であれば、さして重要な時ではないということだ。四六時中張り詰めていても疲れるだけだぞ？ オンオフはしっかり分ける。それをクロウリーは実証しているだけだ」

「「は」」

そう言われてしまえば頷くしかない。

イオクは悔しそうにしていたが、セブンスターズの強権が使えないのならば反論もできやしない。

イオクの階級は三尉でしかないのだから。

「そうだ、クロウリー。アレの試運転は良いのか？」

『しても構わないのか？ 作戦が終了したばかりだろう』

「取り締まりなどは他の艦にやらせている。お前も出撃することがあるのだから、試運転は終わらせておけ」

『了解した。司令官殿』

クロウリーはブリッジから出ていく。

ジュリエッタはアレというものを直感でわかっていたが、ラスタルに聞いていた。

「ラスタル様。アレというのもしかや、ガンダム・フレームですか？」

「そうだ。ガンダム・ゲートイア。奴の専用機だ」

しばらくして、全体的に黒い機体に所々関節部などが紅いガンダム・フレームが飛び立つ。

その漆黒の機体は全体的なフォルムが分厚く、重装甲を思わせる機影だった。背中のスラスターには隣接するかのよう歪な羽根が生えており、それが八枚も見えた。

装備も左腕にジョイントされた大型のスクエアシールドと、右腕に装備された大口徑

のアンチマテリアルライフル。腰には接近戦用のバスターソードが備え付けられている。

その速度は最新鋭機であるはずのレギンレイズを優に超えており、そのスラスターが描く蒼い軌跡に、ジユリエッタは思わず呟いた。

「綺麗……」

その感想の後は、その試運転をずっと目で追っていた。

設定されたルートを駆け抜ける様はとて重装甲MSの動きには見えなかった。ガンダム・フレーム特有の出力に任せて加速し続けているのだろうが、それでもそのフォルムからすれば信じられない移動速度だった。

速いだけではなく正確にポイントを通過していく。そのレコードはアリアンロッドでもブッチギリの記録。

その結果に満足したのか、ラスタルは次の指示を出す。

「ダミーバルーン射出。アサルトビットの性能検査を行う」

「アサルトビット?」

「見ていればわかる」

ダミーバルーンがいくつも出来上がり、不規則な回避行動を取り始める。訓練用にしては高級な物的だった。

その数優に十六。バラバラに配置されたそれは距離も方角もどれも同じものなどなかった。それを撃破するにはジュリエッタも時間がかかるだろうなと考える。

それを。

『アサルトビット、射出』

ガンダム・ゲートィアの羽根が分離する。それは四方八方に飛び散り、次の瞬間。

羽根の先から弾丸を射出し、同時に全てのダミーバルーンを破壊していた。

「自動子機!?」 ラスタル様、自律プログラムの搭載はギャラルホルンにおいて禁止だったはずです!」

「狼狽えるな、イオク。アレはプログラムによる自動操縦子機ではない。ジュリエッタならわかるな?」

「はい……。アレは、あの人の感応波で動かしているのですね? 私達が機体の制御を
しているように」

「そうだ。アレは全てクロウリーが自力で操縦している。アリアンロッドの精鋭なら理解するだろう。クロウリーの實力を。私があの男を信用する理由を」

歴戦のパイロット達が、力強く頷く。彼らも機体制御の一部を感応波を読み取るシステムによって動かしているが、それはあくまで身近な自分の機体のみ。

離れた場所の物体を、八個も同時に動かせないのだ。

「……カイン特務三佐でも難しいでしょう。私にはできません」

「バカな!?? カインにもできないことをあの男はやって見せたというのか!??」

「カイン特務三佐も機体制御はズバ抜けていましたが、遠くの物体を動かすことはできなかつたはずです。あの男は一体……?」

ラストルはジュリエッタの様子を見て、安堵の息を吐いていた。

全ての目的を達成できたことをクロウリーに伝えて、戻るように伝える。

コックピットの中で、クロウリー自身も息を吐いた後、これからも気を抜かないように左手の操縦グリップを握る力を強くしていた。

26 アリアンロッドの日常

クロウリーがアリアンロッドに編入してからしばらくして。

クロウリーのことが話題にならない日はなかった。

食事を徹底して自室で摂るため、素顔がわからない。怪しい。

准将、または中将相当にしてはかなり気さく。わからないことは聞けば答えてくれる。階級相応に博識。

任務中でなければずっとガンダム・フレイムのコックピットにいて何かを弄っている。その時は何を話しかけても反応がない。怪しい。

やたらMSの操縦技術が高い。シミュレーターではグレイズやゲイレールを使ったものの歴戦のパイロットが惨敗。曰く慣れているとのこと。

ずっとアリアンロッドにいるわけではなく、時たまフラリといなくなり、一ヶ月帰ってこないこともザラにある。怪しい。

食事を食べた後は食器などは本人が片しに来る。その際炊事係に「(さすがアリアンロッドだ。良い食材と良い腕の職人が集まっている)美味しかった」と告げたために食堂の者からは評価が高い。

経歴を聞いても何も答えてくれない。アリアンロッドの前には機密保持局にいたので戦績などはデータに残っていないのだとか。怪しい。

女性の扱いに慣れているのか、ラスタルの友人だからか。とにかく女性を立てることが多い。対応も紳士的で、女性隊員からの評判はむしろ良い方である。この間も言葉巧みに女性の荷物を運んだという。

准将にそんなことはさせられないと女性隊員も断ったのだが、気付いた時には荷物は全て持たれて笑顔で談笑していたという。そんな恐れ多いことをしたと気付いたのは全てが終わってからだという。怪しい。

書類仕事が速く、彼に提出した書類は一日を経たずして纏め上がる。それどころか他人の書類も終わらせて、ミスがあれば指摘してくる。文官顔負けの速度と精度だった。

顔を隠している理由を聞くと、大火傷をして見せられる顔ではないから。声の加工も補助器を使って話しているため。顔は絶対見せられないとのこと。怪しい。

「という調査結果が出た！ この結果から貴官はアリアンロッドに相応しくないと判断する！ 退艦命令を下したいが、一方的では貴官も承服しないだろう。そのため、ここに私イオク・クジャンがレメゲトン・クロウリーに決闘を申し込む!!？」

『……確か、そのようなことが以前地球でもあったと記憶している。アレはセブンスターズ同士のいざこざだったか……。それも貴官から切り出した案件だったはず』

「返答はいかに!?？」

『うん? 受ける意味がないだろう。私を退艦させよという声が過半数にも昇るのならばその決闘も受けざるを得ないが、私はそのような声を聞いていない。これでも私なりにアリアンロッドの者達とは良い関係を築けていたと自負していたが』

イオクの決闘騒ぎを一蹴するクロウリー。

決闘なんて双方の合意がなければ成立しないものだ。しかもクロウリーとしてはイオクに飲ませたい条件があるわけでもない。

それに実際どう思っているのか、アリアンロッドの者に聞いてみた。本当に嫌がられているのであれば決闘を受けるだけ。そして返り討ちにすれば良いのだ。

「クロウリーの旦那? 顔隠してるのはまあ、怪しいが……。何日か経てば見慣れちゃまったし。迷惑もかかってないんで」

とは一般兵。

「あ、クロウリー准将! また今度書類仕事について教えてください! あの書類、本部にすつごい好評でした! 本部の方もあの形式を正式形式にしようと連絡が」

『わかった。空いていればいつでも手伝おう。それとウィーンゴールヴにもアレを雛形にするのは許可すると返答を』

「はい!」

とは女性文官。

「准将！ また模擬戦やりましょう！ いつ空いてます？ 今？」

『すまない、今は聞き取り調査をしている。一尉はそんなに私と模擬戦がしたいのかな？ 実力ならばジュリス二尉も変わらないと思っっているが』

「あー、ジュリエッタもタイムマンなら良いんですけどねえ。視野の広さ、部隊での即応への対処に関しては准将が群を抜いています。エースとはなんぞや？ という回答を頂けたようなもんですよ。なのでまた二中隊ほどと訓練でもと」

『なら時間を調整しておこう。都合の良い時間を申請しておくように』

「やっ！」

とは中隊の部隊長。

「クロウリー准将、ですか。確かに怪しいですし、ラスタル様を呼び捨てにするのは如何なものかと思いますが……。公私の区別は付いていて、作戦中は一貫してラスタル様を上司として敬っています。MSパイロットの腕は疑いようもなく、様々な事務仕事も速い上に隊員から良い評価を聞きます。……何故だかイラッとしますし、模擬戦で勝てないことは純粹に悔しいですが、追いつくほどのことではないかと。ラスタル様の信頼も厚いようですから」

「お前もか、ジュリエッタアアア！」

「というか、決闘？ イオク様が？ 私でも中隊を組んでようやく勝てるのに、一対一で勝てると思っっているのですか？ 寝言は寝てから言った方が良いかと。あの方はどのような出世をしたかは不明ですが、准将までなった方です。MSパイロットをしているということは士官学校を卒業したばかりのイオク様と戦歴が隔たっていますよ」

とはジュリエッタ。ラスタル腹心の部下までもクロウリーを擁護したことにイオクは悔しがった。

そして、それを聞いていたクロウリーが廊下の角から出てくる。今までは一緒に聞いていたが、イオクに言われて隠れていたのだ。

『君がそれほど私を買ってくれていたとは思わなかったよ。ジュリス二尉』

「……隠れていたことに気付かないとは、不覚です。そして女性の話を盗み聞きしているとは、評判の紳士さが感じられません。私はそのような扱いを受けた覚えがないのですが？」

『ラスタル司令から、君は戦士として育てるようにと言われている。君を次のアリアンロッドの旗頭にしたいようだ』

「……私を？ ラスタル様が？」

『市井では『革命の乙女』が一大ブームとなっている。今でも低い立場である女性を男性と同じまで上げる運動が多くなっているのは君も知っているな？ ……男女の性差に

よる不平等は歴史上何度も問題になってきているが、今もそんなことで人類は踏み止まっているとはな。厄災戦以後は子供を産める女性こそが人類の希望として持て囃されていたというのに。歴史は循環するようだ』

「ハア」

クロウリーの自分への態度を咎めたら歴史の話になっていたために、ジュリエッタは生返事をしていた。

それにしても初耳だったのはアリアンロッドの旗頭にジュリエッタが添えられるという話。ジュリエッタはそういう話は一切聞いていなかった上に、そういう教育がされているわけでもない。

女性の権利が低いのは特に宇宙だと顕著だ。ヒューマンデブリだとか労働層だからとか関係なく、女性というだけで酷い待遇を受けるということが散見される。

ギャラルホルンはまだマシなのだが、他はそうはいかない。

『事実、ギャラルホルンでも女性ながら上に立つ者は少ない。軍隊がそういう場所だからと言ってしまえばそれまでだが、ギャラルホルンも経済圏からモデルケースとなるためにせっつかれているのが現状だ。女性がギャラルホルンでも出世できるとなれば余計な暴動が減るからな。経済圏はその辺りはギャラルホルンと足並みを揃えるつもりがあるらしい。カルタ・イシユー准将も頑張っているが、それだけでは足りないトラス

タル司令は考えている。そこで君だ』

「アリアンロッドというギャラルホルン最大規模の軍事力を持つ部隊で矢面に立つパイロット、ということですか」

『その通りだ。政治に利用してしまうことになるが、君は今まで通り任務をこなせば良い。君の場合は孤児だということも大きな注目の的となるだろう。……煩雑な視線も増えるだろうが、それがひいてはギャラルホルンのため、ラスタル司令のためになると思つて我慢してほしい』

クロウリーは誠意を持つて頭を下げる。准将という立場で一士官にそこまでするかかと驚いたジュリエッタは、自分が頭を下げさせているのだとわかつてすぐに頭を上げるように懇願した。クロウリーも他の者に見られたら困ると思つたのかすぐに頭を上げた。

そして、ジュリエッタは純粹に感じたことを聞き出す。

「あの。孤児でも出世できると宣伝したいのであれば、カイン・ベリアル特務三佐はどうなるのでしょうか？ 彼も孤児ながら一佐待遇まで駆け上がった方だと思いますが」

『ああ、彼か。彼の場合はギャラルホルン内に敵が多くてな……。監査局という仕事柄仕方がないのだが、彼は更迭させた者が多い。それで推しづらいとラスタル司令は言つていた』

「そう、ですか。私以上の適任だと思ったのですが」

『ふむ。確か彼とは幼年学校で知り合ったのだとラスタル司令が言っていたな。所属する部隊が異なるというのに、存外信頼しているらしい』

（この人でもカインと私、ラスタル様の関係を知らない……？ ラスタル様の旧友だというのに？ 『髭のおじさま』は知っていた。むしろ指導していたこともあった。でも同じギャラルホルンのこの方が知らないとなると……。この方、何者なの？ それとも、イオク様の前だからそういうことにしているだけ？）

ジュリエッタはクロウリーの言葉に困惑していた。自分達の関係性とどう関わることかわからず、後でラスタルに聞いてみようと思ったジュリエッタだった。

一方イオクはクロウリーとジュリエッタの話の内容がわからず、頭の中で整理しようとしていて聞き逃してついていけなかった。

宿敵のカインの名前が出たのはわかったが、どう繋がるのかわからずに困惑しているのはジュリエッタと同じだった。

「ジュリエッタ、貴様まだカインのことを調べているのか？ 優秀なことはわかるが、同じ部隊に入れさせたくはないぞ」

「階級は上ですよイオク様。それにアリアンロッドの戦術パターンを増やした人物です。尊敬こそすれど、疎う理由はありません」

「やけに肩を持つな……。幼年学校の頃も二人でシミュレーターの訓練をしていたし、ジュリエッタはカインが好きなのか？」

「……ハア!?？」

イオクのいきなりの発言に、ジュリエッタは顔を赤くさせる。頬どころか額や耳の先まで真っ赤で、それはウブな少女のようだった。

そのような女性らしい仕草を見せたことがなかったジュリエッタにイオクは驚く。ジュリエッタと言えばリアンロットに入りたくていつも必死な人物だった。時間があれば訓練に時間を費やし、かと思えば時折空をぼおつと眺めていたり。

目標も一つで、ずっと頑張り続ける軍人の鑑のような子供だった。まるでそんな手本を知っているかのように。

イオクからすれば凄い人物という印象が強くて、一人の女性だという認識がかけていたようだ。

なんとなく思ったことをポロリと溢したら、まさかのガチ照れに逆に驚いていた。

「だ、誰が誰のことを好きだと!?？ イオク様は脳までおかしくなりましたか!?？」

「待て、脳までと言ったか!?？ まるで脳以外も悪いところがあるようじゃないか!?？」

「

「その目元の赤い刺青はセンスないなと常々思っていますか!?？」

「このオシャレさがわからないとは、猿か！ センスのない非人間め！」

「軍人にオシャレが必要だと!?? ワンポイントのチャーミングさと痛いオシャレを勘違いした人にセンスを説かれたくないですね！」

「女つ気の欠片もない貴様がカインに恋などと私の目が節穴だったわ！ それにカインはあんな化け物染みていてもセブンスターズに追い縋る出世株だからな！ さぞモテて貴様など眼中にもないだろうよ！ 猿が人間様に恋をするはずもないか！ フハハハハ！」

「おや、それを言いますか！ 幼年学校や士官学校で女子生徒に『他のセブンスターズの方々ならまだしも、タレ眉イオクはなあ……』と言われていたイオク様が偉くなったものですねえ！ きつと素敵な彼女がいらつしやることでしょうか!!?」

「な、何!?? 私はそんな風に思われていたのか……っ!?? まさかのマクギリス・ファリド以下!??」

「……出自を除けば完璧超人ですよ？ ファリド公」

「バカな!??」

そんな容赦ない応酬が交わされて。
置いていかれたクロウリーが一言。

『……君達は仲が良いな？』

「誰が!?？」

『その息の合ったところが』

「不快です！ 誰がイオク様なんかと！」

「まったくだ！ こんな猿と息が合うなどと！」

二人してプンスカしていたところに、一人の足音が聞こえる。結構な大声で話していたので近くを通りかかった者に聞かれていたのだらう。

クロウリーはその人物の接近を知っていたが二人には伝えなかった。

「面白い話をしているな？ イオク、ジュリエッタ」

「ラスタル様!?？」

クツクツと笑うラスタルが現れる。ジュリエッタは敬礼をしようとしたが、軽く手を振ってやめさせる。ジュリエッタには特に目をかけているので、廊下で会ったくらいで一々そんなことをされても困るのだ。

やめると言っても軍規なのでジュリエッタはやめない。特に他者の目がある場所では。

「そうかそうか。ジュリエッタはカイン特務三佐が好きなのか。デブリデータを貰ったおかげでプライベートトナンバーは知っている。報告しておこう」

「や、やめてください！ あの、その！ 兄！ そう、兄のように慕っているだけですの

で！」

「うん？ そうなのか？ クロウリー、どう思う？」

『……若い娘を揶揄うのは老いた証拠だぞ。ラストル』

「それは困るな。まだまだ俺は現役なのだが。二人が結婚するならドレスやら式場やらの手配が必要だと思ったのになあ」

「話が飛躍しすぎです!!? それにラストル様もまだお若いです！」

「かと言つて俺とカインならカインを選ぶだろう？」

ニヤリと笑つてラストルは問う。クロウリーがやめろと言つても意味がないようだった。

そう問われたジュリエッタはボンツ！ と聞こえてきそうなほど頭の中から湯気をだし、小さく頷いた。

「……ら、ラストル様は父のような方なので。ど、どちらかを選ぶとなるとどうしても……」

「よーし、酒でも飲むか！ クロウリー、付き合え！」

『待て!!? 何故そうなった！ もしや今の会話の前から酔っていたわけではないだろうな!!?』

「娘が恋をした。それだけで親としては祝福すべきだろう！ カインの人格は俺も認め

ている。今日はもう任務も書類仕事もないからな！」
『ああ、もう……！ アリアンロッドの司令も、ただの親バカか！』

上機嫌に肩を組んで去ってしまうラスタルとクロウリー。

まるで確定事項のように話が進み、頭を抱えてその場に踞るジュリエッタ。

カインに恋していると確信したジュリエッタに、あんな化け物を好きになるなんて趣味が悪いなど冷たい視線を送るイオク。

こうしてアリアンロッドの何気ない日常が過ぎていく。

こんな日は貴重だ。いつ暴動や海賊の襲撃があるのかわかったものではないのだから。

原作二期 (P. D. 325)

27 明朝を拝めない者達・1

ヴィーンゴールヴ本部にて。

まるで祭壇のような、たった一機だけそこに置かれた格納庫。セブンスターズのそれぞれの家紋が記された扉と、ギヤラルホルンのシンボルが描かれたその場所は、ヴィーンゴールヴでも一番大事な場所だった。

そこに立つ、純白の天使のような一対の羽のようなスラスターが着けられた機体。ギヤラルホルンの象徴とも呼べる伝説のガンダム・フレーム。

アグニカ・カイエルが搭乗した最初の一機。ガンダム・バエルがいた。

そのコックピットに手をかけているのはカインだった。カインは本部の監査の名目で P. D. 325 年の初頭、ここを訪れていた。

バエルの整備は毎年行われてきた。この機体を起動させられればギヤラルホルンの全権を得るといふ眉唾な噂もある機体だ。起動させるためと、神輿として最低限のことはできるようにと整備だけは続けられてきた。

その整備と研究は正しい予算内で行われているか監査するという名目で、カインはこ

こを訪れていた。

本当の目的は、この機体に宿するというアグニカ・カイエルの魂が本当にあるのかを調べるためだった。

ラストルから自身の出生を聞いて、腑に落ちることばかりだった。『方舟計画』について臆げながら記憶にあり、ガンダム・フレイムは『方舟』を守るために全員で動かしただけのことでもあった。

MAは自分達にとって不倶戴天の敵であり、同胞を殺し尽くした仇敵だ。そのことを思い出してカインは怒りに震えたが、そのMAはどこにもいない。であれば、この怒りをぶつける相手もない。

怒りを鎮めながら機体に触れるが、それはある意味予想通りだった。阿頼耶識システムはあくまで機体と人体を？くだけのもので、魂の保管をするようなものではなかった。いくら人体と機械を一体化させようと、魂までは繋ぎ止められなかったようだ。

そもそも、三百年以上経ってしまっている。今の医療技術によつて百年以上人間が生きられるようになっていても、流石に三百年は長すぎたようだ。

微かな残り香は感じて、もう語りかけることはできなさそうだった。

「アグニカ……。いや、父さんとも呼ぶべきなんだろうか。あなたがどんな気持ちで『方舟』を送り出したのかわからない。勝手に子供を作られて良い迷惑だっただろう。」

いつかはMAを倒すための兵器になるクローンなんて、あなたには疎ましいだけだったのかもしれない。けど、オレはこの時代に目覚めて良かったと思ってる。だから、ありがとう父さん」

それだけ伝えて去る。

ギャラルホルンへ真実を告げる理由もない。特に魂なんて実証の難しいものだ。魂が宿っているかどうかなんて重要視している者もないだろう。

カインが部屋を出た後。

バエルのツインアイが動いた、かもしれない。

今回の本部の監査に合わせて、セブンスターズの定例会合が行われていた。最近の宇宙での海賊の活発な活動が問題になっており、そこへマクギリスが火星へ本部の部隊を送ることを提案していた。

今地球圏は火種が広がっておらず、コロニーや宇宙海賊の問題が大きくなってばかりだ。エドモントンの一件でヒューマンデブリ、阿頼耶識システムの有用性を示してしまつたためにそれらを利用して武力で訴えかける組織が急増していた。

また、MSがなければどうにもならないと様々な宇宙の端に行つてジャンクMSを拾い、修復して使用する武装集団が増えた。結果、アリアンロッドは大回転の大忙しと

なっていた。司令であるラスタルと第二艦隊司令に就任したイオクがセブンスターズの定例会合に欠席することがしばしばあるほどだ。

今回は二人とも出席したが、明日にはもう宇宙へ上がる予定だった。ラスタルはジュリエッタを連れて孤児院へ焼肉パーティーへ向かう。

そんな中セブンスターズ三羽鳥と呼ばれているマクギリス、ガエリオ、カルタはカインも含めてヴィーンゴールヴの一室でお茶会をしていた。宇宙も地球でもかなりの混乱が生じており、四人が纏めて休暇を取れないので定例会合に合わせてカインが休暇を取ったりここへ職務として来ることで時間を合わせていた。

会話のタネは、先程の定例会合で決まったことだ。

「マクギリス、随分と突拍子もないことをするじゃない。本部の部隊を動かして圏外圏の、それも火星近辺の海賊退治なんて。エリオン公が許可したからいいものの……」

「まったく。いや、言い分は最もなんだぞ？　アリアンロッドの疲弊具合を鑑みて、本部の練度を落とさないための実戦経験を積む。本部の守備隊は精鋭が集まっているとはいえ、小さな紛争でもないし駆り出されないからな」

カルタとガエリオがマクギリスへ苦言を呈する。いくらアリアンロッドが大変だからといってアリアンロッドの活動圏内に割り込む行為であり、かなりの越権行為だった。

本部の練度が心配だというのも本音であり、アリアンロッドへ休暇を与えたいというのも組織を維持するための本音だ。

だがカインからすれば、火星にいる鉄華団と共同して事を成したいのだというマクギリスの真意がわかっていた。あとは火星で橋頭堡を作り上げて活動範囲を広げたいとか、そういう理由だと。

ラスタルもその真意に気付いているだろうから、カインがすることは黙秘することだけだ。お茶を飲んでいるだけ。

「案の定、イオク・クジャンが突つかかかってきていたし……。あの坊やも成長しないわね」

「私は目の敵にされているからな。お互い当主を引き継いだためにこうやって定例会合で顔をあわせるから接触禁止令は解除になったが、これが目に見えていたから決闘の条件にしたのだが……。全てご破算だ」

「アルミアにはまだ有効なんだからいいだろ。それだけでもお前が身体を張った理由はある」

「妻を守るのは当然だろうか？」

そのマクギリスの言葉にカインは何も言わなかったし、カルタが悲痛な表情をしたことを見過ごした。

マクギリスとアルミリアの婚約が正式に成立しても、カルタはまだマクギリスを諦められないらしい。

マクギリスのアルミリアに対する愛は本物だ。だからこそ、この人間模様には何も口を出さなかった。

「お前らの仲が良好なら何も言わないさ。カイン、お前は今回の作戦に参加するの？」

「

「最近MSの戦闘を行なっていないので本部より参加するよう言い渡されました。つまり、マクギリス様の名指しですね」

「マクギリス……。それは横暴じゃないかしら？ そんなことをしていいのなら、私もカインを引き抜きたいのだけど？」

「

「監査局は本部預かりだ。それにカインの戦闘能力は折り紙付き。もしもの際の保険のようなものだ。私は本部を離れないからな」

カインは特別監査顧問になってからシユヴァルベに乗って戦闘を行なったことはなかった。カインの実力が知れ渡っていることもあるが、セブンスターズでも失脚するとわかった一般隊員や役職付きは監査局に大仰に反抗することをやめたのだ。

事実様々な場所で鎮圧活動が多くなっており、腐敗にかまけるほど暇ではなくなっているということも大きい。

カインも戦場から離れて久しいので、この辺りで錆を落としてもらおうとマクギリスは考えていた。それに内部の腐敗はカインがかなりの場所を巡ったのであらかた潰し切ったということもある。

だが、今のカインの身分は便利なのでマクギリスもラスタルもこのままにしておこうと考えていた。

「あー、相手って宇宙演習の時の『夜明けの地平線団』だったか？俺達に負けてから更に規模を増やしたらしいぞ？」

「地球圏には全く顔を出さなくなつたわね。どれだけの相手がいるのかも不明よ。昔は神出鬼没とまで言われていたのに。どこかの誰かさん達に分隊を壊滅させられちゃつたからかしら？」

「ギヤラルホルンが大々的に士官学校生が壊滅させたと宣伝したからな。だが、そのせいで圏外圏は危険になってしまった。圏外圏の民からギヤラルホルンの信頼を失うのは避けたい」

「だからつてたつたの三隻で向かいますか……」

カインとして文句があるとしたらそこ。明らかに戦力が足りていない。いくら鉄華団に力を借りるとはいえ、戦力比が明らかに釣り合っていない。

マクギリスからすれば全て鉄華団とカインが潰すとも考えているのだろう。

カインはやれと言われればやるが。

「ここを空にするわけにはいかないのな。カイン、頼んだぞ」

「了解致しました。できる限りはやりましょう。つきましては、先日提出しました新装備のテストも兼ねたいのですが」

「ああ、アレか。本部の技術課が試したいと言っていた新装備群。構わん、好きに使うといい。許可を出しておこう」

「ありがとうございます」

「新装備？」

カインがマクギリスに許可をもらった新装備。それがガエリオには気になったようだ。

本部の技術課が提案する装備は、基本厄災戦当時のデータを再現しようとするものばかりだ。ガエリオが今キマリスに施している地上用の追加脚部も本部の技術課の提案によるもの。

カインはタブレットにその新装備のデータを表示してガエリオとカルタに見せる。そのデータを見ていった二人は渋い顔をしていた。

「これ、使えるのか？」

「使えますよ？ 質量の関係で完全に宇宙専用の追加装備ですが」

「カイン。この実証データが取れたら私にも頂戴。私の部隊でも使用するわ」

「確かに防衛でも使える装備ですね。マクギリス様、構いませんか？」

「もちろん。多大なる戦果を期待する。カイン特務三佐」

「は。期待に添えてみせます」

お茶会を解散した後、マクギリスが鉄華団に連絡を取ると鉄華団も『夜明けの地平線団』に火星で襲われたという。渡りに船であり、戦力を派遣することを伝えて協力関係が構築された。

カインもマクギリスの腹心の部下である石動いするぎと一緒に火星に向かった。

火星に着いて鉄華団と面会した際、説得は石動に全て任せてカインはそこにいただけ。今回の作戦を主導するのはヴィーンゴールヴ本部であり、カインは保険でしかない。折衝などは関わらなかつた。

石動は相手に悟られないために部隊を二つに分けて、挟撃作戦を取ることにした。鉄華団には矢面に立つてもらうことになったが、それを団長のオルガは承諾した。

「こちらはお願ひしている側だが、構わないのか？」

「指揮権はこっちにくれるんだろう？ ならそこまで問題じゃねえ。それにアンタがいるならその無茶なお願ひって奴も聞き入れてやる。この一回こつきりだがな」

オルガの視線の先にはカイン。付き添っただけで話題を振られるとは思っていない

かった。

「団長さん。オレが何かしたのでしようか？」

「何って……。ミカの治療してくれただろ。こっちも『夜明けの地平線団』には襲われてるし、また襲われちゃかなわねえ。奴らの知名度から倒す価値もあるし、こっちにも利益はある話だ。んで、俺達は恩義には報いる。それだけの話だ」

「そうですか。義理人情に厚いとは、『革命の乙女』も見る目があるようで」

カインの存在がこの共闘を後押ししたとなれば、それだけでここにきた意味があるというものだ。マクギリスはこれも考慮してカインを送ったのかもしれない。

ギヤラルホルンと鉄華団の話も纏まったので帰ろうとしたカインだったが、その通路の途中で三日月とアトラが反対側からやってきた。

「あ、ライオン」

「……だからライオンはやめてくれ。カイン・ベリアルだ」

「あれ？ この前は違う名前じゃなかった？」

「カインが本名だ。モンターク商会では本当の名前を名乗るわけにはいかない」

「こんにちは、カインさん！」

三日月の愛称呼びに、カインは訂正を求めた。様々な偽名を名乗ってきたが、ライオンだけはどうしても受け付けないのだ。

ライオンとは言ってしまうえばアグニカ・カイエルその人。カインは自分の出自を知ったからこそ、ライオンとは呼ばれたくなかった。自分のことをライオンの紛い物、虎とかその辺りだろうと思っていた。

アトラは三日月の治療をしたためか、かなり好意的にカインのことを捉えているようだった。今も笑顔で挨拶をされた。

「こんにちは。君は確か鉄華団の炊事係だったね。名前を聞いても？」

「あ、そういえば名乗ってなかったかも。アトラ・ミクスタです」

「改めて、カイン・ベリアルだ。マクギリス・フアリド准将の部下としてここにいる。今回の戦闘にも参加する予定だ」

「ねえ、アトラ。准将ってどれくらい偉いの？」

「さあ？　でもすつごく偉いんじゃない？　だってセブンスターズでしょう？」

「ふーん。チョコってそんなに凄かったんだ」

三日月の愛称呼びは変わらないらしい。カインもそれを個性と捉えて深く言及しないようにした。

マクギリスも気にしていないどころか、三日月をやたら気に入っているので変に訂正しなくていいだろうと判断。ライオンと呼ばれるのは本当に嫌だったが。

「右腕と右目、変わりはないか？」

「ん、ああ。あんまり動かないし、あんまり見えないけど変わんないよ。バルバトスと繋がれば前と変わんないし」

「そうか。……君は、アグニカ・カイエルになるなよ」

「誰？ それ」

「ガンダム・フレームと一つになって、笛を吹き続けて。望んだ世界を見られなくなった偉大な人の名前さ」

「ふうん？ バルバトスと一つになったら農業もできなくなるし、アトラを慰められなくなる。だからいいや」

「み、三日月っ!?」

アトラが顔を真っ赤にして、しれっと答えている三日月の顔を見て。

いきなり桃色空間が出来上がっていたことにカインは辟易としていた。

カインの周りはマクギリスとアルミリアといい、カルタといい、すぐにこういう空間を形成する。

カイン自身は作りたくても作れないのに。

だが、彼がアグニカを目指さないのは良いことだと頷く。

「人が人のままである世界。アグニカもオレも、作れなかった。でも、その結果こうして産まれる関係もある。……君達の未来が明るく照らされていることを、祈るよ」

「俺達はみんな、オルガの目指す場所へ走るだけだよ」

「そうか。前を見過ぎて、隣や後ろの誰かを蔑ろにしないように。アトラさんも彼の手をよく握っておくと良い。やりたいことや目標ばかりに目を向けていると、身近な大切なものを見逃してしまう」

「そんなもん？」

「ああ。オレはそうやって、後悔してきた。もう少し手を握ってやれば良かったと思ってる。少し歳上からのお節介だ」

カインが実感を込めてそう言うと、アトラはうーんと考え込んでしまう。

そして「あ」と何かに気付いたような声をあげた。

「もしかしてカインさんって、好きな人と離れ離れなんですか!?!?」

「……あー、そうだね。別に死に別れをしたわけじゃないが、あまり言葉を重ねてこなかった。今も寂しい思いをさせている、と思う。だから、近くににいるのならできるだけ寄り添っているべきだ。特に戦闘に身を置いているのなら、尚更に」

「死んじやったら、手も繋げないか」

「そう言うことだ」

カインがそう言うと、三日月はアトラの手を握る。右手で握っていたので握力はあまりなかったが、それでもしっかりと繋がっていた。

「ライオンも、その人を泣かせてるなら抱きしめてあげれば？　それだけで良いんじゃない？」

「……殴られそうだな」

「大変なんだね。んじゃ、戦いになったらよろしく」

二人は手を繋いだまま行ってしまう。いきなり積極的になった三日月に動揺したのか、アトラは口をパクパクしたまま三日月に引き摺られていった。

カインも若い二人を守るために、艦に戻ってシユヴァルベの調整に戻ることにした。海賊退治は十二時間後。

28 明朝を拝めない者達・2

鉄華団とギャラルホルンの共同部隊は『夜明けの地平線団』の首魁がいるとされる艦の捕捉に成功していた。追いつくまでの間はパイロット達は休息に充てて戦闘に備えた。

肉眼でも戦艦を把握できる間合いに入った時、鉄華団とギャラルホルンからすれば誤算となる事実が発覚した。

敵の艦隻が三ではなく十二だったのだ。

おそらく全ての『夜明けの地平線団』がそこには集結していた。何故三隻しか確認できていなかったかというと、昔鉄華団がやったように他の艦で残りの艦を牽引していたのだ。それではエイハブ・リアクターを検知できない。

「まあ、そんな簡単に行くわけがないと思ってたけど」

カインはコックピットでそうごちる。そんな単純な話ではないといつもの直感が告げていた。本当に三隻しかいないのであればカインも出撃を取りやめたかもしれないが、これだけ敵がいるのであれば新装備のテストも十分に行えるだろうと思っていた。

『夜明けの地平線団』の頭であるサンドバルが、余裕綽々な態度で鉄華団に降伏宣言を

してきたらしい。それをカインは聞くことはなかったが、オルガは真つ向から拒否。むしろその程度の戦力で自分達を潰す気かと煽り返していた。

その返しを持ってして、戦端は開かれた。鉄華団が前に出て海賊達と戦っていく。

そんな報告を石動から聞いていたカインは、一人出撃用意をしていた。

「鉄華団だけにやらせるわけにはいかない。オレも出るぞ、石動」

「はっ、申し訳ありませんカイン特務三佐。挟撃までの時間を稼ぐために自分も出ます」「いや、いい。石動は予備戦力として控えていてくれ。ギャラルホルン側はオレ一人がいい。相手はこの規模だ。鉄華団もオレも補給が必要になってくる。代わる際の第二戦力として待っていてくれ」

石動の方が階級は下であるが、今回の作戦の責任者でもある。挟撃のタイミングを計ったり全体の状況を把握する必要があるため、MSで出撃するのは最終手段として取っておくべきだ。

それにカインも、新装備を試さなければならぬ。今回は的が多く、とても実験向きだった。

「鉄華団との関係をこれからも維持したいのなら、戦闘は彼らに大部分を任せただ方がよい。我々ギャラルホルンが出せるものは多いが、彼らが出せるのは戦力と火星の情報くらいだ」

「相手の領分は守るべきである、と？」

「そうだ。火星近郊で動かせる戦力は限られている。そう見せることで相手も大々的に戦力を貸すという相互潤関係を構築できる。信頼を得やすくする、と言った方が良いか。特に彼らは阿頼耶識の恩恵でパイロットの練度は非常に高い。こちらが見せるのは連携と数が精々の部隊だと見せるのが一番だ」

「……それではあなたが出る理由と矛盾しそうですが？」

石動の指摘はもつともだが、それに対する答えももちろん用意しているカイン。

「戦力が貧弱すぎても手を組むには及ばないと思われる。ある程度の力の誇示は必須だ。それにオレの場合はマクギリス様の部下ではあるが、この部隊の人間ではない。そういう言い訳が効く存在だ」

「わかりました。ではご武運を」

「ああ。こちらは任せる」

石動との通信も切れて、カインは出撃のためにカタパルトに乗る。

カイン特有の紅のシュヴァルベ・グレイズ。これに各部ヘリアクティブ・アーマーを装着し装甲を強化。さらに脚部側面と両肩にミサイルポッドを装着。両腕にバズーカを持ち、サブマシンガンや滑空砲などを背面部にラックしていた。

この重量を万全に動かすために追加プロペラントタンクを二本付け、スラスタも倍

増。これによって大火力を高速機動できるような強襲機へとカスタムしていた。

やりようによっては防衛にも向くこの大火力と追加装甲を見て、カルタもこのデータが欲しいと言っていた。

「カイン・ベリアル。シユヴァルベ・グレイズ・F Aカスタム、出る！」

カタパルトから射出されたカインはそのままフットペダルを踏み込んで加速。既に様々な光が漂う戦場のど真ん中へ向かっていった。

その道中にいたユーゴーやガルム・ロデイへ確実にコックピットへバズーカを直撃させて沈黙させていた。

カインはMSが多かった場所に向かうまでに、右腕の装備をマシンガンへ変えていた。敵も気付いてカインへ様々な弾丸を放つが、それを右腕のマシンガンで全て撃ち落としていた。

そしてすれ違いざまにコックピットか背面のスラスターを狙撃して行動不能に追い込んでいく。十機を撃ち落とした後、カインはマシンガンを一度背面ラックに戻して腰部に備えていたバズーカの弾倉を入れ替える。

力もフルに使って敵と味方、ぶつかりそうな物を全て感知。それを避けた上でワンショットキルをかましていった。

敵の中央は鉄華団に任せて、カインは左翼を撃ち滅ぼしていく。

『夜明けの地平線団』はいつも数で敵を圧倒していった海賊だった。数年前のギャラルホルン襲撃事件の後から更に戦力の拡大をしてきたが、エースはあまり育たなかった。

それもそのはず。既にその時にはギャラルホルンに負けたとはいえ喧嘩を吹っ掛けてくるような組織もおらず、いたとしても数で押し潰して併合してきたのだ。自分達が圧倒的に不利だという状況を経験しておらず、数のゴリ押しをすれば勝ててしまう。

勝ててしまうのだから、強くなる理由も薄れていく。特にサンドバルは宇宙演習で失った戦力を補充するために、そして戦力とは何かを考える際にすぐ数へ結び付ける人間だったので数ばかり増やしていた。

確かに戦力は増えたが、その数によって恐れられた集団は個の戦力が育つ土壌がなかったのだ。

今回だって鉄華団を潰すつもりだったのに、鉄華団がギャラルホルンを引き連れてきていた。それでも見えたのは鉄華団を除いてたった一隻だったので倒せると増長した。

ギャラルホルンが強いことはサンドバルも承知の上だった。だから宇宙演習以降ギャラルホルンには手を出さなかったし、今回は戦力比が四倍だからいくらギャラルホルンがいてもひっくり返せないだろうと踏んだのだ。

鉄華団は所詮エドモントンでたまたま成功し、成り上がった新興組織。どうとでもな

ると思つてしまつた。

それが、絶対的なエースによる戦力比の打破という現実をもたらすと気付かずに。

蓋を開けてみればどうか。中央は鉄華団によつて突破されつつあり、左翼に至つてはギャラルホルンの一機に壊滅状態だ。今も左翼の戦艦が一隻、カインのシュヴァルベが落とした。鉄華団も負けじと戦艦を落とす。

数は圧倒的に上だ。

だが阿頼耶識システムによつて回避性能が高いパイロットを揃えた鉄華団と、宇宙においては特に感知能力が増幅されたカインにはまず攻撃が当たらない。近付いたところで反撃され、どんどん撃破されていくのだ。

「こ、こんな筈ではっ!? もう良い、俺も出る!」

サンドバルは痺れを切らして自分で出撃することにした。部下が不甲斐ないなら自分で事態を解決するしかないと考えた。

とうか、それしか取れる手段がなかったと言えるだろう。ここにいる戦力が『夜明けの地平線団』の全戦力だ。鉄華団の所有する火星のハーフメタル採掘場を攻撃して失敗した時点でサンドバルなりに警戒して部隊を動かしたのだ。

これだけの戦力があつて負けるなんて想定していなかった。ギャラルホルンに負けたのは不鮮明な情報ながら、騙されて士官学生ではなく本隊に負けたのだらうと考えて

いたからだ。それだけギヤラルホルンが提示した情報は信じられなかった。

士官学生四人に、分隊一つが滅ぼされたなんて。

だが、左翼で猛威を奮っているMSが真紅のシュヴァルベ・グレイズだと聞いて嫌な予感がしていた。

「ま、まさかあのコロニー公社の反乱を治めた三機のシュヴァルベ……。その内の一機だとも言うのか?!? 特に紅いのはそのカラーリングと回避性能から、『紅鬼』^{あっき}とまで呼ばれるギヤラルホルンのエースじゃなかったか?!?」

時折現れる紅のシュヴァルベ。誰も真似しないカラーリングながら、出てくる戦場では圧倒的な戦果を見せる化け物。

海賊退治には滅多に現れなかったが、その姿を見た者は殺されるか、捕まって拷問にかけられるという噂が広まっていた。

カインはただ職務に忠実だったただけだ。捕らえた者も尋問をしただけで拷問はしていないが噂には尾ひれがついていた。

ギヤラルホルンの内外でも怖れられるエース。挑発的なカラーリングに見合う戦果を引つぎてくることから、戦場で見たら逃げると武力組織に広まるほどだった。カインはこの噂を知らなかったが。

というか、後にこの二つ名を聞いて恥ずかしがった。

「カイン特務三佐。鉄華団で補給のための戦線の入れ替えがあるので私も出ます。特務三佐はまだ大丈夫でしょうか？」

「ああ。スラストーも弾薬もまだ余裕がある。石動は鉄華団の補佐を。こっちはもう終わる」

カインは石動と通信しながらも、左翼の艦隊を全て撃沈していた。この『夜明けの地平線団』は戦力を持ってして海賊行為に走り、武力で強奪に走る輩だったので捕らえるのではなく徹底的な排除を行っていた。

残ったMSも弾薬の節約のために両腕に持った鉄剣で叩き潰していた。

左翼の戦力、戦艦三隻とMS三十機を全て無力化させて、鉄華団の邪魔をしないように右翼にでも行こうかと考えている頃、大規模な戦力が右翼に向かっていていることを感じ取った。

石動が挟撃しようと思っていた他の部隊は左翼の方角から来る筈だ。だからカインは道を開けるために徹底的に左翼を潰したのだ。だから右翼からやってきているのは石動達の別働隊ではないことになる。

まさか『夜明けの地平線団』の予備戦力かとカインが警戒したところに、まさかの人物のプレッシャーを感じていた。

（ジュリエッタ!? ということは、アリアンロッドか！ 何故この宙域に！）

(カイン!!?) あなた、監査局でしょう! 何で海賊退治なんか!)

(本部所属としての任務だ! ラスタル様はいないのにここにいては、イオクのお守りか……!)

(そこまでわかるって、あなたの感能力にはいつも驚かされますよ……)

カインはジュリエッタと感能力を用いて交信していた。養父であるラスタルのことは同じ戦場にいれば感じられる。そのラスタルの気配が全くなかったので、それ以外にジュリエッタがいる理由はアリアンロッドの第二艦隊司令であるイオク関連しかないだろうと思っていた。

アリアンロッドの稼働率を鑑みて、休暇を出すためという理由もあつてのカイン達の出撃なのだが、そんなことは第二艦隊司令様には関係がなかったようだ。

部下に休暇を出さないとんでもない上司の下で働かされて、アリアンロッドの将兵に同情をしたくなつた。ラスタルだってあまりの多忙さに疲れていたことを知っている。それだけ出勤率が高かつたからこそ、今回の本部防衛隊の出撃が許可されたというのに。

アリアンロッドの艦隊も戦闘宙域に入つて艦砲射撃を敢行。その射撃がいくらか敵艦に当たつたことで鉄華団とギャラルホルンは増援が来たと思つてしまった。

「石動が言つてた本隊か! 」

「いや、違う……！　バカな、なぜここにアリアンロッドがいるんだ？！」

オルガの言葉を石動は否定する。なにせやってきた艦隊にはアリアンロッドを率いるセブンスターズ二家の内の一つ、クジャン家を示す北欧神話に登場する神オーディンの使いである二羽の鳥であるフギンとムニンが記されていた。

間違いなく、イオク・クジャンが動かせる戦力だった。

石動からすればアリアンロッドの部隊がここにいるはずがなかった。マクギリスがアリアンロッドの総司令であるラスタルから正式に許可を得てこの作戦を実行している。アリアンロッド艦隊は休暇のはず。

だというのにクジャン家のシンボルマークが描かれた戦艦が三隻、ここにやって来ていた。『夜明けの地平線団』は宇宙でも最大規模の海賊だ。それを打破、もしくは拿捕でもできればギャラルホルンでも大きな名誉になるだろう。

だが、その名誉のために休みが取れていない部下達を率いてこんな火星の先まで来るなんてなんと酷い上司なのだろうか。

艦砲射撃に合わせて戦艦からMSが続々と出撃してくる。ジュリエッタもレギンレイズで出撃したのをカインは感じ取った。

そして戦闘宙域に大きな声で、黒いレギンレイズから通信が入る。

「我々はギャラルホルンアリアンロッド艦隊第二司令、イオク・クジャンだ！　この宙域

は我々の作戦行動圏内である！ その海賊は我々が制圧する！」

「ハア!!? イオク様はバカですか！ そんなことしたら敵がこつちに集中するでしょう！」

ジュリエッタは一人特攻をしようとしたらしいが、イオクの通信で機体の動きを止める。

セブンスターズの一人が、自分の存在をこの乱戦で宣伝する。つまり狙ってくれと言っているようなものだ。

ギャラルホルンの象徴であるセブンスターズの首は、海賊からすればかなり価値のあるものだ。ギャラルホルンの栄光に罅を入れられるのだから。セブンスターズを撃破したとなれば組織に箔が付く。

それは『夜明けの地平線団』からしても同じ。鉄華団を倒せなくても、というか使える駒に映ってしまう。

セブンスターズの権力はギャラルホルンでもかなりのものだ。その一人を捕まえて人質にすればこの状況を打開できると考え付く。

「クソ！ 石動、オレも右翼に行く！ サンドバルの確保は任せた！」

「……いつそ見殺しにしても良いのでは？ その方が准将もやり易くなると思います」

「いや、逆だ！　どんな理由であろうとここでイオク・クジャンが負傷でも確保でも戦死でもしてみろ！　一緒の戦闘域にいた我々が政敵として邪魔なクジャン家当主を、『夜明けの地平線団』と火星の民間企業を利用して謀殺したと思われる！　そうなればマクギリス様はセブンスターズでの実権を失うどころか、イズナリオ前当主のように失脚する可能性もある!!？」

「……っ！　そちらは任せます！」

カインの推論に石動はその可能性に行き当たり、カインが右翼に行くことを許可する。

カインはここでイオクを殺すことはできない。マクギリスにとつてもラスタルにとつてもイオクが戦場で死ぬにはその肩書き上不味いのだ。

ただでさえ今ギヤラルホルンは世界から嫌疑の目を多数向けられているのに、セブンスターズの威光までハリボテであったとなれば、更に混乱が増す。せめて宇宙の暴動がもつと収まった後に処分しなければならぬ。

特にイオクが死ぬということはクジャン家の断絶を示す。セブンスターズが必要のない体制に移行できているのであれば問題ないが、こんなにも混乱している世の中で後継者もない家の人間が死ぬことの意味が本人に全く自覚がないらしい。

そしてイオクのMSの操縦技術の低さは折り紙付きだ。

もうすぐ『夜明けの地平線団』を倒せるといふ時に舞い降りた厄介ごと。
カインはスラストターの残量を気にしながらフットペダルを踏み込んだ。

29 明朝を拝めない者達・3

戦局は一気に右翼に偏った。イオクの宣言は『夜明けの地平線団』にとつてこの戦況を唯一変えられる希望の光となつてしまい、街灯に群がる蛾のようにMSも戦艦も右翼へ向かつていった。

迎え撃つアリアンロッド第二艦隊だが、その動きは緩慢だ。それもそのはずでこれまでもかなりの稼働率で任務に当たつてきており、今回はマクギリスに功績を渡さないために強行軍でここまで来ていた。

いくら優秀な部隊とはいえ、人間である以上疲労には勝てない。火星まで地球から二週間ほどかかるとはいえ、その間だつて警戒しながら航海を進めなければならぬ。ギヤラルホルンだつて宇宙であれば襲われる可能性はあるのだから。

そういつた事情もあつてアリアンロッド所属のMS部隊の動きに精彩さが無い。向かつてくるMSを迎撃できているが、倒すまではいかないようだ。

「このっー」

ジュリエッタが自分の感応波を活かして動かせる蛇腹剣で確実に相手を屠っていく。相手からすればどう動くか軌道が読みづらい兵器だ。それに絡まれて武装を失ったり、

コックピットを貫かれたりしていた。

カインも近付きたかったが、黒いレギンレイズの下手な射撃でそちらへ近寄り難くなっていった。相手がいない見当違いの場所へレールガンを放っているが、そのレールガンの威力がギヤラルホルン謹製の最新型であるばかりに高火力なため、強化装甲を施したカインのシュヴァルベでさえ当たったらマズイ火力だ。

鉄華団は石動の指示で『夜明けの地平線団』の頭領サンドバルを確保するように言われる。カインは最短距離で右翼への道を切り開いた。機体につけているミサイルポッドは全て使い切ってしまったが、必要経費だと切り捨てた。

「ジュリエッタ二尉、無事か!?」

「無事です！ 援護ありがとうございます！ ……私、昇進したことを言いましたか？」

「とあるツテで聞いた！」

「なるほど！」

それだけの短い会話をしながら、まるで二人でダンスを踊るかのように迫っていたユーゴーをシュヴァルベの鉄剣とレギンレイズの蛇腹剣で斬り裂いていた。

そこからは言葉もなく迫る弾丸をマシンガンで撃ち落とし、片方がMSを蹴り飛ばした先にもう片方の攻撃が置かれて撃破したりと、二人は感応波を全開にしてこの戦場でワルツを踊っていた。

言葉もなく、それこそ戦場で一緒に戦うのは初めてののはずの二人。なのに息が合っていて二人が撃破していく数が時間経過と一緒に増えていた。

弾丸なども無駄にせず、時には片方が足止めを。もう片方がトドメを。そんな役割分担を言葉もなしに完璧にこなしていた。

たつたの二機に翻弄されて戸惑う『夜明けの地平線団』。途中から補給明けで戦線に加わろうとしていた鉄華団も、二人の快進撃に息を飲んでいった。

「凄いな、ライオンは。アレが前言ってたライオンの大事な奴……」

三日月は直感でレギンレイズに乗っているジュリエッタがカインにとつての大事な人だとわかっていった。

先程補給に戻った際に、三日月はご飯を送り届けてくれたアトラが可愛いと思つて唇を奪つていた。暖かいご飯を食べに帰ると約束したために、三日月も仕事をこなそうとスラスターを吹かず。

敵から鹵獲したMSから、ダンテがハッキングしてサンドバルがMSに乗っていることがわかった。そのMSのエイハブ・リアクターの信号が鉄華団の全員に送られ、全員がその反応の元へ向かう。

一方カインはジュリエッタとMSを撃破していたが、一向に下がらないイオクへ進言をする。

「イオク様、お下がりください！ もう趨勢は決まりました！」

「その声、カインか!? 趨勢が決まったとはどういう意味だ！」

「そのままの意味です！ 敵の六割方を撃破しました！ 壊滅と言つていい戦況です！」

「ここからは撃破ではなく確保に移行すべきかと！」

「それを決めるのは貴様ではない！ 監査局の人間が、アリアンロッドの行動に口を挟むな！」

予想通りであつたが、話を聞いてくれるわけがなかつた。彼はクジヤン家に仕える家臣の言葉すら聞き入れないおぼっちゃまだ。

階級で言えばカインの方が上。そしてこの作戦を任されているのは石動の部隊で、その部隊にカインも編成されている。軍の規律を考えればカインの指示に従うべきはイオクの方だ。

だが、イオクはこれがアリアンロッドの正しい活動だと考えている。活動範囲も内容も確かにアリアンロッドの業務の範疇だが、今回はラスタルの許可を得たマクギリスが部隊を動かしているのだ。

後から来て横槍を入れているのはイオク達アリアンロッド第二艦隊の方。だがイオクは絶対にアリアンロッドの業務の正当性しか主張しないだろう。

カインが舌打ちをしようとした瞬間、敵のガルム・ロデイが接近していた。

「仲間割れとは好都合！　くたばれセブンスターズ！」

「このっ！」

「この至近距離で長距離射撃兵器を使おうとするな！　避ける！」

カインが忠告しても避けようとしなかったため、カインがイオクのレギンレイズを体当たりで横に飛ばす。飛ばされる前に放ったレールガンは相手に命中せず、ガルム・ロデイのアイアン・ハンマーがイオクと場所を入れ替わっていたカインのシユヴァルベの左腕へ当たると。

それと同時にリアクティブアーマーが機能。小さな衝撃波でハンマーを弾いたのと同時に右手に持っていた鉄剣をコックピットへ突き刺した。

沈黙するガルム・ロデイ。

まさか長距離支援用に改造された機体で、接近されて避けたいとは思わなかった。距離を縮められたらマズイとわからないのは二年前の決闘の頃から変わっていないかった。

「カイン、無事ですか？？」

「ああ、問題ない。左マニピュレーターが動かなくなったただけだ」

「利き腕側ではないですか……」

「もう終わりだよ。ほら」

心配するジュリエッタへ、打ち上がった信号弾を知らせる。

『夜明けの地平線団』が頭領のサンドバルを三日月に確保されたことで諦めたのだろう。戦力としても七割が撃破され、残っている戦艦やMSもボロボロ。鉄華団もヴィンゴールヴ本部部隊もアリアンロッドも大きな損害がなく健在。

『夜明けの地平線団』側のエースは全て撃破されている。勝ち目がないとようやく悟ったのだ。

後処理も鉄華団と石動の部隊が行なっていく。イオクもそれを見て部隊を動かさそうとしていたが、動かない。

イオクがどういう名目でここに来たのかわからないが、『夜明けの地平線団』を捕縛する権限があるのは石動の部隊だ。

「民間企業とマクギリスに手柄を取られるな！ 残っている艦隊を確保しろ！」

「イオク様、帰投しますよ」

「なっ!?? ジュリエッタ、離せ！ ここまで来て一隻も確保しないなど……！」

「休暇を利用した部隊の練度を上げるための演習だと申請したから部隊を動かせたのに、こんな火星の端まで来て本来の業務なんて行えるはずがないでしょう!?? ラスタル様に言われてついて来ましたが、やはり私では止められませんでしたね……」

ジュリエッタもラスタルに、一応『夜明けの地平線団』の頭領を捕縛できそうなら捕縛してもいいと言われていた。だがそれはあくまで演習の航行中に偶然見付けて、他の

団体に邪魔をされない状況下のみだ。

マクギリスとの決定もセブンスターズの定例会合で正式決定した内容なので、不慮の事態を除き介入できない事案だ。仮に『夜明けの地平線団』が火星近郊以外の場所に移動して、そこに偶然アリアンロッド艦隊が通りかかれば捕縛しても問題はなかっただろう。

宇宙は広い。マクギリスの部隊と行き違いになることだってある。そういう状況下を想定してジュリエッタには許可を出していただけたこと。

ジュリエッタはラスタルの指令を守ろうと思っていたがイオクが戦闘配備に移させ、MS部隊の出撃準備と艦砲射撃を行なってしまった。戦闘を吹っ掛けてしまったのでジュリエッタも出撃した次第だ。

ジュリエッタがワイヤーアンカーを用いてイオクのレギンレイズを確保して戻っていった。カインも石動に確保などの後処理を任せてイオクの艦に降りる。

本部の人間としての任務は戦闘が終了した時点で終わりだ。ここからは監査局の人間として動かなければならなくなった。

イオクの艦にいたMSデッキの整備班に一言断ってシユヴァルベを置かせてもらった。仕事さえ終われば石動と一緒に地球に戻る。

アリアンロッドと帰る予定はなかった。まだラスタルとの関係を公表する段階では

ないからだ。

アリアンロッドの面々には何故カインが来たのかという目線と、来た理由に心当たりがある者、監査局で噂の人物がやって来たことに驚いている者など様々な反応が見られた。

カインはある種監査局特有の特権を持っているのでどの部隊にも顔を出せるし、入れない場所はない。むしろカインを入れさせないようにしている場所というのは疾しいことを隠している場所だ。

カインは宇宙戦艦の構造を把握していたので、真っ先に事務室へ向かった。こういう戦艦にも事務室は存在する。使った弾薬数などを取り纏めて本部に提出するために文官はどの戦艦にも乗っているものだ。

その事務室へ訪れると、第一種戦闘配備が解除されたからか文官もデスクに戻っていた。

カインが敬礼をして入室すると、向こうも慌てて返礼をしてきた。三佐の階級章が見えて階級の高い者がいきなり来たことに驚いたのだろう。パイロットスーツにも階級章は刻印されている。

「伍長、戦闘が終わったばかりだというのにすまない。監査局所属のカイン・ベリアル特務三佐だ。今回の演習の航路日程と、諸君ら全員の勤務状況を教えてくれ」

「しよ、少々お待ちください」

伍長も心当たりがあつたのか、すぐにパソコンを起動してカインが言った物を提示してくれる。それを紙に印刷し、伍長にお礼を言つて退室した。次に目指すのは司令室だ。この艦はクジャン家の物なので、いるのはイオクになる。そこに居なければブリッジにでもいるのだろう。

カインは直感を信じて司令室に行くと、イオクはそこにいた。扉を三回ノックする。

「イオク・クジャン三尉。カイン・ベリアル特務三佐です。入室してもよろしいでしょうか？」

「カインか。着艦を許可した覚えはないが、良いだろう。許可する」

「失礼します」

階級が下でも相手は艦隊司令だ。尊大な態度を取られてもカインはスルーした。

本来セブンスターズだろうが何かしらの役職に就任するのであれば付随するように昇進するものだが、イオクは昇進していない。

普通はカルタのように地球外縁軌道統制統合艦隊の司令に就任すると同時に一佐に昇進したり、マクギリスやガエリオのようにヴィーンゴールヴ本部や経済圏の一つを任されれば准将に昇進する。

イオクが昇進していないのは、他のセブンスターズの当主全員が力量不足だと判断し

たからだ。

クジャン家当主を継いだので第二艦隊司令には就任したが、完全にお飾りだ。ギャラルホルンにおける昇進資格を得るような功績も立てておらず、本人はMSに乗ってばかり。司令として指揮官として昇進するには作戦立案や戦場を俯瞰しながら指揮を執らなければならぬが、本人はMSの操縦で手一杯。

この様子から指揮官として昇進させるには功績不足とし、MSパイロットとしては本来レギンレイズという最新鋭MSを与えられないほどに落第だ。

この評価をラスタルというアリアンロッドで一緒のセブンスターズが下したため他の家も同意。こうしてイオクは昇進していない。

イオクが昇進できないために、階級が下ながら過分な役職に就き、階級が上な者も下手に出るしかないような状況が出来上がっていた。

カインはそれらの諸々をスルーすることにする。監査局はその職務上、かなり特権的に振る舞うことができるからだ。

「何用だ？ カイン」

「アリアンロッド第二艦隊の稼働状況を査察いたしました。明らかな超過労働です。演習という名目は目を瞑ったとしても、この艦隊は即時休暇を与えなければならぬほど、勤務日数を超過しています。このままでは過労死が発生しかねません。そして今

回、演習には希望者が参加ということになっており、書類上は今回のアリアンロッド全
てに与えられた休暇がこの演習に当てられています」

「……それで？」

「全員が任意の上で演習に参加した以上、超過労働に対する特別休暇が適応されません。
その特別休暇を演習に当てたわけですから。休みの日にMSで訓練したとしてもギャ
ラルホルンは更なる休暇を与えられません。休暇の過ごし方は本人に委ねられていま
すので。その上で申し上げますが、このままでは軍人に与えられる年間の休日が確実に
足りません」

「何？？？ まだ年度始めだぞ？！？」

カインが語る言葉に、イオクは机をバン！ と叩きながら立ち上がって反論する。

だが、カインが持ってきた資料にはカインの言葉を肯定する事実しか書かれていな
い。

「昨年度から既に超過労働が進み、有給なども今年度に持ち越しになっている隊員ばか
りです。出勤などがなかった日なども半休として消費されていますが、艦内にいる間の
休日とは別に、コロニーや地球など艦外で取得しなくてはならない休暇が一定数ありま
す。そちらの休暇が足りず、このままではギャラルホルンが秩序を乱し、弾劾されるで
しょう」

「わ、私が秩序を乱していると!?!?」

「軍規に基づき、将兵との契約を照らし合わせるとそうなります。ですので、地球圏に戻ったら即時彼ら全員の休暇の申請を。これらの申請は各部署が本部に許可を取り、直筆のサインを必要としますのでヴィーンゴールヴに出頭願います。超過理由なども聞き出されるのでその用意も」

「わ、わかった……」

「資料は置いていきます。それでは失礼します」

カインは仕事を済ませてその足でシユヴァルベに乗って帰る。石動の艦に着く前に今回のことについてボヤいた。

「これで指揮官としての自覚が出るかどうかをラスタル様は見極めたいのだろうか。そして、芽が出なければ切り捨てる。……ジュリエッタの休暇を取得したんだから、それで十分か。ブラックなのはオレだけで十分だ」

カインはこの後F Aカスタムの使用感などのレポートを作成して提出し、次の仕事の準備をしなければならぬ。休みは自由に取得できる立場だが、その休みも蝙蝠のように動いているために本当の休みはないようなものだ。

これはラスタルの駒として動くことを決心した時から覚悟していたことだが、自分の出生を知って余計に自分で動くことが多くなった。この世の中を少しでも良くするの

が残された自分の役割だと強く認識してしまったためだ。

カインも疲れが溜まっている。それでもと、彼は動いた。

三百年前から取り残された彼が、この時代で居場所を作りたいかのように。

30 名もなき戦争・1

『夜明けの地平線団』を捕縛してから暫くして。地球圏で新しい火種が勃発しようとしていた。ギヤラルホルンの腐敗、セブンスターズの失脚という前代未聞の事態。それによつて経済圏が自分達を守るためにギヤラルホルンの力は借りられないと考えるようになり、防衛軍を独自に設立し始める。

ギヤラルホルンが守るべき場所にMSで攻め入れられたとなれば、信用もなくなるのだ。

力を得ればもつとと求めてしまうのも人間である。防衛力を持つてしまうと他の経済圏へ攻め入ろうと思う強気な思考が増えるのだ。特に三百年もギヤラルホルンによつて領土を厳密に区切られ、地球での発展を抑制され続けてきたのだ。

隣接する経済圏同士は、相手の嫌な部分も見えてくる。地球で争いがなくても、コロニー同士での軋轢もあつたりする。

そこでギヤラルホルンの支配力が落ちれば、小競り合いが起きたりする。小さな紛争はこれまでのように起きていたが、その頻度が多くなつていた。

そして鉄華団が一躍有名になつた、ここエドモントンでも同様だつた。

鉄華団はアーブラウにその武力を認められ、鉄華団の地球支部をエドモントン近郊に構えることを許された。全戦力の三分の一を駐留し、副団長であるユージン・セブンスタークが地球支部を任されていた。

その補佐としてチャド・チャダーンが付き、子供組ではタカキ・ウノが珍しく妹と一緒に地球へ来ていることが特筆されることだ。

アーブラウの防衛軍も形を作り始めて、発足式典を行うという時にそれは起きた。

「ユージン、本当に俺が蒔苗先生の護衛で良いのか？」

「アーブラウ側からも護衛は一人つて言われてるしな。防衛軍のメンツもある。俺は外で指揮をするから、任せられんのはチャドだけなんだよ」

ユージンはそう言い、チャドにアーブラウの代表である蒔苗の護衛を任せた。

そして式典が始まる前に、蒔苗が待機していた部屋の花瓶が爆発を起こし、チャドは蒔苗を庇って負傷。蒔苗も意識不明の重体に陥る。

爆発を起こしたのは何者なのか、調査の手が伸びることとなった。

そんな中、今回の事件にはS A Uが関わっているという憶測が流れ、両経済圏では接している領土境界線の辺りで部隊が展開することとなる。

ユージンは地球支部を預かる者として団長のオルガへ連絡を入れていた。

「マジでこのままじゃ戦争一直線だ。第三者による調査って言っても、それを行うのは

本来ならギャラルホルンだ。だがギャラルホルンは……」

「アーブラウ、特にエドモントンでは住民から嫌われてる。だから調査の手が伸びないってのか？」

「エドモントンじゃ何故かギャラルホルンの仕事じゃねえかって噂まで流れてるぜ。ほら、アリアンロッドの締め出しと同じじゃないかって」

「ドルトの件か。お嬢さんが暴露しちまったからな……」

「どれもこれも鉄華団が関わっている事案だったためにオルガもユージンも溜息を吐く。」

そんなこんなで事件の全容なんて全く掴めていないのだという。

「アーブラウとの契約じゃ、戦闘行為があつた際は鉄華団が戦闘を引き受けることになつてたよな？」

「ああ。だから戦争になつたら徴兵される。軍事顧問つつうのはそういうの込みの契約だったからな」

「……わかつた。じゃあ準備を進めておいてくれ。俺達もすぐそつちに向かう。火星での仕事もあるから、ミカと明弘と他にも少しつて程度だろうが」

「その二人を送ってくれるなら問題ねえよ。こつちもこつちで調べてみる。また何かあつたら連絡入れるぞ」

ユージンはそれだけ伝えて、こちらでやるべきことを始める。チャドが抜けた穴は彼が埋めるしかないのだ。主力は基本火星にいて、こちらは出張で来ているだけなのだから。

ユージンは動かせる戦力、アーブラウとの状況確認などなど、することは山積みだった。そうしている内に、事態は悪い方向に転がっていく。

S A U側の偵察機がM Sのエイハブ・リアクターによってコントロールを失って墜落。これによってS A U側に死者が出たことで開戦。

アーブラウ側の蒔苗が意識不明のために外交問題をどうするかとアーブラウ側が話し合っている最中のことだった。これによってS A Uが一方的に戦争行為に踏み出し、戦争は始まってしまった。

一応 S A U側もギャラルホルンを通じて調停を要請したが、ギャラルホルンにしゃりやり出られることをアーブラウ側が拒否。こうして碌な外交も行えないまま戦争は勃発。

もちろん鉄華団も駆り出されることとなる。

そんな鉄華団の地球支部に訪れる者がいた。顎髭を伸ばした黒髪でガタイの良い男。歴戦の戦士を思わせる傭兵の象徴のような男だった。

その人物がソファから立ち上がり、ユージンへ手を差し出す。

「ユージンさん。こちら今回のアーブラウ側を指揮することとなった……」

「傭兵のガラン・モツサだ。よろしく頼むぞ、アーブラウを立て直した勇者達」

「鉄華団地球支部を任されてるユージン・セブンスタークだ。……傭兵？」

ユージンはテイワズからの出向で事務職に就いているラディーチェ・リロトの紹介を受けたガランの手を取る。てつきり防衛軍の誰かと話し合うものだと思っていたが、なるほど確かにガランは防衛軍の隊服を着ておらず私服のようなジャケットを着こなしていた。

傭兵が何故と問うと、その答えは簡潔なことだった。

「アーブラウは防衛軍が発足したと言っても形だけだ。実戦経験もなく、大隊指揮なんて教本しか知らん連中だ。それを不安に思ったアーブラウが紛争の経験がある俺を雇ったわけだ。お前さんらも信頼の置ける仲間を指揮するならまだしも、練度も信頼もない者を指揮するのは難しいだろう？」

「それは、まあ。俺達も懸念してたことだ。その点アンタなら経験豊富だと？」

「傭兵は寄せ合い世帯だからな。身分から兵装やら思想まで、何もかもごちゃ混ぜでも戦闘ができちまう。そういう人種だ」

ガランの言葉にそういうものかとユージンは頷く。

アーブラウからの正式な書類も交えて、どのように戦うかを話し合って行く中で。

ユージンと戦闘の指揮を一緒にすることとなるタカキは、ガランの戦術に思わず聞き返す。

「徹底した遅滞戦闘お？」

「ああ、そうだ。この状況、本来ならギャラルホルンが仲裁を行うはずが、アーブラウはそれを突っぱねている。蒔苗氏を失って冷静ではないのだろう。発端がわからないまま戦争になれば泥沼と化す。徹底的に相手を潰すか、やられるか。それしか終戦になる見込みがなくなる」

「相手を潰すっていうのは……無理か」

「防衛軍の練度が低いことは俺も知っている。そしてお前達も全戦力じゃない。それに……地球の四分の一を敵に回す恐ろしさを覚えておいた方が良いぞ？」

「そう、経済圏の大きさをもっと深刻に考えるべきだ。アーブラウ防衛軍の頼りなさを知っているからユージン達は過小評価しかけたが、地球という大きな星の四分の一が相手であり、その財力は化け物と言っている」

「その上、足りない戦力は最悪宇宙から引つ張ってくればいいのだ。そんな力を持った経済圏同士の争い。着地点を早々に見付けなければ長期戦になることは必至。」

「で、そんな長期戦を戦いきるスタミナが鉄華団の地球支部にあるかと言われれば、否だ。」

確かに電撃戦において多大な戦果を成し遂げてきた鉄華団だが、それはどれも短期決戦。規模的には弱小と言っているいい鉄華団の兵站能力では長期の戦争なんて息切れをする。アーブラウが支援しようが、団員が保たない。

そのためガランが言いたいことは。

「アーブラウで強権を発動できる時苗氏の回復を待つ、消極的な戦闘。これが最善手だ。お前達も『家族』を失いたくないだろう？」

「……」

団員、家族のことを持ちだされると弱いのが鉄華団の特徴だ。オルガは鉄華団のみんなを家族のように思い、彼らに居場所を与えたくて頑張っている。ユージンもそんなオルガに同調し、タカキに至っては妹が実際にいる。

だから今回の戦争で被害が出にくい遅滞戦闘に、二人は頷く。

「わかった。それで行こう。俺達の配置は？」

「防衛軍の後ろだ。アーブラウも自身の戦力を誇示したいのだろう。矢面に立たせるように言われている。戦争は彼らに任せて、我々は砲撃支援、撤退支援に終始する」

「それでいい、のか？」

「いいのだよ。お前達が防衛顧問と言われているにしても、それはあくまで防衛軍が発足するまで。発足した後の責任までお前達に負わせようと思っていない。むしろ経済圏の重

鎮とは自己顕示欲の権化だ。自分の防衛軍おもちゃを自慢したくてたまらないのさ。そこに英雄的な君達は邪魔になる」

「利害が一致してんのか」

ガランのその説明にユージンも取るべき方針を決定する。

ここに、名もなき戦争が勃発した。

「それで？ 実際この戦争の引き金はなんなんだ？」

「それは今カインに調べさせている。カインが監査局の権限でアープラウ方面軍へ監査をする名目でアープラウに入り込み、当日の監視カメラの映像をハッキングしているよ
うだ」

「爆発物が運び込まれたことは事実だからな。ラストル、お前の考えは？」

「十中八九SAUの仕業だ。火星のハーフメタルの独占はMSの価値が上がって更に脅威となった。それをやっかみ、ハーフメタルの流通を得ようというのが彼らの考えだろう」

ガランこと『髭のおじさま』が自分の愛機ゲイレール・カスタムのコックピットの中で秘匿通信をしていた。ここの安全性は世界一で、ギャラルホルンでも傍受できない特別仕様になっていた。

愛弟子が多方面で活躍していることを知って嬉しい反面、過労死しないかと心配になった。

「そこまで言い切れる根拠は？」

「偵察機の事故より前に、調停の申し込みではなく武力の提供をギヤラルホルンに申請している。ガエリオへ確認を取ったから間違いない。ボードウィン家として彼とマクギリスが動くようだ」

「それで遅滞戦闘に徹しろと？ ガエリオはガンダム・キマリスとして、マクギリスは？」

「シュヴァルベだ。ファリド家のガンダム・アスモデウスは本部で調整中のようだな。ヴァルクリア・フレームのグリムゲルデは使えば地球外縁軌道統制統合艦隊を襲ったのは自分だと証明することになって使えない。シュヴァルベしか選択肢がないのだよ」

ラスタルはアスモデウスが調整中の理由を知っている。カインに使わせるために様々な仕掛けをしているようだ。これもカインからの情報で、そこからマクギリスが使う機体はシュヴァルベに絞れた。

「……SAUもギヤラルホルンの戦力があればアープラウを攻め落とせると考えたんだろうが、詰めが甘いな」

「ああ。我々ギヤラルホルンは相手の徹底占領などはしない。侵攻作戦をしているわけ

ではないからな。そういうわけで、この戦争を止めるなら蒔苗氏の回復を待つしかない」

「ラストル。何故お前はマクギリスとガエリオ、カルタに手を貸すような真似をする？ 敵になるかもしれないのだろうか？」

「ガランはそう問う。今回の問題が解決しやすくなるようにラストルはわざわざ虎の子の手札であるガランをアープラウに送ったのだ。アープラウとSAUの関係を守るために。」

「カルタは一見関係なさそうに見えるが、地球での出来事は地球外縁軌道統制統合艦隊の案件の一つでもある。今回はガエリオとマクギリスに任せて宇宙の監視を続けるよ。うだが、カルタへの援助にもなる。」

「もしも事態が悪化したらカルタも参加しなければならなくなるからだ。」

「そして彼らは、いわゆるマクギリス派閥と言ってもいい。マクギリスの真意を知っているのかまではわからないが、おそらく賛同するような仲だ。」

「ラストルの敵になりかねない彼らを手伝う理由は何かと、ガランは問う。」

「経済圏を刺激したくないことが一つ。イオクの失態の埋め合わせが一つ。そして鉄華団の名声を広げないことが一つ。ある意味マクギリスへの牽制でもあるんだぞ？」

「……なるほど、そういうことか。やはりお前は怖い男だよ」

「とはいえ私にもできないことがある。だからお前やカインに頼ることになるのだが」
「そうそう。カインは相変わらず化け物だな。鉄華団に首輪をつけるワードを即座に読み取るとは。『家族』と言った途端大人しくなったぞ」

「ギャラルホルンを纏めた男を父に持つ、私の部下だぞ？」
「お前の部下という意味合いの方が大きそうだぞ？」

「ガランもラスタルからカインの出自を聞いていた。だがそれでもあのえげつなさはラスタルの弟子だという理由が大きいと感じていた。」

「ま、精々戦場で踊ってみせるさ。そろそろ通信はマズいな。こっちは任せろ、友よ」
「ああ。雑事は私とカインに任せろ。友よ」

31 名もなき戦争・2

そして、戦争は始まる。

アーブラウ側は防衛軍を前面に展開して守備は鉄華団やガラン達傭兵に任せられた。偵察任務なども鉄華団に任せられる。

一方SAU側は自分達の戦力はあまり出さず、ギャラルホルンに戦力の大半を任せた戦いを仕掛けて来た。

アーブラウ防衛軍は知識も経験も少ないので練度の高い軍隊であるギャラルホルンには全く敵わない。これに怒ったのはアーブラウ側だ。经济圈同士の戦争にギャラルホルンが介入して来たのだから。

ギャラルホルンは確かに经济圈同士の戦争を起こさないように監視する治安維持組織だ。起きた場合は戦争に介入する権限もある。

だが、それは一方だけの肩入れとなると話は別だ。

アーブラウ政府はすぐにギャラルホルンのアーブラウ方面軍に苦情を入れる。いきなりの武力介入はないのではないかと。だがこれはギャラルホルン側もたまったものではない。調査を断られ、戦争が起きないように努力しようとしたのを邪魔したのは

アーブラウ側だ。

いくらエドモントン事件があるからと言って、ならどうすれば良いのかと困惑した。そんな政治の問題は置いておくとして、戦争行為は続く。境界線付近では毎日のようにドンパチが起こり、アーブラウ防衛軍はギャラルホルンに為す術もなく撃破されていく。

ガランも撤退指示を出すものの、ようやくの陽の目を逃してたまるかと特攻する防衛軍の姿にガランは天を仰いだ。

戦力がSAU側に傾いているのに戦争に決着が付かないのはガランの戦術眼が優れていると言うこともあるが、ギャラルホルン側が調停の妥協点を探して戦力の本格投入を避けているからだ。

このままどちらかが勝ったら、地球圏は火の海に消える。武力で全てを叶える世界になつてしまう。その先に人類の行き着く先はないと、マクギリスとガエリオが戦場を調整していた。二人は敵が想定以上に突っ込んでこない限り、撃退に抑えていた。

「マクギリス、まだか?」 まだアーブラウ側の外交チャンネルは開かれないのか?!

「

「叫ぶな、ガエリオ。外交チャンネルは、まだだ」

「……外交チャンネル『は』?」

「

前線駐屯地である天幕で叫びながら入ってきたガエリオだったが、いつまでも小出しするような戦闘に苛立っていた。それをぶつけてしまったが、マクギリスは冷静に返す。

「こういうところがアルミリアやカルタにモテるのだろうなと、その一端を実感していた。

「アーブラウ側もSAUの戦力に我々が出てくるのは予想外だったようだな。アーブラウ方面軍に泣きついてきたらしい。ギャラルホルン同士で戦うわけにはいかないから方面軍が出撃することはないが、そこを通じて我々には通告が来たよ」

「向こうはなんと？」

「ギャラルホルンは退けと。それだけだ。経済圏同士の争いは各々で決着を付けたいらしい」

「俺達の存在理由を全否定したな……」

「アーブラウが我々を嫌う理由はわかる。今回も早期に戦力の派兵を決定してしまったからな」

エドモントンの一件は確実にギャラルホルンに非がある。クーデリアを危険視したのはギャラルホルン及びビズナリオであり、彼女がエドモントンに入ることを拒否したのはギャラルホルンの意思だ。

彼女と蒔苗をエドモントンに入れるくらい許容すれば、ギャラルホルンはこうもアブラウに嫌われなかった。アインが市内で暴れなければこのような事態にはなっていない。なかつた。

その図を描いたのはマクギリスだが、今回はSAUの早計が原因だ。

ギャラルホルンも市民を守るために戦争を早く止めるために武力介入は仕方ないと判断した上に、アブラウとは関係が微妙だったためにSAU側に着いたという理由もある。

アブラウ側を軽く蹴散らして喧嘩両成敗に持つていこうとしたのに、アブラウは強固な姿勢なまま戦争を止めようとしない。これは鉄華団の力を信用しているというのも大きい。なにせギャラルホルンに一泡吹かせた集団なのだから。

「このままじゃ共倒れだぞ？」

「それをどちらも理解していないのが度し難い。だから、我々は我々のやり方でこの戦争を終わらせる。武力だけがギャラルホルンではないと証明してみせないとな」

「……何をするつもりだ？」

「情報収集。ガエリオには引き続き時間稼ぎに徹してほしい。深追いをしなければ良い。適当に追い返すだけの作業だ」

「まだ続くのか……。いつまでだ？」

「」

「一週間程度だな。それだけあれば情報も集まるだろう」
「長いな」

戦争をする期間としては十分長い。ギャラルホルンが今まで調停してきた紛争は二週間と保たなかった。だが今回の戦争は既に二週間で過ぎていく。ギャラルホルンが武力介入している戦闘行為の中では長い部類に入る。

それだけギャラルホルンは圧倒的な武力で物事を解決してきた。だが今回のこの戦争の成り行き次第ではギャラルホルンが戦争を調停できない無能だと知らしめることになる。

そんな不安がよぎったガエリオがマクギリスへ問う。

「そんなに悠長にしているのか？ このままでは俺達が無能の誹りを受けるぞ？」

「初めての経済圏同士の戦争だ。規模が違うのだからその心配はない。それに良いサンブルケースになるぞ？ 経済圏も結局、ギャラルホルンの力ありきの戦争にしかならないと。我々が味方をした方が勝つ戦争をする意味がないとな」

「何も間違っていない事実だが……。MSの質と量、兵隊の練度。経済圏が俺達を信用できなくていきなり作つた防衛軍程度では、向こう三十年は確実に追いつけないだろう」

ガエリオが自分達の戦力と今回の防衛軍の実力。そして経済圏の状況などを鑑みてマクギリスの言う意味を正しく認識した答えを出す。

いくら悪い風評が流れ、様々な組織が立ち上がったとしても、三百年この世界を守護してきたギヤラルホルンの土台はそう簡単に崩れないという自信があった。

そうなるように抑制した世界を作り上げたのだから、当たり前前の帰結だ。技術的な発展があつても、ガンダム・フレームのようなオーパーツが用いられようと。そう簡単に外部の力だけで崩れるような組織ではないのだ。

「今回の戦争が長引いている理由は、お互いの防衛軍という軍と呼ぶにはお粗末な戦力が最前線で戦っていること。我々が全く深追いをしていないこと。相手が鉄華団で引き際を弁えており、前へ出てこないこと。相手に鉄華団と、アーブラウの雇った傭兵がいなければとつくの昔に決着が付いている」

「鉄華団……。今ではアーブラウの防衛顧問か。アインを倒したんだ。その実力は俺も認めている……」

言葉とは裏腹に、ガエリオは苦虫を噛んだような表情をしていた。

因縁ある組織で、自分の慕う部下を破った者達。アインにも問題があつたとはわかっているが、それでも遣る瀬無い気持ちが残っていた。

「あの無茶をするばかりの宇宙ネズミ達が引き際を悟るとはな」

「彼らだってこの二年で成長したのだろう」

「……マクギリス。なぜ鉄華団と手を組んだ？ 『夜明けの地平線団』を捕らえた火星の民間企業とは、アイツらのことだろう？」

「利害の一致によるものだ。アインの仇と私が手を組んだことが、気に食わないか？」

天幕の中で、ピリピリとした空気が出来る。

ガエリオは高潔すぎる。だから自分を慕っていたアインを誅した鉄華団と親友のマクギリスが手を組むことが認められない。

元々は火星支部が悪いことはわかっている。その結果がこじれてギヤラルホルンと敵対したことも、自分の行動のせいと溝が深まったことも。

その辺りの分別はついでなので鉄華団を戦場で見ても深追いはしないし、戦場に私情は持ち込まない。

「彼らは戦力として優秀だ。確かに二年前は我々とも敵対したが、その蟠りも既に解消している。彼らはクーデリア嬢の護衛上我々が立ち塞がったために蹴散らしただけ。敵対する理由さえなければ、彼らは海賊を討伐する善良な企業でしかない」

「お前に協力したんだから、そうなんだろうな。火星で敵対したお前とも手を組む度量がある」と

「そうだ。そして我々の仕事と彼らの仕事がかち合えば、今回のように敵対することも

ある」

「……本気で敵対したら、俺は憂いなく鉄華団を討つからな」

それだけ言つてガエリオは前線指揮官を務めるためにガンダム・キマリスの整備を頼んで休むことにする。相手がいつ攻め込んでくるのかわからないために、休める時に休むのが戦場での基本だ。

ガエリオは以前からマクギリスと鉄華団が縁故の関係だったと知らない。だからこの程度の話術でマクギリスは切り抜けられていた。

一息着いてから、マクギリスは今回の事態の整理をする。

「さて。今回はアーブラウの自作自演か、内輪揉めか。もしくはSAUの作戦か、ギャラルホルンの他派閥の横槍か。可能性が高いのはSAUの作戦だな。ガエリオに戦力の供与を頼むのが早すぎる。……頼むぞ、カイン」

マクギリスは一人になった天幕でそう呟く。

その呟きから三日。カインはアーブラウで入手した情報をマクギリスへ送る。

マクギリスの部下もSAUで情報を手に入れ、この戦争を止める手札を揃えた。

マクギリスとガエリオが天幕で話してからちょうど一週間。

その日もアーブラウとSAUの境界線付近で戦闘が起きていた。鉄華団は後方支援

に徹し、前へ出ることもなく相手への嫌がらせを続ける。

そんな最中、上空からエイハブ・リアクターの反応があった。

「上^り!? S A Uの奴ら、まさか宇宙から攻め込んできやがったのか^ら?」

ユージンはM Wに乗って指揮を取っている中、そう叫ぶ。

それにしても鉄華団の後ろを取られたわけでもなく、その反応はそれこそ戦闘区域の中心へ落ちていくようだ。

「副団長! この反応、マクギリスって人から貰っている周波数と一致します! コー

ドネームライオンです!」

「ああ? ってことは、あの紅いシユヴァルベか……」

タカキから聞いて、ユージンはその反応に攻撃せず近寄らないように指示を出す。一機だけで戦場のど真ん中に降りるなんて無茶なことをするなと思っていたが、これで事態は動くだろうと思えた。

ガランもそれがわかってアープラウ側に攻撃をしないように指示を出す。ギャラルホルンの識別反応を出していたためにアープラウ防衛軍はS A Uの増援だと思つて攻撃しようとしていたが、シユヴァルベが大きな白い旗を持っていたことで攻撃の手が止まる。

ウエイブライダーに乗って地上に着地したカインは、全域に聞こえるように通信を流

す。

「私はギャラルホルン、ヴィーンゴールヴ所属カイン・ベリアル三佐である。双方即時戦闘行為を辞めるように勧告する。アーブラウ・SAU双方が交渉のテーブルに着くとギャラルホルンを通じて発表した。これ以上の戦闘行為は認められない。即刻軍事行動を控えよ。繰り返し――」

「なあ、ガランのおっさん。これで終わったのか？」

「ああ。どういう結果になるかはわからないが、戦争は終わりだ。……長かったな、戦友よ」

「そうだなあ。なんかやけに長かった気がする……」

ガランとユージンは拳を当て合う。臨時の戦線を組んだだけだが、三週間もあればそれなりの交友も深めていた。

お互い少し気楽なのは、所属する者達の被害が軽微だったからだ。MSなどは少なからず破損したが、死者は出ていない。怪我をした者はいても軽傷ばかりだ。

戦争は結局、喧嘩両成敗で終わる。アーブラウに爆薬を仕掛けた者はアーブラウ防衛軍の設立を良く思わないナシヨナリストの犯行と発表され、アーブラウの自演でもSAUの作戦でもないとして開戦の責任の所在を曖昧にして終わりを迎えた。

鉄華団はアーブラウ防衛軍の設立を持って防衛顧問の責務を全うしたと判断された。

鉄華団としても火星のハーフメタル事業をテイワズから任されたこともあつて地球からの撤退を決めていた。

アーブラウとの関係は保つたまま、戦力の駐在を辞めた形だ。

アーブラウとしても経済圏同士の戦争は泥沼になるだけだとわかり、いざとなればやはりギャラルホルンに頼るのが戦力としては間違いないと理解して鉄華団へ支払う防衛費の削除という理由もあつて防衛顧問の契約を解除。

その代わり有事の際にはギャラルホルンに、市民へ被害が出ないような防衛を徹底させることを約束させた。ギャラルホルン側もエドモントンでの一件を経て、これを遵守することを誓う。

そんな終わりを迎えた戦争の跡地で。

ゲイレール・カスタムのコックピットでガランはある人物へ通信を試みていた。

「結局はSAUの仕業だったんだらう？　マクギリスはその証拠を手にしてSAUを脅したのか？」

「はい。実行した男はSAUの特殊作業員。SAUの住民権を持つていた男に間違いありませんでした。その証拠を突き付けてSAU側の反論を封殺。結果、SAUは賠償などを折半にすることで交渉のテーブルに着きました」

「SAUの仕業と公表したら徹底抗戦に陥るだけだからな。それにそうなればギャラル

ホルンはSAUから手を引き、アーブラウに着くだろうか？」

「ええ。経済圏を刺激しないためにも、SAUを潰さないためにも。このような処置となりました」

妥当なところだろうとガランは頷く。SAUも勝てず、自分達が潰れるくらいならある程度の賠償を払って自ら折れた方がマシだと判断したのでだろう。

「マクギリスはイズナリオよりはマシだな。それにガエリオもその辺りを飲み込んだか。……ようやく地盤が固まってきたか？」

「これも『髭のおじさま』の戦局操作が一流だったおかげです。ありがとうございます。オレではそうはいかないので」

「ふん、良く言う。単機の戦闘能力と戦場の理解力ではもうお前の方が上だろうに」

「ですが、オレはどうやら指揮官には向いていないようで。誰かに指示を出しながら戦うという才能がないようです」

「そういう風に俺もラスタルも育てなかったからな。お前は全ての個に優り、集団すらも殲滅する最強のジョーカー。誰かと協力して物事を成す戦士に育てなかった。お前に追隨できるのはジュリエッタくらいだろうよ」

人には向き不向きがある。

そして指揮官ができなくても、たった一人で戦況を変えられる絶対的なエースに育つ

たならそれでいいのだ。力をつけさせた上に指揮官の真似事までさせなくていい。

その割にはハッキングなど、戦闘以外の技能はたらふく仕込んだが。

「カイン、次は宇宙か？」

「はい。シュヴァルベのFAカスタム、その実践教導を地球外縁軌道統制統合艦隊に」

「お前……。多忙すぎて倒れるぞ？　しつかり休んでいるのか？」

「ええ。もうすぐ完全休暇です。三日ほど休ませてもらえますよ」

「ならゆっくり休め。ジュリエッタの写真と一緒にな」

「……あなたもそのことで揶揄いますか」

「クク。このヘタレめ。ラスタルから色々聞いてるんだよ。……大仕事が終わった

ら、伝えるんだろう？　お前の勤では、どれくらい先なんだ？」

「案外近いかもです。宇宙の騒乱が終わったら安定期に入りそうですよ」

それは良いことを聞いたとガランは、いや、また名無しの男に戻る『髭のおじさま』は

笑う。

その時はラスタルと一緒に面と向かって揶揄ってやろうと、また楽しみが増えた。

3 2 天使と悪魔の目覚め・1

それは火星のハーフメタル採掘場での発見が発端だった。

ハーフメタルを掘り出しているところにエイハブ・リアクターを二基搭載したガンダム・フレームと、用途不明のとても大きく大きなMSらしき機械。それに複数あるMWのような不思議な形状の機械が出てきた。

ガンダム・フレームはともかく、他の機械がどういうものかわからず、そこまで掘り出せないということもあって鉄華団はガンダム・フレームとMWもどきをティワズの歳星に送ることにした。

ガンダム・フレームはフラウロスだとわかったが、MWもどきはコックピットもなかったのどどういう機体かわからなかった。動力も不明でどうやって起動するのかについても四苦八苦ししていた。

そのため、オルガの伝手でマクギリスにその機体のことについて聞こうとティワズの整備士エーコが提案。このままではわからずじまいであることは明らかなので、オルガが連絡を取った。

その画像を見て、マクギリスはすぐに動くことを伝えた。マクギリスはガエリオとカ

ルタに連絡を取って三人で戦艦を動かして火星へ向かう。

話は変わって。

テイワズは今、少しばかりゴタゴタしていた。下部組織である鉄華団が順調に成果をあげていたことでNo. 2のジャスレイ・ドノミコルスが苛立っていた。自分の立場を鉄華団の兄貴分である名瀬が奪いにくるのではないかと思っていたのだ。

それだけテイワズのボス、マクマードが鉄華団と名瀬を気に入っているからだ。

そのことを憂いたジャスレイは鉄華団とマクギリスが手を組んだと聞いて自分もセブンスターズと渡りをつけようと考えた。前当主の話になってしまいが、ジャスレイはクジャン家と関係があったのだ。

それを用いて火星で発掘されたMWもどきの画像を送った。何が陥れる証拠になるかわからないからだ。

その画像を送られてきたイオクは、意味がわからずラスタルに相談していた。

「ラスタル様。ジャスレイ・ドノミコルスなる者から送られてきた画像なのですが……。兵器のようですが心当たりがなく」

「どれ。……クロウリー。お前も見てみる。最悪の事態かもしれない」

ラスタルはイオクから受け取ったタレットに表示された画像を見て、一瞥しただけでその兵器の正体を看破した。隣にいたクロウリーにも確認させるためにタレットを渡す。

クロウリーもタレットを見ると、鉄仮面越しなのに息を飲んで驚愕の表情を見せていた。それをジュリエッタは感じ取って、この人も感情なんてあるんだと思っていた。『ブルーマ……？』これがあるということはMAもあるということに……。ツ！ 火星か！』

「MA？ 火星？」

この場で唯一、MAについて知識がなかったイオクにラスタルが厄災戦の時の人類の敵だと伝える。ブルーマはそのMAの付属ユニットだということも。

「クロウリー。何故それが火星に繋がる？」

『ジャスレイという男は確かテイワズのNo. 2のはず。そんな男がギャラルホルンに連絡をつけてきたということから、テイワズとは表立って対立するような事案ではないのだろう。なにせテイワズとアリアンロッドはドルトコロニーの一件で溝が深まったのだから。その男も切羽詰まっていなと見ると、対岸の火事。木星圏で危なくないとすれば彼らの影響力があるのは他に一部コロニーと火星だけ。地球に彼らの拠点はないからな』

「コロニーにこんなものがあるわけがないからな。消去法か」

『後は火星で以前不穏なものを感じたということもある』

ラスタルが頷いていると、下士官が展望室に入室してきた。今日は本来月の近くに作り上げたアリアンロッド宇宙本部で休暇だったのだが、イオクが相談事ということでもラスタル達はやってきていた。

下士官は運悪く当直になっていた者だ。その彼が報告書を出してきた。

「マクギリスとガエリオ、カルタが揃って火星へ？ まさかMAを討伐する気か？」

『いや、そこまで過激なことはいらないだろう。アレを呼び起こしたら一機だけでも人類の生活圏が狭まる。……ラスタル。私は行くぞ。そのためのガンダム・フレイムだ』

「呼び起こした際の保険ということか？ わかった。だが最善策は呼び起こさずに解体することだ。……お前には釈迦に説法だったか」

『ああ。解体用の機材も借りていく。艦を一隻借りるぞ。シャトルでは間に合わないかもしれない』

「行け。そして事態を見極めろ。私まで行ったら地球圏がスカスカになるから私は残る。すぐにこちらの任務も始まるからな」

アリアンロッドの休暇が終わればラスタルも忙しくなる。MAという事案も大事だが、日常を守ることも大事だ。

それに、クロウリーが行けば問題ないだろうと全幅の信頼を寄せていたからこそその結論だった。

「あの、ラスタル様！ 私もクロウリー准将に同行してよろしいでしょうか？」

「ジュリエッタ、お前もか。理由を聞いても？」

「嫌な予感がするのです。それはもう、過去一番なくらいに。私が行って何が変わるのかわかりませんが……」

「……お前の勘も良く当たる。わかった。クロウリーを補佐せよ」

「はい！」

クロウリーとジュリエッタはすぐに火星へ行く準備を始める。火星まで長い航路だ。

一隻だけとはいえ入念な準備がいる。

『ジュリス二尉。嫌な予感とはどれほど当たる？』

「ふふん。実のところ百発百中です。これに従って物事を避けたら、女子の嫌がらせを全て回避できましたよ！」

『……そうか。士官学校の時に苦労したのだな』

「ええ。幼年学校はまだしも、士官学校ではエリート志向が高くて女子は私のような孤児を蹴落とそうと必死になっていましたからね。良い危機感知の練習になりましたよ」

『随分ポジティブなことだ』

したり顔で説明するジュリエッタに、クロウリーは溜息をつく。

その嫌な予感というものがどうい風なものだったのか聞くのをやめたクロウリーの失敗が後々に響いてくる。

「ラストル様。MAを討伐すれば七星勲章を得るといのは本当ですか？」

「三百年前はな。この七星勲章の数で我々セブンスターズや他の良家の席次が決まっている」

「マクギリスは、それを利用して席次を盤石にするつもりでは？ 新たな授与者ともなれば大戦果と共にギャラルホルン内で発言力が増すでしょう」

「イオク。それがどうした？ 奴は今や正式なフアリド家の当主でヴィーンゴールヴを統べる男だ。七星勲章を得た程度で何が変わると思っている？」

「アレは、妻の子ですらないのでしょうか!? 赤の他人がセブンスターズを継承していることがおかしいのです！ 実績まで得ては、奴の暴走の歯止めが効かなくなる！」

クロウリーとジュリエッタが去った後に、イオクはそう申し立てた。

どこからかマクギリスの真実を聞いたのだろう。だからこそ、余計マクギリス憎しとなっている。

イオク自身が、セブンスターズコンプレックスを患っているために。

「今の地位が、出自に反して相応しくないと」

「ええ。誉れあるヴィーンゴールヴはセブンスターズが率いるべきギャラルホルンの中心！ それをあのような男が座っていると思うと……！」

「だが、公表したところで実証できる証拠が何も無い。真実を知るイズナリオ殿は失脚して亡命している。……なんにせよ、我々は普段通りに任務に忠実であるべきだ。そうして民衆から理解を得て信頼を回復するのが今すべきこと。急がば回れという奴だな。こうした地道な行動が積み重なって後々に響いてくる。政治や統制というのはそういうことだぞイオク。」

我々は軍隊だが、英雄のように華々しい活躍はいらん。そんなものはクロウリーに任せとおけ。エースという一過性の栄光の証ではなく、我々は長期的な安心を与える軍隊であるべきなのだから」

ラスタルはイオクをそう説得する。

エースももちろん大事だが、そんなエースは何人も要らない。アリアンロッドには複数いる上に、クロウリーもジュリエッタもいる。

マクギリスのことも公表できる段階ではない。切り札は無闇矢鱈に切れればいいというものでもないのだ。

切るべき場面を整える。そして最も効果的な場面で押し出す。それこそが切り札としての用い方。

下手に切ればむしろ利用されて、不利になる。そんな危険を伴ったものが切り札と呼ばれるものだ。

「イオク。次の任務に集中しろ。マクギリスのこととなると視野が狭くなる。今日の内に気持ち落ち着かせておけ。司令官には冷徹に状況を俯瞰する視野が必要だ」

「は。わかりました」

イオクはそう言つて敬礼して退室する。

廊下で待つていた忠臣が、イオクに話しかけてきた。

「イオク様。どのような物でしたか？」

「あの男が言つていたように危険な物だった。我々を邪魔した鉄華団が持てば危険な戦力となるだろう。ジャスレイなる者は鉄華団の危険性をよく教えてくれた。エドモントンのように我々に罪をなすりつけるだろう。ドルトの件も鉄華団の仕業だということはないか。やはりあの組織は滅ぼさなければならぬだろう。これも立派なアリアンロッドの業務だ」

「危険組織の摘発ですね？」

「そうだ。休暇を切り上げて第二艦隊は出撃だ。次の任務は火星の悪辣企業、鉄華団の摘発だ！」

「既に準備は整つております」

「よし！ すぐに出るぞ！」

そうしてイオクの第二艦隊は火星に向けて一足先に出発する。

その様子を、休暇に戻っていたラスタルは気付くことはなかった。クロウリーもジュリエッタも出発前の休眠を取っていたので気付けなかった。

気付いたのはイオクが出発して四時間後のことだった。

「嫌な予感はこちらでしたか……」

『ラスタル。イオクはM Aが自律兵器だと知っているのか？ ギャラルホルンで自律兵器が禁止だというのにM Aを知らない様子だったが……』

「知らないだろう。すまない、即座に出発してほしい。これはジュリエッタではなくても嫌な予感がする」

『ああ。もしM Aが目覚めたら私のことは諦める。種別次第では、私は兄弟のようにヴァルハラへ行くだろう』

「……そうしないために、ゲーティアを調整させた。生きて帰ってこい。ジュリエッタもな」

ラスタルは苦痛の表情を浮かべながらも二人を送り出す。

それからクロウリーはゲーティアのコックピットに籠るようになった。まるで最終決戦前かのように。

「マクギリス。珍しいな？ お前がカインを呼ばないなんて」

「物理的に不可能だった。金星近辺のコロニーへ監査に行っているようだな。最近あちらで多くの海賊が暴れていたようで、戦費が膨れ上がっているらしい」

「逆方向か……。確かにそれは無理だな」

「でも、火星の情報だと休眠しているんでしよう？ カインの戦力に頼る必要もない案件だわ。……一応物が物だから私もガエリオ坊やも来たけど」

「心強いよ、カルタ。私に取っても未知の物だ。もしもがあつては困る」

33 天使と悪魔の目覚め・2

マクギリス達が火星についてすぐしたことは鉄華団に会うことだった。採掘場からMAを掘り出したのは彼らだ。彼らに顔を合わせなければ話は進まない。

カルタとガエリオは二年前の出来事から鉄華団には苦い印象があるが、それを飲み込んで接しなければならぬ。それだけの大きさだからだ。

マクギリスとオルガが握手をしたところで、三日月がガエリオを見て呟く。

「今度はガリガリもいるんだ」

「お前……。相変わらず失礼な餓鬼だな。俺の名前はガエリオ・ボードウィン。ボードウィン家を正式に継承した准将だ」

「ププ。ガリガリって……」

「笑うなカルタ！」

相変わらずだった三日月の様子にガエリオは訂正をさせるが、初めて生で会った三日月の様子にカルタは笑ってしまった。バルバトスを操縦するパイロットだとは事前にマクギリスから聞いていたが、この天然つぶりは笑いを堪えられなかった。

「そっちは？」

「……地球外縁軌道統制統合艦隊総司令官、カルタ・イシュー准将よ。二年前はどうも。『鉄華団の悪魔』さん」

「二年前？」

「ほら、三日月。僕らが地球に突入する時に防衛網を準備してた人だよ」

「ああ。あの時の」

三日月は直接戦ったわけではなかったのであまり覚えていなかった。ビスケットに言われて地球外縁軌道統制統合艦隊と二年前という言葉に納得がいったようだ。

カルタはその時に何人もパイロットを失っている。それをまるで印象に残っていないような返しをされたのは堪えたが、実際あの時は鉄華団にしてやられた。戦ったのもその一回のみ。

印象に残っていないなくても仕方がないと、飲み込んだ。

（これが、マクギリスの言っていた戦いでしか生きられない子供達。オルフェンズ。二年経って少しはまともになったんでしようけど、特にこの子はそれが顕著なんだろうね。『鉄華団の悪魔』の戦績はおかしいもの……。これが、クーデリア・藍那・バーンスラインが変えたいと思っている火星の実態）

カルタは実際に会ってみて、鉄華団と三日月の歪さを感じていた。ハーフメタル事業によってこれからは戦闘をする回数は減るかもしれないが、戦闘を行わないということ

にはならないだろうと感じていた。

戦うしかできない子供もいるのだろうと。

ガエリオもアインを討たれたことを改めて思い出していたが、アインに引き摺られてここで諍いを起こせば、何十万という人が亡くなるだろうと理解していた。MAが起動すれば厄災戦の再発と同義だ。

まずはMAの解体に専念する。だからこそアインのことは話題に出さなかった。

「早速移動しよう。MSはなしで、MWとこちらで用意した解体用の機材を現場に持っていく」

「ヤバイ代物だっというのに、MSはなしなのか？」

「MAはほとんどの場合エイハブ・リアクターに反応して起動する。起動してからは人口密集地を襲うようにプログラムされているが、起動しなければただの物体だ。これは前例が二件あるために間違いないだろう」

「二つしか前例がないのかよ……」

「むしろ二件もあったことが問題だ。それだけMAとは恐怖の対象であり、目覚めれば火星が減びると思ってくれ」

「わかった。MSはもしもの時のために本部待機にさせてもらう」

マクギリスとオルガがそう話し合い、MSは置いて移動を始める。マクギリス達も

持ってきたMSは共同宇宙港に降ろしたもののそこから出す気は無かった。

一般車両とMWのみで移動を開始する。車両の中でMAの詳しい説明と、解体作業の手順について話し合った。解体作業は下手をすれば何週間もかかる根気のいる作業であり、その間鉄華団の他の仕事は休んでもらうこととなった。

「ねえ。ライオンはいないの？」

「ライオン？」

「カインのことだ。カインは別の任務に当たっていてな。火星には来ない。それに解体作業ならカインの力も必要ない」

「ふうん。この前の礼を言いたかったのに」

『夜明けの地平線団』の時の話か。お礼を言うのはこちらだと思っていたが」

マクギリスは戦闘についての礼だと思っていたが、それならマクギリスが協力を願ったので礼を尽くすならこちら側だと言いたかったが。

三日月が言いたいことはそうではなかったらしい。

「ん、いや。戦闘の話じゃなくて。まあいいや。どうなったかも聞きたかったけど、アンタら知らなそうだし」

「仕事の話ではなく？」

「うん。ライオンは大事な奴にちゃんと話ができたのかなって」

「……ん？」

セブンスターズ三羽鳥は全員首を傾げた。

ライオンがカインのことだとガエリオもカルタも今知ったが、それを知っていたマクギリスですら知らないことが出てきた。

カインにとっての大事な奴。

大事な奴とはどういうことか。

この中で一番経験値のあるマクギリスが勘でその答えに行き着く。

「それは、女性か？」

「それ以外あんの？」

「あー、なんだ？ 三日月って言ったな。カインにはその、好きな女性がいると？」

「そう言ってたけど？ 知らなかったの？」

「知らなかったわよ!? あの子、そんなこと一切話さないもの！ どこの女!?」

話の流れでガエリオも察して、カルタは発狂する。カルタはカインのことを手のかかる弟のように思っていた。そんなカルタには相談せず、三日月に話していたことが悔しかったのだ。

信頼関係は確実に三日月より築いている。この中ではマクギリスがそのはずだった。なのにマクギリスもその女性のことを知らない。

「知らない。ギャラルホルンの誰かじゃない？」

「監査局、ではないだろうな。そんな気配は一切なかった」

「だなあ。俺達の知らない二年の間にそういう奴ができたのか？」

「二人でわからないなら、誰かわからないじゃない……」

「……まあ、私達同僚ではなく、外部の三日月・オーガスにだからこそ話せたということもあるのだろう。決して我々が蔑ろにされたわけではないだろうさ」

「ギャラルホルンで有名な女性だったらすぐわかるからな。特に俺とマクギリスなら監査局時代の名残で顔は広いし」

カインが話せない理由にもなんとなく察しが付く三人。ギャラルホルンは広い組織だがマクギリスとガエリオなら特徴的な女性であれば思い出せる。それだけ女性隊員は少ないのだ。

それに軍人なのだからいつ死ぬかわからない身。三日月の話からもまだカインはその女性と付き合っている様子はない。そんな不鮮明な間柄だから話していないのだろうと考えた。

「お礼ということ、カインにアドバイスでももらったのか？」

「うん。ちよつとね」

「そうか。私も妻についてカインには助けてもらったよ」

「チヨコも?」

そこからは共通の話題ができたのか、マクギリスと三日月はひとしきり盛り上がる。それをカルタとガエリオは微妙な顔で聞き、オルガや運転をしていたビスケットは曖昧な表情で口を出さなかった。

「イオク様。アーレスには既にハーフビーク級が三隻停泊しています」

「くつ、マクギリスに先を越されたか。MS隊発進用意! アーレスを通らず、グライダーで直接火星に降りるぞ!」

「はっ!」

マクギリス達と鉄華団が採掘場に到着して実際のMAを検分していた。MSの倍はあ
る全長。その異様とプルーマからマクギリスは結論を出した。

「最大でも主天使級だな。MSの倍程度ということは中位階級に間違いない。上位三隊
だったら数週間の作業では済まなかったかもしれないな」

「何の話だ?」

「MAの等級だ。この階級で大きさと強さが決まっている。下位三隊に属していればM
Sと同等程度の全長。中位で倍、上位だと数倍だと記録されている。最上級の熾天使級

だとMSの十倍の大きさで、ガンダム・フレームでも十機で同等とされたらしい」

そんなMAの序列の話をしていると、三日月が上を向く。ビスケットがその視線に気が付いて釣られて上を向くと、空から流星が降ってきていた。

「オルガ、上！」

「あ？ ……オイオイ、ありやあMSの大気圏突入か？？」

「ギャラルホルンのグライダー？ ……どここの部隊だ？」

マクギリス達は一切心当たりがなかった。火星支部からも何も連絡がなく、乗ってきた戦艦には全て待機命令を出している。

火星支部はマクギリスの支配下にある。そのためラスタルが火星支部にイオクのことを伝えたら訝しまれると思えば連絡しなかった。それに火星に降りるには火星支部の許可が必要だ。その手続きをしている内にマクギリスに話が行くだろうとラスタルは考えていた。

そうすればイオクに降下許可など降りず、足止めできると考えていた。ラスタルとイオクは表向き協力関係だ。だというのに味方の身を売るような真似をすれば後々に響く。

あとはそう。クロウリー達が間に合うだろうと信じていたのだが、タッチの差で間に合わなかった。

イオク達のレギンレイズが火星の大地に降り立つ。そして先頭のイオクが無造作に採掘場へ近付いた。

「マクギリス・フェアルド！ 貴様が鉄華団と手を組み、禁止兵器MAを手にしようとしているという内通を受けた！ これをギャラルホルンへの叛意と捉え、禁止兵器を運用しようとしている鉄華団を危険組織としてアリアンロッドとして摘発する！」

「……おい、あのバカ何を言ってるんだ？ MAを運用って、厄災戦が人と人の争いだったと思ってるのか？」

「MAを作ったのは確かに人間だけど、そういうものじゃないって習わなかったの？ いくら親が早く亡くなったからって、セブンスターズとしての教育は親がいなくてもされるでしょう？」

イオクの発言にガエリオとカルタが狼狽する。

同じセブンスターズとして有り得ないことしか言っていないのだ。

たとえ当主が亡くなっても、当主の妻や家に仕える者、もしくは家庭教師などが絶対に教育する。当主としての最低限の知識は当主のみに継承されるようなことはないのだ。

後見人になったラスタルを責めることはできない。ラスタルもアリアンロッドの運営で忙しく、イオクの教育などクジャン家に代々仕える者に任せきりだ。後見人といえ

ども名前だけの関係だというのは同じような関係だったカルタが一番わかっていた。

マクギリスもイオクの発言に驚いているが、マクギリスは動けない。

こちらにある戦力はMWだけでMSには敵わない。それにこれ以上は許容範囲を超える。

「イオク、今すぐ止まれ！　MAはそんな生易しい機械ではない!!？」

「問答無用！　覚悟！」

イオクが射撃の体勢を取るために一步踏み出したところで、MAの感知範囲に接触してしまった。

電源が入ってしまい、天使が目覚めの産声を上げる。

その産声は、口から放たれるメガ粒子砲という名前のビーム兵器によって行われ、地面を挟りながら天へと届かせる復活の宣言。

天使は三百年の時を経て、墓標より蘇った。

「え……？　まさか、もう乗り込んでいたのか!?!　総員、迎撃用意！」

イオクは指示を出す、MAハシユマルは即座に自分の子機であるブルーマに指示を出す。

ハラガヘツタと。

目の前の馳走を、喰い散らかせと。

憎きMSを粉碎せよと。

親から指示を受けたブルーマは、それを神の啓示だとしても言わんばかりに行動で示す。少し集まっている人間よりも、今だけはエイハブ・リアクターの方が優先だと優先順位を変えていた。

折角の目覚めなのだ。これからこの地上の人類を滅ぼさなければならないのだ。

神の座おほす場所へ、人類を導かなければならないのだ。

そのためにはエネルギーがいる。万全な状態に戻らなければならない。神への宣誓のためにビームを放ってしまったので、使ったエネルギーを回収しなければならない。

使命を全うするために。

では、いただきます。

「うああああああ!!?」

「イオク様、お逃げください！ こいつら、普通じゃありません！」

「鉄華団、ガエリオにカルタも！ 今すぐに後退するぞ！ いつこちらに予先が向くかわからん！ 目覚めた以上奴は火星を滅ぼすぞ！」

「クソ、どうしてこうなった!!? 全員撤退だ！ 本部にもMSの用意をさせろ！」

イオク達がスケープゴートになっている間に鉄華団とマクギリス達は撤退する。

予定が全て狂い、MAを討伐しなければならなくなった。

マクギリスも通信機を借りて火星支部へ連絡。この場所から一番近い人口密集地であるクリュセの防衛をさせることと、自分達のMSを持ってきてもらうことを連絡した。

カインがいないことを、今更ながら悔やんだマクギリスだった。

イオク達が火星に着陸した頃。ようやくクロウリー達の乗るハーフビーク級が火星近郊に着いた。かなり飛ばしてきたのだがイオクには追いつけなかった。

追い抜いたということはあり得ないとクロウリーとジュリエッタの直感が告げており、火星に着いたらすぐに戦闘を行えるように準備していた。

イオクを捕らえるためと、MAが起動してしまった時に備えてだ。

クロウリーがブリッジからイオクのハーフビーク級がアレスに入港していないことを確認していた時、火星から空へと昇る一条の光が目焼き付いた。

それは人類を焼き尽くす暴虐の印。憎く、忘れたこともない仇敵の産声だった。

「クロウリー准将。今のは……?」

『MAのビーム兵器だ。今目覚めたのか、もう暴れているのか……。火星支部には入港要請を出しておけ。艦はそのまま待機。ジュリス二尉、私と一緒にグライダーで火星に

降りてもらおう。MAに勝てるのは私と二尉だけだ』

「は！・了解です！・」

クロウリーとジュリエッタも火星へ降りる。グライダーの使用許可も後から取ることにする。そんな正規の手順なんて踏んでいられないほどの緊急事態だった。

この一秒一瞬が、人命に関わるのだから。

34 天使と悪魔の目覚め・3

MAが起動して。

一番近くにいたイオク達はブルーマに襲われていた。百を越す数のブルーマが地面から這い上ってきて、それらが一斉にMS部隊を襲ってきた。いくらレギンレイズとはいえ、たった八機のMSで圧倒的な戦力差を覆すことはできなかった。

相手がただのMWもどきであればどうとでもできただろう。だがブルーマはMAの眷属、MWではない。厄災戦の際も数々のMSがそのブルーマに屠られてきた。

太古より続く、数こそ正義という戦争の基本が通じてしまう兵器なのだ。

レギンレイズといえども、十機以上のブルーマに押し寄せられたら機体の操縦など効かなくなりそのままコックピットを貫かれる。一機、また一機と撃破されていく。

このままでは全滅だと、イオクの親衛隊の中では状況判断ができる方の部隊長がイオクへ進言する。

「イオク様、お下がりにください！ このままでは全滅します！」

「しかし！」

「クジャン家を存続させるためです！ あなたは生きて、我々の死を無駄にしないでく

「ださい！」

「そうですイオク様！ あなたは生きなくてはなりません！ あなたはアリアンロッドの第二艦隊司令なのです！」

「お、お前達……！ お前達の思いは受け取ったッ！ 必ず貴様らの仇を、鉄華団を潰してみせる！」

イオクは部下に庇われる形で戦線を離脱。部下達はプルーマの波に飲まれ、帰らぬ人となった。

ハシユマルも七つものご馳走があれば十分で、一つ取りこぼした程度は気にしなかった。それよりもエイハブ・リアクターでは得られない空腹を満たさなければならぬ。

プルーマにはオイルや電力などを取ってくるように指示を出し、ハシユマル自身は人の一番多そうな近場へ移動を始める。

ハシユマルとプルーマの一团が去った後、グライダーに乗ってガンダム・ゲートイアに搭乗したクロウリーと、レギンレイズ・カスタムに搭乗したジュリエツタが火星に降り立った。

レギンレイズの残骸と採掘場の不自然な穴から、MAは結構離れた場所にいることがわかった。そして相手の軍団の規模も。

「……エイハブ・リアクターを引っっこ抜いていますね。それにこの損壊具合……レギン

レイズだと判別できませんよ」

『リアクターの照合も難しいからな。MSはMAに対する切り札であつて餌にもなりうる。ビーム兵器の座標を考えると、あれは目覚めの一撃だったな』

「准将、どうなさいますか？」

『……一番近く最大規模の人口密集地はクリュセ。その手前にも農業プラントがあるな。MAの習性を考えればこのどちらかに行く。そしてどちらにしてもこの渓谷を通るだろう』

「そこで迎え撃ちますか？」

『無理だと私が判断したら、ジュリス二尉は火星支部と乗ってきた戦艦で地球へ戻れ。ラスタルへ伝え、ガンダム・フレームでMAを倒せ』

ジュリエッタの実力ならガンダム・フレームを使いこなせるだろうと思つていた。クローリーはこれで失敗したらガンダム・フレームに頼るしかないのだと考える。

ここにはマクギリスなどセブンスターズの実力者が来ている。鉄華団もいる。それでも負けたら、勝てるのはジュリエッタだけになる。それ

最後の希望を費やすつもりはなかった。

「命令ですか？」

『命令だ。最悪火星を捨ててでもダインスレイヴで倒すとか、ラスタルなら考えるだろ』

う』

「弱気な准将など、気持ち悪いですね」

『それだけの相手だ。できるならこの手で粉碎するとも。行くぞ』

クロウリー達は移動を始める。

一方マクギリスと鉄華団はどうか撤退できており、MSの用意を始めていた。

そしてクリュセへの避難勧告と同時にハシユマルとプルーマの分断作戦を考える。

渓谷を爆破して分断することとした。

鉄華団はすぐにMSを用意してハシユマルの進行速度を遅らせる、または爆破地点までハシユマルを誘導する任務に取り掛かる。

マクギリス達はMSを受け取りに行った。火星支部の基地もハシユマルに襲われて自力で取りに行くしかなかったのだ。

ハシユマルはギャラルホルンの基地を襲撃してオイルなどを補給した後、最短ルートを通ってクリュセに向かっていった。

そのハシユマルへ、明弘が率いる鉄華団の二番隊が一当たりして爆破地点まで誘導しようとして攻撃を仕掛けようとする。

だが、それは別の方向から邪魔をされた。

黒いレギンレイズが、カスタマイズされたレールガンで距離ギリギリからその一撃を

加えていた。動きが遅かったこともあってその弾頭はハシユマルに直撃。ハシユマルもその方角を見て、抵抗するMSと人の密集地を検知。

小さな場所であれば優先しようと考えていかなかったハシユマルだったが、そちらに戦力があるならば踏み躪ろうと向きを変える。

「ふ、銃身が逝ったか。だが一矢報いてやったぞ鉄華団！ これで部下も浮かべられる……。本当なら徹底抗戦したいところだが、生きろと願われた。私はその意思を受け継ぐ！ さらばだ！」

その弾丸を食らわせたイオクは撤退をする。最大出力で放った一撃でMAは沈黙しただけだと信じて。

だが、ただの一撃で戦闘不能になるわけもなく、興味を引かれただけだ。

方向が変わってしまったことに、明弘はキレる。

「あつちは農業プラントがあるんだぞ!?？ やったのはどこのバカだ!?？」

二番隊がハシユマルを追う。ライドが先行して農業プラントを守ろうとするが、ハシユマルは一気に人類を滅ぼすためにメガ粒子砲を放った。

MSはナノラミネートアーマーを施しているのでメガ粒子砲が直撃しても熱い程度で機体の損傷は少なかった。だが、後ろにあった農業プラントはそうはいかない。MSを超えて建物も人も燃やし尽くし、黒煙が空へ昇っていた。

「ああ……い！ ああああああ！ なんなんだよお前！ 埋まってるならずつと埋まってるよお！」

残っていたライドはブルーマに襲われる。メガ粒子砲が効かないのなら直接潰そうと派遣されてきた子飼いだ。

ライドも奮戦するが、数が数だ。取り付かれて装甲や盾を壊されていく。

「チクシヨおおおおお！」

『間に合わなかったか』

その言葉と同時に、ブルーマが多数弾かれる。三日月の乗ったバルバトスがライドに近寄る。ブルーマをメイスで弾き飛ばし、近寄ろうとしているブルーマはゲーティアに乗ったクロウリーがアンチマテリアルライフルで吹き飛ばしていった。

「三日月さん……と、だれ？」

『ギャラルホルンの者だ。アレは私が倒す。それに鉄華団の少年。阿頼耶識とガンダム・フレームがMAの前に揃ったら動けなくなるぞ。三百年も経てばリミッターが再び付けられているだろう。粗悪品な阿頼耶識なら尚更』

「アンタ、何を……」

三日月が言葉を続ける前にバルバトスが警告音を鳴らす。操縦桿を操作するが、クロウリーの言うように動かなくなってしまった。

「何が……?」

『ガンダム・フレームによるリミッター解除と、阿頼耶識のパイロット保護システムだ。MAを倒すために人の身を捨てる覚悟を問われている。——だが、君はそんなことをしなくていい。私が全てを終わらせる。他にもガンダム・フレームのパイロットがいるのなら退避させるといい』

クロウリーはそれだけ言うとプルーマの群れに突っ込んでいった。そこに遅れてジュリエッタも合流する。クロウリーは嫌な予感がして先行したのだが間に合わなかったのだ。

プルーマを殲滅させながらMAを指す。ジュリエッタから通信が入った。

「准将。イオク様を見付けましたが、放り出しました。戦場からは離脱するようです」
『アレに気を回している余裕はない。ここからは死地だ。生き残ることだけを考えろ』
「は」

プルーマを片しながら、MAの反応を追う。MAはクリュセ方面に向かいだしたようだが、やはりガンダム・グシオンリベイクフルシティも動きが止まっていた。

「新手?!?」

『ギャラルホルンのレメゲトン・クロウリー准将だ。MAが復活したと知り援軍に来了。クリュセを落とされるわけにはいかないだろう』

「……あいつら以外の援軍っているのか？」

「まあでも、あのちっせえの倒してたし。援軍なんじゃね？ とりあえず団長に報告だ。明弘のことも伝えねえと」

鉄華団のダンテとチャド達と合流し、グシオンを運ぶのを手伝いながら次の迎撃ポイントとやらに向かう。向かいながら作戦を聞く。

『なるほど。溪谷の爆破か。マクギリスはブルーマの特性を知っているらしい。最良の判断だ』

「あのちっこいのが本体を直して、ちっこいのも材料があれば増え続けるんだろう？ ならそうするしかねえだろ」

『そして分断したところを君達のエースであるガンダム・フレイムで倒そうと思っていたが、システムエラーでそうはいかなくなつたと。良い、なら私と彼女で二人の代わりに務めよう』

グシオンを鉄華団の臨時作戦本部まで連れていき、オルガに顔を見せるために機体から降りるクロウリーとジュリエッタ。

ダンテ達はすぐにブルーマの排除へ向かっていった。

『お初に御目に掛かる。鉄華団の団長殿。私はレメゲトン・クロウリー。MAのことを聞きつけこうして馳せ参じた。君達のガンダム・フレイムの代わりに私達が働こう』

「そつちもガンダム・フレームってわけか。……ギヤラルホルンは仮面でも流行つてるのか？」

『すまない、顔は火傷が酷くてな。見せられない』

「まあ良いさ。何でアンタのガンダム・フレームは無事なんだ？」

『ギヤラルホルンに保管されているフレームは既にリミッターが外されている。機能不全に陥ることはない』

それと阿頼耶識もつけていないのでクロウリーとゲートティアが同じような症状になることはない。

「アンタ、所属は？」

『アリアンロッドだ』

「そのアリアンロッドはどうやってMAについて知った？俺らはマクギリスにしか伝えていないぞで？」

『背中に気を付けろ、と言っておこう』

「……そうかよ。あともう一つ。この黒いMS、アンタの所のやつか？」

オルガが見せる映像。それはライドの機体が記録していた、撤退するイオクのレギンレイズ。

隠す必要もないかと、クロウリーはあっさりと告げる。

『夜明けの地平線団』との戦いで見ただろう？　アリアンロッド第二艦隊司令官、イオク・クジャンの乗機レギンレイズだ』

「アンタらのせいだ、農業プラントが焼かれたんだぞ！　わかってんのか？」

オルガがクロウリーの胸ぐらを掴む。それにジュリエッタがムツとしたが、クロウリーが手で制する。

『ああ。彼の暴走を止められなかった我々の責任だ。言い訳はすまい。だからこそ、これ以上を防ぐために私達が来た。アリアンロッド最強の個は私達だ。クリュセを守るために、私達を戦線に加えることを許可してほしい』

「……許可してやる。責任を果たしやがれ」

『マクギリス達にも私とジュリエッタ・ジュリスが加わることを伝えてくれ。では行かせてもらう』

クロウリーとジュリエッタはハシユマルの元へ向かう。その間にジュリエッタが質問をしてきた。

「准将。どうして鉄華団に下手に出るのです？　イオク様の責任を准将が取る理由はありませんよ？」

『彼らにアリアンロッドの現状やラスタルの心情、イオクの実態など気付くわけがないからな。アリアンロッドはアリアンロッドでしかない。それは彼らだけでなく、火星に

ついても同様だ。イオクの不始末はアリアンロッドで拭わなければならない。そうなる彼らへの謝罪を私がするのも不自然なことではないぞ』

「まったく。疫病神ですか？ あの人は」

『それには激しく同意する。ここからは私語は無しだ。行くぞ』

鉄華団には全員に連絡が行っていたようで、クロウリーとジュリエッタが参戦しても何も思われなかった。彼らも一度ギャラルホルンと共闘しているためにその辺りの認識ができているのだろう。

渓谷の上からプルーマだけを狙う。本体に攻撃を当てたら反撃を食らうのは先程のイオクの攻撃で実証済み。プルーマだけに狙いを絞るよう徹底された。

その結果プルーマを六十機以上撃破することに成功する。特にクロウリーとジュリエッタの奮闘はすごいもので、三日月と明弘の代わりを務めると宣言したのは嘘偽りなかった。

「お前ら、よくやった！ あとはユージンの班が爆破する！ その後も子機を倒してくれ。本体はギャラルホルンが叩く」

『では私達も移動する。マクギリス達も来るのだな？』

「もうすぐ爆破地点に着くって連絡があった」

『了解した。先回りする』

オルガからの連絡を受けて移動を開始する。

爆破地点にはマクギリスのシユヴァルベ、ガエリオのキマリス・トルーパー、カルタのグレイズリッター。そして石動のヘルムヴィーゲ・リンカーがいた。

マクギリスが代表として、話しかけて来る。

「レメゲトン・クロウリー准将。アリアンロッドは何がしたい？」

『今はMAの討伐だ。アリアンロッドの総意としては、今回のファリド公達の邪魔立てをするつもりなどなかった。ラスタル中將からも正式な任務を傳達されて私と彼女は来ている。MAが目覚めた際に討伐するための戦力派遣だ。イオク・クジャンの行動予定表と共に渡そう』

マクギリスへ、電子データを送る。

そこにはラスタルの印が押されたクロウリー達の依頼書と、イオクの本来の行動予定表。それを見ると火星に来る予定などなかったはずなのだ。

「明らかな電子音声といい、信用できないな」

『だが、MAの危険性を座視できないのはアリアンロッドとしても同様だ。もしイオク・クジャンが邪魔ならセブンスターズとして彼を除名したまえ。ラスタル中將も賛同してくれるだろう』

「エリオン公が？ 同じアリアンロッドだろうか？」

『MAを起こし、その危険性を調べず。任務を遂行しようとしてもしない人間がギャラルホルンに必要だと思おうか?』

「話し合うのも良いが、そろそろMAが来るぞ」

会話にユージンが割り込んで来る。座標データをみると確かにハシユマルが近付いて来ていた。

『言葉が信じられないのなら行動で示すしかないだろう。MAを倒すまでの共同戦線だと思ってくれば良い』

「時間がないな。今はそれで納得しよう」

MS全ての準備を整えて、観測班がしっかりと速度を計測して。

仕掛けた爆弾が、爆発した。

35 天使と悪魔の目覚め・4

私にとつて、レメゲトン・クロウリー特務准将というのは不思議な人でした。

接した期間は短い。アリアンロッドに来て間もないということもありますが、何と言つてもこの方の出張があまりに多いのです。アリアンロッドにいる期間よりも出張の期間の方が長いという異例の上司。

しかし、ラスタル様が信頼する方だというのは普段の業務でわかりました。

本職のMS戦闘においては精鋭揃いと呼ばれる我々アリアンロッドの誰よりも突出していました。それは数多く行なった模擬戦と任務の結果からわかっています。私も一対一ではついで敵いませんでした。

そして准将は驚くことにパイロットとしての才能だけではなく、文官も舌を巻くほどの事務処理能力、そして階級に相応しい知識を併せ持った方でした。質問をすれば確実に答えが返ってきて、知らないことなどないのではないかと思うほど。

アリアンロッドには長い時間いないのに、誰もが彼を一員だと認めていました。それは実力があることと、普段の態度が紳士的であること。そしてラスタル様の笑顔を引き出す方だから、ということが大きいでしょう。

ラストル様の親友というのは本当で、准将といえる時は屈託無く笑われるのです。

アリアンロッドに所属する者はラストル様に惹かれて入隊する者ばかり。そしてラストル様のために働くことを至上としつつも、ラストル様の様々なお顔を見たいというのも紛れもない事実。

笑顔という一部を引き出してくれる准将を嫌う理由がないのです。当の本人の表情は全く見えませんが。

紳士的で、戦場で輝く一等星で、ラストル様のご友人。

その人柄から、実力から。そして孤児である私を一隊員として認めてくれる信頼度から。私は自分のパーソナルスペースにラストル様とカイン兄様、そして『髭のおじさま』の隣くらいに、准将を含めてもいいのかなと思いました。

べ、別に実力を褒められたからではありませんよ？ MA討伐の同行を許可されたからとか、そんな安い理由ではありませんから。

まあ、とにかく。そんな風に認めていましたが、結局彼の本心までは読み取れなかったのです。鉄仮面と同時に、心を塞いでいるようで、少しは親しくなれたと思っても、その仮面の奥を私は感じ取れませんでした。

なんとなくの感情は読み取れるようになりましたけど、全てはわからない人。喜怒哀楽は僅かに見せるものの、その全てを抑え込んでいるような人。そして彼の身の丈も、

本心も。知っているのはラスタル様だけで。私達には全てを打ち明けてはくれない寂しい人。

だから、総評としては不思議な人です。

その不思議な人が、こうも感情を露わにして暴れるなんて思いもしませんでした。

『あああああああ！ 消えろ!!? 人の歴史のためにオレが壊す！ もう二度と大事な者を手放してたまるものか！』

ああ、あの人が怒っている。

そんな当たり前のことを知らなくて、私は自分の無知をさらけ出して。

血を吐きながら意識が遠のいていった。

盛大な爆発音とともに渓谷を構成する岩壁が崩れ、多種多様の岩石がハシユマルとプルーマを襲う。ハシユマルはその凶体の大きさと装甲の硬さから岩落としを強硬策で突破していたがプルーマはその機体の小ささからほとんどが埋まってしまった。

埋められなかった機体も、山となった岩を登るのは時間がかかる。その間に後ろに現れた鉄華団のMS部隊が一機ずつ撃破していった。

「どっどっどっどー」

「さすが鉄華団だな。こちらは任せろ」

ユージンに賞賛の声をかけてマクギリスがハシユマルに突っ込む。それと同じようにクロウリー達も突っ込んだ。

独特のキュウウという駆動音を立てながらハシユマルは暴れ出す。プルーマを助け出すのではなく、目の前に現れたMSの撃破を優先するようだ。

それもそのはず。このハシユマルは直前までガンダム・フラウロスと戦っていた。自分を休眠状態に追い込んだガンダム・フレイムが二機もいるのだ。怨敵と遭遇したように牙を向けてきた。

マクギリスが鉄剣で斬りかかれば、援護するようにカルタとクロウリーが射撃を当てる。マクギリスに負けじとジュリエッタとガエリオもそれぞれの武器で斬りかかり、突き刺した。石動はその堅牢な機体特性を活かしてハシユマルの鋭い爪を防ぐ。

ハシユマルの近接戦闘の速度は凶体に似合わず高速だったが、この場にいるのはギャラルホルンでも最上位に位置する実力者ばかり。避けられない攻撃はあるものの致命傷にはならず、速度的にはついていけない。

それを見ていた爆破班の鉄華団もその戦闘能力の高さにエドモントンで彼らがいなくて良かったと安堵していた。

ガエリオがランスで装甲を削ぎ、マクギリスとジュリエッタが剣で装甲の隙間に斬り込み。やってくる攻撃はカルタとクロウリーが狙撃して撃ち落としていた。

即席のチームとは思えないほどの連携の練度。話し合う時間などなかったはずなのに、一人一人が何をやるのかわかっていっているように動いていた。

今もマクギリスがテールブレードで距離を開けられたが、そこを埋めるように石動が同じポジションに入った。

かといってシユヴァルベとヘルムヴィーゲ・リンカーでは機体のコンセプトが異なる。パイロットも違うのだから全く同じ動きができるはずもない。

だがマクギリスが復帰するまで石動はそのポジションを全うしていた。

「すまない、石動！ 助かった！」

「問題ありません准将！」

入れ替わる時も大きな齟齬や全体への動きの強要などなくスムーズに立ち位置を変えていた。

周りで見ている者からすればギャラルホルンの連携の凄まじさを見せつける場だったが、やっている本人達からすれば堪ったものではない。

（なんだこのやりやすさは!?? 言葉を出さずに全員の動きがわかる!?? これはアルミリアと繋がった時と同じ……!! 自律機械の動きが読めるなど、アルミリアのように人と人の接触ではないんだぞ!??)

（視野が広い? いやだが、モニターに映らない動きまで俺は追えている? 後ろどこ

ろか、目が複数になったかのような……？　そこ！　……何で俺は今尻尾が来るとわかったんだ？？」

（異常よ、こんなの！　指揮官として離れていたとしてもここまで俯瞰して状況を把握できない！　僅かに手が足りないところにだけ気付ける今の状況が異常だって、才能のない私にだってわかる！　）

（とつさに遊撃のポジションに収まったが……。こうも完璧に攻守の切り替えができる判断力があつたか？　相手は人類を滅ぼしたMAだぞ！　こんな雑念を抱ける余念がある時点でおかしい！　それにこれは准将達も同じ状況に陥っている……。！　なんなのだ、これは？！　）

上からマクギリス、ガエリオ、カルタ、石動の所感だった。高速戦闘を行なっているせいで声を出したら舌を噛みそうだったので心の内で思うだけだったが、疑問に感じながらも最適な行動をしている自分達がおかしいという自覚はあつた。

だが一方で、この戦闘に順応している者もいた。

ジュリエッタだ。

（左、上！　右下、地面を砕く目眩し！　からの砂煙からテールブレード！　……見えま
す！　いつかのカインとの戦闘のように！　これをやってるのは、クロウリー准将……
？）

そのクロウリーもアサルトリットを使って攻撃はもちろん、立っている地面を攻撃して足場を悪くして体勢を崩したり、相手への牽制に使ったりしていた。

そして全員が、ハシユマルが口を開く前に回避行動を取っていた。

直後放たれるメガ粒子砲。さっきまで立っていた場であれば直撃し、機体は無事でも攻撃するための武器が焼かれていただろう。もしくはマニユピレーターが融解していた可能性がある。

それを予備動作になる前に予感して避けるなんて超人じみたことができる。それに困惑した四人は次の行動を取れなかった。

むしろ慣れているジュリエッタとクロウリーはすぐに攻撃を再開させる。それを見てマクギリス達ももう一度踏み込んだ。

その様子をユージンから送られてくる映像で確認して、オルガは秘密兵器たるフラウロスや三日月達を戦場に出さなくて済むことを喜ぶ。

だが、待機させていた三日月がそれではダメだとバルバトスに乗り込んだ。

「おい、ミカド？」

「オルガ。俺が行かなかつたらあそこの誰かが死ぬ。そうしたらオルガの立場が悪くなる」

「あれだけ優勢なんだぞ？ それにもう一回お前がMAと戦えばエドモントンの二の舞

だ！ そうなったらアトラとクーデリアに申し訳が立たねえじゃねえか!!？」

「あの二人も大事だけど、俺はオルガも大事なんだよ。それにクリュセには二人が残ってるんだ。人任せにするよりは、自分の手で守る」

「ミカ！」

オルガが止めるまでもなく三日月は戦場に向かってしまう。それに慌てたオルガは自分専用の白い獅電、通称『王様の椅子』に乗り込んで三日月を追いかけた。

そして戦況は動く。

MAは何を思ったのか、メガ粒子砲を連発した。岩壁も地面も粉々に砕くように何発もビームを解き放った。

そのせいで降り注ぐ大小様々な岩。モニターがやられるほどの岩の粒子。全員がその場に居座るのは危険だと感じて砂のカーテンから離脱しようとする。

しかし、それを許すハシユマルではなかった。

「がっ!!？」

「カルタ!!? このっ！」

「プルーマ!!? どこか……きやあ!!?」

『ジュリエッタ！』

砂埃から現れたプルーマによってカルタとジュリエッタは吹っ飛ばされてしまう。

カルタはすぐにマクギリスがブルーマを排除したので軽傷だったが、ジュリエッタには五機ものブルーマが突っ込んでいた。

しかもすぐ近くに岩盤があったためにそこに叩きつけられてしまった。クロウリーがブルーマを即座にバスタードソードで排除したが、レギンレイズはどこどころがひしゃげていた。

『無事か、ジュリエッタ?!?』

「……はは。ようや、く……。名前を、呼んで……。くれました、ね」

『バカなことを言っている場合か！ 応急キットを出せ！ それもできないなら下からせる！』

「……なんでしよう、あなたとの、共闘。そんなに嫌いじゃ、なかった……。ガハッ！」

『石動一尉！ 彼女を連れて下がれ！ すぐに処置しなければ命に関わる！』

「は、はっ！」

吐血までしていたので、石動を使ってジュリエッタを下がらせた。

ハシユマルは先程の鉄華団の仕掛けによる爆破で生き埋めになったブルーマに、火星の大地を掘らせて地中に潜ませていたのだ。そしてメガ粒子砲で視界を奪った後、全くの想定外である真下から奇襲を仕掛け、女性陣を追い込んだ。

だが埋められていたブルーマが六機しかおらず、砂埃のカモフラージュもあまり長く

保たなかったので近場にいたジュリエッタに戦力を集中させて確実に戦線復帰不可能へと追い込んでいた。

その残虐性に、機械が人を殺すという理不尽に。

クロウリーがキレた。

『あああああああ！ 消えろ!!？ 人の歴史のためにオレが壊す！ もう二度と大事な者を手放してたまるものか！』

今までの連携がなんだったのかと思うほどの苛烈さで、単機でハシユマルへ突っ込んでいった。アンチマテリアルライフルと大型のシールドを投げ出して、バスタードソードを両手で持って斬りかかっていた。

直前まで冷静に一步引いて援護に徹していたクロウリーが突出したことを誰も止められなかった。そこまでの激情家だったと、ギャラルホルンの誰もが知らなかったのだ。

近接戦闘で一對一だというのに完全に渡り合っていた。全く引けを取らず、攻撃を受け流すどころかむしろ攻撃を加えていた。

『クソ！ 仮面が邪魔だから動きが鈍る！ ——ジュリエッタが傷付くくらいなら、こんな物最初から着けなければ良かった！』

クロウリーがコックピットの中で仮面を外す。

するとリミッターが外れたのか、格段にゲーティアの動きが良くなった。速度が上が
り、アサルトビットの動きも複雑怪奇になっていく。

キュウウウウ！という悲鳴のような機械音がハシユマルから聞こえる。先程まで六
人がかりで追い込んでいたというのに、今は一人で圧倒していた。

その鬼神の如き動きもそうだが、マクギリス達が動けなかったのはゲーティアから聞
こえてきた肉声が原因だ。

この場にはいないと思っていた人物の声が辺りに響いたのだから。

「か、カイン、なのか……？」

「マクギリス！ 何でカインが准将を名乗って、アリアンロッドにいるんだ……？」

「俺は何も知らない……？ 何も聞いてないぞ……？」

あまりの衝撃に、マクギリスは素の一人称が出てしまった。取り繕う余裕がないほ
どにマクギリスは驚いていたが、それはガエリオもカルタも同じ。

MAという脅威もそうだが、親友だと思っていた人物が自分達に内密に、立場も偽っ
て暴れていた。カインの裏を知っていると思いついていたマクギリスが一番衝撃を受
けているだろう。

そんなセブンススターズ三羽鳥の衝撃を置き去りに、上空から一機の白い悪魔が天使を
襲う。バルバトスがメイスでハシユマルの頭を突き刺していた。

「手伝うよ」

「三日月・オーガス！ 自分の身体を大事にしろ！」

「やっぱりライオンだったんだ。ライオンも大事な奴傷付けられて怒ってんのに、俺になんか言えんの？ 俺だって、オルガやアトラ、クーデリアが傷付くのは嫌だ」

「……好きにしろ！」

バルバトスは少しだけリミッターを外し。本来の力を使い出したゲーティアもハシユマルを追い込む。

最初の内はメイスやバスタードソードで斬りかかっていたが、途中からは獣のように圧倒的な膂力をもってして装甲を砕き、手刀で割り、脚部に着けたクローエッジで蹴り込み。

カインの普段のスマートな戦闘を知る者としてはあり得ない、野生味溢れた戦闘にギャラルホルンの者は誰もついていけなかった。阿頼耶識を付けたオルガでも不可能で、そのカインについていけるのは三日月とバルバトスだけ。

カインは昔から突拍子のない戦闘方法をしていたが、それもあくまであり得る範疇のもの。自分の機体が傷付くことを厭わず攻め続ける姿など誰も見たことがなかった。

時にはアンチマテリアルライフルを拾って口に突っ込んでゼロ距離射撃を行なった。シールドでシールドバッシュをやってノックバックでハシユマルを怯ませ、その隙

に三日月が一撃を与えたり。

アサルトビットを使い捨ての弾丸扱いにして一方的な火力を叩きつけていた。

まるでさつきまでの戦闘のように、何も言わずともカインと三日月はわかり合っているかのように熾烈な攻撃を仕掛けていた。カインが下から投げたメイスが避けられなかったら頭上に跳んでいた三日月が受け取って突き刺すなど、これが初めての共闘だと思えないほど阿吽の呼吸を見せていた。

そこに、誰かが何かをしたらこの状態が崩れるのではないかと思いい何もできない。二人が傷付きハシユマルを攻め立てているというのに、誰も一歩も動けなかった。

それは途方もなく長い時間のように感じたが、実際にはとても短い時間だった。

二体の悪魔に、主天使では歯向かえず。

そもそも過去に、主天使よりも階級が上の智天使がたった一機の悪魔に敗北しているのだ。

悪魔に相応の傷を付けたものの、今度は完全なる暗闇へと落ちていった。

その光景をプルーマを排除していた鉄華団のMS部隊も残さず見入っていた。

厄災戦の一端を、誰もが肌で感じていた。

ゲートティアも傷付いたことで偽装用のエイハブ・リアクターが損傷した。そのせいでリアクターの照合が可能となった。

照合ができたのはギヤラルホルンの者のみ。それは存在しているとされてきたが、ギヤラルホルンでも実在を証明できなかった幻の機体。

厄災戦で製造されたものの、搭乗者が存在しなかった。ただの数字合わせの機体と言われていたガンダム・フレーム。

「ASW—G—72、アンドロマリウス……。最後の悪魔が、泣いてるわ」

天使を誅殺した悪魔の末弟。

全身の装甲が剥がれ、右手のマニピレーターが潰れ、特徴的な二本角の片方が折れ、ツインアイの片方も明滅したボロボロな状態。

その姿がとても悲しげで、カルタは思わずそう零していた。

その感想はあながち間違っていない。アンドロマリウスの中でたった一人の生き残り、確かにそこで涙を流していたのだから。

36 告解

MA騒動が終わった後の火星、アーレスで。

きちんと入港許可を受けて寄港しているハーフビーク級の戦艦の前にクロウリーとジュリエッタがいた。

ジュリエッタの治療が無事に済み、これから軍務を再開させても大丈夫だと軍医からも許可が出たのだ。

『ではすまないがジュリス二尉。先に地球圏へ戻ってくれ。私はまだ後片付けが残っている』

「了解致しました、クロウリー准将。……また呼び方が戻っていますね？」

『アレは緊急時だったからだ。私は普段からの呼び方を変えようとは思わない』

「ラストル様だけ、名前呼びなのですか？」

『……そうだな。彼と同じ扱いを受けたければ私に心配をかけないように……。これは卑怯だな。MAを倒すために同行を願ったのは私なのに、それ以上を望むとは。すまない。君はよく頑張っている』

「結局MAを倒してしまったあなたからすれば、私は力不足でしょう。ええ、それくらい

はわかっていきますよ。ラストル様に遠く及ばないことも」

ジュリエッタが拗ねてしまったことでクロウリーはどうしたものかと悩む。

こういう時に気の利いたことでも言えれば良いのだろうが、それが言えていたらこの関係がいつまでも続いているわけがなく。

というわけで、共通の話題である軍務の話になってしまふ。間違いなくヘタレだった。

『ラストルはまた激務で首が回らないらしい。君が行って助けてやってくれ』

「あなたも戻ればその分ラストル様が楽をできるでしょう？」

『MAの最期をアリアンロッドの代表として見届けなければならぬ。もしもがあるからな。その証拠にクジャン公は今も消息不明だ』

「あの男は……。散々場を引つ掻き回したと思つたらいつの間にか消えているなんて。しかも任務も放り出して、ラストル様には何も連絡がないだなんて」

『となると、また火星に攻めてくる可能性がある。それを警戒しているという意味合いもあるが、それは可能性が低いだろう。勘だが』

クロウリーの勘が火星そのものに危険はないと告げている。鉄華団周りでまた騒動は起きそうだが、火星そのものに攻め込まれるとは思えなかった。

それにクロウリーが残る意味はある。ギャラルホルン火星支部の被害も大きく立て

直しが必要。クリュセへの説明も必要で、そのためには准将という立場は大きい。

ガンダム・ゲートティアも少しの修理で問題なく使うことができる。その修理パーツは持って来ていたので既に修理済みだ。

『それと機体はどうする？ あのレギンレイズはフレームにガタが出たとトーカ整備長が言っていたが』

「その整備長の提案で、とあるカスタム機を受領する手筈になりました。……ガンダム・フレームにも引けを取らない最新鋭機です」

『ガンダム・フレームは必要か？』

「もしもの時には乗れと言ったのはあなたですが？」

『今の所その予定はなくなつた。ラスタルが君へあの機体を渡さなかつたということから、そのカスタム機で十分だと思つたのだろう』

新機体、それもジュリエッタの物ともなればラスタルの裁可がある。火星という離れた場所においても通信は送れる上に、実際確認は取つた。許可もラスタル本人に確認を取ればいくらでもくれるだろう。

「ガンダム・ベリアルですか。……アレを私にはくださいません。なにせアレはカイン兄様のための機体ですから」

『カイン兄様、か』

「准将は私とカイン兄様の関係性をご存知ですか？」

『……ラスタルから聞いている。同じ孤児院で育つたと。拾われる前も一緒にいたらしいな』

「はい。ですので、私の中で特別な人だということですよ。そして兄様は私よりも凄いです。ラスタル様が全てを託そうとするならば、それは兄様になるでしょう」

他人に、兄だということを伝えることは初めてだったジュリエッタ。

それを聞いてクロウリーは自分の存在をどう伝えようかと悩んでしまう。

『ラスタルがどう考えているかまではわからない。まだまだ彼も現役だ。それにベリアル特務三佐は監査局。アリアンロッドの全てを知らない人間だ』

「おそらく、ラスタル様が情報を流していますよ。兄様は特別なんです」

『……ふむ。何にせよ、クジャン公の問題を片付けなければラスタルの跡を継ぐという話もないだろう。まだまだ荒れるぞ、この世界は』

「そうですね。私もゆつくり休んでしまったので、その分は仕事で挽回します。准将もお早いお戻りを」

『努力する』

お互いに敬礼をして、クロウリーはジュリエッタを送り出した。

この後はセブンスターズ三羽鳥との面談だ。ジュリエッタやアリアンロッドの戦艦

がいる間がレメゲトン・クロウリーでいなければならなかった。

だがここから求められるのはカイン・ベリアルだ。

マクギリス達の旗艦に向かい、指示された部屋に入る。そこには三羽鳥が全員座っていた。防音措置が取られている部屋なのだろうと、クロウリーは仮面を外してカインとしての素顔を見せていた。

そして唯一空いていた椅子に座った。

「……カイン。聞かせて頂戴。あなたがレメゲトン・クロウリー特務准将に成り代わっていることをエリオン公は知っているのね？」

「勘違いなされているようなので訂正させていただきます、カルタ様。レメゲトン・クロウリーはラスタル様がオレに与えたパーソナルデータに過ぎません。元々、架空の人物ですよ」

「そんなはずは……。准将としての全てのデータが残ってるのよ!?? それが架空の人物? 実績も士官学校の卒業記録も残っているのに!??」

「はい。正確にはレメゲトン・クロウリーを名乗っていた人物は他にいました。そのデータを残し、エリオン家に仕える人間として適度な戦績と給与のみ払ったオレの隠れ蓑です。ボードウィン家のスレイプニルの艦長のように、普段任務に就いていないセブンスターズ御付きの軍人はいくらか心当たりがあるでしょう? そういった存在の一

人です」

カルタの質問に淡々と答える。これは元々『髭のおじさま』のパーソナルデータだ。それをカインが使い回しただけ。

セブンスターズには家ごとに所持する戦力がある。ギャラルホルンに属している者から私兵まで様々だ。それらを持つていることは公然の秘密となっており、そこに軍人としての給与が支払われていることに異論を挟む者はいない。

マクギリス達も心当たりがあるからだ。

「じゃあ、何だ？ カインはエリオン公と親しい仲だと？ 宇宙演習の時からか？」

「いいえ、その前からです。あの時ラスタル様は演技をされていたのでしよう。詳しくは見ていないので詳細はわかりませんが」

「……いつからだ？ いつからエリオン家の私兵になった？ カイン」

「最初からです。マクギリス様」

ガエリオの次のマクギリスの問いにも正直に答える。クロウリーがカインだとバレた時点で隠す必要は無くなったのだ。

ならば全て告解した方が時間を無駄にしないと考えただけ。

そもそも本当に隠そうと思ったらもう一人影武者でも使わなければ物理的にバレるのだ。だがカインもラスタルも影武者を使うということを考えなかった。

クロウリーを名乗っていた目的もほぼ完了し、ラスタルの大目標も成就する目処が立った。

となればセブンススターズの中でも一大派閥であるマクギリス派閥を取り込むことを優先すべきなのだ。

「最初つてなると、幼年学校もエリオン公の指示で入学したつてこと？」

「はい。……オレは水星の近くで捨てられた孤児です。海賊に拾われ、邪魔になったように地球に捨てられました。その時に拾ってくださったのがラスタル様です。あの方に貰った命をあの方のために使うのはおかしなことではないでしょうか？」

「……ジュリエッタ・ジュリス二尉もエリオン公の孤児院出身だったわね。そういう繋がりなの？」

「一緒に拾われました。そしてオレ達には不思議な力があつた。それはMS戦闘で活かせるとなれば、パイロットを志すのもおかしな動機ではないでしょう」

さっきの衝撃的な告白からまだ立ち直っていないマクギリスの代わりに、カルタが質問する。

カインが言う不思議な力というのも今なら漠然と理解できていた。アルミアも似たような力を持ち、ハシユマルとの戦闘ではそれを実際に感じ取った。

即席のチームが凄まじい連携を取り、更には感応波によって動かす特殊兵装まで使い

こなす特殊能力のようなもの。それを知っていればパイロットをさせる理由にもなる。俺と仲良くなったのも、エリオン公の指示か？」

「そうです。ガエリオ様。イズナリオという前例がある以上、セブンスターズがギャラルホルンにどのような不和を引き起こすかわかりません。事実、あなた方よりも歳下のクジヤン公がああ始末です、誰がどうなるか、オレはラスタル様の目となりました。一番警戒したのは、フェアリド家」

「イズナリオが散々だったからな……。マクギリス？」

一向に会話に入っていないマクギリスへ、ガエリオが確認がてら視線を向ける。話題になっっているのはマクギリスの家なのに一切言葉を話さないのだ。

そしてカインも。マクギリスへ強い視線を向けていた。

「……そうか。エリオン公が一番警戒していたのは俺だったのか。カイン？」

「はい。あなたこそを、最大の宿敵と捉えました。そして、最高の同胞にもなりえると」
「エリオン公に最初に会ったのは……。そうだな、ヴィーンゴールヴ。俺がイズナリオに拾われた直後だった」

「ええ。そしてあなたはバエルが欲しいと言った。……それは今も変わりませんか？」

「……エリオン公が警戒するということは、あの噂は本当だったということか？」

「バエルに乗れる程度でギャラルホルン全てを統べる王にはなれませんが。それならオレは王になっていきます。それにラスタル様が協力して、ヴィーンゴールヴを統べているあなたがいる時点で、あなたの目的は叶うはずだ」

カインとマクギリスが話す間、ガエリオとカルタは話についていけなかった。

マクギリスとは長い付き合いだが、ガンダム・バエルが欲しいなど聞いたことがなく、バエルに認められた者にギャラルホルン全てが追随するといった御伽噺がマクギリスを動かしていたと聞いても受け入れられなかった。

ヴィーンゴールヴを指揮する今でも十分セブンスターズのトップだ。セブンスターズ第一席のカルタも協力するのだから、ギャラルホルンをどうこうするあれこれは揃っているのだ。

そこで邪魔になるかもしれないのは宇宙を統べていると言ってもいいアリアンロッド、つまりラスタルだけだ。

そのラスタルがカインを通じて協力できると要請している。

「カインはバエルに乗れるのか。アレの起動には阿頼耶識が必要なはず。手術をしたのか？」

「いいえ。阿頼耶識によるパイロットリンクはあくまで代行パイロット選定のための予備システム。アレは基本的にはアグニカにしか動かせない専用機です」

「だがカインは起動したと言ったな。フツ、まさか若返ったアグニカとでも言うのか？」

「あながち間違っていないというか。オレは厄災戦の生き残り、アグニカ・カイエルのクローンです。DNA情報はアグニカと変わらないので、バエルというシステムはオレをアグニカと認めるのでしよう。ただ起動できただけで動かさせません。あの中にはオレを拒否する『アグニカの意志』がある」

「ほう？ ほうほうほう！ カイン、その話をもっと詳しく！」

さつきまでの絶望のような顔から一転。

マクギリスは身を乗り出してお目目に星を輝かせてカインに迫っていた。

「いやいや、待てマクギリス！ 何だか今サラツと流してはいけない情報がたくさんあったか？？」

「黙れガエリオ！ バエルにはアグニカの魂が残っているのかもしれないぞ！ それを聴き逃せるか！」

「お前、やっぱりそれが本性だな？？ 随分と猫被つてたんだな！」

「アグニカの魂と呼ぶには相応しくない成り損ないのような残り香があるだけです。阿頼耶識を通じて機体に残ったナノマシンがアグニカの魂の情報を得て、成りすましていくというか。アグニカを思想をコピーしたバイオ脳のようなものがエイハブ・リアク

ターに記憶されているだけですな」

「……それは残念だ」

「マクギリス……。カインも普通に答えるのね」

マクギリスの本性を知って幼馴染二人は困惑しながらも、質問に平然と答えるカインには呆れていた。

詰問の場の空気が完全に変わってしまった。

「……マクギリス、教えて。あなたはバエルを手にして、どのような世界を望んだの？」

「ギャラルホルンをどうしたかったの？」

「正しい世界を作りたかった。身分も年齢も関係なく、その個人が持つ才能を、力を。正しく評価される世界。身分による差別、横行する腐敗、特権階級の増長。これらがある限り俺やカインのような存在がいっまでも世界に使い潰される。ヒューマンデブリや少年兵も同じだな。」

差別と搾取が続く限り、この世界は行き詰まる。それはこの二年で特に顕著となっただろう。最初はバエルを錦の御旗に見立て、暴力が支配する世界にするために全てを破壊しようかとも考えた。……だがそれではただの暴君だ。俺の目指したアグニカ・カイエルとは全く異なる姿だろう」

「おい。今すつごく物騒な話が出たぞ？」

「」

「ガエリオ坊や、お黙り。その考えを破棄したのなら意味のない仮定よ」

カルタがマクギリスのことを知ろうと聞けば、スラスラと回答が出てくる。その内容はカインも聞いていたものだ。だから口を挟まなかった。

幼少期のようにバエルの威光を利用した暴力的な考えであればカインが排除しただろう。だが徐々に思想を変化させて、マクギリスの思想は固まった。

その変化で大きな要因は、アルミリアだとカインは考える。

マクギリスが本当にアルミリアを愛しているのだとわかってから、マクギリスの棘が抜けたのだ。それを感じ取ってからカインはマクギリスをあまり警戒しなくなった。それからの行動はラスタルに反発するようなものではなかったからだ。

それを言語化してラスタルに説明するのは大変だった。だがラスタルもカインを信用しているようでその説明を信じた。

だから二人が警戒するようになったのはイズナリオやイオク、その他のセブンスターズにギャラルホルンでも上位に来る良家となった。その調査対象が多くて難航したが、そこはカインの監査局での肩書きから何とか調べられた。

ほぼほぼ調べ終わった頃に、このMA騒動だ。

ラスタルもイオクが成長することを一応願っていたが、その願いは霧散した。

マクギリスにとってのアルミリアが、イオクにはいなかった。それだけの話だ。

「カイン。エリオン公のしようとしている革命の内容は？」

「セブンスターズ及び、いわゆる貴族制の廃止。特権階級を全て廃し、ギャラルホルンの清浄化を考えています」

「なるほど。……俺は彼の手の上で踊っていただけか」

「まさか。本当に踊っていただけならば、あなたはアリアンロッドを仕向けられていますよ」

「それは怖い。宇宙演習でカインに牽引された並にな」

「妥協点は見付かったでしょう？　そして、理想の世界の目安も」

「アリアンロッド総司令が味方だと随分と簡単そうだ。それには他にも力を貸してくれる友がいる」

マクギリスはカルタとガエリオを見る。

カルタは悠然と頷き、ガエリオは呆れたように頷いた。

「いいわよ。手を貸してあげる。散々手助けしてもらってたし」

「はあ。わかったよ。……出身でその人物を測るというのはギャラルホルンの悪しき風習だ。そのせいでカインも苦しんだ。俺も、こんな間違った組織は直したいと思ってんだ」

「——二人とも、ありがとう。カインも手伝ってくれるな？」

「手伝いますよ。オレもジュリエッタを悪く言うこの体制は嫌いなので」

「そこは自分じゃなくて彼女のことなのかよ……。というか、宇宙演習といいアルミリアの婚約パーティーといい、お前らはどんだけ俺達を化かしてたんだ……。いや、シユヴァルベの一件とかはあからさまだったか？ でもカルタも肩入れしたせいで判断材料に欠けたなあ」

「私のせいだって言いたいの？ ガエリオ坊や！」

「いい加減いい歳になったんだから、そのガエリオ坊やつて呼ぶのやめろよ！」

「アンタ、子供の頃から何も変わってないじゃない！」

「どこが？ めちゃくちゃ変わっただろ！」

わーぎやー言い合うカルタとガエリオの様子を微笑ましく見るカインとマクギリス。

この二人は本当に変わらないと、思った。

全てが上手く回り出したと思った頃。マクギリス宛に通信が届く。石動からだった。

「何かあったのか？」

「それが、鉄華団のオルガ・イツカが確認したいことがあると。テイワズの輸送部門であるタービンスにアリアンロッドのガサ入れが行われたので、カイン特務三佐に確認してほしいと通信が入りました」

「鉄華団との関係は維持したい。カイン、アリアンロッドの予定は？」

「火星に来る前までにそんな調査の予定は入っていませんでした。そもそもタービンを違法組織として摘発すれば、コロニーの運営のために必須なヘリウムガスの供給が滞りますか……？」

それがわかっていないラスタルではない。

それこそ禁止兵器でも運んでいない限り、タービンを摘発する理由がないのだ。MSやMWやその他の武器弾薬を運んでいようが、そんなものは圏外圏で運送業をする上で必須のもの。

核爆弾などを運んでいけば摘発されてもおかしくはないが、ヘリウムガスに、今やハーフメタルまで運んでいるタービNZ及びテイワズがそんな危険を犯す理由がないのだ。利益は十二分にある。

ギャラルホルンに戦争を吹っ掛ける。もしくはそれに準ずることでも考えていない限りタービNZがアリアンロッドに敵視される理由がない。

カインは非常に。非常に悪い予感が脳内で警鐘を鳴らす。

愚者は時に想定外の出来事を引き起こすから、愚者と呼ばれるのだ。

37 無知の罪科・1

イオクは火星の一件の後、木星方面にあるジャスレイの拠点の一つに身を寄せていた。

MAが起動して部下をやられてイオクは自分の戦艦に撤退。その後火星でのゴタゴタの間にジャスレイの拠点まで逃げる事ができていた。

イオクはラスタルの命令に逆らった挙句、部下を死なせたのだ。地球圏におめおめと逃げることは叶わず、家出をした子供のように実家以外の場所へ逃げ込んでいた。

ジャスレイとしても、MAの性能が予想以上でまさかMS七機があつという間にやられてしまうほどのものだとは思っていなかったのだ。厄災戦でかなりの被害が出たことは知つていても、それを成したMAを過小評価していたと言える。

なにせギヤラルホルンでもない限り、MAを倒したガンダム・フレームですらちよつとレアで特殊なMSくらい認識でしかないのだ。ギヤラルホルンが新造したMS以外はほぼ全て厄災戦のフレームを再利用した物。

厄災戦で使っていた物程度は今の時代にも溢れかえっているのだ。

そしてそんな驚異のMAを鉄華団が手にしたと思ひ込んでいる二人。

MAが自律兵器だという事実を知る者が、この場にはいないのである。

MAが火星をうろついていたのも、イオクを倒すためだと思ひ込んでいた本人。もしくは試運転をしていたのだろうとしか思っていない。何故か火星でガンダム・ゲイティアとジュリエッタの乗るレギンレイズを見ていたので、アリアンロッドの二人を倒すために暴れたのだろうと考えていた。

確かにイオク視点では鉄華団とマクギリス一派が手を組んでいて、MAが起動。MAはイオクの部隊を壊滅させ、部下の抵抗もあつてイオクだけを取り逃した。そのイオクが決死の一撃を与えたら援軍で来た同じ所属であるアリアンロッドのクロウリーとジュリエッタを襲った。

まるでアリアンロッドを壊滅させようという動きだが、当然のことながらMAを止めようとしていた側に鉄華団やマクギリス達がいる。その姿を見ていないだけで。

しかも火星のゴタゴタのせいでイオクもジャスレイも今の火星の状況は掴めていなかった。鉄華団の粗を探そうと高い金を払って送っていたジャスレイの密偵はMA騒動でイオクが火星に来るということで撤退させていた。

イオクの手のも今は戦艦ごとジャスレイの拠点に身を寄せている。つまり彼らは今火星の状況を知る術がなかった。

マクマードなどテイワズの一部は鉄華団やタービンスを通して状況を把握している

が、その者達がジャスレイに情報を流す理由もない。

だから勘違いが更に続いていく。

「鉄華団がMAという戦力を手にしても、それだけじゃ奴らはただの犬です。マクギリス一派や奴らの首輪を持っている連中がいなければまともに戦う脳もないガキどもの集まりなんですから」

「マクギリス以外にもそういう連中がいると?」

「ええ。鉄華団はテイワズの、正確にはタービンズの下部組織です。そのタービンズさえ潰せば、MAを扱えるのはマクギリス一派だけ。タービンズは間も無くマクギリス一派に加わるでしょう。ですが、今は分断している。このチャンスを逃せば後々面倒になります。タービンズも武闘派の組織なので」

ジャスレイはMAの危険性を理解しても、せめて自分の目的だけは果たそうとイオクを利用しようと思っていた。MAが厄災戦の時の敵だと知っているのです、ギャラルホルンがどうにかするだろうと楽観視して、目障りなタービンズを排除することを優先する。

そのためにとある資料をまた用意する。

「タービンズが新造している兵器の名前がわかりました。ダインスレイヴ、というらしいです」

「ダインスレイヴ!?」 ギャラルホルンが禁止した兵器ではないか!」

「そうなのですか? 何しろこちらには資料がなくて、どうやら弾頭だということはわかってはいるんですが……」

写っているのは細長い槍のような形状ではなく、まさしく弾頭という名前が相応しい形状だ。大きくなったピストルの弾に似ている。

その形状の差はテイワズで開発したダインスレイヴがあくまでガンダム・フラウロスが使うための通常弾頭であって、ギャラルホルンが禁止するダインスレイヴとはまた別物であるからだ。

イオクもその差はどういうことかと疑問に思ったが、ダインスレイヴという名前だけで判断した。

「これが本当ならば、タービンズは違法組織となる。そしてタービンズに繋がる鉄華団も同罪だ! これなら大手を振るって摘発できる!」

「そうですか。情報提供した甲斐があつた。身内に危ない組織がいたらこつちも危なくなりません。あなたに相談できて良かった」

「こちらこそ事例を言う。……しかし、ダインスレイヴを撃ち込まれたらこちらもタダでは済まない。目には目を、歯には歯を! こちらもダインスレイヴを用意して徹底的に潰そう!」

そうしてイオクは地球圏に残してきた動かせる戦力を総動員して第四倉庫からダインスレイヴとそれを運用するための付属品を取り寄せる。

ジャスレイもタービンズの最後を見るために同行する。

この頃、ラスタルは通常業務で月と地球から離れていて、マクギリス達も火星の復興や説明、三日月の容態などもあつて火星から動けずイオクの様子など確認していなかった。

タービンズの拠点の一斉捜査が始まる。

カインは即座にアリアンロットの権限を使って情報を精査し、ラスタルに確認のための通信を行なっていた。

ラスタルも一度、MAの事後処理で火星に残っているカインの状況を把握していたのでカインから連絡が来るのはおかしくはないとすぐに受け取っていた。

「ラスタル様は今どちらに？」

「月とは少し離れた、クジャン家保有のコロニー群だ。イオクが行方不明となればこちらに来るだろうと網を張っていたのだが、外れてしまつてな」

「まさかラスタル様が不在中に禁止兵器倉庫群からダインスレイヴを持ち出すとは……。しかも一企業を潰すためにかなりの数を持ち出すなんて予想できません」

「タービンは武闘派とは聞くが、アレが必要だとは全く思わないな。命中率も低く、資源衛星やコロニーに当たってみろ。決定的な被害が出て二次災害が出かねん。核のように環境問題にはならないが、やり方次第では環境被害も起こせる。そして高威力過ぎて地表などが簡単に割れるからな。味方も巻き込みかねんのに、それを持ち出すとは」

その威力から、基本当たたらMSだろうが戦艦だろうが落ちる。そして宇宙では何かに当たらない限りずっと弾頭は突き進む。その先に無関係な宇宙船やコロニー、資源衛星があれば簡単に穴が空き、爆散するだろう。

それほどの危ない兵器を、ギャラルホルンの優位性を保つためという裏の理由があったとしても持ち出すとは愚かとしか言いようがない。

一つのコロニーには百万人以上が住んでいる。外壁に穴が開けばその人員の八割以上が死にかねない。

そうした被害を出すことを恐れて禁止兵器にした代物を、民間企業を潰すために持ち出すというのはギャラルホルンに属する者として有り得ないことだ。

「そちらの情勢は？」

「マクギリスが矢面に立って火星へ説明をしています。そして我々准将全員が立会いの元MAハシユマルを解体、コアユニットを徹底的に破壊しました。マクギリス達はまだ火星に残って説明を続けるそうです。火星支部や火星の農業プラントが焼かれたこと

で死者が多数。責任の所在や賠償問題などを取り纏めています。もちろんこちらからもイオクのことを隠蔽するようなことはしていません」

「それでいい。MAの解体が終わったなら、すぐに動けるな？」

「いつでも」

アリアンロッドのクロウリー准将としての仕事は終わりだ。ここからはカインとして動ける。監査局の権限でイオクを捕らえることも可能だ。

「これ以上火種を増やすわけにもいかん。イオクに追い付き、奴を止めろ。火星からの方が近いだろう？」

「火星と木星の間のようです。鉄華団に問い合わせたところ、既にいくつかの事業所を摘発されていて、今はタービンス全員で集結して逃げているそうです」

「マズイな……。ダインスレイヴで一掃される可能性がある。カイン、ゲートティアの修理状況は？」

「ヤマジン整備長が終わらせてくれました。アサルトビットも限界量を搭載済みです」
「負担をかけてすまん。お前しか頼れない。イオク・クジヤンを捕らえよ」

「はっ」

ラスタルと通信を切った後、カインが向かったのは鉄華団の本部だ。クロウリーの格好をして向かったために鉄華団の団員には白い目で見られていた。

カイン・クロウリーだと知っているのはマクギリス、ガエリオ、カルタ、石動に鉄華団だけだ。他のギヤラルホルンには伝えておらず、クロウリー准将が今回の騒動を丸く収めるために残っていると思われる。

そのため鉄華団本部で案内をしてくれたビスケットに変な顔をされた。

「まだその仮面をしていたんですね」

『誰の目があるかわからないからな。ここにいるのはクロウリー准将でなくてはならない』

「ギヤラルホルンも大変だ」

『生きていくのはどこでも誰でも大変だとも』

ビスケットの案内で団長室に着くと、そこにはユージンやシノ、明弘がオルガを説得していた。

オルガは名瀬に助けに来るなど告げていたが、鉄華団は全員がタービンスに世話になっていたので。ただフラウロスの宇宙慣熟訓練に出ているところ民間人が襲われていたので助けただけだというシナリオで通すらしい。

これにはビスケットも、今来たカインも納得していた。

「すまないが、力を貸してほしい。オレ一人では取り零す命があるだろう。だが君達に来てくれればどうにかできるかもしれない」

「あつたりまえだろ！ タービンを助けるんだつたらなんだつてしてやる！」

「お前一人で背負ってんじやねえよ、オルガ。たまには副団長の俺も頼れ」

「そうそう。相談役の俺だからこそ回せる手もある。タービンはクーデリアさんの護衛の時から助けてくれた、一番お世話になつてゐる企業だ。そこが困つてゐる時に何もしなかつたら俺達鉄華団の信用が落ちる。そういう経営事情からしても、介入すべき案件だよ」

カイン、シノ、ユージン、ビスケットがそれぞれ主張する。明弘も言いたいことは言われたのか力強く頷くだけだったが、意思は固いらしい。

「お前ら……。カイン、さんも」

「カインで構わない。……頼んでおいて悪いが、戦場にはダインスレイヴが出てくる。フラウロスにも搭載された高火力レールガンだ。当たればMSも戦艦も一撃で沈む。……そんな戦場へ君達は来られるか？」

「くどいぜ！ むしろ俺の流星号が撃ち返してやる！」

「危険なら尚更俺達が身体を張らなきゃならねえ。ラフタ達だけじゃ限界があるはずだ」

「自分達が危険だから行かないなんてことはないですよ。それにオルガの隣はいつだって危険ですし」

全員すべきことを固めていた。その様子を見て、オルガがテイワズ式のお辞儀をした。

「すまねえ、お前ら！ 兄貴達を頼む！」

「任せろ！」

「オルガ、『夜明けの地平線団』からかつぱらった戦艦一隻借りるぜ。ダンテとチャドも護衛として連れていく。俺とビスケットが保護してくるからお前はこつちを頼むぜ」

「ライドも行くと聞かなくてな。クタンで先行部隊に入れる。あー、カインさんも乗っていくか？あと一機くらいなら積めるはずだ」

「助かる。すぐに行動しよう」

彼らはすぐに共同宇宙港に上がり、クタンは戦場へひた走る。

その後を追うように、エイハブ・リアクターを偽装した戦艦が出発した。

クタンは燃料を気にすることなく最大出力で吹っ飛ばした。悪魔三機と、産みの親と育ての親を持つ黄色い獅電が恩人を守るために、間に合えと焦りながら拳に力を入れる。

タービンは戦力を二つに分けていた。一つは名瀬とアマダだけの囀部隊。もう一つは非戦闘員を乗せた避難船の護衛だ。守るべき人間が多かったので戦力比を偏らせ

るのは当然のことだった。

ある程度避難したところで、名瀬はアリアンロッド艦隊に降伏宣言を送る。だが、それをイオクは一蹴した。ここで確実にタービンを倒さなければ鉄華団が増長するとジャスレイに言われたからだ。

何も返答がなかったことでハンマーヘッドのブリッジで名瀬がコンソールを叩く。

「クソ！ 降伏宣言を受けねえだど!!? しかもあんな悪趣味な金色の戦艦、見間違えるはずもねえ！ やっぱりテメエだったか、ジャスレイ！」

「名瀬、変な装備をしたグレイズが並んでる！ おそらく拠点を破壊した新兵器だ！」

「アミダ、無理するんじゃないぞ！」

アミダが専用の辟邪に乗って先行する。あまりにも多勢に無勢だったが、名瀬を一人で撃沈させるわけには行かなかった。隠し拠点としていた資源衛星をダインスレイヴによつて追い出されたのだ。そんな兵器を使ってくる連中に戦艦一隻で向かうよりはMSもあつた方が良いと判断した。

もつとも、一番の理由は愛した男を死なせたくないからだ。

その名瀬達の様子を見て、たった一機のMSと戦艦ならばいつでも落とせると思い、イオクはダインスレイヴ隊の標的を逃げようとしている艦隊へ向けた。

「一人たりとも逃さん！ ダインスレイヴ隊、標準敵後方艦隊！ 撃てえ！」

イオクの号令に十を超えるダインスレイヴが放たれる。ダインスレイヴの軌道を邪魔するものはいない。確実に撃沈したと、イオクが口角を上げた瞬間だった。

戦場で何かが光り、いつまで経っても戦艦が爆発しない。艦隊は一つ残らず、相変わらず逃げ続けていた。

「ええい、外したのか!?」　いくら直前で目標を変えたとはいえ……！　次弾装填用意！　一番から四番は正面の戦艦とMSを目標に、残りは今度こそ後方の艦隊を撃ち落させ！」

イオクが命令した頃、ダインスレイヴ隊の八から十番が何かの攻撃を受けて損傷した。八と九に至っては完全な撃破判定だった。明灰色をした特殊なグレイズは、仕事も完遂できずに散ることとなった。

「な、何が!?」

「いよっしや！　当たったぜ！」

「シノ、このままあの色違いをぶっ倒すぞ！」

「任せろ！」

「明弘!?　シノにライドまで!?」

「ラフタさんアジーさん、助けに来ました！　後、その人も味方なんで！」

シノと明弘が放った長距離射撃で、まともに動けなかったダインスレイヴ隊のグレイ

ズが狙撃されていた。シノに至ってはダインスレイヴ弾頭を使ったので敵が爆散していた。

突っ込む二人に少し遅れてライドも向かう。

一方カインは、戦場には着いたものの最初の一撃でかなり消耗したためにそこに浮かんでいるだけだった。

「そのアンタ、大丈夫？」

「……いま、話しかけないでくれ。集中が途切れる」

「ご、ごめん。って、その声、エドモントンで会ったギャラルホルンの？」

「そうだ……。民間人の護衛は任せた」

アジーとラフタの問いかけにカインはゆっくりとそう答える。

ダインスレイヴの横腹にアサルトビットで攻撃を与えて逸らしたのだ。そんな曲芸をやって消耗しないわけがない。

カインは機体の操縦を放棄し、アサルトビットの操作にだけ集中した。感知範囲もできるだけ広げて、ダインスレイヴやその他の弾薬がタービンスの避難民に当たることを避けるためだ。

タービンスが経済圏やギャラルホルンに悪影響が出ることをやったかと言われればやっていない。秩序を乱すような悪事を働いたかと言われれば、それもやっていない。

この摘発行為そのものが間違っているのだから、死者を被害者側に出すことそのものが間違っているのだ。

そのために持てる能力を全開にして、感覚を研ぎ澄ませる。

十六基もののアサルトピットが、戦場へ散らばっていった。仮初めの役職とはいえ、今のカインは圏外圏の秩序の番人たるアリアンロッドの一員なのだから。

38 無知の罪科・2

鉄華団の少数精鋭が介入したことで戦場の趨勢は変化していった。

名瀬は敵が降伏を受け入れないとわかって単身特攻することを辞めた。ジャスレイが相手にいる段階でそんなことは言っても無駄だとわかり、アミダと一緒に後退して撤退を進める。

そこに援護でライドがハンマーヘッドに付き、明弘とシノがアリアンロッド第二艦隊とやりあった。アリアンロッドが精鋭の集まりとはいえ、今回の作戦はダインスレイヴで駆逐することが前提とした部隊展開。

ダインスレイヴを撃つグレイズと、弾頭を取り替えるグレイズが計二十機もいて、まともな戦力は残っていないかった。

そしてほぼ動けないグレイズなど、ガンダム・フレイムの敵ではない。

接近された時の応対武器を所持していないグレイズ達では精々回避行動を取るしかできなかった。ガンダム・フレイム特有の脅力を活かした武装が使われていることで遠距離武器でもその一撃一撃が必殺の威力を持っている。

直撃したら最低でも中破しかねないので、グレイズは避けるしかない。そうなるとダ

インスレイヴの補充なんてできるわけがなく、一方的に攻撃を受けていた。特にカインがアサルトビットでハラスメントを行なっているのも大きいだろう。

何かをしようとしたら遠距離から実弾が飛んでくるのだ。ダインスレイヴの発射機構を破壊されればダインスレイヴも形無しだ。

禁止兵器を持ち出したのに何も戦果が得られないことにイオクがブリッジで地団駄を踏む。

「ダインスレイヴの第一射はどうして外したんだ!? 当たらない兵器なんて価値がないだろう!」

「イオク様、ダインスレイヴは元々命中率がそこまで高くありません! 距離も離れています、当たる保証なんてありません!」

「十発も撃って、直進してくる戦艦に一発も当たらないのはおかしいだろう!? ああ、邪魔をしてくる機体はどこ誰だ! 悪趣味な機体色をして、戦場をバカにしているとしか思えん!」

「IFFは不明ですが……どちらもガンダム・フレームです! あ、いや!? もう一機ガンダム・フレームの反応が!」

「MAに惹かれて、古代の英雄まで甦ったか!? 我らの栄光の片割れを穢す愚物はどこのごどいつだ!」

イオクはセブンスターズとしてガンダム・フレームを所持しているクジヤン家の跡取りとして、ガンダム・フレームの存在は認知している。MAを知らずガンダム・フレームを知っていたのは実物があるかないかの差だ。

ブリッジでデータ解析をしていた者が観測結果について驚く結果でも出たのか、声が裏返る。

「な!?? 識別コードはガンダム・ゲートエア! レメゲトン・クロウリー特務准将です!」

「何!?? なぜ奴がここに……!!」

「……我々の任務外行動を咎めに来たのでは?」

「そんな訳があるか! 我々は鉄華団という脅威を取り除くための行動をしているのだ!」

「それがたとえ任務外行動であっても、秩序を守るための大義に変わりないはずだ!」

「そう言っても本人は既にここに来ている。」

カインはまず避難民の安全確保のためにダインスレイヴを徹底的に狙って攻撃しているのに接近はしていなかったが、排除が終われば次はイオクの番だ。

他の観測員がグシオンの解析を終えて、IFFを隠蔽しているものの相手が鉄華団だとわかる。タービンズと鉄華団の関係を考えれば来るのは当然で、そんな一騎当千のガ

ンダム・フレイムが相手ではアリアンロッドとはいえ戦力は心許ない。

直接戦闘ができる機体はダインスレイヴ運用のために限られていて、逃げようとして
いる艦隊を追おうとして追撃にほとんど回している。イオクの旗艦の周りに戦えるM
Sはほとんどいなかった。

「ええい！ クロウリーに通信を繋げ！ 真意を確かめる！」

「エイハブ・ウェーブのせいだ、通信できません！」

「右翼ハーブピーク級八番艦、損傷率三十%を突破！ このままでは航行不能となりま
す！」

「左翼十一番艦も損傷拡大！ つ、次は我々です！」

「黄金のジャスレイ号、戦線を離脱しようとしています！」

「くう！ こうなったら私が直接叩き潰してくれる！」

「いけません！ まだレギンレイズは修理が終わっていません！」

イオクのブリッジは混乱していた。その間にも避難艦隊とハンマーヘッドは離脱し
ていき、ダインスレイヴは破壊されていく。

タービンスがダインスレイヴの有効射程から離脱したこと、ほとんどをガンダム達
にやられてしまったので副司令官が撤退を指示。

第二艦隊は木星でも火星でもないどこかへ逃げていった。

「クソ、逃げやがった！ めちゃくちゃなことやっておいて、自分達が不利になったら逃げるなんてよ！ 明弘、追おうぜ！」

「追撃は……無理だな。スラストの残量がなくなる。それにラフタ達は無事だったんだ。それでいいだろ。もうすぐビスケットの合流時間にもなるしな」

シノと明弘が武器を降ろす。タービンスやユージンが操縦する戦艦に合流しようとして後退を始めると、エイハブ・ウエーブの影響力が低くなったのかラフタの甲高い通信が入る。

「ちよつと明弘、助けて!!? ギャラルホルンの奴、反応が返ってこないんだけど!!?」

「あ? ……なんだっけ、ビット? それはまだ動いてるから意識はあるはずだが……」
「アンタの筋肉でなんとかしてよお！」
「俺の筋肉をなんだと思ってるんだ……」

明弘はげんなりしながらゲーティアに近付く。ラフタも外から揺らしていたようだが反応がないようなので、コックピットを軽く小突いて揺らすことにした。

「あー、カインさん? 戦闘は終わったんだが、返事をしてくれ」

「……ん、ああ。すまない……。集中しすぎていた。終わったのか……」

「……カインさん、鼻血が出てる」

「鼻血? ……久しぶりだな。やはり十六基は無茶だったか……。脳が焼き切れなかっただけマシだ。昔はその直前まで行ったからな……」

カインは明弘に指摘されて、救急セットを用意して鼻血を拭う。感応波を使いすぎると血管に影響が出ることもある。昔どれだけの物を動かせるかと研究所で実験をしていた時も十六は限界値であるのと同時に、機体本体の操縦ができない本当の意味での限界だった。

カイン達はユージンとビスケットに回収されると、カインは戦艦で火星に着くまで爆睡。

カインが火星に戻ると、火星の状態も落ち着いていた。マクギリス達と一緒に地球へ戻った。その航路の中で今後どうするかを話し合う。

そして鉄華団では、今回の騒動でまずはジャスレイへ報復することを考える。

三日月も容体が安定し始めたのでジャスレイ討伐の戦線に加わる。

鉄華団とタービンスの連合がジャスレイのJPTトラストを襲撃した。

ジャスレイも金に物を言わせてヒューマンデブリを大量に雇ったが、戦闘派のタービンスとギャラルホルンを相手にしてきた鉄華団の猛攻は防げなかった。戦力比だけならジャスレイの方が上だったが、練度が違いすぎた。

その蹂躪劇に、イオクを使えない歯痒さに。ジャスレイは取りたくなかった手段であるマクマードへ連絡を取った。

「親父、名瀬と鉄華団が俺に攻め込んで来やがった！ 親父から言つてあいつらの暴走を止めてくれ！」

「ジャスレイ……。確かに身内での揉め事はご法度とした。だがな、ちいとやりすぎたんじゃないか？ MAのことも精査せず、セブンスターズの問題児と手を組んで名瀬を嵌めようなんてよ……。てめえが誓つた仁義つて奴はそんなもんか？」

「お、親父……？」

「MAは自律兵器だ。その上ギヤラルホルンと鉄華団が討伐した、厄災戦以来の英雄様にてめえは何してんだ？ 人類を守つた、俺の誇れる息子達を禁止兵器で潰そうとしたな。その禁止兵器を扱つたつていう冤罪を仕掛けて」

マクマードの態度から、ジャスレイはもう取り返しのつかないところまできたのだと自覚する。そして走馬灯のようにどこで間違えたか逡巡し始めた。

「折角No. 2の席が空くんのだ。名瀬を若頭に出世させて、鉄華団をテイワズの一組織に格上げしねえとな。ハーフメタル事業で上がったシノギは大きい」

「ま、待つてくれ親父！」

「もうてめえは息子じゃねえよ。お前の首を持つて、MAに焼かれた人々への哀悼の意

とさせてもらう」

そう言ってマクマードはジャスレイの盃を割って通信を切ってしまう。

テイワズではなくなったジャスレイを、テイワズのタービンスと鉄華団が討伐してもなんら問題はない。

バルバトスがブリッジに向かってメイスを叩き落とした。

テイワズの勢力図が変わり、内紛の終わりを示す一戦となった。

イオクの暴走はギャラルホルン全てに通達される。セブンスターズも緊急会議を行うこととなり、ヴィーンゴールヴヘイオク以外へ招集がかけられた。

主な目的は火星での出来事の精査。そしてこれからのイオクへの裁可について。

火星の被害から経済圏ではまたギャラルホルンへの不満が爆発していた。今回のやりかしがイオクのせいだと情報が出回っており、それを止める手段がなかったのだ。

ギャラルホルンが暴力を持ってして秩序を守っていたために、情報戦にあまり力を入れていなかったからこそ後手に回っていた。経済圏も火星に企業を進出させていたの本部とのやり取りなどをして情報は拡散されてしまった。

火星はM A被害の最前線だったために最速で動いたことで落ち着きを取り戻している。地球圏ではむしろ今こそ

がホットな話題になっていた。

その対応にヴィーンゴールヴも追われていたが、統治するはずのマクギリスがいなかったことで混乱に見舞われていた。

だが、マクギリスを責める声はない。MAについて知られ回っているということは同時にマクギリス達三羽鳥の活躍も同時に伝わっているのだ。

クロウリー准将のことは一切伝わらず、マクギリス達と鉄華団、そしてジュリエッタだけの活躍が持て囃される。現代の救世主だと、アグニカ・カイエルの意志を継ぐ者と評価されていく。

マクギリス達が評判を挙げたこともそうだが、ラスタルの評判もそこまで落ちなかった。ジュリエッタの活躍が取り上げられたこともそうだが、このMA騒動の際にラスタルが送り込んだのはジュリエッタを含む戦艦一隻だけで、第一艦隊は任務をこなしていたと知らされたからだ。

第二艦隊のスケジュールも全て公表され、火星支部へ寄港許可を申請したデータなども提出された。そのため、イオク周りの騒ぎはイオク本人と第二艦隊の暴走だと受け止められた。

それもこれも、過去から続くイオクの暴走がギャラルホルンでは有名だったからだ。だがそれでも、やはり同じアリアンロッドとしてラスタルは責任を取らなければならな

い。

セブンスターズが勢ぞろいするヴィーンゴールヴで。ギャラルホルンが変革する弾丸の音が鳴り響いた。

39 エピローグ 0. 18

カインはヴィーンゴールヴに着いてすぐラスタルにアポイントを取っていた。極秘の話がしたいと。こんな情勢だから通信ではなく直接会って話したいと。

ラスタルはそれを了承。ラスタルの執務室で会うことにしていた。もちろん誰の目にも留まらないよう人払いもしてあった。ジュリエッタも呼ばない徹底ぶりだった。セブンスターズの招集にも時間がかかるからこそ、このタイミングしかなかった。

ラスタルはカインが来たということは、そして本人から会いたいと言ってきたということは特務が終わった、または失敗したということだ。

どちらでもカインは答えを出したのだろうとラスタルは意を汲んだ。長年の不安だった問題が解決するなら過程などどうでもいいときさえ思っていた。カインならさほど大きな失敗はしていないだろうという信頼もあった。

だからラスタルは、現れたカインに朗らかに問う。

「カイン、答えは出たか？」

「はい。マクギリスは力による支配を求めています。バエルはアグニカへの憧れ程度で、あの眉唾な噂は信じていません。信じてても信じなくても同じです。彼はセブンス

ターズ過半数の賛同を得るのですから」

「私と協力できると踏んだのか。何もかもを暴力で否定する人間ではなかったと。私も目が濁っていたかな？」

「そういう危うさは確かに幼少期にありました。やはり大きかったのはアルミリアの存在と、アグニカの救世主像が崩れたことですね」

「話したのか」

ラスタルの言葉に頷くカイン。

アグニカは今のギャラルホルンで神聖視されているが、彼は神ではない。人類の四分の一を抹殺されてしまった、ただ機械殺しが上手く自己犠牲精神の強く、少し大局が見えていただけの英雄人間でしかない。

神聖視の原因は厄災戦を生き残った人間達が無理に持ち上げたからだろう。タブレットに残っていた記録からも、当時からそういう人間はいたのだ。

MAという天使に勝てる存在は神しかいないと、そんな風潮が流れてしまった結果だろう。

「皮肉なものです。当時意識のなかったオレが、一番アグニカに詳しいなんて」

「その身体とバエル、アンドロマリウスに残ったナノマシンに適合した結果、アグニカの血を継ぐお前が唯一の生き字引になっただけだ。厄災戦の情報はとも少ない。今の

世の中でアグニカを正しく理解している人間はいないからな」

「人間性を剥奪され、都合の良い神輿になる。時とは残酷です」

「だな」

時間が経ってしまったことで余計に神聖視される。過去を知る術が限られているからこそその現象だ。

もしもカインという当時を知る人間がいなければ、この時代でもっとアグニカを崇拜する人間がいてもおかしくはなかっただろう。

それほどまでに鮮烈すぎるのだ。アグニカの伝説は。

その幼少期の光だったアグニカと同等になったアルミリアが凄いと叫ぶべきか。

「マクギリスはこれからどうするつもりだ？」

「長期的な案としては、セブンスターズの特権階級の廃止。ギャラルホルンの登用条件の見直しに、監査局の拡大。武力に寄りすぎず、情報戦に長けた部隊の構築をして、世界に正しく秩序をもたらそうとしています。力のある者は出自に関係せず出世できるような改革を為すつもりです」

「短期的には？」

「イオク・クジャンを始めとしたギャラルホルン内の膿の切除。そして、自身の孤児であるということの公表です」

「自ら起爆させに行つたか。なるほど、よく分かつた。では現状を考えると——私が邪魔だな？」

ラストルはカインを通してマクギリスの状況を全て把握する。

途方も無い愚者がいない限り、宇宙を動かせるラストルだ。自分の状況を俯瞰することはわけない。

「イオクの責任を取れという声は必ず上がるでしょう。総司令であるのならばイオクの手綱を握らなければならぬと考えるのが人情です。たとえ相手がセブンスターズで、独自裁量権があると思つている破綻者だとしても民意や一般兵は納得できません。特に、火星の民は」

「そのイオクがだんまりだからな。農業プラントを丸ごと焼失。しかも行動を見れば火星にいたずらに被害を出しただけだ。火星の復興を優先したら今度は禁止兵器の使用。しかも謂れもない組織を勝手にな。これでまたテイワズへ負債ができた。

……イオクの上司として、私がただで邪魔だろう。イオクを止められなかったこと。今も行方がわからないこと。これだけで今のギャラルホルンの運営に支障が出る。私が倒れたとしても、クロウリーという替え玉がいる」

それにラストルが倒れた程度で崩れる部隊ではない。確かにラストルへ忠義を捧げている者ばかりだが、ラストルがいらないならいらないなりに動ける組織となつている。

そうでなければラスタルは度々地球へ降りられない。

「ラスタル様が対応できなかった理由は既に凶弾に倒れていたから。次の指揮権を持つクロウリーは火星から帰る途中。イオクはこの有様。こうすれば溜飲も下がるでしょう。今は言葉を発しないことこそ、すべきことです。隠遁場所は『髭のおじさま』に護衛を頼んであります。情勢も実力も心情も含めて最上の守りかと」

「そうか。アイツにも手を回していたのか。……撃つのがお前だとしたら、少しシナリオを変えてもらおうか。撃つたのはあくまでイオクの陣営の者。理由は適当にイオクを庇わなかったとか、火星の騒動から助けなかったからとかでいい」

「……よろしいのですか？」

「イオクを討つ理由の足しにしろ。その後はクロウリーとしてアリアンロッドを率いろ。任せたぞ」

その変更要請に、カインは頷いてすぐに協力者の石動へメールを送る。

そしてラスタルを撃つための銃をラスタルへ渡す。弾丸などを確認してもらい、どういった弾丸かわかると笑ってカインへ返した。

「おもちゃだな」

「あなたを本気で撃てるんですか？ あなたはオレの父です。親に実弾は撃てませんよ」

「偉大なる英雄と比べると、酷い父親だっただろう？ 家族とも引き離して、幼少期から

スパイにさせる親など親失格だと思うが？」

「それを言ったら本当の父親はオレを兵器として宇宙へ送り出して、もしもの時は人類のアダムとイブにするつもりでしたよ？ 護衛も付けてくれませんでした」

「護衛を付けたらむしろMAに襲われかねないだろう。合理的な判断だったさ」

「それ以外だと名前をくれただけです。あなたはオレとジュリエッタに苗字と家名をくれた。生きる術を授けてくれた。オレ達の出自が分かっても変わらず接してくれた。オレをアグニカの代わりに据えることもできたのにしなかった。オレの好きな人を守り、育ててくれた。

ですの——お父さん。ジュリエッタをオレにください」

その告白に、ラストルは破顔する。

まさかこのタイミングで言われるとは思わなかった。あまりにも場違いだった。

「これから撃つ親に言うことか？」

「はい」

「お前も私の息子だぞ？」

「挨拶が一度で済んで楽です」

「ジュリエッタには気持ちを伝えていなくせに。ジュリエッタを連れて出直せ。このバカ息子」

「そうします」

終始真顔だったのに、最後は苦笑してカインは了承の返事をする。

そして部屋の外に視線を向けた後、銃を構えた。

「すみません、イレギュラーです。撃ちますね」

「ジュリエッタが来たか？ 全く、あの娘の勘も大概だな」

「……」

「何でわかつたって顔をしているな。お前達のような特殊な力がなくても、子供の表情を見れば言わんとしていることを察するのが親だぞ？」

「御見逸れしました」

頭を下げた後、すぐに左手で構えた銃の引き金を引く。

ラスタルの左脇腹に突き刺さる弾丸。パン！という音と飛び散る血飛沫。

その衝撃に、ラスタルは近くにあった執務用の机へ寄りかかるように倒れて、苦悶の表情を浮かべていた。

カインは銃を構えたまま、後ろから聞こえる扉の開閉音に視線を向ける。

開いた扉から現れたのは同じように銃を構えて突撃してきたジュリエッタだった。

ジュリエッタはこの部屋の惨状を受け入れられないようで、銃を持っていない左手で頭痛を抑えるように手を当てながらうわ言のように呟く。

「ら、ラスタル様……?」

ラスタルが血溜まりに沈む姿を見て。

警戒はしていないものの、銃を持ったままのカインの姿を見てようやくカインを認識したようだった。

「か、カイン……? あなたが、あなたがラスタル様を撃つたのですか?」

「状況判断が鈍いぞ、ジュリエッタ。オレ以外の誰が、ラスタル様を撃つたという状況証拠が残っている?」

「マクギリス・ファリドの狗に成り下がったというのは本当のことだったか!」

そうなるようにラスタルの命令で動いてきた。そう見えるようにマクギリスと関わってきた。だからジュリエッタの勘違いはカインの想定通りだった。

その勘違いのまま、ジュリエッタに銃を向けられることも。

いつかラスタルと話した、ジュリエッタと敵対するかもしれないという未来予測。それがこんな茶番で実現するなど、カインも当時から思いもしなかった。

「や、めろ……ジュリエッタ……」

ラスタルの呟くような声。まだ脇腹に受けた衝撃が残っており、まともに声を出せていなかった。だから、そんな細かい声は頭痛に苛まれながら放ってしまったジュリエッタの弾丸によって掻き消える。

それと同時に、ジュリエッタの瞳からは二人が全く見ていなかった液体が滝のように零れていた。

ラストルへ当たった場所と同じ場所に、カインも衝撃を受ける。それは間違いなく実弾で、その衝撃にカインは口の中を切って血を吐いていた。

(父親を撃つて、最愛の人を騙し続けて……。これくらいの罰は受けないと、ジュリエッタに申し訳が立たないな……)

そのまま床を転がる。それ以上ジュリエッタが撃つことはなかった。それどころか銃を持つ手は震えていて、照準も全く定まっていない。

息も荒く、涙も止まらない。頭も抑えたまま、ラストルの治療という取るべき行動も思い至っていない様子だ。

ジュリエッタが困惑している間に、石動含むヴィーンゴールヴの警備隊がやってくる。

「……！ 全員、彼女を取り押さえろ！」

「この、マクギリスの狗が！ 貴様らが、貴様らがカインを誑かしたのか!? 何をした!? この人にラストル様を撃たせるなど……！」

「落ち着けジュリエッタ！ カインの治療が先だ！」

そう叫んだのは脇腹を撃たれたはずのラストル。血溜まりからしつかりと二本足で

立ち上がり、ジュリエッタの銃を上から取り押さえて弾が発射されないように抑え込んでいた。

「ら、ラスタル様……?」

「お前の能力も完璧ではないな。カインも下らない煽りをしておつて……。石動一尉。カインからこの後のことは聞いているな?」

「はい。まさか特務三佐が撃たれるとは……。彼女には説明をしていなかったのですか?」

「カインの密命については全てを伝えていない。カインをすぐに病院へ。私も担架で運ばれた方が良いか?」

「そうしていただけると」

マクギリスの狗として有名な石動とわかり合っているように話すラスタルに、ジュリエッタは困惑を隠せない。

手際よくカインとラスタルが担架に乗せられていき、ジュリエッタは叫んでしまう。

「ラスタル様つ、カインに撃たれたのでは!?!?」

「暴徒鎮圧用のゴム弾に血糊を付けたおもちやだ。私が倒れるというシナリオが必要だった。カインはマクギリスの部下の前に、私の息子だぞ?」

「あ……!?!?! ああああああつ!?!?!」

ジュリエッタは顔を蒼褪めさせてカインの担架に駆け寄る。カインも当たりどころが良かったので弾は貫通していた上に意識があつた。

息は荒かつたが。

この執務室に来るまで嫌な予感と頭痛が収まらなかつた理由が全て分かつて、ジュリエッタはカインに縋るように手を取つていた。

「か、カイン！ ごめんなさい……！ わ、私……！ 嫌な予感がしたのに、あなたのこと、ずっと感じていたのに……！ あなたがずっと、ラスタル様のために別行動を取つていたと知っていたのに……！」

「オレも、黙つてたことがたくさん、ある……。お前に酷いこともしたから、おあいこだよ……」

「実弾で撃つようなことを、私はされていません！ ダメ、死なないで……！ お兄様っ！」

「この程度で死ぬか、バカ。……ジュリエッタ、愛してる。だから泣き止んでくれ」

「……はあ……」

ジュリエッタ、ラスタル、石動は声を揃えてその単語を発していた。

言われたジュリエッタは言葉の意味を考えて顔を青くしたり赤くしたり。

聞いていたラスタルは心の中でこのタイミングで？と呆れていたし、石動も同じよう

にムードも何もない告白に目を逸らしていた。

そんな力オスな場が出来上がった中、マクギリスが動く。

「ギャラルホルン全ての将兵よ。聞いてほしい。私の名前はマクギリス・フェアイド。本当の名前をマクギリス・モンターク。ただのギャラルホルンの准将だ」

全ギャラルホルンへ向けた演説が、始まった。

40 エピローグ0・24 マクギリス宣言

マクギリスはヴィーンゴールヴの通信装置を用いて、全世界に通信を行なっていた。地球圏だけではなくコロニーにも火星にも木星にも、人類が住む場所ならどこにだって届くように通信をジャックしていた。

マクギリスは演説をするために壇上の上に立っていた。その両脇には一歩離れてガエリオとカルタが立っていた。

そしてマクギリスの第一声は、世界へ衝撃を与えた。セブンスターだと思っていた人物が違う名字を名乗った。婚約を結んでいるボードウィン家ではなく、全く知らない名前を取り出したのだ。

どういふことかと、誰もがその映像を、次の言葉を待った。

「私はイズナリオ・ファリドの血縁ではない。噂されている妾の子でもなければ、親族でもない。血が全く繋がらない孤児である。本来ならばファリド家を、セブンスターを名乗るのも烏滸がましい身分だ。このように名前を偽っていたことを平に謝罪させていただく。申し訳ない」

マクギリスだけが頭を下げる。

この事実を知っていた者はごく少数。

ギャラルホルンでも知っている者が少ないファリド家最大の秘密に、聞いていた民衆は誰もが度肝を抜かれた。

そしてセブンススターズはそこまで腐っていたのかと思ひ知る。

「全てはイズナリオがギャラルホルン内で自分の立場を盤石にするための嘘だ。そして私もその嘘に縋らなければ生きられない子供だった。だが、今や私はファリドを名乗る意義を見出せない。現時刻を持ってファリドの名を返上する。ギャラルホルンに登録されていた偽装DNA情報も正しいものへ変えさせていただいた。前のデータも詐称の証拠としてしばらくは残させていただく」

全てのデータはマクギリスとイズナリオを親子と示すように改竄されていたが、今は赤の他人という証拠しか出てこない真実のデータが載せられていた。

これでもかなりの爆弾だが、これはまだ序の口だ。

「私の今までの功績がセブンススターズという家名ありきのものだと判断された場合、准将という階級もヴィーンゴールヴ総司令という地位も返上させていただく。それがギャラルホルンの、そして民意の結果だとすれば私は潔く全てを辞する」

この発言にたまったものじゃないと反論の声を挙げたのはギャラルホルンの、特にヴィーンゴールヴ所属の上位階級の者達だった。

ヴィーンゴールヴは代々フアリド家で統治されてきた。ノウハウは全てフアリド家が持つていると言っている。事務方などは運営の仕方などを共有されていても、セブンスターズの後釜に誰がなれというのか。

優秀な者は軍にもそこそこいるだろうが、マクギリスのようにMSの操縦も部隊の指揮も内政もできる万能人の後継なんてすぐに用意できない。ヴィーンゴールヴを率いるというにはそれなりな箔が必要で、セブンスターズであるとか、かなりの実績があるとかでなければ就任することもできない名誉ある立場だ。

孤児である云々を除いても、その能力の高さからマクギリスの降板など誰も考えられないほどに優秀だった。イズナリオの失態を完全にカバーできたのは同じフアリド家でありながらもイズナリオを遥かに超える才覚があったからだ。

そこに万全に指揮ができる者がいるのに、それをイズナリオのような身から出た錆で辞めさせられるのではなく、イズナリオの被害で辞めて手放すなどもつたいないと憤りを隠せていなかった。

それだけマクギリスが問題ない人格を演じていたことと、人心掌握術に長けていたからこそその評価だった。元々妻の子というマイナス評価だったものを覆さなくてはならなかったのだ。かなりの実績を産んできた甲斐があったというもの。

それにガエリオとカインも合わせて、バケモノ染みた実績と出世を続けてきた。その

中でも突出していたのがマクギリスだ。そのマクギリスに匹敵するのはセブンスターズに何人かいる程度で、代替になる人材などギャラルホルンには残っていない。

この辺りも計算に入れてのマクギリスの発言だった。

「私がこのような宣言をさせていたしたのは、今のギャラルホルン並びにセブンスターズの腐敗が原因だ。私は幼少期から養父イズナリオ・ファリドの元にいたためにセブンスターズの闇については十分に承知していたつもりだった。

だが、それはセブンスターズに限つての話ではなかった。私はヴィーンゴールヴ着任の前に監査局としてギャラルホルンが統治する様々な場所を巡ったが、この目で多くの悪しき風習を目の当たりにしてきた。

統治すべき場所の権力者との癒着、賄賂。功績を上げるために自作自演による鎮圧行動を行使するための政治介入。申請のない部隊運用に加え、一般企業への襲撃など枚挙にいとまがないほどだ。

いや、ギャラルホルンは責められまい。その上に立つべきセブンスターズが、それに続くギャラルホルン上位の名家が、同じように多くの腐敗を見せつけていたのだから。これがその証拠だ」

ガエリオがボタンを操作すると、数々の汚職がマクギリス達のバックのモニターに映し出される。それは放送とは別口で全世界に情報として拡散していった。

そんな汚職は今更だとあまり無関心な者。自分の身近でもあったのだと悲しむ者。これを契機に立ち上がる者などがいた。

秘密裏に悪事を働いていた者も、この情報の暴露には慌てる。バレていないはずの悪行が今や世界に証拠付きで拡散されてしまったのだ。

これらの情報提供は監査局はもちろん、カインがこの二年で独自に調べ上げたものも多い。監査局として監査をすると告げずに調査したために、無防備に腹を見せた者も多かった。カインがバレないようにスニーキングしていたこともあるだろう。

ギャラルホルンの隊服を着ずに市場調査などをした結果集めた情報を全てカインはマクギリスに渡していた。火星のような状況は珍しいものではなくありふれたものだった。だから摘発された家は多い。

「皆の者、もう一度原点に立ち返ってほしい。厄災戦を生き残った始祖達は平和な、秩序を守るための組織であったはずだ。だがこのような自らを貶めることをして本当にギャラルホルンを名乗れるのか？」

その最たるものが、先日一企業に対して行われたイオク・クジャンによる禁止兵器ダインスレイヴの使用。禁止された物を自ら使うその精神性を疑う。養父イズナリオ同様、近年は酷い腐敗が進みすぎている。

これ以上は看過できないほどに、いつその禁止兵器が一般人に向くかわからない恐怖

を抱かせながら夜を過ぎさせるわけにはいかない。こうして話している我々にもいつ禁止兵器が降り注ぐかわからない。

そして今や、そのイオクはどこにいるのかわからないままだ。任務を放棄し、活動報告を提出しない有様は軍人としての責任を放棄している。我々はこの悪逆を見過ごすわけにはいかない。我々は総力を持ってしてイオク・クジヤンを捕縛することをここに宣言する！

これを成したのちに腐敗した全ての人物を肅清する！ このギャラルホルンへの改革を持つてして、私のヴィーンゴールヴ総司令最後の責務としよう！

現時刻を持つて我々はイオク捜索隊を編成、全ての宇宙の捜索を始める。どこに逃げたとしても、必ず全ての市民へ安眠を約束しよう！

そう言うて放送は終わる。

これからイオクと、その他の摘発した家や人物がマクギリス達へ反旗を翻すだろう。むしろそっちの方がありがたい。短絡的な思想をしてくれた方が武力を持つて制圧できるのだ。

「カインは上手くやったかしら？」

「やってるだろ。これで一時的にエリオン公は退場。アリアンロッドの戦力が動かせないだけで相手の戦力はガタ落ちだ」

「イオクに味方する者は少ないと思うがな。今はエリオン公に寄せられる不満を避けることが大事だ」

放送が終わって肩の力を抜いていた時、一人の将兵がやってくる。

その顔は焦りに満ちていた。

「准将、大変です！ カイン特務三佐が……！」

「どうかしたのか？」

「任務は遂行したのですが、脇腹を銃弾により負傷。今は軍事病院に入院したようです」

「何？ 程度は？」

「弾は貫通していたので縫合すれば大丈夫のようですが……」

その報告を詳しく聞くとカインが珍しく失敗したらしい。だが程度は軽いようだったので問題なしとした。

これから大きく動かなくてはならないだろう。カインの状態を確認しつつ、彼らは行動を開始する。

宇宙ではこれを聞いた者達が、武力を結集し始めた。

4 1 エピローグ0. 37 ある孤児院の兄貴分

孤児院にやって来た二人の男女。こいつらは変だった。

やって来た時にラスタル様から紹介があった。ラスタル様が直接見付けた孤児はこうやって紹介されるのが恒例となっていた。

紹介された男の方はカイン、女の方はジュリエッタというらしい。

そいつらはラスタル様によく気に入られたのか、ラスタル様が地球に降りて来た際、いつもその二人を連れて研究所とかつて所に連れていくらしい。

俺達も一回連れて行かれた。感応波がくとか言われてもわけわかんね。

それでもつてその変な力というのは兄の方がよく日常生活でその変な力を使っていた。

「雨降りそう」

「えー？ 雲ないぜ？」

俺が知識を披露してそう言ったが、カインは首を横に振るだけ。カインは外で遊んでいる子供達の中に入れると、その十分後ぐらいに本当に雨が降ってきた。一気に黒い雲が流れてきてざあっと降り始めていた。

肉眼で見た限りそんな黒い雲は見えなかったのに。

濡れなくて良かったと喜ぶ孤児院の皆。そんな予言をしたカイン本人はなんてことのないように孤児院の中でじつとしていた。

正確には、雨を通して雲を越えて、宇宙を見ているとは思ひもしなかったけどよ。

そんな不思議なことは他にもあった。

隣の席で食事をしていた子供が不注意で食事の皿を落とそうとした時、落としかけたところで即座に止めていた。直前まで反対側のジュリエッタと話していたのに、反対側に即座に気付いて受け止めるなんて普通はできっこない。

そんなものを目の前で見せられたらカインの特別性なんてすぐわかる。

ラスタル様が彼を優遇する理由がわかった。

俺は四歳差だったためにカインが来た時には既に幼年学校に入っていたのに、カインが入った途端近い学年になって乾いた笑いが収まらなかった。俺もラスタル様の役に立とうと頑張っていたのに挫けそうになった。

いつだってカインの名声は聞こえてきた。その学年にセブンスターズの御曹司もいたのでカインの学年のことはいつだって耳に入ってきた。

それでも頑張っていたらイシシュー家の長女が同じ学年にやってきたのは驚いた。

そのまま実績を重ねてアリアンロッドに入隊。様々な任務をこなして第一艦隊の配

属になった。孤児院のメンバーの中にはイオクを監視するために第二艦隊に配属になったものもいる。イオクがバカすぎてラスタル様の手の者はすぐに所属替えをしていたけどな。

そんな俺は実績を上げて、入隊してきたジュリエッタにすぐに追いつかれはしたもののエースと呼ばれるくらいに撃墜数も稼いでいた。その積み重ねもあって先行配備型のレギンレイズを与えられたのは嬉しかった。

俺もなんだか宇宙に適性があったようでMSを自在に操れるようになっていた。それもこれもカインとジュリエッタの研究成果のおこぼれだけだ。俺も研究所で何回か測定してもらったが二人とは脳の拡張具合が違うらしい。

それでも俺はラスタル様の盾として、ただ邁進するだけだ。

鉄華団の一連の事件があつて、そこからは本当に色々あつた。イオクが主にバカなことをしたり、秩序を乱す輩が多かつたり。

そして決定的なことが、MA事変とマクギリス宣言。その結果ラスタル様が倒れ、イオクを筆頭とする反乱分子を討伐するためにリアンロッドの全戦力が地球外縁軌道統制統合艦隊のステーションに集合していた。

そこでラスタル様に代わりリアンロッドを指揮するクロウリー准将がいつもの鉄仮面を付けて、ジュリエッタを後ろに控えさせて壇上に上がってきた。

ただ、いつもとは何かが違う。俺の鈍い直感でもあの鉄仮面の奥から感じる既視感に首を傾げる。

クロウリー准将はマイクの前に立つと、いつもの機械音声で講堂に響き渡る。

『離反していないアリアンロッド将兵の諸君。よくぞこうして集まってくれた。ラスタル中将が凶弾に倒れたため、臨時で私が指揮を執る。とはいえ私は前線司令であつて、艦隊司令ではない。だから実際の指揮権は分散することとなる。それは承知してほしい』

クロウリーがその劳いの言葉と共に言葉を続ける。

『この戦いがギャラルホルンの、そして世界の平穩に繋がると信じている。皆の力を貸してほしい。ラスタル中将という精神の柱を欠き、アリアンロッドから多数の離反者を出し、更には私のような若輩者にアリアンロッドを任せなければならない状況というのは諸君の不安を煽ることとなっているだろう。』

だが、私からは信じてほしいとしか言えない。イオクの艦隊は以前持ち出したダインスレイヴをまだ所持しているだろう。アレの火力を持つてすればMSといえどひとたまりもないだろう。この作戦は今まで以上に危険で大規模な戦闘となる。諸君らの命は保証できない。

だがあえて言わせてもらおう。ラスタル中将がいない中、私に全てを預けてくれ。

私が身体を張ろう。私は再び、殺戮者を屠る悪魔に身を委ねよう。

そしてこの——偽りの仮面を外そう」

クロウリー中將が仮面を外す。

そこから出てきたのは本人が言っていたような火傷の痕が酷い顔がなく、どこか見覚えのある、金髪に瞳孔が縦に長い金の瞳をした若い青年の男の姿が現れた。

「ラストル中將より特命を受け、偽りの名と階級を名乗っていたカイン・ベリアル一佐だ。將軍の地位でもない私が司令を務めるということも不服だろう。そして若輩者の私ではキャリアも信用も足りないだろう。

それでも最早、時間がない。私を信じてくれ」

「信じてもらうにはあなたがクロウリー准將だったと証明しなければならぬのでは？
カイン一佐」

ジュリエッタが呆れたように後ろでそう言う。

こういうところで俺が動くしかないだろう。

「カイン！ お前がクロウリー准將だつて言うなら、そのジュリエッタにゲーティアで勝つてみせろ——」

俺の声が響く。

その俺の声に、カインとジュリエッタが俺のことを見付けて一つ頷く。

「それが証明となるのなら。十分程度の模擬戦をやろう。ジュリエッタ」
「わかりました。それが証明となるのなら」

そうして二人が模擬戦を始める。

カインがガンダム・ゲートティアに。ジュリエッタがレギンレイズ・ジュリアに乗って模擬戦を始める。クロウリー准将しか動かせないはずのゲートティア専用武装アサルトリット八基を自在に動かしたことでこれ以上にならない証明となった。

言われてみれば、あんな感応波を使って操る武装を使えるのはカインとジュリエッタしかないだろうけどよ。ジュリエッタはいたんだから消去法でカインしかないんだだけ。

カインとクロウリーという証明ができてアリアンロッドの全員がこの作戦に異存なく臨むこととなる。

4 2 エピローグ0. 4 9 開戦前に

ギャラルホルンが運営する場所ではなく、私立病院にて。

ラストルと『髭のおじさま』はそこでゆったりとした時間を過ごしていた。

世界はギャラルホルンを二分する戦いが起きようとしているのに、ここではそんなこととは関係ないと言うようにいい歳をしたおじさん二人が駄弁つていただけだ。

「ラストル、いつまで入院してるんだ？」

「地球の再生治療は遅いことで有名だからな。もう二週間はここにいますぞ」

「ということとはあと二週間はここで待機か。長いな」

「全ての決着を何もせずには眺められる贅沢を味わえばいいだろう？ こんな一大決戦は歴史に残るぞ」

「セブンスターズが瓦解するだろう一戦だからな。それはもう、歴史の一ページにインクの染みとして残るだろうよ」

マクギリス派閥のギャラルホルン正規軍と、イオクを筆頭としたギャラルホルン離反組による宇宙での決戦。どっちが勝つかなんて二人は心配などしてはいない。二人の弟子と言うべきカインとジュリエッタが正規軍にはいるのだから。

それに離反組は正規軍の迅速な摘発によつて着の身着のまま離反した者も多い。捕まるよりは力で勝ち取ろうとなんとか逃げ出した者ばかりで、装備も練度も高が知れている。

一応世界の闇組織がもしもの時を見据えて離反組に武器弾薬を供与したが、MSまでは提供できなかった。それなりに裕福だった貴族なども摘発されたために全ての財力を投じて決戦に臨む者もいる。

それでも戦力比は無情にも正規軍が上だ。世界を統べる暴力装置たるギヤラルホルンに寄せ集めの集団で一矢報いるなどかなりの奇跡がなければ無理だ。

そんな奇跡を起こした鉄華団も火星の一件から正規軍に組している。イオク・クジャンと言う悪名は圏外圏ではかなり浸透しているのだ。そしてまともな企業であれば正規軍を応援した。

ギヤラルホルンは今まで悪い鎮圧行為などをしてきたが、それでも正義と呼べる部分は数多くあった。紛争の鎮圧や暴徒の摘発などはギヤラルホルンだからこそできたことだ。経済圏は基本的にギヤラルホルンを信用している。

イズナリオやイオクのような膿を今回完全に排除してくれるとなれば、経済圏が手を貸すのは当然だった。

イオクに敵意を向けられたら冤罪でダインスレイヴを放たれることをテイワズと

タービンズと鉄華団が連名で発表したためにイオクへ恐怖を覚えた企業は多い。気に入らなかつたら禁止兵器を使われるなど溜まったものではないのだ。

このダインスレイヴを持ち出して使用した件も含めて、今後はギャラルホルンが強権を発動できないように様々な改革案を暇なラスタルが書き出しているところだ。その内容をマクギリス達と一緒に検証し、纏めたものを経済圏に提出する予定だ。

セブンスターズだけで話しては結局今まで通りなので一般将兵や市民なども含めた意見交換会を開く予定だった。そういったものの調整もあつてラスタルはベッドの上にいながらも意外と暇ではない。

「しかし銃弾を腹部に受けたカインはもう前線復帰か？ それほどあいつの肉体は強靱だった、というわけじゃないだろう？」

「それはそうだ。アグニカは神ではない。ただの人間だ。そのクローンたるカインでも腹部への銃撃など重傷だ。ネタは『方舟』に残されたアーティファクト、現代では再現不可能な再生装置。それを使って即日で復帰したよ」

「人類最後の希望を乗せた船は何もかも規格外か」

「アンドロマリウスなんてとんだ化け物だったぞ？ ベリアルと混ぜてようやく当時の八割再現がいいところだからな」

「アレで八割再現？ というか、ベリアルを使つてたのか」

「私が無断で使えるガンダム・フレームはベリアルしかないからな。今倉庫で眠ってるのは外装だけ真似たグレイズだ」

ラスタルがアンドロマリウスを見付けた時にはフレームしか残っていなかった。そのフレームに残された情報からアンドロマリウスのスペックは判明していたが、現存する全てのガンダム・フレームのスペックを超えていた。

まさしく最後の悪魔と呼ばれるに相応しい機体だった。

それを今用意できる最高の素材を使って復元したのがガンダム・ゲートティアだ。

「ベリアルなどガンダム・フレームの中では先行試作型に過ぎん。後継機の復元には多少の役にしかたたん」

「だが、バエルはどうなる？ マクギリスが乗るそうだが、あのスペックは一般のMSどころかレギンレイズすら凌駕しているぞ？」

「バエルはMAを滅ぼすために当時の全てを賭けて作った傑作機だ。五十番代までのガンダム・フレームはバエルの簡易マイナーチェンジ機で、バエルを超そうと製作されたのは六十番以降のガンダム・フレームだ。それまでは数が必要だったことと、喫緊の情勢でバエルをもう何機も作る余裕がなかったそうだ」

一番最初の機体というのは予算度外視で作られるものだ。だからこそ性能も別格である。そんなバエルとアグニカでも一人ではMA全てに勝てなかったので似た悪魔が

必要だっただけのこと。

ベリアルはマイナーチェンジに当たる機体なので、素のスペックではアンドロマリウスは愚かバエルにも敵わない。

「今回の戦場に、正規軍は六機ものガンダム・フレームを用いるのか。鉄華団の三機にマクギリス、ガエリオ、カインか。これだけでも個の戦力で優っていて、戦力比も正規軍が上。イオクがまくろうとするなら、虎の子のダインスレイヴのみ」

「普通の理性があればダインスレイヴなど使用できないんだがな。マクギリスがダインスレイヴの詳細データも公表した。たまたまコロニーでも資源衛星でも、人の住む場所に落ちてみる。すぐに空気が抜けて中の住民は皆窒息死だ。……だが、イオクが勝つ手段はそんな破滅の剣しかない」

「まったく、愚者はいくらお前でも掌握できなようだな？ ラスタル」
「社会のつまはじき者。その者の名こそ愚者と言う。たとえ愚かであっても世界を変えられることができる人間は『革命の乙女』のように謳われるのだよ」

むしろラスタルは賢い者や純情な者こそ掌握できる。変に知識があるために行動が読めるのであって、何も考えずその場で行動するような者こそ天敵と呼べた。

イオクは知識もなく、大局観もなく、従順でもなく。家の力があり、その家に付き従う愚者がいて、行動力がある。裸の王様よりもタチが悪い愚王なんて、ラスタルではど

うしようもできない。

一応ラスタルが保護者であるはずなので言うことを聞くだろうと首輪をつけていたらその首輪を勝手に外して飛び出していった、今や捨て子だ。もうラスタルの責任はなくなっている。イオクも良い年齢の大人のはずなのだから。

「適当に問題を起こしてその失策からセブンスターズの権力を剥いでやろうと思っていたが、やらかしたことが大きくなり過ぎた。家の取り潰しで済まなくなったのはイオクの責任だ。私は戦いの結果については何も口を挟まん」

「この前鉄華団に連絡を取ったが、かなりの殺意を募らせていたぞ。兄貴分の組織を抹殺しようとした片割れなんだからそれはそうだろうが」

「色々なところに喧嘩を売っているな。カインもキレていたし、アイツを生かそうとする者はもう残っていないだろう」

「だな。願わくば、正規軍の被害が少ないことを祈ろう」

一方イオクは集まった戦力を見て苦虫を潰したような顔をしていた。

はつきり言ってしまうえば、彼らは世界に指差されたあぶれ者集団だ。何かしら悪事を働いたために世界から要らないとされた悪人。戦闘に頼らずのさばってきた人間も集まり、できるだけの支援をしてきたが明らかに戦力が足りない。

「……資産家の援助があっても、第二艦隊に少し足した数にしかならないのか？」

「はい。ヒューマンデブリに傭兵、海賊などを集めました。ギヤラルホルン同士の争いに手を貸せないと断る者が多くて」

「我らに正義があると言っても、首を縦に振らないのか!?!？」

「彼らは元々、秩序とは程遠い存在なので……」

イオクは副官が提示する内容に大きな声で確認を取るが良い返事は返ってこない。

戦艦十隻、MS180はかなり集まった方だ。そして一攫千金を目指した馬鹿者も集まってこの程度。

レストアMSや傭兵のカスタマイズMSでは正直グレイズとどっこの性能が精々。ギヤラルホルン製のMSはそれだけ特別なのだ。性能から整備性から汎用性まで、ギヤラルホルン製のMSは全ての水準が高い。

テイワズが作成するイオシリーズやガンダム・フレームがグレイズとやり合えることがおかしいだけで、厄災戦という三百年前のMSを修理して使っているのだから、劣化などはあつて当然なのだ。

それでも、彼らには切り札がある。

「ダインスレイヴの弾数は？」

「無事だったものが六発。新造したものが四発、合計十発です」

「たったそれだけか……。いや、使いようによっては戦況を一変できるな」

「それと、地球に残った同志からイオク様が手配した機体を両方とも送られてきました」

「何？ それは僥倖だ！ すぐに片方はパイロットを選別しろ」

「いえ、すでに志願が出ています。能力的にも問題ないかと」

「ではそのように進めろ。もう一つは私が乗る」

ダインスレイヴ以外の切り札も揃ったことでイオクには希望が見え始めていた。この戦いで勝つことで自分が正しいギャラルホルンだと世界に示し、今の不名誉な汚名を雪ぐことを真剣に考えていた。

そしてもう一つ、イオクの懸念材料があった。

「ラストル様の状況はどうだ？ 何か情報は手に入ったか？」

「それが……どうやらマクギリスの革命の日に、誰かに襲撃されたようで。今は再生装置で昏睡状態だそうです」

「何？？？ ラスタル様が？？」

「はい。目覚める予定は三週間後とのことで……」

「誰にやられたのだ？？」

「そ、それが我々の派閥の人間にやられたとギャラルホルン内で専らの噂となつていましつ」

カインがやったと知っているのはジュリエッタやマクギリスなどの一部だけで、しかもその後のジュリエッタの凶行を知っているのもその一部だけ。

ラストルが無事だと知っているのはその面子だけなので、その者達がバラさない限り情報が漏れることはない。

親とも呼ぶべきラストルがやられたと知って、しかもそれが自分の手の者のせいだと
言われてイオクは激昂する。

「そんな筈があるか！　これはきつとマクギリスの罠だ！　そうに違いない！」

「真偽は不明ですが、ラストル様とは連絡が取れないことは事実です。ですので、アリア
ンロット第一艦隊に増援を願うのは絶望的です……」

「そうか……。いや、マクギリスを討つ理由が増えたと思おう。総員、決戦に備えよ！
我らが正義を示すのだ！」

イオクのこの言葉から三日後。

天下分け目の一大決戦が始まった。

43 エピローグ0・79 最後の戦い

地球近郊の宇宙で、ギャラルホルンの内ゲバとも言える決戦が始まろうとしていた。ギャラルホルン正規軍は地球を背にして陣形を構築し、イオク達反旗側は圏外圏から出てきたように戦艦を展開。

正規軍は総司令をカルタ、第二司令をガエリオとして陣形を構築していた。矢面に立っているのはアリアンロッド第一艦隊であり、カインとマクギリスがガンダム・ゲイティアとガンダム・バエルに乗って前線司令を務める。

ジュリエッタも専用のチェーンナップをされた現代の技術でガンダム・フレームに勝ろうとする傑作機レギンレイズ・ジュリアに乗って前線に立っていた。

ガエリオは予備戦力としてカルタとは別の場所ですレイプニルに乗って司令官として待機していた。カルタはグラスヘイムで指揮を執る。前線には出ずに指揮官として徹するようだ。

一方イオクは予備戦力がほとんど用意できなかった。戦力差が激しく、虎の子のダインスレイヴは初手で放とうと思えばバテて避けられる可能性が高い。それにダインスレイヴとはいえ必殺の兵器ではなく、過剰な弾幕を放たれば迎撃されることもある。

MAにはそうやって防がれたという記録もあるのだ。イオクは知らないが。

イオクは自分が乗る機体や虎の子の兵器だけを予備戦力として、それ以外は全部展開することにしていて。戦力で劣る分、食料や弾薬の問題からも短期決戦を仕掛けるしかないのだ。

イオク派閥は今や世界の敵で、彼らに物資を融通してくれる組織は少ない。食料や弾薬といった消耗品はギャラルホルンに切られた貴族達が用意した物で全てだ。それ以上は用意するアテもなく、この一戦の撤退は死を意味している。

それを知っているのは融資した貴族達や第二艦隊でも上位の一部だけだ。イオクはもちろん、一般兵や雇った海賊達も知らない事実。それがあからこそ一部はこの戦いに賭ける意気込みが桁違いだった。

勝てば官軍という言葉があるように自分達の正しさを証明するためにイオクの艦隊はやる気だけは高い。追放された者達も負ければどの道処刑が待っているだろうと思っただけで全ての資産をイオクに賭けた。

負ければ全てを失うのは戦の常。万が一負けそうになっても撤退して次の機会に備えれば良いと思っただけの者もいるが、その次が存在しないとわかってる者は躍起になつてた。

撤退した上での餓死という惨めな死を選ぶくらいならここで戦死しようと、事情がわ

かっている者はある意味潔い決意を固めていた。

開戦は世界時計で時刻を指定していた。その前から攻撃を始めればそれは相手に付け入る隙を与えることになるのでそこは両軍とも律儀に守った。

これは世界に正しさを示す戦いなのだ。そこでズルをすればその後の経済圏との共同統治に悪影響を及ぼす。後々に禍根を残さないためにも、そこは断固として死守した。

そして世界時計が十二時を示した瞬間。

ギヤラルホルン最大の戦火が、幕を開いた。

艦砲射撃から始まり、すぐにMS戦へと移行していった。MS同士の衝突は、いささか予想通りに推移する。

ギヤラルホルン本隊の練度が高すぎるのだ。いくら海賊が百戦錬磨でヒューマンデブリが阿頼耶識を搭載していても、それらを二年間鎮圧してきたギヤラルホルンだ。二年前のように困惑してやられるような無様な様子を見せることはなかった。

阿頼耶識のデータも集まり、仮想敵を阿頼耶識搭載MSとしたシミュレーターも開発したためにヒューマンデブリが相手でも問題なく迎撃していった。

その様子に慌てるのは海賊達とイオクだ。阿頼耶識の優位性を実体験として経験している者からすればギヤラルホルンがなんてことないように対処していく様は悪夢で

しかない。

「何故あかもヒューマンデブリがやられるんだ!? 機体に不備があるのか!」

「ありません、イオク様! おそらく実力で突破しているのです!」

「阿頼耶識とはその程度のものだったのか!?」

イオクと似たようなやり取りを海賊の頭目やヒューマンデブリに出資した、この戦場に来ていた資産家達もしていた。戦力になるからとヒューマンデブリと乗機へ金を掛けたのに、簡単に撃破されてはたまったものではないのだ。

この戦いは正規軍に喧嘩を売っているのだから、勝てなくては意味がない。その頼っていた戦力の一部がアテにならないとなれば憤るのも無理はない。

ヒューマンデブリは主にアリアンロッドとカインやジュリエッタ、マクギリスに撃破されていった。彼らは阿頼耶識を用いた機動に見慣れている。しかも練度は高くなかったために対処ができていた。

阿頼耶識による機動が人体の動きに似ていて予測がしづらいとは言うものの、その阿頼耶識を用いても技量の差はある。素人がMSを動かせるようになるとはいえ、特異な動きができるとはいえ。

戦闘経験と戦場への恐怖、戦術的な思考や共闘に関する連携などとはまた別の話だ。ナノマシンを埋め込んだからといって戦闘で万能の存在になれるわけでもない。

ヒューマンデブリの多くは年端のいかない子供だ。しかもここ二年でMSの需要が急拡大したために急いで確保した存在のため実戦経験も少ない。そんな子供がしつかりと連携をしてくる正規軍や、ギャラルホルンの中でも一騎当千を誇るエースの進撃を止められるはずがなかった。

そんな彼らに対抗できるのは歴戦の海賊達だけだ。アリアンロッド第二艦隊の残りメンバーも戦闘が優秀だった者は全てMAとの戦闘で戦死している。戦力としてアテになる者は海賊と一部の天才だけ。

正規軍は予備戦力を控えさせていたので今の戦況はまだ拮抗していた。エースが既に三人も出ているが、ガエリオや石動が控えているなどまだエース級は残っている。しかしイオク軍はダインスレイヴとある二機を除いて全戦力が出ている。

その拮抗具合に、イオクが痺れを切らす。

「ダインスレイヴ隊を発進させろ！ 一気に戦況を動かす！」
「はっ！」

イオクの命令で一般のグレイズにカラーを変えたダインスレイヴ隊が出撃する。六発しかないダインスレイヴなので全部装弾した状態で出撃する。随伴機もなしに出るが、ダインスレイヴ隊を守護する機体も既にもいない状況だ。

出撃してすぐ発射準備に移る。レールガンの発射機構を開き、グレイズのセンサーユ

ニットも開いて目標へ照準を定める。

「目標はグラスヘイム1・2！　そして中央のガンダム・バエルとガンダム・ゲートイアだ！」

イオクの指示でダインスレイヴ隊が通信を取り合って誰がどこを狙うのか決めて目標を確定させた。

ダインスレイヴは放てばMSも貫通して一気に戦況を変えることができる貫通力と破壊力を秘めている。グラスヘイムの後ろには地球があることを気にした指示ではない。イオク達は既に勝つことしか頭にない。

禁止兵器を放った後の被害を、もしもを考える余裕などなかった。

その悪意は戦場においても強すぎた。

地上に残ったアルミリアも空を見上げ、最前線で戦っているカインとジュリエッタにもシャーブに頭に響いた。

「ジュリエッタ！」

「はい！」

「アサルトビット／ソードビット！」

カインとジュリエッタはそれぞれの機体の背面に装備されていた遠隔操作兵器を放出した。

ソードビット。アサルトビットのように弾丸を射出する兵器ではなく、それ自体が細剣のようになった一つの質量兵器となっていて、それを遠隔操作で突き刺すことで目標を撃破することを目的としたジュリエッタ専用の兵装だ。

二つのビットがダインスレイヴ隊に接近する。そして発射する前にレールガンへ弾丸が炸裂したりソードビットそのものが突き刺さることで爆発。発射機構がなくなつたことでダインスレイヴはただの物質に成り下がった。

「ダインスレイヴ隊、全機中破！ ダインスレイヴ、発射できませんでした!?!?」
「またか!?!? あの時もクロウリーが戦場にいたが、まさか奴に邪魔されたのではないだろうか!?!?」

イオクは珍しく正解を言い当てる。

そしてカイン達がダインスレイヴのためだけにビットを温存していたことを知っていたマクギリスは二人がビットを使用したために一つの通信をするようにカルタへ伝える。

カルタも即座に信号弾を発射。緑色の火花が四つ、地球を背景に夜空へ浮かん

その意味は『雌伏の時は終わり也』。

これは正規軍にだけ伝えられた意図があるために、イオクの軍は四つの緑色の信号弾の意味がわからなかった。警戒する者はいたが、何を警戒すればいいのかわからないま

ま。

信号弾を確認した者達はエイハブ・リアクターに火を入れる。

「「出番だ、鉄華団」」

マクギリスが、ガエリオが、カインが。口を揃える。

イオクの艦隊の後ろから、鉄華団とタービンを中心としたテイワズの武装組織の一団が一斉に姿を現した。今まではイオクの艦隊の動きを確認してエイハブ・リアクターの反応を感じされない距離を保って後ろからついてきていたのだ。

「後ろから、多数の艦隊！ MSも複数出撃しています！」

「挟撃されたのだと!?？」

イオク達は慌てるが、これは正規軍にとつてのシナリオ通り。一応一般企業であるテイワズの参戦はギャラルホルン同士の揉め事なので難しかったが、禁止兵器を使用する悪の集団に成り下がったイオクの軍相手になら世界も納得できる。

しかもその禁止兵器たるダインスレイヴを使用されたタービンの親元だ。一企業として世界中の企業の代表として意思を示すには条件が揃っていた。

「お前ら、これが最後の戦いだ！ デケエシノギを邪魔する奴らを蹴散らすぞ！」

「わかったよ、オルガ。アイツらをぶっ飛ばす」

オルガの声を受けて、三日月が我先にと突撃する。他の鉄華団の機体もそれに続き、

挟撃戦が始まった。

「私が出る！ 例の機体を後ろの部隊へ回せ！ アレなら後ろの奴らを蹴散らせるはずだ！」

部下の返事を待つこともなくイオクは出撃するためにMSデッキへ向かう。

戦力比は倍になったが、それでもイオクは諦めずに戦場へ向かう。

自分だけの正義を信じて。

44 エピローグ0. 87 エドモントンの再来

戦線が両面に展開されて、困るのはイオク軍だ。退路を断られた上に連携が上手くない寄せ集め部隊だ。イオクの指示を完璧に聞く集団でもなく、明らかに兵站・戦力・情勢が負けている者達。

最悪の状況になれば圏外圏に逃げれば良いと考えていた小心者達が浮き足立った。前後を包囲されて逃げられるほど戦場は甘くない。そもそも自分達が乗っている戦艦ごと逃げられなければ宇宙で餓死する。

しかもそんな小心者達の間が一番心配なのは、これがあれば勝てると言われていたダインスレイヴが不発に終わったことだ。放つタイミングで味方に被害が出ないように退避命令が出たのだが、戦場を穿つ一条の光は終に見えなかった。

それに戦場で後ろを取られるというのはかなりマズイ。MSは小回りが効くからまだしも、戦艦は戦場で方向転換は難しい。後ろからでは一方的にやられる可能性がある。戦艦は前面で戦うことを基本としているので、後ろ側は脆い。

スラストアーなども多いため、背面を取られたのは本当にマズイことだ。逃げられないことに消沈していく大多数。

鉄華団という歴戦の勇士達の参戦によって更に状況は正規軍優位になっていく。戦力比が完全に倍以上差がついて、エースの数も差がついた。及び腰の者がイオクの軍で増えたために、MSもどんどん撃破されていく。

そんな状況の中、イオク軍の切り札の一つが戦場の後方へ現れる。

その巨体はMSとしても一際大きく、型式としては若干古いその黒い機体。

三日月は見覚えがあったので眉を吊り上げる。エドモントンで辛酸を嘗めさせられた機体と瓜二つだったので覚えていたのだ。

今の右目と右腕になった元凶。悪化したのはMAのせいだが、最初の不調を覚えることになった相手だ。

「昭弘、シノ。気を付けて、あいつだ」

「あんなもん、二つも作ってやがったのか……」

「ああ、覚えてるぜ……。俺が後にも先にも勝てなかったのはアイツだけだぜ」

鉄華団のガンダム・フレーム乗りが危惧する相手。

普通のMSの二倍はある全長。エドモントンの時とは異なり、宇宙用に改造されたその機体。

グレイズ・ツヴァイがそこにはいた。

接近戦用の戦斧を腰に、大口径のバズーカを二つと牽制用のハンドガンを持ったシン

プルな兵装となっている。全身を阿頼耶識手術で固めているために、変な装備など必要としていないのだ。

『イオク様の栄光のために！ この道を進ませてしまったがために！ 私は貴様らを踏み潰す！』

「宇宙だよ、ハハハ」

三日月がそう言い、バルバトスで斬り込む。

ガンダム・フレイム三機がグレイズ・ツヴァイと戦う。三日月達もこの機体が敵の主力だとわかったためにエース三人で挑むのだ。

このグレイズ・ツヴァイに乗っている者は、クジャン家に昔から仕えている家系の者だ。タービンス討伐作戦の際にダインスレイヴ隊として出撃して負傷し、もうMSに乗れないと診断された者だ。

クジャン家に仕えることを誉れとしろ、という教えを幼少期から受け、イオクを絶対の主として扱ってきた。

そのイオクの言うことを全て是として受け入れるのが臣下団の在り方だった。多くの者はそれに疑問を覚えることなくアリアンロッドに入隊し、イオクを神輿として持ち上げて死んでいった。

イオクはまだ若いのだからと。間違っていたら諫めようと。年上の自分達で彼を支

えようと。

——いつからだろう。歯車が狂ったのは。

臣下団の多くは、イオクの同年代はいなかった。いても一人・二人。なので幼年学校や士官学校の頃のイオクのことを知らなかった者が多い。臣下団とはいえ、通常の業務に励まなくてはならない。

休暇を利用してイオクに会うことはあっても、込み入った話をする時間などなかった。イオクはヴェインゴールヴに近いメガフロート群に住み、臣下団の大半はアリアンロッド所属として宇宙にいた。

セブンスターズでもないのでもう多く地球へ降りられず、一年に一回しか会えないこともあった。

イオクの教育はクジャン家に仕える、本当の側近に任せ、臣下団は将来の手足になると第二艦隊で実績を積んできた。イオクに本格的に会うのは彼がアリアンロッドに入ってからだ。

最初の変化は、前当主が亡くなったこと。これは間違いなかった。

イオクが幼いながらもクジャン家の跡取りとなり、彼にはセブンスターズとしての責

任が付随するようになった。それに応えようと彼は尊大な態度を取るようになった。それこそが上に立つ人間の在り方だと思つて。

形から真似るのも良いだろうと、止めなかった。これが一つ目の間違い。

次期当主としての教育で後見人たるラスタルと一緒にたつて知識の詰め込みを行わなかつたことも失敗だろう。

ラスタルが艦隊指揮で忙しかつたので、後見人というのが形だけになつてしまつた。それをイオクが入隊してから後悔しても遅かつた。入隊してしまえば、任務に忙殺されて知識を詰める時間が取れるはずもなく。

そのせいでセブンスターズとしての知識も曖昧なまま。不完全な状態で彼はクジャン家の当主となつてしまつた。これが二つ目の失敗。

お付きの者を軍人でも良いのでつけるべきだつたのだ。セブンスターズのみ伝えられる知識などはただの軍人が付いても意味がなかつたかもしれないが、諫める人間さえいれば多くの失敗はどうかでできたかもしれないなかつた。

臣下団の知らない場所で喧嘩を売り、他者を不快にさせ、決闘を申し込んで。

氣付いた時には取り返しつかない利かん坊になつていた。

自分も他者も見えない、自分中心の自己完結人間。

当主の座を継ぎ、軍人になつてしまい、大人の自覚ができたことで彼の性格は固定さ

れた。修正は不可能になっていた。

進言した者は私の部下に相応しくないと、手にした権力で左遷させられ。ラスタルを目標の人物にする割には見ている方向がてんで別で。自分が気に入らない相手であるマクギリスやカインには自分の立場を考えずに突っ掛かり。

あまつさえラスタルの忠言も流して自分の考えを優先し。情報の裏取りをするということもできずにジャスレイの甘言に乗ったり。臣下団で戦死者を出し。

甘やかしていた臣下団の目もようやく覚めた頃にはもう何もかも遅かった。

ダインスレイヴ弾頭摘発のために本家本元のダインスレイヴを使用し、相手の降伏宣言も無視。ここまで来るともう軍人とは呼べない器だと分かりきっていた。

それでも自分達が見捨てれば、イオクがどうなるか。それが分かって結局甘やかしてしまったのが臣下団の実態だ。

イオクを変えることを諦めてしまった大人達。

その結果世界から見放されたとなったら、その責任を取るためにこの戦場で命を散らせようと決めていた。

グレイズ・ツヴァイに乗っている者はカインのアサルトピットの弾頭をともに喰らい、コックピットの破片などが身体中に刺さって再起不能になったパイロットだ。

イオクが禁止されている全身阿頼耶識の手術をしなければ乗れないこの機体を都合

した時点で、彼が一番状況に適していた。他の者では四肢を切断しなければならなかったために、臣下団は苦渋の決断で彼を選んだ。

阿頼耶識に接続して意識を取り戻した彼に、決断を下した全員が頭を下げるということもあつた。

彼は、そのことを受け入れた。彼が拒絶すれば誰かが犠牲になると思ったからだ。

こんなことになってしまった責任を取ることが、パイロットをすることなら今までと変わらないとある意味思考停止をするのが楽だったのだ。

『どけえ！ もうこうするしかないのだ！ 私の死を持つてしても変わらないのなら、イオク様は……！』

「イオクつてのが誰だか知らないけど、煩いよ。一人の名前ばっか叫んでバカみたいだ。その機体に乗ったら皆そんな感じになんの？」

「三日月……。一応敵の大将の名前くらい覚えとけ」

昭弘が呆れながら三日月に教えるが、人の名前を覚えるのが苦手な三日月のことだ。戦闘中ということもあつてすぐに忘れているだろう。

グレイズ・ツヴァイを動かしている人間はさすがアリアンロッド所属というべきか、ガンダム・フレイム三機がかりだというのに決定打を打てなかった。グレイズ・アインの敗戦を糧に色々と強化した機体だ。二年前から三人が強くなっていると云つてもす

ぐには倒せない、凶悪な機体になっていた。

「敵の大将なら悪い奴じゃん。タービンを殺そうとして、自分は嫌だつて逃げんの？」

『あの方は子供なのだ！ もつと時間があれば……！』

「知らないよ。お前もそいつも。そういう身勝手さで俺達を排除しようとするなら、俺が殺す。新しい家族が増えるんだ。わけわかんない理由で撃鉄を落とされるわけにはいかないんだよ」

相手の理論がまるでわからず、三日月はメイスを叩き付ける。装甲は歪んだが、まだまだ健在だった。

『貴様も、鉄華団という組織に任せ、一人の男を頂点に据えているだろう！ その男が間違えたらどうする？』

「俺がオルガの選択を間違いにさせない。全部オルガの責任にさせない。それだけでしょ。何言ってるの？」

『そんなもの、ただの綺麗事だ！』

「癩癩で俺達を殺そうとしてる奴よりはマシじゃない？ オルガは突つかかってくる相手は蹴散らすけど、一般人は守ろうとしてる。そいつとオルガをまるで似てるように言うのはやめろ。オルガは俺達の家族で、鉄華団の団長だ」

三日月が一瞬機体を静止させた瞬間、グレイズ・ツヴァイのコックピットを腰の辺りについていたハシユマルのテールブレードが貫いていた。

元々MSを破壊するための兵器だったので密度も段違いだった。それはコックピットを貫きながらも原型を保っていた。

「あーあ、ウザかった。昭弘、シノ。まだいける？」

「途中からお前一人で戦ってたからな。まだ余裕だ」

「ああ。タービンスの援護に行こうぜ。昭弘の彼女も守ってやんねーと」

「む。ラフタはそこまでヤワじゃない」

「とか言つて真つ先に向かつてんじゃんか！ お熱いねえ！」

そんな軽口を叩きながら彼らは戦場を移す。

戦いの終わりは近い。

45 エピローグ0・97 ガンダム対ガンダム

「イオク・クジャン！ ガンダム・マルコシアス、出るぞ！」

イオクがそう言い、黒に黄色をとどころどころに施した狼を想起させる流線的なフォルムが特徴のガンダム・フレームがイオクの旗艦から飛び出した。

ASWG——35、ガンダム・マルコシアス。欺瞞を嫌う正直者を示す悪魔の名を冠するガンダム・フレームだ。このガンダムが生産された頃には多局面に対応できるように、様々な地形で活躍できるように設計された地形対応ヴァリエーションの一機だ。

マルコシアスは地上専用機だ。フラウロスの前身となる機体で、変形機構を用いて地上で高速機動をもってして敵MAを狩ることに特化させた機体。それを宇宙での決戦に合わせてプログラムを書き換えさせていた。

本来はウルフモードに変形してバエルをも超える速度で敵を錯乱させ、超鋼鉄ブレードで叩き斬るということが主要の戦術だった。

そのため、装備はブレードが二本に牽制用のガトリング砲が両肩に装備されているだけ。速度と一撃離脱を念頭にコンセプトされた機体なので余計な装備は外されていた。

厄災戦の時はそういう何かに特化した機体こそが活躍し、実際に戦果を挙げたのだ。

だからのちのセブンスターズの一角になり、七星勲章も大量に得ていた。そういう機体が当時は刺さったのだ。

もちろん今の機体は阿頼耶識用のコックピットは外されて、一般用のコックピットになっている。

イオクは多大な出力に振り回されながらも、前を、地球を目指した。彼の辞書に撤退の二文字は基本的に存在せず、勝って地球に凱旋することを第一の作戦目標としていた。だからこそ戦場でも一番鉄火場となっている最前線へ向かう。

ダインスレイヴが不発だったために士気が落ちてきているのだ。それを取り戻すのは自分にしかなできないと考えて陣頭指揮を執るつもりだった。それこそが士官学校から培ってきたものだと言っていた。

「正規軍よ、私に来たからにはもう大丈夫だ！　ダインスレイヴこそ不発に終わったが、私の正義の剣が革命軍を討ち滅ぼそう！」

イオクは自分達の軍を正規軍だと、頑なに呼称した。マクギリス達の軍を革命軍として、暴力で全てを解決しようとしている野蛮な集団と決めつけた。

相手はギャラルホルンに所属している軍人ばかり。他方イオクは傭兵や海賊などが多数所属している多国籍軍のようなものなのどの口が正規軍だと言っているのかと味方にさえも思われていたが、訂正するのも面倒だったので誰も口を挟まなかった。

イオクの軍からすれば、勝てばいいのだ。勝てば官軍なのだから。

イオクが広域に宣言をしたことで確かにイオクの軍に統一感が出てきたが、それと同じく大将首の在り処をマクギリス達に伝えることとなった。

マクギリスはすぐに、カインへ通信を入れる。

「カイン、私が部隊を率いてこの戦争を終わらせてくる。カインとジュリエッタ一尉は一旦下がれ。ビットは消耗が激しいと聞く。ガエリオと代われ」

「了解致しました。ジュリエッタ、下がるぞ」

「はい」

カインとジュリエッタは素直に退却する。大きな悪意はダインスレイヴとグレイズ・ツヴァイが撃破された時点で二人とも感じなくなっていた。その前からも獅子奮迅の活躍をしていたために消耗は事実激しかった。

ダインスレイヴ発射のために相手の陣形は崩れており、頼みの綱は不発。その上後ろをテイワズに抑えられ、戦況はぐちゃぐちゃになっている。これならカイン達が離脱しても問題ない状況だ。

イオクの声で纏まりだったが、その前に混乱した者達を精鋭達が各個撃破して更に数を減らしていた。戦局を覆す秘密兵器が機能しなかった以上、ここからイオクがひっくり返す手段はない。

カインとジュリエッタにはそれがわかっていたために退却するのだ。ここからはイオクを倒すまでの消化試合に等しい。あとはどれだけ被害を減らすかに注力すべきだろう。

カイン達が下がる代わりに予備戦力が出撃していく。カインももしものためにガンダム・ゲートティアの整備を頼んで食事を摂っていたが、再出撃する可能性は低いと睨んでいた。

スレイプニルから宇宙用に改修されたガンダム・キマリスが出撃したのを見送って、カインはジュリエッタと並んでブリッジで戦況を見守る。

その頃ようやくマクギリスがイオクに接敵していた。

マクギリスはバエルの推力に物を言わせて真正面からバエルソードをクロスさせて斬りかかる。それを奇跡的に同じような動作でイオクも防いでいた。

「うおっ！」

「ガンダム・フレームに乗ったものの、まるで扱えていないな！ 機体が泣いているぞ！」

「何をっ！ 貴様こそ、バエルを持ち出すとはどういう見だッ！」

イオクは不器用にバエルソードを弾くが、やはり操縦は覚束ない。阿頼耶識がなければ操作性は劣悪なガンダム・フレームだ。グレイズの操縦だって危なっかしいイオクに

は過ぎた代物だった。

宇宙で溺れていないだけ操縦技術は上がった方なのだが、それはギャラルホルンのパイロットとしては全く褒められることではない。

この場合、マクギリスやガエリオが阿頼耶識なしで十全に機体性能を発揮していることが称賛されることであって、まともに動かせない方が普通なのだ。それでもイオクは拙いが。

マクギリスの剣舞による連撃をまともに受けられないイオク。イオクは機体の正面ばかり剣で守ろうとするため、その動作を見たマクギリスが余裕で剣の軌道を変えることで徐々に機体の装甲を削り取っていった。

マルコシアスは速度を重視した機体だ。装甲も削って速度を出そうとするコンセプトから、MSの中でも特に防御力がない。ナノラミネートアーマーに変わりはないので、そう簡単には撃破されることはないのだが、比較すれば脆いとは言えない。

そんな脆い機体で、しかも変形機構を搭載しているのだ。内部に負担がかかって余計に脆くなっている。関節部はガンダム・フレームにあるまじき脆さだ。

パイロットの技量さえあれば無双できる機体なのだが、逆に技量がない者が乗ると欠点だらけの貧弱な機体に成り下がってしまう。一点特化というのは多くのリスクがあり、相応のリスクがある諸刃の剣でもあるのだ。

コンセプトだけで言えばバエルとも似ているマルコシアスだが、だからこそ余計にパイロットの差を如実に示してしまっていた。

イオクは防戦一方で徐々に内部フレームが見えるほどに傷付けられていた。その間も無意味に「うおおおおお!!? 」と叫ぶだけ。

このままではやられると、イオクの親衛隊が二人の鏖迫りに介入した。

「イオク様! 」

「チイ! いつまで腰巾着を続けるつもりだ!!? この男が長生きするほど戦乱が蔓延ると何故わからん! 」

迫り来るグレイズを即座に跳ね除けるマクギリス。

だがその一機を皮切りに続々とバエルに集るグレイズ達。それはマクギリスが率いていた部隊によってほとんどが除去されたが、時間稼ぎにはそれで十分だった。

二十機ものグレイズが散っていくことによってできた時間。それはあるものが最前線まで辿り着くには十分な時間だった。

「マクギリス、避ける! 」

「うおおおおお! 」

「バカな、フラグシップが特攻だと!!? 」

旗艦であるはずの戦艦が突撃をかましてくれば流石のマクギリスでも驚く。ガエリ

オの忠告がなければ火だるまになっていた可能性もある。マクギリスが避けると弾薬が尽きたのか本当に体当たりを仕掛けてきた。

バエルに唯一装備されている肩の電磁砲で戦艦の動きを止めようとするが、それだけでは動きは止まらなかった。電磁砲はあくまで牽制用の装備なので大型戦艦を止められるほどの威力はなかった。

マクギリスに対抗手段がないとわかったガエリオが、キマリスの背中にジョイントアームで接続されたレールガンを取り出す。『夜明けの地平線団』の戦艦を落としたレールガンの改良型だ。

その引き金を、躊躇いもなく引いた。イオクの旗艦は拿捕する予定だったが自爆されてマクギリスを失うくらいならとガエリオは高威力の弾丸を放つ。

それが直撃してブリッジを貫いたのと同時に、狂信者は一つのボタンを押した。

戦艦に積まれていた火薬全てを引火させるためのスイッチだった。まさしく神風特攻であり、それは景気良く大爆発を引き起こした。

最前線で大きな爆発が起きても、カインは全く慌てなかった。無事だとわかっているのに心配をする理由がないのだ。

その証拠に、バエルには大きな傷もなく健在。その様子を見てイオクが叫ぶ。

「我が部下達の輝きを持ってしても貴様という巨悪は倒れないとは……!! お前達の命

は預かった！　みんなの力を私にくれ！　マクギリス・ファリド、覚悟お！」

「いや、終わりだ」

大仰に叫んでいる間にマクギリスはイオクへ近付き、コックピットに向けてバエルソードを突き刺した。何も言うことはできないままイオクはコックピットごとすり潰され、最後に何も残せないまま肉片へと変わっていった。

マクギリスは余韻を感じるまでもなく、そのままマルコシアスの頭部も切断し、剣先で頭部を見せ付けるように掲げた。

と同時に、それを感じ取ったカインが信号弾を撃つように指示。

戦場に赤・青・黄色の信号弾が浮かぶ。それは戦いを生業としている者なら誰もが知っている合図。

大将首の撃破。即時戦闘中止の合図だった。

それに続いてマクギリスが勝利宣言をする。

「逆賊イオク・クジヤンは今この刻を持って死した！　ここに宣言しよう、不当なる世界は終わりを迎える」と！

「うおおおおお！　マクギリス万歳！」

「万歳！」

「勝ったー！　内乱は終わりだー！」

大喝采とともに、イオク軍は全てを諦めて大人しく捕縛されていった。元々負け戦だったのだ。イオクが討たれた以上、無駄に命を散らす理由はない。

マクギリスがガエリオとカルタと連名で残った者を殺すことはやめるよう通達。海賊達も当座は命の心配をしなくていいということ諦めて縄についた。

もつとも余罪次第では極刑もありえる話だ。この場で殺すことを禁止しただけである。

戦闘行為が終わったことで、カインが大きく伸びをする。

「ハア……。ようやく艦隊指揮なんて重荷から解放される」

「カイン一佐。帰還するまではあなたが最高責任者です。まだ終わりではありませんよ」

「……本当にオレはこういうのに向かないな。ラスタル様には遠く及ばない。あー、捕縛要員は足りているか？ 足りなかったら予備戦力で控えていた者を出撃させろ」

クロウリー准将を演じていた時とは違って自信なさげに指示を出すカイン。演じていた時と違って場違いだという思いを仮面で隠すことができないためにそんなしどろもどろな指示になってしまった。

その様子を見たブリッジの者全員がクスリと笑って、その指示を通達する。

長いギャラルホルンの歴史が変わる内乱が、終わりを迎えた。

エピローグ1 辿り着いた場所

『マクギリス革命』から一年が経った。

ギャラルホルンが体制を一新させたことで海賊なども数を減らした。ギャラルホルンに不満を持つ者が急激に減った。それだけ真つ当な組織に変革したのだ。

監査局の人員が増えたことでギャラルホルンの腐敗を完全に防止。戦乱の気配があればすぐに出兵することで過去の栄光あるギャラルホルンを取り戻していた。

一方火星では。

とある組織の本拠地で組織員全員が大慌てだった。いや、若干数の大人は冷静に対処しているのだが、主流メンバーは誰も彼も大慌てである。

「おぎやあああああ！」

「あ、暁!?? なんだ、何が足りないんだ!?? オムツは変えたばかりだろう！」

「お、オルガ! ミルクなんじゃねえか!?? ガキンチョコはミルクが好物だろう！」

「シノ、好物じゃなくてそれしか飲めないんだよ! でもミルクだってさっき飲んでたよね!??」

「ヤマギまで困惑してんじゃねえよ。つーか、大の大人が揃いも揃ってうるせえな」

「カッコつけてんじゃねえぞユージーン！ てめえも昨日は大騒ぎしてたじゃねえか！
」

「は、はあ？ ダンデ、言つていいことと悪いことがあんだろ？」

誰も彼もが大慌て。それを困つたように眺めているのが三日月とアトラだ。

三日月とアトラの子である暁が産まれて、母子共々退院したのが先日。その日は鉄華団を挙げて宴会になったのだが、暁が泣き始めたら全員がしどろもどろになつてしまつた。

それから暁を泣かせないように無い知恵を絞つてタービンスから貰つた育児本などを読み始めたのだが、学がない彼らは大苦戦。大人の女性であるメリビットに聞いた知識からそれを実践していたのだが、それでも泣き止まない暁に手を焼いていたのだ。

MSでの戦闘よりも鉄華団を追い詰めた赤子。アカツキ 恐るべし。

「何でこういう時に育児経験があるタービンスの姐さんらがないんだよ！」

「しょ、しょうがないだろ？ ラフタさんが今朝産気づいたつていうから昭弘と一緒に総出でクリュセの中央病院に行つてる！」

「あの人達が帰つて来たらこの騒動が二倍になると？？ どんな世紀末だ！」

「て、鉄華団はおしまいだ？？」

『革命の乙女』たるクーデリアを守り切つて地球まで送り届け、アーブラウ防衛に尽力

し、宇宙のならず者を退治し。マクギリスから革命最大の功労者と言われている英雄の姿はそこになかった。

あるのは図体だけは大きくてどうしようもない情けない子供達の姿しかなかった。

オルガが暁を抱いて慌てふためいている様子を見て、三日月が椅子から立ち上がった二人の元に行く。

そのまま左手で暁の背中を抱えて、アトラの隣に戻る。

その頃には暁はすっかり泣き止んでいた。

「お、おおう。さすが三日月さん。って、右腕大丈夫なんスか？」

「ハツシユうっさい。暁が起きるだろ」

「す、すんません」

怒られたハツシユを尻目に、オルガは大人しく眠っている暁を見て三日月に問いかける。

「あー、何だ？ つまり親じゃない人に抱かれて不安になったってところか？」

「じゃない？ そんなこと本に書いてあったし。物心着いたらまずはオルガの匂いを覚えさせよう。うん、決定」

「三日月は本当に団長が好きだね。そこが三日月の良いところでもあるけど」

アトラはのほほんとそんなことを言う。それでいいのか妻とツツコミが出そうなも

のだが、アトラの性格を知らない者は鉄華団にいない。

クーデリアにとんでもない提案をしていたのを聞いていた団員が多い。そこからアトラさんはヤベー奴と年少組に認識されていた。その辺りはアトラの幼少期の経験が要因なのだがそれを本人が語らないので知っている者は少ない。

三日月はMAとの戦闘でバルバトスのリミッターを外してしまつたがために右腕と右目は完全に使い物にならなくなつていたが、それでも自分にできることをしようと今では鉄華団の敷地に畑を作っている。

海賊退治などはギヤラルホルンに要請されて手伝うこともあるが、頻度はめつきり減つた。海賊そのものが数を減らしたこともあるが、ギヤラルホルンが圧倒的な戦力を見せつけたこと、テイワズが協力を申しつけたことから海賊業は肩身が狭くなり数を次第に減らしていった。

ギヤラルホルンに見付かれば迅速に討伐され、圏外圏ではテイワズが睨みを利かせているために簡単には手出しをできない。ちよつかいをかけた者の末路は広く伝播されていた。

ギヤラルホルンも真つ当な組織に変革したために、逆らう者もいなくなつた。経済圏と協力して腐敗などが無い組織になつていったために徐々に民衆からの信頼を取り戻している。

そんな中鉄華団の主な仕事はハーフメタルの採掘と運送業になった。

たとえ海賊がいなくても宇宙にはデブリがたくさんある。その除去にMSを用いるのが一番早い。ハーフメタルの需要もあつて鉄華団の仕事はなくなっていなかった。

そんな忙しい最中でも、団員同士の初めての子供ということではばらく仕事を休みにして暁に構っていた。仕事も軌道に乗っていたので少し休んでも経営に影響がないのだ。

「あーあ、俺も彼女欲しいなあ」

「女性団員増えたじゃねえか。そつから探せよ」

「身内はよお！　なんかあつたらまずいじゃねえか！」

「何かある前提かよ」

シノとユージーンがそんなことを言う。アトラ一人で家事をこなすなど不可能で、しかも妊婦になつてしまった。そのため『マクギリス革命』の後に女性の炊事係を複数雇つたのだ。それまで一人しかいなかったのが問題なのだが。

一応手伝える人間で手伝ってきたのだが、メインのアトラがいなければ動けない団員ばかり。なのでアトラの指示がなくても動ける人を募集して女性団員が増えていた。

その女性団員と付き合えばとユージーンが勧めるものの、シノは渋る。

そしてそんな話をヤマギが恨めしそうに見ている。最近のヤマギはそういうことを隠していない。

三日月といい昭弘といい、おめでたが続いているのも事実だ。他の団員も仕事や鉄華団の知名度から彼女ができた者もいる。

シノはよく夜の街に繰り出しているために女性からも一歩距離を置かれている。そこにとある男子の鋭い眼光は関係ないはず。ナイヨ？

団員達が談笑をしている頃、本拠地に帰ってきた者達がいた。チャドとビスケットを中心とした元地球支部組だ。ある人物の護衛で地球までの往復をこなしてきたところだった。

そのある人物とは。

「ただいま帰りました。皆さん」

火星で一番有名な人物、クーデリアだった。地球、というより経済圏の一つアープラウとの折衝で直接地球に向向かなければならず、久しぶりに火星に帰ってきていた。

映像を繋いでいたので色々とは知ってはいるが、実際に暁を見るのは初めてだった。

「見て見てクーデリアさん！ ウチの子、暁！」

「ん。抱っこする？」

「いいのですか？ うわ、暖かい……」

近付いてきたアトラと三日月から暁を受け取るクーデリア。

他の男連中が散々泣かれたのに、クーデリアに抱かれた暁は安らかに眠っていた。

その様子にがっくりとくる男性陣。

「何でオレらはダメで、クーデリアはいいんだよ……」

「そりゃあおっぱいだろ」

「バカヤロウ。包容力って言いやがれ」

上からオルガ、シノ、ユージーンの台詞。

地球組は生で暁を見るのは初めてなので、興味深そうに暁を見たり触ったりしていた。

「あと俺らは硝煙の匂いとか、汗と油の匂いとかもあるかも。赤子ってそういう匂いに敏感だから」

「ビスケット……。むしろそれが一番ヤバいのってミカじゃねえか？」

「それはほら。父親だから」

「納得いかねえ……」

「俺らだって昔はああだったんだから。それに赤子に常識を求めたってダメだよ」

「そりゃそうだけだよ」

ビスケットは妹達の世話をしていたためにそういう知識が人一倍あった。逆にオルガ達には子育ての知識なんてまるでなかったもので、何がどうなっているのか理解できないのだ。

いや、ない。

「オルガも子供作りなよ。団長が跡取りもいないのは問題だつて桜ちゃんが言つてた」
「ああ!?? 何でオレに飛び火した!?? 」

「そうだねえ。参謀役として将来を見据えたら、オルガに子供がいれば鉄華団は安泰かな」

「ビスケットまで！」

「よつしやあ！ 俺とオルガ、どつちが嫁さんを先に見付けるか勝負だぜ！」

「そういう問題じゃねえぞシノオ！」

わーぎやー騒がしくなる食堂。

そんな騒ぎになつていても暁はクーデリアの胸で眠り続けたまま。

アトラはクーデリアから言質が取れたのでニコニコと笑っているだけ。

顔を真っ赤にして慌てているクーデリアのことは御構い無しだ。

それから鉄華団はオルガの嫁をどこから連れてくるかを真剣に話し合い始めた。

その空気を壊したのは、電話を受けたメルビット。

ラフタの出産が無事に終わったことが病院から電話でかかってきたのだ。

目出度いことが続いたので、今度は地球組も合わせて宴会をすることが決まる。

この穏やかな光景こそ、オルガが全員を連れてきたかつた場所。

「オルガ。俺達は辿り着けたかな？」

「ああ。これが目指してきた、一つの終着点ってやつだろうよ」

三日月とオルガが拳を合わせる。

この騒ぎはもうしばらく続きそうだった。

エピローグ2 ハッピーエンド

マクギリスがまずやったことは、ラストル含む残りのセブンスターズ及び有力貴族、そしてギャラルホルンで階級の高い者と一般兵の代表を呼び出して今後についての折衝。

イオクの暴走を鑑みて、そして多すぎる腐敗の現状を真摯に受け止め。同じ過ちを繰り返さないためにどうするかという民主的な話し合いだった。

セブンスターズだけで話し合えば今までの二の舞になると分かり切っており、ギャラルホルンの他の者も民意も納得しない決定になるとセブンスターズ全員が自覚していた。いや、イオクの悪行でそうなってしまうと理解させられたと言うべきか。

そういった理由で幅広い人材が集まったこの会議を否定する者はいなかった。

会議が始まってすぐ、セブンスターズの一席であるバクラザン家当主ネモ・バクラザンが挙手をする。

事実を知っている者以外はどうしたのだろうかと首を傾げる中、ネモは堂々と宣言をした。

「我々セブンスターズはギャラルホルンに置ける特権全てを破却する。我々はこの会議

の後、ギャラルホルンの階級に則した権限以上は所有しない。……だが、資産や今ある土地は見逃してほしい。あくまで我々は一軍人に立ち直ろうという話だ」

今まで散々特権を使っていた人間から開口一番に言う発言とは思えず、いきなり会議はざわめき始めて進行が止まる。

妥協案も本人達から示されてどうなのだと思考する者。虫の良い話だと一蹴する者。話の推移を見守る者。我関せずの者。様々だった。

セブンスターズは全員この話を聞いていたので表情も変えない。

むしろこれはラスタルがバクラザン家とファルク家に根回しした結果だ。ラスタルはセブンスターズの特権とも呼べるような物を使用したのは二度だけ。『髭のおじさま』のパーソナルデータの改竄と、そのデータをカインに流用したこと。そのくらいだ。それ以外でセブンスターズとしての権力を使ったことはなかったのだ、むしろセブンスターズであることを煩わしく思っていたほどだ。

「バクラザン公。それはつまり、ギャラルホルンの意思決定は全てセブンスターズではなくヴィーンゴールヴに移譲するということですか？」

「そうなる。我々はイオク・クジャンを今も恐れている。特権階級であることだけを芯にした人間はああなるのだという末路をまぎまぎと見せつけられて、同じ立場の我々が何を思ったと考える？ ああ、アレは我々の子孫の有り得る可能性の一つだなと思った

よ。この三百年でクジャン家とファリド家が地に墮ちた。次は我々の番だと思うのが当然だろう。我々は大丈夫でも、次の百年はわからん。なら腐る元の特権という毒を切除しようと考えるのは当然ではないのかね？」

「……まあ、おかしくはないでしょう。七分の二がダメなら、他の五つも次第にと考えるのはおかしくない」

「そういうわけだ。まあ私やエレクは既に退役した身だ。軍にも戻らん」

ネモの言葉にファルク家の当主エレク・ファルクも頷く。これで七面倒なものを全て息子達に押し付けられ、自分は改革を成した人物として語られる。有終の美としてもとても相応しい終わり方だった。

最初の議題としてはかなり突拍子もなく、思わず一般兵の代表がマクギリスへ問う。

「マクギリス殿はこの提案をどう思われる？」

「養父のしでかしたことを考えれば至極真つ当な意見だと考える。私は今やセブンスターズの外側の人間だが、公平性を考慮すればセブンスターズの解体というのはおかしなことではないだろう。セブンスターズであったことを誇ることは先祖の誉れを尊ぶことだ。好きに続けると良いと思うがそれだけだな」

「え？」

マクギリスが淡々と言ったが、その内容を理解できていない人物がたくさんいた。なぜ疑問が浮かんでいるのかとマクギリスも首を傾げ、ラスタルがしようがなく助け舟を出す。

「マクギリス・モンターク准将。彼らはまだ貴殿をマクギリス・ファリド准将だと思っているのだよ」

「ああ、なるほど。ご助言ありがとうございますエリオン中将。私は既にファリド家から離縁している。セブンスターズではなく暫定ヴィーンゴールヴ司令官としてここに出席している」

「お、お待ちください？ あなたはアルミリア・ボードウィン嬢と婚約なさっている。セブンスターズの関係者であることには変わりあるまい」

そういえばそんな宣言が元となって始まった『マクギリス宣言』だったと思い出す各位。それでも関係性としてはセブンスターズで括って良いはずだとある准将が確認する。

セブンスターズの決定などはマクギリスも聞いていたが、今の身分としては本当に一般人のマクギリス。首を軽く横に振る。

「妻は確かにセブンスターズ本家の人間であり、セブンスターズとしての教育も受けてきました。ですが、既に彼女は我が妻。元セブンスターズであっても、今は一般人です。

セブンスターズのお歴々が決定されたことを、私は今になるまで知りませんでした」

(白々しい。俺から全部聞いていたくせに。つていうか、アルミリアを妻つて。まだ関係性は婚約者だろうに)

(うわあ。ロリコンだあ……)

マクギリスの発言にガエリオが嘆息し、他の者は全員思考を一致させていた。

どうやらカインやジュリエッタ、アルミリアのような特別な力がなくても人々は分かり合えるらしい。

とにかくセブンスターズの特権が排除されることは全会一致で可決され、それ以降も今後の人事や方向性などを全員で話し合った。

マクギリスやラスタルが受け持っている業務は徐々に他の人間に受け持ってもらい、本人達も代表を辞するつもりだった。セブンスターズの間人間がいつまでもその組織の代表に居座ったままでは結局何も変化がないと民衆に思われるからだ。

そして監査局の権限を強化すると同時に、第三者委員会的な役割を持たせるために経済圏からの人員を監査局に組み込むことを決定した。ギャラルホルン内部だけの組織では限界があると一般兵からも意見が出たのだ。

それはラスタル達も懸念していた事項だったので鷹揚に頷く。

こうして『マクギリス宣言』と共にギャラルホルンは大革命を実行した。

腐敗は確かになくなったのだが、ラスタル達の忙しきは海賊達がのさばっていた頃と何一つ変わらなかった。大組織を根本から変える変化には確認業務や書類作業などが重なることで多忙になるのだ。

それはもちろん、とある二人にも降り掛かる火の粉だった。

『マクギリス宣言』から一年半。

ようやく変わった組織に慣れ始めたのか、忙しさが減ってきた頃。

監査局の局長に就任したカインはMSに乗ることは少なくなっていた。毎日毎日書類との格闘だ。様々な部署との折衝に人員の派遣予定の行程表作成、予算の確認。そしてたまに現れる阿呆を鎮圧するためにMSでの出撃。

ラスタルとマクギリスの二人の間で板挟みになっていた頃と変わらない多忙さに疲れ切っていた。

そんな仕事も部下達がようやく経済圏から派遣されてきた人材と上手く分担できるようになってきたのかカインの仕事も減ってきた。監査局が新生した時も最初はカインの監査局時代の行動を基にしたために、一般兵は覚えることがたくさんあったのだ。

主導したり最終的な判を押すのもカインの仕事であり、一年目は指導ばかりの日々だった。その後は業務に釘付け。カインのプライベートなんてあつてないようなもの

だった。

だがこれはカインだけが忙しかつたわけではなく、元セブンススターズの面々は後継者づくりに業務の引き継ぎに新しく始める仕事を覚えるなど、誰も彼もが忙しかつた。カインはマクギリス達と会ってお茶をしたり、ラスタルと堂々と焼肉を食べに行くということもできていなかった。

カインの息抜きといえ、時々鉄華団から送られてくる近況報告だけ。産まれてきた子供の健やかな成長、新たなカップルの誕生、事業成績などなど。様々な報告が送られてきてそれを微笑ましく眺めることだけが癒し。

その中にはかの『革命の乙女』であるクーデリアの結婚報告があり、相手は誰だと確認すると三日月だと知ってカインは思わず意識が宇宙へ行つてしまいハイライトが消えた。

何故かカインは三日月の妻であるアトラに好意的に思われており、息子の暁の様子を嬉しそうに報告してくれた。彼女を選んだのかくらいに思っていたのだが、この報告には混乱した。しかもその報告と一緒にクーデリアの妊娠報告まであるではないか。

カインが報告を受けてまずやったことは圏外圏及び火星の法律を調べることに。そしてまさかの重婚可能ということを知り、自分の頭がおかしくなったのではないと判明。

結果的に火星と人類の英雄なのだから三日月には二人のお嫁さんがいるくらい当た

り前の報酬かと納得していた。

そんなこんながあつた後、カインの執務室へノックの音が三回。カインが入室を許可すると入ってきたのは髪を肩口まで伸ばしたジュリエッタだった。

「失礼します。カイン一佐」

「ああ、久し振りだなジュリエッタ。ヴィーンゴールヴに降りてきていたのか」

「ええ。報告がいくつか有りまして。ついでに顔を見せておこうかと」

ジュリエッタもアリアンロッドの引き継ぎをしているために忙しかった。組織そのものの運営については他の人物が引き継ぐことになっているが、ジュリエッタはこれからアリアンロッドの顔になる。

前線にいればいいだけの存在ではなく、経済圏のお偉いさん方やコロナーの代表などと話し合う場面が増えてくる。そういった場で粗相をしないような教育を受けてきた。そのため忙しくて地球に降りてくる余裕がなかった。

「ジュリエッタ。今日の仕事は終わりか？」

「はい。この後は特に用事もありません」

「そうか」

カインは目の前の書類群を見る。別に明日に回しても問題のない書類ばかりだったと思ひ出し、最優先事項を優先することとした。

あいにく有給はバカみたいに余っている上に、とある火星からの便りもあつていい加減自分の幸せを追求したくなっていた。

「ジュリエッタ。オレ、まだお前からの告白の返事をもらっていないが？」

「……？ ハツ？？？ まさかあの勘違いの時の話をしています？？」

「そうだ。オレは血塗れで告白したというのに、その後の始末をしていたらお前からの返事がなかったと思つてな」

心当たりがあつたジュリエッタは顔を赤くする。

『マクギリス宣言』から内紛となり、その後はギャラルホルン再編に奔走。会う暇もなければ、仲睦まじく過ごすことも不可能だった。

告白だつて有耶無耶のまま流されていき、カインは結局何も言われていない。

「今更言わなくてもわかっているでしょう？？」

「わかっているでも直接言葉にしてほしいんだ」

「カインはクロウリー准将だったんだから、その時に聞いてますよね？？」

「ラストル様とどちらを選ぶかという選択で頷いていたのを見ただけで、言葉では聞いていない」

「屁理屈を……！ この天邪鬼！」

「なんとでも言え。オレはお前の口から直接、その言葉を聞きたいんだ」

カインは席から立ち上がってジュリエッタを見下ろす。ある意味追い込まれたジュリエッタはグヌヌと顔を歪めつつも、諦めたかのように息を吐いて口にする。

「……わかりましたっ！ 言います、言えばいいんでしょう？ カイン、私は小さい頃からあなたのことが——むぐう!!？」

ジュリエッタが言い切る前に、カインはその尖った唇を奪っていた。二人のファーストキスはカインがジュリエッタの唇をなかなか離さず、しばらく二人は繋がったままだった。

どれだけ合わせていたことか。カインから唇を離すとジュリエッタの瞳がトロンとしていた、そしてカインが——。

「オレのことが？ ちゃんとやってくれ」

「は、ハア!!？ あなたが途中で遮ったのでしょう!!？」

「そんな小憎らしいことを言うのはこの唇か？」

「ちよ、待って——んんっ！」

もう一度、カインは唇を塞ぐ。今度は逃げられないように腰も抱いてジュリエッタが逃げられないようにしていた。

キスをしている間はジュリエッタは痺れたようにされるがまだまだだったが、いつまでも離してくれずにどう呼吸すればいいのかわからなくなって少し冷静になってジュリ

エツタがカインからなんとか離れていた。

「プハッ！ 窒息死させるつもりですか?!?」

「そうなたら人工呼吸で生き返らせる」

「カインって病的に私のことが好きですね?!?」

「何を今更。ラスタル様のためだけにスパイを幼少期からできると思ってるのか？」

「そこに私も理由として含まれているのですか?!?」

「0ではない」

「ああ、もう！ 言わせてくれないなら行動で示します！ というか、かなり嬉しがってるくせに更に求めるとか強欲ですね?!?」

今度はジュリエツタがカインの両頬を抑え、そして――。

これは孤児達の物語。

厄災を乗り越えた先にある、めでたしめでたしのフィナーレで綴る、愛と希望と家族の物語。